

ISSN 0910—3791

神 按

研 究 紀 要

第 5 7 号

昭 和 6 0 年 3 月

身 延 山 短 期 大 学 学 園

日蓮聖人諸法實相鈔

行学の二道を

はげみ候べし

身延山第九十代嗣法

身延山短期大学々長

岩間日勇



—— 学長猊下御染筆 ——

神 摺

研 究 紀 要

第 5 7 号

昭 和 6 0 年 3 月

身 延 山 短 期 大 学 学 園

棲 神 第五十七号 目次

『大智度論』における法華經の把握……………	望月海淑 (1)
日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討……………	中條暁秀 (39)
——教法相配釈について——	
身延山晩年の日蓮聖人……………	上田本昌 (49)
火 と 光……………	高橋堯昭 (67)
(仏身觀の変遷)	
マックス・ウェーバー Max Weber に於ける	
「禁欲的宗教倫理」について……………	町田是正 (85)
「柔道の精神」について……………	一宮嘉孝 (103)
「精神善用自他共栄」の教えるもの	
〔資料〕	
身延山諸堂記・身延山再建諸堂記・身延山再々建諸堂記	北沢光昭 (113)
校註 編纂 身延山短大仏教文化研究所	
〔資料〕	
身延山「高座石年中行事帳」……………	校註 奥野本洋 (197)
言語小論 ⑧……………	大森孝 (1)
学園彙報……………	227
後記……………	

『大智度論』における法華經の把握

望 月 海 淑

1

法華經と『大智度論』との関係については古来、沢山な学者によって研究がされて来っている。『大智度論』は竜樹造、鳩摩羅什訳出として伝えられ、『摩訶般若波羅蜜經』に対する逐語訳の型をとっているが、『大智度論』がそのまますべて、竜樹によって書かれたものかどうかについてさえ、疑問が持たれるに至っている。

すなわち、干潟竜祥教授は『大智度論』の内容を検討した結果、A、竜樹の言とは思われないもの。(1)明かに竜樹の言ではなく、訳者羅什の言と思われるもの、(2)「明かに」とまでは云えなくとも、「恐らく」竜樹の言ではなく羅什の言と思われるもの。B、ここは竜樹の言に相違ないという特色のはっきりしているもので、竜樹以外の者少くも印度外の羅什の如き者の言とは思われないもの。C、これはAではない、然しBとすべき特色も見られない部分、即ち何れとも特色の明かでない部分、ここは致し方ないから伝の通り竜樹のものとしておかざるを得ないもの。というように分類し、漢訳に際し羅什が加筆した部分のあることを指摘している、などである。

『大智度論』を訳出した翌年に『妙法華經』を訳出した羅什の態度としては、この両者に対する関連を見ることが出来るのであるが、もし然りとすれば、竜樹と法華經という関連では一考を要さなければならないであろう。

『大智度論』における法華經の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握（望月）

『大智度論』の中に引用されている法華經の語句の引用についての研究はすでに行なわれているところであるが、⁽³⁾今は、この兩者の関連をしらべ、更に梵文法華經における表現を摘し、それにより『大智度論』が見た法華經、法華經の説示をどのように『大智度論』がとらえているのかについて考えてみることになるであらう。

〔註〕

- (1) 干潟電祥「大智度論の作者について」(『印度學仏敎學研究』七ノ一) 1~2。この外塚本啓祥教授は、その論文の中で、ラモット教授の説を詳細に亘って紹介している。「大智度論と法華經」(坂本幸男編『法華經の中國的展開』) 六四〇~六五七。
- (2) 『大智度論』訳出は後秦弘始四~七年、『妙法華經』訳出は姚秦弘始八年とせられている。
- (3) 『大智度論』と法華經に關しての論究として、山川智応『法華思想史上の日蓮聖人』四三七~四四四、勝呂信靜「インドにおける法華經の注釈的研究」(金倉円照編『法華經の成立と展開』) 三六五~三七四塚本啓祥「大智度論と法華經」(坂本幸男編『法華經の中國的展開』) 六一一~六六〇、等がある。

2

(1) 『大智度論』卷七には、

復次有諸仏無二入請者^一。便入涅槃^二而不^三說法^四。如^五法華經中多宝世尊^六。無^七入請^八故便入涅槃^九。後化仏身及七宝塔。証^レ說^二法華經^一故。一時出現。⁽¹⁾

とある。これは『大品般若經』の「能請無量諸仏」の句を釈したもので、請うのには二種があるとし、一は仏の初成道の時で、二は諸仏が無量の壽命を捨てて涅槃に入らんと欲した時だとしている。そして諸仏が目前にいる時は請えるが目に見えない時は請えないとし、諸仏の法は必ず応に說法して広く衆生を度すべし、請うと請わざるとにせよ、

法として自ら応に爾るべし、何を以てか請うを須たんや、との質問に対して、諸仏は必ず説法し、人の請を待たずと雖も、請う者は亦応に福を得べし、請う者なき場合は涅槃に入ると語って多宝如来 Prabhutaratna-tathāgata に言及したものである。

『大智度論』の多宝如来への言及は要旨を語ったものであるが、妙法華経によると、多宝如来は、

於三寶塔中一坐三師子座。全身不散如入三禪定⁽³⁾

と表現され、仏と成り滅度した後、十方の国土において法華経を説く処あらば、わが塔廟はこの経を聴かんがための故に涌現して、ために証明をなして讃めて善哉といわん、との誓願 prañidhana を作し、多宝如来の身体を人に示さんとする時、その時の仏は分身仏を十方世界から集めよ、との誓願があったことを示している。梵文法華経はこれに關して、多宝如来は、

siṃhāsanaṃ paviśya parvaṇkaṃ baddhva paṇḍita-gātraṃ saṃghaṇṭha-kāya yathā samādhi-samāpannas
tathā sandṣyate sma⁽⁹⁾

(獅子座に坐り、足をくみ、四肢は干からび、全身は不散で、禪定に入っているかのように見えた。)

であったとして、法華経が説かれる時、その時に多宝塔が出現し、善哉と証明し、諸仏が多宝如来の身体を四衆に示そうと欲する時には、十方世界の如来の分身 tathāgata-vigraha を集めなければならないことを示している。

しかして、四肢が干からび全身不散であるという時、それは全身の舍利を意味するであろうから、滅度した仏であることになる。『大智度論』により「便入涅槃」といわれるところであるが、法華経が説かれる時、涅槃の後であっても、誓願によって出現し証明法華経するというから、多宝如来は入涅槃しているのではなくて、塔の中から音声

『大智度論』における法華経の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握（望月）

放つて大衆に呼びかけているから、現在している仏陀である、⁽⁸⁾とも考えられる。「滅度之後」と妙法華經が訳出しているのに対し、梵文法華經は前世において菩薩行を修行したが、教菩薩法仏所護念の妙法蓮華の法門を聞かない間は、決して無上等正覺に達しなかった、⁽⁹⁾としているから、妙法華經、「便入涅槃」とした『大智度論』とは異っている。しかし、干からび全身不散という時、實質的には涅槃を意味するから、妙法華經がいう誓願力、梵文法華經のいう法華經を聞くまで、という働きが現在している仏という意につながるのであらう。このことは活動せずして、しかも現在している仏、法身仏たる多宝如来を表現したことを示したものと思われる。しかし、妙・梵両法華經とも法身の何たるか、多宝如来が法身仏であるのかについて、言明をしているわけではない。

『大智度論』は、仏法は等しく衆生を觀て、貴なく賤なく、輕なく重なく、人の請う者あらば、その請のための故に、便ちために法を説くとし、

雖^レ衆生不^レ面^レ請^レ仏^一。仏常見^レ其心^一亦聞^レ彼請^一。假令諸仏不^レ聞不^レ見。請^レ仏亦有^レ福德^一。⁽¹⁰⁾

としている。すなわち、仏法が請に應じて法を説くことあるを示しているが、仏法が法を説くことそれは法身仏の説法であり、多宝如来がそのように理解せられたことを意味するであらう。しかも、衆生は目前に仏を見なくとも、仏に説法を請う心が大切なことを示しているから、仏が法として遍在することあることを意味しているであらう。

(2) 『大智度論』卷九は、

如^レ大月氏西^レ佉肉^レ醫住^レ処^一國。一^レ仏圖中有^レ二^レ人^レ頼^レ風^レ病^一。來^レ至^レ遍^レ吉^レ菩薩^レ像^レ辺^一。一心自^レ歸^レ念^レ遍^レ吉^レ菩薩^レ功^レ徳^一。願^レ除^レ此^レ病^一。是^レ遍^レ吉^レ菩薩^レ像^一。即^レ以^レ右^レ手^レ宝^レ瓶^レ光^レ明^一。摩^レ其^レ身^一病^レ即^レ除^レ愈^一。復^レ一^レ國^レ中有^レ二^レ阿^レ蘭^レ若^レ比^レ丘^一。大^レ説^レ摩^レ訶^レ衍^一。其^レ國

王常布髮令_レ蹈_レ上而過_二。有_二比丘_一語_レ王言。此人摩訶羅不_二多說_レ經。何以大供養如_レ是。王言我一日夜半欲_レ見_二此比丘_一。即往_二到其住处_一。見_二此比丘_一在_二窟中_一誦_二法華經_一。見_二一金色光明人騎_二白象_一合_レ手供養_二。我輒近便滅。我即問_二大德_一以_二我來_一故。金色光明人滅。比丘言。此即遍吉菩薩。遍吉菩薩自言。若有_レ人誦_二說法華經_一者。我當_レ乘_二白象_一來教_二導_二之_一。我誦_二法華經_一故遍吉自来。⁽¹¹⁾

と法華經に言及している。これは、今、此の衆生は多く三惡道の中に墮つ。若し十方無量無辺の諸仏及び諸菩薩あらば、何を以てか来らずや。との質問に対したものである。これに対し『大智度論』は、衆生は罪重きが故に諸仏菩薩が来ると雖も見ず。又、法身仏は常に光明を放ち常に説法しても、罪を以ての故に見ず聞かず、として、衆生の心清浄ならば、則ち仏を見、若し心不浄ならば則ち仏を見ず。今実に、十方の仏及び菩薩ありて、来り衆生を度すと雖も、而も、見ることを得ず、とし更に、十方の仏が来らずは、衆生は罪垢深重で見仏の功德を種えざるを以て、であり、一切衆生の善根が熟し結使が薄らぐを知って、然して後に来り度すとすのべ、その上で前掲のように法華經に言及した上で、人ありて罪垢の結薄く、一心に仏を念じ、信が淨く疑わざれば必ず見仏を得て、終に虚しからざるなり、と述べている。

すなわちこれは、見仏のあり方について述べたところであるが、見仏に関し『大智度論』は、普賢菩薩の功德と来至の挿話を使用して答えたことになる。

遍吉の訳語は Samantabhadra 普賢の訳であるが、⁽¹²⁾ 妙法華經は、「有人癩風病」等に関して、若し後の世に於て、是の經典を受持説誦せば……所願虚しからざらん……

若復見_二受_二持是經_一者_一。出_二其過惡_一。若実若不実。此人現世得_二白癩病_一。⁽¹³⁾

『大智度論』における法華經の把握（望月）

『大智度論』における法華經の把握（望月）

とのべ、癩風病を白癩病とし、法華經の受持者を排謗する者がうける病であるとしている。そして、普賢が白象に乗りあらわれる所を、

是人若行若立誦誦此經¹³。我爾時乘¹⁴三牙白象王¹⁵。与¹⁶大菩薩衆俱詣其所¹⁷。而自現¹⁸身。

と、供養し守護してその心を安慰せん。亦、法華經を供養せんがための故なり¹⁴と述べている。

梵文法華經は、後の時機、後の時、後の五百年が時に、この法門を受持するであらう僧たち、……かの法師たちは素直であり、三解脱を得るであらう。現世、来世に彼等は成就されるであらう。……

ye cāvaṃ-rūpaṇāṃ sūtrānta-dhārakāṇāṃ bhikṣūṇāṃ avarāṇaṃ saṃśrāvayisyanti teśāṃ dṛṣṭva eva dharmame kāyaś citro bhaviṣyati⁽⁹⁾

（このようにすべれた經典を受持する僧たちの非難を聞かしめるだろう彼等は、現世において身体に癩病が生ずるであらう）

と述べ、更だ、

yaḍā ca sa dharmā-bhāṇako 'smin dharmā-parivāye cinta-yogam anuyuktas caṅkramābhivṛddho bhaviṣyati tadā'haṃ bhagavaṃs tasya dharmā-bhāṇakasyāntike śveta-śaḍ-dantaṃ gaja-rājan abhiruḥya tasya dharmā-bhāṇakasya caṅkrama-kuṇim upasamkrāmiṣyāmi bodhisatva-gaṇa-parivṛto 'sya dharmā-parivāsy' āraksāya⁽⁹⁾

（その法師がこの法門について思索の行に専念し、經行所に登るであらう時に、世尊よ、私は六牙の王侯のような白象に乗り、菩薩の集団に囲まれて、この法門を護るために、その法師の經行所の庵に近づくであらう）

と述べて、この法門から一句、一字でも見落すようなことがあれば、六牙の王侯のような白象に乗り法師の前にあらわれて、この法門を欠けるところなく発声させるであらう。かの法師は私の姿を見て、この法門を欠けるところなく私から聞き、満足し悦び歡喜し極喜し欣喜と愉悅を生じ、この法門に十分に精進をおこすでしょう、と述べている。

すなわち妙梵両法華經俱に、後者に關しては普賢菩薩の行願として法華經の法師に對しての守護を述べ、前者は、普賢の言葉を聞いた釈尊が法華經を受持する者をそしめる人が受ける報いとして述べたものである。これに對し『大智度論』は、普賢（遍吉）菩薩がその（行願によつて）法華經を誦誦する人のところへ、金色光明の身をもつて自ら現われ、又、癩風を病める人が、遍吉菩薩に帰依をし念じたところ病除却したと述べているから、表現は法華經が示すものよりも一層積極的であることになる。そしてこれは見仏のあり方について述べたものであるから、仏の実在を信ずる心、心のあり方を示すために、法華經に對する受持の姿が用いられたのであらう。

(3)『大智度論』卷十は、若し皆東方の諸仏を供養せば、諸仏は甚多し、何の時か當に訖つて此の間に來るべきや、との質問に對して、諸の菩薩は人天の法による供養をするのではなく、菩薩の供養の法を行ず、それは、身禪定に入つて、其の身を直進し、其の身邊より無量身を出し、種々な供養の物を化作して諸仏の世界に満たす、のだとしてゐる。そして、更に、此の諸の菩薩は釈迦牟尼仏に詣んと欲す、何を以つてか中道で諸仏を供養するのか、との問に對し、諸仏は第一の福田なり、若し供養せば大果報を得る、この故に供養するのだし、菩薩は常に仏を敬い重んずること、人の父母を敬い重んずるが如くで、菩薩は仏の説法をうけ三昧・陀羅尼・神力を得ているのだから、恩を知るが故に広く供養するのだ、として法華經に言及している。すなわち、

『大智度論』における法華經の把握（望月）

如法華經中藥王菩薩。從_レ仏得_二一切變現色身三昧_一。作_二是思惟我當_三云何供_レ養_二仏及法華三昧_一。即時飛到_三天上_二。以_三三昧力_一雨_二七宝華香幡蓋供_レ養於_二仏_一。出_三三昧_一已意猶不_レ足。於_二千二百歲_一。服_二食衆香_一飲_二諸香油_一。然後以_二天白疊_一纏_レ身而燒。自作_二誓言_一。使_二我身光明照_二八十恒河沙等_一仏世界_一。是八十恒河沙等世界中。諸仏讚言。善哉善哉善男子。以_レ身供養是為_二等一勝_一。以_二國城妻子_一供養百千万倍。不_レ可_二以_一譬喻_一為_レ比。於_二千二百歲_一身燃不_レ滅_也。

として、このように仏を供養すれば無量の利を得、この故に菩薩は仏を供養するのだ、としている。

塚本啓祥博士によると、この部分は法華經の直接引用の状況で、妙法華經とは部分的相応關係を示す⁽¹⁸⁾とされているが、妙法華經は『大智度論』の文章よりも、はるかに詳述しており、梵文法華經は更に詳しい。今、紙数の關係もあり、その全文を紹介することが出来ないので、要をとって見ていくことにする。

法華經によると、この箇所は藥王菩薩の前身、一切衆生喜見菩薩 Sarvasattvapriyadarśana の焼身供養の場面であり、この菩薩が現一切色身三昧 Sarvarūpasamādarsana-samādhi を得たのは「皆是得_二聞_三法華經_一力_一」*imam Saddharmapūṇḍarikam dharmaparyāyam āgamaṃ* (この妙法蓮華の法門の故に) であるから、日月淨明徳仏 Candrasūryavimalaprabhāsārī と法華經に供養しようとして三昧に入った。すると虚空 *antarikṣa* (空中) から華の雨がふり、三昧から立ち上った菩薩は、身を以て供養するに如かず、として、香を食し千二百年間 *dvādaśa* (十二年) も香油をのみ火をつけた。その光明は八十億恒河の世界 *asit Gaṅgā-nadī-vālikā-sama* (八十恒河沙と同じ) を照した。この供養は第一の施、於諸施中最尊最上 *viśiṣṭāgṛā varā pravaraṃ prañitā dharma-pūjā* (最勝、最高、最上、最善、上妙な法供養) で、國城・妻子を布施するよりも勝れたもので、その身体は千二百才 *dvādaśa varṣa-*

當(19) (千二百年) 燃え続けて消えた。と。すなわち、妙・梵兩法華經は數字の差こそ一部にはあれ、大よそ同一内容を示している。

而して『大智度論』の表現は、法華經を要約したものであることが知られるが、法華經が仏と法華經に対する供養とされているのに、論が法華三昧に対する供養となした理由は解らない。法華經は一切衆生喜見菩薩が仏と法華經のために焼身供養をなし、その供養が諸施の中で最尊最上であるから、藥王菩薩として現世に出現したことを説示している。『大智度論』が、藥王菩薩の焼身供養を語り、「如是供養三佛一得三種無量利」(20) 以て是故諸菩薩供養三佛」という時、仏に対する供養の心が如何なるものかを示さんとしたものと思われる。そして、釈尊に至らんと欲すのに、何故に中道で諸仏を供養するかとの問に対する答えでもあり、菩薩は諸仏を見て供養すれば仏たる果報を得るとなすから、釈尊と諸仏との關係について、釈尊の中に諸仏が含まれるのか、どうかは考えてみなければならぬ。

(4) 『大智度論』は卷二十六の中で、仏の滅度にふれて、若し仏衆生を度せんと欲して未だ息まざれば、何を以てか涅槃に入るや、との問を設け、その答として、衆生を度すに二種あり、或は現前の得度あり、或は滅後の得度あり、として、法華經の説示を例証に挙げ、

如法華經中説。藥師為諸子合藥与之而捨。是故入涅槃。復次有衆生鈍根德薄故。不能成大事。但可種福德因緣。是故入涅槃。

と述べている。仏の現前の得度は当然のことであるから、法華經を挙げたのは滅後の得度に関するもので、藥師云々の語は如来寿命品の説示の良医の譬を意味している。すなわち妙法華經は、父(良医)の留守中に誤って毒藥を服し

『大智度論』における法華經の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握（望月）

天子等が、父の調合せる色香美味の薬を見て、不失心者は服したが、失心者は服しなかった。薬を留めて旅に出て方便を以て父は死すと告げさせる、これを聞き失心者も父の言葉を受け薬を服し癒えたり、という話を記し、父が仏であることを示している。⁽²²⁾梵文法華經も同様の意を伝えているが、失心者について、viparita-saṃjñinī（意識の顛倒）という語を使っており、偈文の「令顛倒衆生」については、viparita-buddhi ca nara vimūḍhaḥ（理性が顛倒し愚かな人々は）としている。saṃjñin buddhi の顛倒者は父（仏）が滅度の後にしか飲薬しなかった（不見）のであったことを示して、このような人々は愚かな人であるとしている。⁽²³⁾これに対して父は、「良医智慧聰達。明練三方藥善治衆病。」(vaidya-puruṣo bhavet paṇḍito vyakto medhavi sukusālah sarva-vyādhi-praśamanāya⁽²⁴⁾)（賢明で明晰で知的で立派で全ての病を癒す良医がいるとしよう）とせられるから、これは失心者とは相反するものである。『大智度論』が、鈍根にして徳薄きと称したのは、まさに失心者のことであり、この故にこそ福德の因縁を種えるために仏は涅槃に入るとせられたのであらう。

(5)『大智度論』卷三十には、阿修羅は天に非ず人に非ず、地獄の苦多く畜生の形と異なるとし、五道の摂するところだとし、更に、經には五道ありと説く、云何なれば六道というのかとの質問に対し、仏去ってから久しく經の流れ遠し、法伝わって五百年の後、多く別異あり部々同じからず、或は五道といい、或は六道という、若くは五と説く者は仏の經において文を廻して五と説き、若くは六と説く者は仏の經において文を廻して六と説くのだとし、

摩訶衍中法華經説レ有三趣衆生⁽²⁵⁾。觀諸義旨⁽²⁶⁾レ有三六道⁽²⁷⁾。

と述べて、六道説を示している。この句は説示のごとく法華經序品の

於此世界。尽見彼土六趣衆生。⁽²⁶⁾

ye ca tesu buddha-ksetresu satūsu gatiṣu sattvāṇ samvidyante sma te sarve 'śeṣeṇa samprīyante sma⁽²⁷⁾

(この仏国土で六趣の人々が知られ、彼等は一切すべて見られた)

をうけたもので、法華經により六道説をとっていることを示している。

(6)『大智度論』卷三十二には、經の三千大千世界の大地、諸山、微塵数を知らんと欲せば、般若波羅蜜を学すべし、の語をうけて、仏は何故に六度等の諸の功德を讃歎せず、大力を讃歎するのかの質問を設け、衆生には善法を楽しむ者と善法の果報を楽しむ者の二種があるとし、前者には諸の功德を讃歎し後者には大神力を讃歎する心があるのだとしている。そして、一石土の微塵すら尚數うべきこと難し、何に況んや三千大千世界の地、及び諸山の微塵の数をや、との質問に対し、声聞辟支仏の智慧、尚知ること能わず、何に況んや凡夫をや。是の事は諸仏及び大菩薩のみ知る所なり、とし、

如法華經說。譬喻三千大千世界地及諸山末以為微塵。東方過三千世界下一微塵。如是過三千世界復下一微塵。

如是尽三千世界諸塵。仏告比丘。是微塵數世界算秤量可得。知不。諸比丘言。不可得。知。仏言。所不可著。微塵不著。微塵上諸國。尽皆末以為微塵。大通慧仏出世已來劫數如是。如是無量恒河沙等世界微塵。仏大菩薩皆悉能知。何況一恒河沙等世界。⁽²⁸⁾

としている。すなわち、衆生の善法の果報を楽しむ者のために仏は大神力を示したもので、法華經化城喻品の大通智勝如來の三千塵点劫の説示を、そのことを証するために引用しているといえるであろう。

『大智度論』における法華經の把握（望月）

妙法華經と梵文法華經とが、大通智勝如来 Mahābhijñānābhīṣṭhū-tathāgata の壽命について述べる表現は、おおむね『大智度論』の引用するところに似ているが、ただ引用の後半の「尽皆末以為塵」⁽⁸⁾の箇所は、妙法華經においては「尽末為塵一塵一劫」として塵点劫が示されており、梵文法華經では「śakyam punar bhikṣavas teṣāṃ loka-dhātūnāṃ kena-cid gaṇakena vā gaṇaka-mahā-mātreṇa vā gaṇanayā paryanto 'dhigantum yeṣu vōpanikṣiptāni tāni paramāṇu-rajāṃsi yeṣu vā nōpanikṣiptāni (比丘たちよ、それらの最も微細な塵がおかれたり、おかれなかったりしたそれらの世界を、誰か数学者か大算者が計算によって、正しくつくし知ることが出来るだろうか)」とされているだけで、『大智度論』の引用に近い。そして引用末尾の如来の壽命を悉知しているところろは、妙法華經は「如来知見力」を以ての故にとしており、梵文法華經は、「tathāgata-jñāna-darśana-balādhanā (如来の知見力を執すること)」となしているから、塵点劫を知るためには如来の知見力が必要なことを示している。すなわち『大智度論』が三千塵点の数を知らんと欲せば、般若波羅蜜を学すべしといい、そのような数が算せられるわけがないので不可信という質問に対して、法華經の説示が語られるのであるから、凡夫の智から如来の知見力への転換として般若波羅蜜を捉らえているかと思われる。

(7) 又、『大智度論』卷三十二は、經の菩薩摩訶薩は一毛をもって三千大千世界中の諸の須弥山王を挙げ、他方無量の世界に擲げるところをとりあげて、菩薩は何を以っての故に須弥山及び諸山を挙げて他方の世界に過着するののかとの質問を設け、菩薩の力は能く之を挙げることを明すのみで、菩薩は仏が当に説法をなすが故に、先ず三千大千世界を莊嚴し、諸山を除いて地を平整ならしむ、のだとし、

如「法華經中説」。仏欲集諸化仏一故先平治地。

と法華經に闕説し、希有の事を現じ衆生をして見せしめんと欲するのだ、としている。⁽⁸²⁾

この化仏（分身仏）来集は、法華經見宝塔品が示すところであるが、妙・梵両法華經ともに「平治地」といわれた娑婆世界のありさまを、細かく具体的に表現している。そして、『大智度論』の須弥山等の諸山を他方の世界に過着させるのに対し、

無三大海江河及目真隣陀山摩訶目真隣陀山鉄罍山大鉄罍山須弥山等諸山王。通為一仏土。宝地平正。⁽⁸³⁾

として、諸山がなく通一仏土で宝地平正だとしている。梵文法華經は Kala, Mucilinda, Mahāmucilinda, Cakravāda, Mahācakravāda, Sumeru の山々がなく、川も天・人・阿修羅・地獄 nīraya 畜生 tiryagyonī や yama もなく整えられ、仏国土は瓊離からなり云云と続けられて、平正・平治地にあたる語はない。⁽⁸⁴⁾しかし五百弟子受記品の「地平如掌」⁽⁸⁵⁾においては、samam paṇi-tala-jātam⁽⁸⁶⁾（手の平のような平で）として仏国土を表現しているから、仏国土は地平正というのは定着していたものと思われる。したがって、地平正は仏の説法の現場面を表現するために示されるものであるとの立場を示し、そのために法華經が引用されたものと思われる。

(8)『大智度論』三十三巻は、菩薩摩訶薩は、一切の声聞辟支仏の前にあること、諸仏に給侍すること、諸仏の内眷属たること、大眷属を得ること、菩薩の眷属を得ること、浄報大施を得ることを欲せば、般若波羅蜜を学すべしとの經の語をうけて、若し菩薩は未だ漏尽を得ずんば、云何ぞ漏尽の聖人の前に在るや、との質問を設け、菩薩について言及している。

即ち、菩薩は功德智慧大なるが故に、初発意の時すでに一切衆生の前にあり、世々に常に大いに声聞辟支仏を利益

『大智度論』における法華經の把握（望月）

すとし、衆生は菩薩の恩を知るが故にどこにても尊重し、菩薩はどのような場にも衆生を利益すとし、舍利弗・目犍連等の聖人、弥勒・文殊師利等の菩薩は大眷属であり、更に、仏には無量無辺阿僧祇の一生補処の菩薩が前に在って導き、後に従って出すとして、

又如「法華經說」。從地涌出菩薩等皆是内眷属大眷属。⁽³⁷⁾

と述べている。從地涌出は明らかに從地涌出品の説示を意味している。妙梵兩法華經は、出現に関して、

娑婆世界三千大千国土地皆震裂。而於其中一有無量千萬億菩薩摩訶薩同時涌出

iyam saha-loka-dhātūḥ samantāt sphuṇṭā viṣphuṇṭā 'bhūt tebhyaś ca sphoṭāntarebhyo bahūni bodhi-sattva-koṭi-nayuta-śata-sahasraṇy uttiṣṭhante sma⁽³⁸⁾

（この娑婆世界は一面に裂け開いて、その裂け目から百千万億那由佗という沢山な菩薩が出現した）

としており、この菩薩たちが釈尊と旧知であることを示し、弥勒菩薩等は、地涌菩薩を昔より已来、見ず聞かず（adṛṣṭa-pūrva, aśrūta-pūrva）と質問し、釈尊は地涌の菩薩は私が教化したものだとし、

我今說「実語」汝等一心信 我從久遠一來 教化是等衆

anāstava bhūta iyaṃ mi vācā śrūṇitva sarve mama śradadhadhvaṃ | evaṃ ciraṃ prāpta mayā 'gra-⁽³⁹⁾
bodhi paripācitās cāti mayāiva sarve ||

（この浄らかで真実の私の言葉を聞いて、一切私を信ぜよ、このように私が最高の覚りを得たのは遠い以前だ、一切のものを私が成熟させた）

としている。遠い以前、久遠は如来寿量品における久遠実成に展開するものだが、久遠実成の生命の流れの中におい

て、地涌菩薩が教化されたもので、八十年という有限な中ではないことを法華經は示している。『大智度論』が地涌菩薩は内眷屬・大眷屬だというのは、久遠実成の中で考える時に、認めうることを意味しているであろう。

(9) 『大智度論』卷三十八は、鈍根とは二十二根の中の何者か是なる、との質問に対し、慧根能く諸法を觀するも久しく禪味を受著するを以つての故に鈍なり、信等の五根は皆道法を助成するも受報著味を以つての故に鈍なり、菩薩は清淨の福德智慧の因縁の故に十八根皆利なるも罪の故に則ち鈍なり、と有人の意見をそれぞれ照介した上で、

眼等六根如法華經說⁽⁴⁰⁾

と述べている。

法華經の中で眼等の六根にふれているのは法師功德品であり、そこでは法華經を受持・誦・誦・解説・書写する人は、八百眼功德・千二百耳功德・八百鼻功德・千二百舌功德・八百身功德・千二百意功德を得、六根を莊嚴し皆清淨ならんとせられている。⁽⁴¹⁾ここでは法華經に対する五種法師の行が六根をして莊嚴し清淨ならしめるとしていることが明白であるが、『大智度論』は前述の引用文に続いて、命根は老病等のために悩まされず安隱に樂を受く、是を命根の利となす、と利なることを種々挙げ、利と相違するが故に鈍なり、としているから、「眼等六根如法華經說」で表現しようとしたものは、利であるということなのだろうと思われる。

(40)そして又、卷三十八は、いかなるを劫と名づくるやの質問に対し、百由旬四方の城と芥子、百由旬四方の石を磨す故話を挙げ、時の中の最小なるは六十念中の一念、大いなる時を劫と名づくとし、劫には大劫小劫の二種があるとし、法華經に關説した有人の説を示している。それは

『大智度論』における法華經の把握（望月）

『大智度論』における法華經の把握（望月）

時節藏數名為「小劫」。如「法華經中說」。舍利弗作「時正法住」世二十小劫。像法住「世二十小劫」。仏從三昧起。於三六十小劫中「說」法華經。是衆小劫合名為「大劫」。⁽⁴²⁾

としている。これは有人の説であるから、そのまま『大智度論』の説示とは出来ないが、妙法華經は

華光仏壽十二小劫……正法住「世三十二小劫」。像法住「世亦三十二小劫」。⁽⁴³⁾

とし、梵文法華經は

Padmaprabhasya-tathāgatasya dvadaśāntara-kalpā āyus-pramāṇaṃ……dvātriṃśad-antara-kalpān saddharmaṃ sthāsyati | tatas tasya tasmīn saddharma-kṣīṇe dvātriṃśad-antara-kalpān saddharma pratirūpakam sthāsyati ⁽⁴⁴⁾

（華光妙來の壽命は十二中劫……正法は三十二中劫続くであろう、正法滅尽の後、像法（正法に似た）は三十二中劫続くであろう）

としているから、正法・像法の続く劫數に關し、『大智度論』と妙梵兩法華經の表現とは非常に異なっていることが解る。尚、正法華經はここを「正法像法住二十中劫」⁽⁴⁵⁾として華光如來の壽命を除いた劫數では、『大智度論』の表現と一致している。これがどのような理由によるものか解らないが、仏が六十小劫の中において法華經を説くという『大智度論』の説示は、以下に述べるところの序品第一の表現と合一している。⁽⁴⁶⁾又、『大智度論』は劫には大小の二劫があるとしているが、正・梵兩法華經は中 *antara* 劫とし妙法華經のみ小劫として一致しているのも疑問であろう。

(10)『大智度論』卷五十は、仏すでに須菩提の所問を知る、今何を以て更に稱して答うか、との質問に対し、この摩訶般若波羅蜜經は十万偈・三百二十万言あり、四阿含と等しきなり。これは一坐に説き尽すに非ずとし、二事は時を異にし日を異にすとし、声聞法の中には不可思議の事あることなく、一日一坐の中に説き尽すことを得ず、との有人の言に対し、仏は無礙解脱あり、菩薩は不可思議三昧あり能く多時をして少時と作さしめ、少時を多時と作し、亦能く大色を以て小に入れ小色を大と作すとし、法華經に闕説し

又如⁽⁴⁷⁾六十小劫説法華經一人謂從日乃至食

と答えている。

これは大乘と一切智に言及しそこにおける菩薩の心のあり方にふれたものだが、六十小劫という長い時間も從日至食と思われたという記述は、法華經では序品の中に見られる。すなわち、日月灯明如来は三昧より起ち妙光菩薩によせて大乗經の妙法蓮華教菩薩法仏所護念と名づくるを説き、六十小劫座を立たず、

时会聴者亦坐⁽⁴⁸⁾三二处。六十小劫身心不レ動。聽⁽⁴⁸⁾三仏所説⁽⁴⁸⁾謂⁽⁴⁸⁾如⁽⁴⁸⁾三食頃⁽⁴⁸⁾

とのべており、梵文法華經は

sā ca sarvāvati parśad ek'āsane niṣṇṇā tām śaṣṭy-antara-kalpās tasya bhagavato 'ntikād dharmam
śrīoti sma | na ca tasyān parśady eka-satvasyāpi kāya-kīamatho 'bhūn na ca citta-kīamathān⁽⁴⁹⁾

(すべての集った人々は同一の坐にて六十中劫の間、この世尊の法を面前で聞いた、かの集った人々の中では一人として身体の疲労や心の疲労がなかった。)

とのべて、從日至食、謂如食頃を心の疲労 citta-kīamathā がなかったと抽象的のべている。心の疲労がないとは

『大智度論』における法華經の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握（望月）

心が緊張し充実していることを示すから、短い時間に感じたということで差はないと思われるが、法華經はこれを説法の場面に使用しているのに、『大智度論』は經典に対する菩薩の不可思議三昧の力の説明に使用している。

(2) 『大智度論』卷七十九は、

仏亦名為_レ宝。亦名為_レ無上福田。若人從_レ仏種_三善根。必以_三乘法入_三涅槃_二不_レ虛。如_三法華中説。有_レ人或以_三一華_二或以_三少香_二供_三養於仏_一。乃至一称_三南無仏_一。如是等人皆当_三作仏_一。

として、有人の但五波羅蜜を行じ作仏せんと欲する時、乃ち空を觀ず、何ぞ用いて常に般若波羅蜜の知り難く得難き空行を行ぜんや、との質問を挙げている。これに對しての答は、要す三乘を得て涅槃に入るとも、まさに了了に六波羅蜜を行ずべし、一切種智を了了に行するが故に疾く仏道を得るのだとなしている。

法華經の方便品は

是故舍利弗 我為設_三方便_一 説_三諸尽苦道_一 示_レ之以_三涅槃_一 我雖_レ説_三涅槃_一 是亦非_三真滅_一 諸法從_レ本来 常自寂滅相 仏子行道已 來世得_三作仏_一 我有_三方便力_一 開_三示_三乘法_一 一切諸世尊 皆説_三二乘道_一……

と説示し、更に若し人が塔廟・宝像及び画像において華香幡蓋を以てて敬心に供養す、若し人散乱の心乃至一華を以てて画像に供養せば漸く無數の仏を見る、塔廟の中において一たび南無仏と称うれば皆已に仏道を成ず等々⁽⁵⁾と示している。梵文法華經は

neśam ahaṃ Sarisutā upāyaṃ vadāmi duḥkhasya karoṇa antam | duḥkhena saṃpiḍita dṛṣṭva sattvaṃ
nirvāṇa tatpāpy upadarśayāmi || evaṃ ca bhāṣāmy ahu nitya-nirvṛtā ādi prāsāntā imi sarvadharmāḥ |

caryān ca yo pūrayi buddha-putro anāgate 'dhvāni jino bhaviṣyati || upāya-kausalya mamāiva-rūpaṃ
yat triṇi yānāny upadarśayāmi | ekaṃ tu yānaṃ hi nayaś ca eka ekā c'īyaṃ deśana nāyakānaṃ ||

(3)

(舍利弗よ、私は彼等に苦を滅せよと方便を語り、苦に遭っている衆生らを見て滅度を見せる。このように一切の法は最初から寂靜で常に滅度していると私は語る。私の息子らは行をみだし未來世にジナとなるであらう。三乗を現わすのは私の善巧方便である。しかし、実は一乗であり、道理は一つであり、指導者の教えも一つである)

とし、乱れた心であっても一本の花を捧げ絵像に供養しても幾万の仏に順次にお会い出来、一度だけでも南無仏と唱えれば最高の菩提に到達する、とせられている。

すなわち『大智度論』が質問の中で引用した法華經説は、三乗を説いて來たが実は一仏乗だけであると説示における表現のみをとったものであるといえよう。

(3)『大智度論』卷八十四は、曾つて仏の功德の能く人の老病死の苦を度するを聞き、若くは多く若くは少く供養し、及び名字を称すれば、無量の福を得、亦苦を畢つて尽きざるに至るとした上で、須菩提の世尊よ、若し諸法実相は壞すること無きが故に二仏異なること無しとせば、今仏分別して諸法は是れ色、是れ受想行識、乃至是れ有、是れ無為法なりと説くは、まさに諸法の相を壞すること無きや、との質問を挙げて、仏は種々に分別して諸法を説くと雖も、但、言説を以って衆生をして解を得、心に所著すること無からしめんと欲す。若し二仏共に語るも諸法の名字を説くべからず。衆生は仏に及ぶ者なく牽引して解せしめんと欲するを以ての故に是は善、是は惡と説くのみ、と答え、更に

『大智度論』における法華經の把握（望月）

如_二法華經說_一火宅_二以_三三乘_一引_二出諸子_一。但以_三名相_一說_二諸法_一不_レ壞_三第一義_一。

とし、名相を以つて衆生のために説くと雖も実事有ること無くんば、まさに虚妄なること無からんや、との質問に対し、聖人は世俗に随つて言説するも、中において名相に著する処有ること無し、仏は此の中に自ら因縁を説く、凡夫の如きは苦を説かば名に著し相を取る、諸仏及び弟子は口に苦く説いて心に著せず等と答えている。⁽⁶³⁾

二仏とは真仏・化仏のことであり、供養等をなすものは俱に無量の福を得、仏の説法は種々に分別して説かれるも俱に第一義のための故であるとし、それを証するために法華經の譬喩品の説示を引用したものである。

妙法華經はこの箇所で、

如_下彼長者初以_三三車_一誘_二引諸子_一。然後但以_三大車_一宝物莊嚴安隱第一。無_中虚妄之咎_上。如来亦復如_レ是。無_レ有_三虚妄_一。初說_三三乘_一引_二導衆生_一。然後但以_三大乘_一而度_三脱_一之。⁽⁶⁴⁾

とし、梵文法華經は

tad-yathāpi nāma Śāriputratasya puruṣasya na mṛṣā-vādo bhaved yena triṇi yānāny upadatsyivā
teṣāṃ kumārakāṇāṃ ekam eva mahā-yānaṃ sarveṣāṃ dattaṃ sapta-ratna-mayaṃ sarvālaṅkāra-vibhū-
ṣitaṃ eka-varṇaṃ evōdāra-yānaṃ eva sarveṣāṃ agra-yānaṃ eva dattaṃ bhavet

（たとえば、舍利弗よ、かの人が三乗を示しながら、かの子供らすべてに唯一の大乘を与えた。七宝づくりですべての装飾でかざられ、同じ色の素晴らしい乗、すべてに最高の乗を与えたからといって、かの人に虚言があるのではない）

として、如来は方便によつて三乗を示しながら大乘によつて衆生等を涅槃させたとしても虚言者ではないとしてい⁽⁶⁵⁾

る。

すなわち『大智度論』で第一義となされているのは、法華経では大乘 *mahāyāna* のことであり、不壞は虚妄 *mithyā* *vyāda* ではないということであることが解り、ともに仏の廣大無辺な力、はからいを示そうとしていることになるであらう。

44 『大智度論』卷八十八には、若し衆生あり菩薩を割截し、或はその肉を食わば当に罪あるべし、云何ぞ得度せんや、との質問に対して、この菩薩には本願あり、若し衆生有つて我が肉を啜わば当に得度せしむべしと。經中に説くが如し。衆生菩薩の肉を食わば則ち慈心生ず。……肉を啜うを以つての故に得度するに非ず、慈心を起発するを以つての故に畜生を免るるを得、善処に生じ仏に値い得度す。菩薩有り無量阿僧祇劫において深く慈心を行じ、外物を衆生に給施するも意なお満たず、並に自ら身を以つて布施す、として

如_レ法華經中_一。藥王菩薩外物珍寶供_レ養_レ仏_一。意猶不_レ満。以_レ身為_レ灯_レ供_レ養_レ於_レ仏_一。爾乃足_レ満。⁽⁶⁶⁾

と、藥王菩薩本事品の説示をとりあげて闕説している。これに關し法華経は、藥王菩薩の本生たる一切衆生喜見菩薩 *Sarvasattvapriyadarśana* の故事をとりあげ、この菩薩が棄つて苦行をなし、仏を供養した上で、

我雖_レ以_レ神力_一供_レ養_レ仏_一。不_レ如_レ以_レ身供_レ養_レ。

と考え、自ら身を灯した時に諸仏が、善哉善哉、これ真の精進なりとし、

以_レ……如_レ是等種種諸物_一供_レ養_一。所_レ不_レ能_レ及_一。仮使国城妻子布施亦所_レ不_レ及_一。善男子。是名_二第一之施_一於_二諸施中_一最尊最上。以_レ法供_レ養_レ諸如来_一故。⁽⁶⁷⁾

『大智度論』における法華経の把握（望月）

『大智度論』における法華經の把握（望月）

としており、梵文法華經もまた

na tatha rddhi-prāthārya samdarśanena bhagavatā puja kṛtā bhavati yathātmabhāva-parityāgeneti |
... idam tat kula-putrāgṛa-pradanam na tathā rājya-parityāga-danam na priya-putra-bhāryā-parityā-
ga-danam | iyaṁ punaḥ kula-putra-putra viśiṣṭāgṛā varā pravārā prañitā dharmā-pūjā yo 'yam ātmabhāva-
parityāgah |
(88)

（神通力の奇跡を示して世尊への供養をしたとしても、自分の身体を捨てるには及ばない。……善男子よ、これは最高の布施であり、王位を捨てて布施しても、愛する息子や妻を捨てて布施しても及ばない。亦、善男子よ、自分の身体を捨てることは、最勝最高、最妙、上妙の法供養である。）

としており、同様の意味を伝えている。すなわち『大智度論』が外物の珍宝となしているのは、単に珍宝だけではなく、自分の身体以外の愛妻・愛子をも含むことになるが、人間が本当に愛するものは自分の生命だということを暗示するのであろうか。『大智度論』は布施に二つありとし、外物の布施と身を以っての布施として、後者が勝れていることを説くのは論を待たないが、この捨身供養は菩薩の本願慈心によるとするが、薬王菩薩の本生の生きざまが影響したものであろう。

89 『大智度論』卷九十三は、

一切仏若人好心聞_レ名皆当_レ至_レ仏。如_二法華經中說_一。福德若大若小皆当_二作_レ仏_一。(89)

との質問を挙げている。妙法華經の方便品には

若聞^レ法布施 或持戒忍辱 精進禪智等 種種修^二福德^一 如是諸人等 皆已成^二仏道^一⁽⁶⁰⁾
とあり、梵文法華經には

ye cāpi sattvās tahi teṣa saṃmukhaṃ śrīvanti dharmaṃ atha vā śrūtāvināḥ | dānaṃ ca dattaṃ caritaṃ
ca śīlaṃ kṣāntyā ca sampādita sarva-caryāḥ || vīrye ca dhyāne ca kṛtādhikāraṇḥ prajñāya vā cintita eti
dharmaḥ | vividhāni puṇyāni kṛtāni yehi te sarvi bodhiya abhūsi lābhinaḥ ||⁽⁶¹⁾

(彼等の面前で法を説き、或は聞いた衆生等は、布施を施し、戒を持ち、忍辱の行、一切の行を成就した。精進、
禪定への努力をなし、般若によって法が思惟され、種々な福德がなされた。彼等の一切は菩提を得るものとなつ
た。)

となされて、ともに六波羅蜜を行じ福德を積んだものが仏道(菩提 bodhi)を成ずることを示している。これは『大
智度論』の若大若小の表現とは相異があるところであるが、法華經は經卷に対する受持読誦解説書写等を強く指摘
し、一句一偈に対してこのようなことがなされる場合でも福德を積むことが出来、仏道を成じうることを各所で説示
していることから、若大若小皆当作仏となされたのであろう。根本の真仏は大小の異を分別することあることな
いからである。⁽⁶²⁾

④同じ卷九十三は、上の阿鞞跋致品の中に如是相を説く、これ阿鞞跋致なり、如是相は阿鞞跋致に非ず、阿鞞跋致は
即ちこれ畢定なり、須菩提、今何を以ってか更に問うとの質問を挙げている。これについての答の中に、般若波羅蜜
には種々問あり、阿鞞跋致はこれ一門の中の説なり、今畢定を問ひ更に異門を問うとし、仏心の中には一切衆生、一

『大智度論』における法華經の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握（望月）

切法は皆畢定なり云とのべた後において、

聞三法華經中說。於三仏所作少功德。乃至戲笑一稱三南無仏。漸々必當三作仏。又聞三阿鞞跋致品中有三退不退。

又復聞三聲聞人皆當三作仏。若爾者不レ應レ有レ退。如三法華經中說畢定。余經說三有レ退有三不退。是故今問為畢定二為三不畢定。

として、その上で、菩薩は畢定なり、不畢定は二乗なり但だ大乘の中において畢定なり、畢定とは必當作仏(63)としている。これによってみると、阿鞞跋致品や余經は退不退（畢定不畢定）を説くが法華經は畢定だけを説き必當作仏を説くということ迷うということであるが、法華經の方便品は、

乃至童子戲 聚レ沙為三仏塔一 如レ是諸人等 皆已成三仏道一……如レ是諸人等 漸漸積三功德一 具三足大悲心一 皆已成三仏道一(64)

と示し、梵文法華經は

sikata-mayā vā puna kūja kṛtvā ye ke-cid uddiṣya jñāna stūpān—kumārakāṇ kṛdīṣu tatra tatra te sarvi bodhiya abhūṣi lābhinaḥ || bhittiṣu puruṣa ca kumārakā vā sarve ca te kārūṇikā abhūvan | sarve pi te tārayi prāṇi-koyāṇ samādapentā bahu-bodhisattvān ||
(65)

（又、幼児らが遊びにおいてそこにジナのために砂づくりの塔をつくる、彼等の一切は菩提を得るものとなった。大人でも幼児でも壁に（像をかけば）一切の彼等は慈悲あるものとなり、幾千万の生命あるものを救い、沢山の菩薩たちを導いた）

であり、妙法華經と梵文法華經とでは微妙な相異が認められるが、大意においては大きく、僅かな功德でも成仏道

となることを示している。この皆已成仏道は一仏乗の開頭に起因するのであるが、『大智度論』がふれる法華經中の説はそのことを意味していると思われる。

の更に卷九十三は、菩薩は退して不畢定といい、ある時には菩薩は畢定して不退なりと仏はいうが、何れが実であるかとの問に對し、二事みな実なりとし、阿耨多羅三藐三菩提を懈怠し牢固ならざる者、かくの如き人は声聞道に従つて得度し、而も声聞を求めず久しく生死の中において苦を受くべきであるから、發心するものは恒河沙の如きも、阿鞞跋致を得るものは若は一若は二と説き、大悲心薄く自ら身を愛し重んず、この人は仏は得がたく多く退する者ありと聞いて、我は仏を得ること能わずと思う人のために、

為是人二故説三一切菩薩乃至初發心皆畢定⁽⁶⁶⁾。如法華經中説。

となしている。この法華經中説に關し、妙法華經の序品の末偈の

諸人今當⁽⁶⁷⁾知 合掌一心待……諸求三乘人 若有疑悔者 一仏當⁽⁶⁸⁾為除斷 令⁽⁶⁹⁾三⁽⁷⁰⁾尽無有⁽⁷¹⁾余⁽⁷²⁾
の句が、それに該當すると思われている。これに對する梵文法華經は、

pratyatā sucitā bhavathā kṛtāñjali bhāṣisyate loka-hitānukampī |yeṣāṃ ca sandeha-gatī 'ha kā-
cid ye saṃśaya yā vicikitsa kā-cit | vyapanesyate tā vidurātmañāṇaṃ ye bodhisattva īha bodhi-prast-
hitāḥ ||⁽⁷³⁾

(よき心で自制し、合掌せよ、世間のために慈悲深き人は(法を)説く。……何か菩提にむかう菩薩たちが、この世で不確実で疑いや惑いがあるならば、賢者は自分の子供らのためにとり除くであらう。)

『大智度論』における法華經の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握（望月）

となされており、ともに仏を一心合掌する人々に対して仏が疑惑等を断ち切られることを示している。そしてこの表現が『大智度論』が法華經中説としたものだと思われる。

(18)同じ卷九十三は更に、阿羅漢の先世の因縁にて受くる所の身は必ずまさに滅すべし、何処にか住在して仏道を具足するや、との質問に対して、

得_二阿羅漢_一時。三界諸漏因縁尽。更不_レ復生_二三界_一有_二淨仏土_一出_二於三界_一。乃至無_二煩惱之名_一。於_二是国土_一仏所_一。
聞_二法華經_一具_二足_一仏道。如_二法華經説_一。有_二羅漢_一若不_レ聞_二法華經_一自謂_レ得_二滅度_一。我於_二余国_一為_二説_一是事。汝皆
当_二作_一仏。

と示している。この文の後半のところが法華經の説示となされているが、化城喻品は、この諸の衆生にして今、声聞地に住することある者に、我常に阿耨多羅三藐三菩提を教化す。この諸人等はまさにこの法を以って漸く仏道に入るべし、とした上で、

我滅度後。復有_二弟子_一不_レ聞_二是經_一。不_レ知_二不_レ覺_一菩薩所行_一。自於_二所得功德_一生_二滅度想_一。当_レ入_二涅槃_一。我於_二余国_一作_二仏_一。更有_二異名_一。是人雖_レ生_二滅度之想_一入_二於涅槃_一。而於_二彼土_一求_二仏智慧_一。得_レ聞_二是經_一。唯以_二仏乘_一而得_二滅度_一。

として、一切衆生をして作仏させることをのべている。梵文法華經は、声聞の地位に在るものが、無上等正覺に向つて成熟せしめられているとして、

ye ca mama parinirvāṇāgāte dhīvaṇi śrāvakā bhaviṣyanti bodhisattva-caryāṃ ca śroṣyanti na

cāvaḥotsyante bodhisattvā vayanṁ iti | kim cāpi te bhikṣavaḥ sarve parinirvāna-saṁjñināḥ parinirvāś
yanti | api tu khalu punar bhikṣavo yad ahaṁ anyāsu loka-dhātusv anyonyair nāmadhēyair viharāmi
tatra te punar utpatsyante tathāgata-jñānaṁ paryeṣamāṇās tatra ca te punar evātān kriyāṁ śrośy-
ante | ekam eva tathāgātānāṁ parinirvāṇaṁ nāsty anyad dvitīyaṁ ito bahir nirvāṇaṁ |

(27)

(私が涅槃に入った未来の世において声聞らがいるであろうが、彼等は菩薩の行を聞いても、我々が菩薩なのだと
覚ることが出来ないであろう。比丘たちよ彼等の一切は涅槃の想いをいだき、涅槃に入るであろう。しかし、実に
又、比丘たちよ、私は他の世界において異った名前に住む時、彼等は如来の智を求めてそこに生まれるであろう。
そして又、彼等はこれを聞くであろう。如来たちの涅槃は一つであり、他に第二の滅度は存在しない、と。)

として、parinirvāṇa 以外は眞の涅槃ではなく、それこそが求められるべき仏の道であることを示している。即ち、声
門のままで滅度した者のためには、仏が異名をもってその国に生じ作仏を得せしめようというのが法華經の説くところ
であり、『大智度論』の説示もそれをうけていることを知りうる。

以上は『大智度論』の記述中に法華經の説示が引用されるか、その句の要旨がのべられているところであるが、こ
の外、三箇所において法華經についての指摘がみられる。

(四)『大智度論』卷五十七の中に、無疑と決了と何の異りかあるやとの問に対し、三宝を信ずるが故に是れ無疑、智慧
究竟の故に是れ決了なり、として、經の発心して阿耨多羅三藐三菩提心を行じ、菩薩道を行ずるも、是の衆生は般若
波羅蜜の方便力を遠離するが故に、若は一若は二、阿鞞跋地に住し、多くは声聞辟支仏地に墮す、……諸余の善法も

『大智度論』における法華經の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握（望月）

て般若波羅蜜の中に入る、をうけて、

諸余善法入般若波羅蜜^二者是諸余經。所謂法華經密迹經等。十二部經中義同般若^一者。雖^レ不^ニ名為般若波羅蜜經^一。然義理即同般若波羅蜜^二。⁽⁷⁵⁾

としている。即ち、經にいう諸余善法とは諸余の經で、法華經もその中に入り、ことさら般若波羅蜜といわずとも義理は同一なのだとしていることがわかる。妙法華經の分別功德品は、一念信解の功德をのべるに際し、壽命長遠を聞き一念信解をする人の功德は限量あることなく、

於八十萬億那由他劫。行三五波羅蜜……除般若波羅蜜^一。

この功德をもって先の功德に比べても、百分千分百万億分の一にも及ばない⁽⁷⁶⁾、として、一念信解に対する功德を賞讃しているが、梵文法華經も同様である。⁽⁷⁶⁾

ここで何故に法華經が除般若波羅蜜、virahitah prajñā-pāramitaya^二となしたのかについては詳論をさけるが、⁽⁷⁶⁾施護訳の『仏母出世三法藏般若波羅蜜多經』には、

於三般若波羅蜜多^二發信解心。自當受持說誦記念。後為他人^一廣說流布^二。普令衆生得大善利。使其正法久住世間^一。……此善男子善女人得福甚多^二。⁽⁷⁷⁾

とあり、『八千頌般若經』*Aṣṭasāhasikāprajñāpāramitā-sūtram* とは、

ya imāṃ prajñāpāramitāṃ abhiśradaddhad avakalpayant adhimucya prasanna-citto bodhāya cittam⁽⁷⁸⁾
utpāṇha……

（この般若波羅蜜を信じて信賴し、信解して心に淨信し、覺りへの心をおこし……）

とあり、更に、宗教的な心で般若波羅蜜を聞き、習い、覚え、唱え、理解し、宣べ、説き、述べ、教示し、説誦し、他人のために解説するならば、実に沢山な福徳を得るであらう、とされている。すなわち、分別功徳品がいう如来壽命長遠（法華經）に対する一念信解、更には五種法師に対するあり方と同一意趣が、般若波羅蜜に対してのべられていることを知らう。このことは分別功徳品が一念信解の功徳をのべるに際し、五波羅蜜の功徳と対比しながら、般若波羅蜜を除外したのは、般若波羅蜜に対する行と、如来壽命長遠に対する行とが異趣のものとは捉えられていなかった、同一意趣のものとせられていたことを示すと思われる。それ故に『大智度論』は、諸余の善法とは諸余の經であり、法華經密迹經等の十二部經の中の義は、般若に同ずるもので名づけて般若波羅蜜となさずと雖も、然も義理は即ち般若波羅蜜と同じ、となしたものであらう。

20 『大智度論』卷百には二箇所にわたり法華經への言及が見られる。一は般若波羅蜜をもって仏が阿難に囑累したとする經の説示をとりあげて、阿難は声聞人であるのに、阿難に般若波羅蜜を囑累し弥勒等の大菩薩にしなかつたのは何故かとの質問を設け、阿難は常に仏に侍し聞持陀羅尼を得て、一度聞けば失わず、六神通三明にして共解脱し、五百の阿羅漢の師で利益すること多きが故に囑累したのであり、諸大菩薩は仏滅後は各地に分散し、隨所に度すべき衆生国土に至り、深く般若波羅蜜力を知るを以て苦しんで囑累することを須いのだとしている。そこで更に、若し爾らば法華經、諸余の方等經は何を以てか喜王諸菩薩等に囑累するやの問を設け、

有人言。是時仏説甚深難信之法。声聞人不_レ在。又如_二仏説不可思議解脱經_一。五百阿羅漢雖_レ在_二仏辺_一而不_レ聞。或時得_レ聞而不_レ能用。是故囑累諸菩薩。

『大智度論』における法華經の把握（望月）

『大智度論』における法華經の把握(望月)

とし、何法か甚深にして般若に勝れる者あるか、般若を以って阿難に囑累し余の經を菩薩に囑累せるや、との間に對して、

般若波羅蜜非秘密法⁽⁷⁶⁾。而法華等諸經說阿羅漢受決作仏⁽⁷⁷⁾。大菩薩能受持用。譬如大藥師能以毒為藥⁽⁷⁸⁾。

となしている。これは般若には共声聞説と、十方の十地に住せる大菩薩のために説くものとの二種があるためだといふ。

法華經がこの法は難解難入 gambhīram durdṛṣam duranubodham (深く見がたく解しがたい⁽⁸⁰⁾) であり、甚深奥少⁽⁸¹⁾有能信者⁽⁸²⁾、duḥśraddadheya yas teṣāṃ deṣito 'dya vināyaka (指導者よ、彼等の信じ難いものが今日説かれた)であるということを隨所に示しているところは周知のことであり、方便品では仏が法華經を説示しようとした時、座にあった五千人の増上慢が座を起ち退去したことをすら示している。そして又、声聞らに授記したことも知られているから、『大智度論』は、このような法華經のあり方を捉らえて論を展開したものであらう。

同じ卷百の末に近く『大智度論』は、仏が阿難にこの般若波羅蜜を囑累せば、仏の般涅槃の後に阿難は大迦葉と共に三藏を結集するに、この中に何を以ってか説かざりしや、との質問を挙げ、摩訶衍は甚深にして難信難解であり、三藏は三十万偈、摩訶衍は無量無限、法華經等の諸大經は無量無辺にして大海の中の宝の如し、云何んぞ三藏の中に入るべけんや、小物はまさに大の中にあるべし、大物は小に入ることを得ず。若し問わんと欲せばまさに言うべし。小乗は何を以ってか摩訶衍の中に在らざるやと。摩訶衍は能く小乗の法を兼ねるが故なり、となしている⁽⁸⁴⁾。

これは小乗と大乘との比較の中において、諸大乘經の名を挙げたもので、法華經もその中の一つとして挙名されたものである。

〔註〕

- (1) 大正二十五・一〇九中
- (2) 塚本啓祥「大智度論と法華經」(坂本幸男編『法華經の中國的展開』)・六一四
- (3) 大正九・三三三中
- (4) 同・三三二下「作大智願。若我成仏。滅度之後。於十方国土。有說法華經一處。我之塔廟為聽是經故。踊現其前。為作証明。證言善哉。」
- (5) 同・三三二下「其有欲下以我身示四衆者。彼仏分身諸仏。在於十方世界說法。尽還集二處。然後我身乃出現耳。」
- (6) H. Kern-B. Nanjio, Saddharmapundarika-sūtra 249 (以下 Saddha. と略す)
- (7) Saddha. p. 241~2
- (8) 平川彰「大乘仏教の成立と法華經の關係」(塚本啓祥編『法華經の文化と基盤』)三二
- (9) Saddha. p. 240~241
- (10) 大正二十五・一〇九下
- (11) 同・一二六下~一二七上
- (12) 塚本啓祥・前掲書・六一六
- (13) 大正九・六二上
- (14) 同・六一上中
- (15) Saddha. p. 482
- (16) 同 p. 474~5
- (17) 大正二十五・一三〇中下
- (18) 塚本啓祥「大智度論と法華經」(前掲書)六一九~六二〇参照
- (19) 大正九・五三上中 Saddha. p. 405~408
- (20) 同二十五・一三〇下
- (21) 同・二四九中下

『大智度論』における法華經の把握(望月)

『大智度論』における法華經の把握(聖月)

- (22) 大正九・四三上中
- (23) Saddha. p. 321~323
- (24) 大正九・四三上 Saddha. p. 320
- (25) 同 二五・二八〇上
- (26) 同 九・二中
- (27) Saddha. p. 6
- (28) 大正二五・二九九中
- (29) 同 九・二二上中
- (30) Saddha. p. 157
- (31) つなづける中より 'I'yo loka-dhātūsu bhaveta tāsū paṃsu rajo yasya pramāṇu nāsti | rajap karitvāna aśeṣataṣ tam lakṣyaṃ dade kalpa-gate ca || Saddha. p. 158 ㄱㄹㄱㄱ' | 爾一處の終をばえしゝり。
- (32) 大正二五・三〇〇中
- (33) 同 九・三三上
- (34) Saddha. p. 247
- (35) 大正九・二七上
- (36) Saddha. p. 202
- (37) 大正二五・三〇三上中
- (38) 同 九・三九上~四〇上 Saddha. p. 297~8
- (39) 同 四一上 Saddha. p. 310
- (40) 同 二五・三三九上
- (41) 同 九・四七上 Saddha. p. 354
- (42) 同 二五・三三九中~下
- (43) 同 九・一一上
- (44) Saddha. p. 66~67

- (45) 大正九・七四中
- (46) 塚本啓祥・前掲書六二六に、これに關説したものが見られる。
- (47) 大正二五・四二〇中
- (48) 同 九・四上
- (49) *Saddha*. p.21
- (50) 大正二五・六一九中
- (51) 同 九・八下～九上
- (52) *Saddha*. p.48
- (53) 大正二五・六四八中下
- (54) 同九・一三下
- (55) *Saddha*. p.82
- (56) 大正二五・六八二上中
- (57) 同 九・五三中
- (58) *Saddha*. p.406～408
- (59) 大正二五・七二二中
- (60) 同 九・八下
- (61) *Saddha*. p.49
- (62) 大正二五・七二二中
- (63) 同 七二三中下
- (64) 同 九・八下～九上
- (65) *Saddha*. p.50～51
- (66) 大正二五・七二三下～七二四上
- (67) 同 九・五中
- (68) 塚本啓祥・前掲書、六三一

『大智度論』における法華經の把握（望月）

『大智度論』における法華經の把握（望月）

- (69) Saddha. p.28
- (70) 大正二五・七一四中
- (71) 同 九・二五下
- (72) Saddha. p.186
- (73) 大正二五・四五六中～四六六中
- (74) 同 九・四四下
- (75) Saddha. p.332～333
- (76) 拙論「四信五品をめぐって」（『日蓮教団の諸問題』）一〇九二～一一一八参照
- (77) 大正八・五九六下
- (78) Āṣṭaśaṣṭikā. ed. by P.L. vaidya, Buddhist Sanskrit Text. No4. Dorbaṅgha. 1960・31
- (79) 大正二五・七五四上中
- (80) 同 九・五中 Saddha. p.29
- (81) 同 十二上 同・70
- (82) 同 七上 同・39
- (83) 同 十一中、二十中～二十一中等 Saddha. p.60. 144～154等
- (84) 大正二五・七五六上中

3

以上、『大智度論』に引用される法華經の文節について、妙・梵両法華經との対比において検討を試みたが、以下、これを更に整理してみることにする。

(1) 卷七。〔質疑〕諸仏の法は法として自ら応に爾るべし、何を以て請うべし、諸仏が現前せば請えても、現前せざればどうして請うのか。〔答〕諸仏は説法するに人の請を待たずと雖も請う者は福を得等と語り、請う人なければ諸

仏は涅槃に入り説法しない者あり、と多宝如来を挙げている。〔注記〕多宝如来への言及は干からび全身不散、滅度後に関してなされたもので、証明法華の誓願の故に法を請えは（説法華）出現し証明することを示したものであらう。すなわち、仏は現前の有無によってとらえるものではなく、誓願力を持つ故に説示を請う姿勢が肝要であることを示そうとしたものと思われる。

(2) 卷九。〔質疑〕衆生らが三惡道に堕ちているのに、何故に諸仏菩薩は来ないのか。〔答〕衆生は罪重き故に見ず聞かず、とし、見仏のあり方として普賢菩薩の功德と来至とを挙げたもの。〔注記〕法華經を受持する者には衰患を除かんとの普賢菩薩の語と、普賢を念ずれば六牙の白象王に乗って来り導くとの説示をうけたもので、一心に仏を念ずることの肝要を示すために引用されたと思われる。

(3) 卷十。〔質疑〕東方の諸仏多し、どうして菩薩は中間で仏を供養し来るか。〔答〕菩薩は常に仏を敬う、諸仏は第一の福田なれば供養す。〔注記〕供養のあり方の第一なるものとして、藥王菩薩の焼身供養が挙げられたもので、供養とは一心なるものに発すべきものとして引用されたのであらう。

(4) 卷二十六。〔質疑〕仏は衆生を度せんと欲し息まざるなら何を以ってか涅槃に入るや。〔答〕仏が衆生を度すうちの第二の滅後の得度のためで、福德の因縁を種えしめるため。〔注記〕寿量品の良医の譬は、仏の救済が廣大無辺なることを示さんとして使用されたと思われる。

(5) 卷三十。〔質疑〕六道を説く理由。〔答〕五道も六道も文を廻したもので他意はない。〔注記〕法華經は五・六道のうち、六道を説いた經典として引用したもの。

(6) 卷三十二。〔質疑〕六波羅蜜の功德を讃歎せず、大力を讃えるのは何故か。〔答〕善法の果報を樂しむ者があるた

め、仏は大神力を示した。「[注記] 仏の大神力を示すために、三千塵点劫の説示を引用したものと思われる。

(7) 卷三十二。「[質疑] 菩薩は何故に須弥山等を他界に擲げることが出来るのか。」「[答] 菩薩は力あり仏の説法のために中界を莊嚴し、地を平正ならしめるため。」「[注記] 見宝塔品の遍為三仏土宝地平正の語は、このことをあらわすものとして引用せられたものと思われる。

(8) 卷三十三。「[質疑] 菩薩は未だ漏尽を得ていないのに、漏尽の聖人の前にあるのは。」「[答] 菩薩は功德智慧大なれば、初発意の時すでに一切衆生の前にあり、一切を利益す、故に菩薩は常に仏の前にあり導き、後に従って出ず。」「[注記] 従後而出を証するために、從地涌出品の菩薩を挙げ、内・大眷属として、仏と菩薩との関連を示そうとしたものであらう。

(9) 卷三十八。「[質疑] 鈍根は二十二根中の何か。」「[答] 利と相違するから。」「[注記] 利であるためには老病等に悩まされないことが肝要で、それを示すために法師功德品の六根清淨のあり方を挙げたものと思われる。

(10) 卷三十八。「[質疑] いかなるを劫と名づくや。」「[答] 時の小なるは六十念中の一念、最大なるが劫。」「[注記] この劫の説明に華光如來の仏寿の劫を挙げたものだが、これは有人の説としている。

(11) 卷五十。「[質疑] 仏は須菩提の、是の乗は何処より出で何処に住するかを質問を知る、何を以て答えるのか。」「[答] 仏は無礙解脱あり、菩薩は不可思議三昧あり、多時を小時に小時を多時となす。」「[注記] 仏菩薩の力は多時を少時と感ぜさせることを示すのに從日至食の法華經の説示を使用したと思われる。

(12) 卷七十九。「[質疑] 方便品には南無仏と称えるだけでも作仏す等とある、難知・難得の般若波羅蜜を行ずる必要があるのか。」「[答] 般若には利益力功德あるが故に、当に般若波羅蜜を行ずべし。」「[注記] ここでは質問の中で法華經

が使用されたもので、法華經の得脱の即時性に対し、般若の功德も甚大なるを説いたもので、般若の行と法華の信との同意性を示そうとしたのではなからうかと思われる。

④卷八十四。〔質疑〕諸法を色受想行識等と説くは諸法の相を壞することではないのか。〔答〕衆生は仏に及ぶ者でないので、牽引して解せしめるために善惡を説くのみ。〔注記〕仏は眞実のありのままを得せしめるために方便を説くもので、譬喩品の三車火宅の喩はそれを証するために引用せられたものと思われる。

④卷八十八。〔質疑〕衆生が菩薩を割截し肉を食わば、罪で得度しないのでは。〔答〕肉を食うから得度するのではなく、肉を食わせる菩薩に本願あるが故に、食したものに慈心が生じ得度する。〔注記〕菩薩の捨身供養は本願によるものとして、藥王菩薩品の本生がとりあげられたものと思われる。

④卷九十三。〔質疑〕人は好心あり仏の名を聞けば作仏すると法華經には説かれるが何故に淨国の仏のみを説くのか。〔答〕仏は無量無辺の光明あり、音声は十方に満つ、故にすべては同一である。〔注記〕仏には差異のないことを示すために、方便品の法を聞き福德を修めたものはすべて成仏道することを示そうとしたもの。

④卷九十三。〔質疑〕阿鞞跋致は畢定なりや否や。〔答〕阿鞞跋致は一門の中の説、仏心の中では一切の衆生・法はみな畢定なり。〔注記〕方便品が漸々積功徳を説き、阿鞞跋致品が退不退を説く故に、この質問となったものだが、法華經は畢定を説くのが本来で、すべては作仏すると、法華經が再説せられたもの。

④卷九十三。〔質疑〕菩薩の退不退の何れが実であるのか。〔答〕二事みな実なり。仏の所説はすべて実なり。〔注記〕仏は所聞の人の根に従って説法す、それ故、仏を得ること能わず早く涅槃をと樂う者のために、序品の説を挙げて令三尽無有レ余とし畢定を説いたと思われる。

『大智度論』における法華經の把握（望月）

（四）卷九十三。「質疑」阿羅漢が先世にうけし身は必ず滅す、何処に住して仏道を具足するのか。「答」阿羅漢は三界の因縁つきて再び三界に生ぜざるも淨仏土にあり、この仏所で仏道を具足す。「注記」阿羅漢が仏道を成ずるのは淨仏土で法華經を聞くからだと、化城喩品の説示を挙げて説示したものと思われる。

（五）卷五十七。「質疑」無疑と決了とに何の異なるや。「答」三宝を信するが無疑、智慧究竟が決了。「注記」諸余の善法をもつて般若波羅蜜に入るものと、法華經の名を密迹經等と列挙したもの。

（六）卷百。「質疑」阿難に般若波羅蜜を囑累し、弥勒等に囑累しなかったのは。「答」阿難は仏に常隨給仕したからで、弥勒等は仏滅後に隨所で説くからである。「注記」しからば法華經等は何故に菩薩に囑累したのかについての問を挙げ、甚深難信の法であり、声聞人はいなかったし、用いられなかったからであり、般若波羅蜜は秘密の法ではないが、法華經等は阿羅漢に決を授け作仏することを説いているからだとしている。すなわち、一仏乘であるため、すべてが作仏するとなす法華經の説示の上に立っているものと思われる。

すなわち、（五）卷三十で示される六道を説いたとする部分、（四）卷三十八で劫に関する所で、法華經にその言葉が示されるとした点を除いては、法華經説示の内容に関してふれ、『大智度論』の説示の展開に際して法華經の説示が使用されていることを知りうる。^{（一）}このことは『大智度論』の作者が竜樹に比定されるや否やにかかわらず、作者が法華經を充分に知り得ており、論の展開の上において、それを利用したことを認めうるであろう。

〔註記〕

（一）塚本啓祥「大智度論と法華經」（『法華經の文化と基盤』）六三五、には、直接引用は四回（内二回は部分的）、要旨の引用は九回、内容の指摘は九回にわたっている、とある。

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討

— 数法相配釈について —

中 條 暁 秀

(一) はじめに

『朝師御書見聞』所収の「本尊抄私記（五卷）・見聞（三卷）」について、『日蓮宗々学全書』の編者は、全八巻中第一から第五までを逸するがゆえに、身延山所蔵の「補施集 観心事 五帖内 日朝」と記すものを「私記」五巻として、第六・七・八の三巻は正本が散逸するによって、立正大学図書館蔵の小林日童師の写本を以て充てるところのものを「見聞」三巻として、別本と称する⁽²⁾、との言である。

そして、執筆の時期及び場所については、「私記」五巻は不明、「見聞」三巻はそれぞれの奥書によると、第六が「文明第八丙申正月二十三日 於身延山久遠寺大坊書之」⁽³⁾、第七が「文明第八丙申二月九日 於身延山久遠寺大坊書之」⁽⁴⁾、第八が「文明第八丙申三月十四日 於身延山久遠寺大坊書之」⁽⁵⁾とある。とすると、『朝師御書見聞』の執筆時期を通観していえることは、まず日朝は宗祖自らが「此事日蓮当身大事」⁽⁶⁾と名づける『観心本尊抄』から、遺文の注釈という浄業を手懸けていったものと思われる。なお後年の執筆の主場所となる行学院はこの時分未だ竣成していなかったものと思われる。

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討（中條）

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討（中條）

さて、「本尊抄私記・見聞」を検すると様々な問題が存するが、既に

(a) 日朝の伝と著述について⁷⁾

(b) 朝師御書見聞について⁸⁾

(c) 日朝は最古の科文といわれる五段の大科に則って、『本尊抄』に注釈を施しているものと思われる。ということについて⁹⁾

(d) 「私記」（五巻）・「見聞」（三巻）に引用される經論疏釈は老大な量に上る。特に中古天台文献が極めて豊富である点が注目される。ということについて¹⁰⁾

等々の考察を試みたので、今は、「私記・見聞」八巻中に展開される「数法相配釈」を一つの手掛りとして、かかる問題について少しく検討を加えようとするものである。

(二) 「本尊抄私記・見聞」の検討

——数法相配釈について——

1、数法相配釈について

数法相配釈は、中国がその起源とされ、特に北魏曇瑱の撰になる『提謂波利經』（『提謂經』と略称されている）は、数法相釈を主張する疑偽經¹¹⁾で、現在散逸して伝わらぬが、後の諸論書にしばしば引用されているなどの点から見て、かかる配釈の象徴的經典と目されている。例えば、智顗説・灌頂撰とされる『仁王護国般若經疏』卷第二は、『提謂經』の説を引いて、「提謂波利等問仏。何不為我說四六戒。仏答。五者天下之大数。在天為五星。在地為五嶽。

在人爲五臟。在陰陽爲五行。在王爲五帝。在世爲五德。在色爲五色。在法爲五戒⁽¹²⁾」と述べ、また、『摩訶止観』卷第六上には、「若深識⁽¹³⁾世法⁽¹⁴⁾即是仏法。何以故。東⁽¹⁵⁾於十善⁽¹⁶⁾即是五戒。深知⁽¹⁷⁾五常五行⁽¹⁸⁾義亦似⁽¹⁹⁾五戒⁽²⁰⁾」……五行似⁽²¹⁾五戒⁽²²⁾」……五經似⁽²³⁾五經⁽²⁴⁾」……と説かれ、さらに湛然はかかる一文を『提謂経』からの援引であるとして、『止観輔行伝弘決』卷第六之二に、「深識⁽²⁵⁾世法⁽²⁶⁾即出世法⁽²⁷⁾」……世即出世⁽²⁸⁾。故引⁽²⁹⁾三五行五常及十善法⁽³⁰⁾。即是五戒⁽³¹⁾」……言⁽³²⁾三五常似五戒⁽³³⁾者。如⁽³⁴⁾提謂経中⁽³⁵⁾長者問⁽³⁶⁾仏⁽³⁷⁾」……と注している。

2、空海と数法相配釈

日本に來つての『提謂経』は、空海の『⁽³⁸⁾心改⁽³⁹⁾定得⁽⁴⁰⁾度者⁽⁴¹⁾受戒⁽⁴²⁾官符⁽⁴³⁾』中にその名が見え、『十住心論』第二の愚童持齋心の解説部分に、「夫五戒同⁽⁴⁴⁾於外書有⁽⁴⁵⁾三五常之教⁽⁴⁶⁾」……在⁽⁴⁷⁾天⁽⁴⁸⁾爲⁽⁴⁹⁾三緯⁽⁵⁰⁾。在⁽⁵¹⁾地⁽⁵²⁾爲⁽⁵³⁾五嶽⁽⁵⁴⁾」……在⁽⁵⁵⁾人⁽⁵⁶⁾爲⁽⁵⁷⁾三臟⁽⁵⁸⁾。在⁽⁵⁹⁾物⁽⁶⁰⁾爲⁽⁶¹⁾五行⁽⁶²⁾。持⁽⁶³⁾之⁽⁶⁴⁾爲⁽⁶⁵⁾三戒⁽⁶⁶⁾」……と、『提謂経』の数法相配釈を下敷とした一文が掲げられている。なお誤解を恐れずにいえば、真言教学は数法相配釈によって為しているといつても過言ではない。そして、この数法相配釈は真言の影響下、特に安然以降の台密諸家の教学中に混入して、いわゆる中古天台本覚思想の一翼を担うまでに成長するのである⁽⁶⁷⁾。

3、中古天台文獻と数法相配釈

中古天台本覚思想を高揚する書物といわれ、恵心流の筆作の中でも初期の著作であると推定される『修禪寺決』には、中古天台でいう典型的な数法相の配釈が見られる。すなわち、『止観』の五略を五仏・五智に結びつけ「五略是

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討（中條）

秘教所説、五仏、五智也。⁽¹⁸⁾」と説き、さらに五智と五時とを「具、五智、奧德^{（19）}。是名、五時^{（19）}。」といい、加えて「仏智、内德具、五眼、即五字^{（20）}。五時亦五重玄故。名、仏智、五重玄^{（20）}。亦五眼即五智也。⁽²⁰⁾」と、妙法五字と五重玄・五眼・五智とを結びつけての説示である。そして、これ以降、数法相配釈はその濃度を増し、例えば『法華肝要略注秀句集』・『文句略大綱私見聞』等においては、五大・五形・五智・五臓と妙法五字、皮肉骨の三と法報応の三身とが結びつけられて、極めて恣意的な程までに自由奔放な相配が、本覚思想の所産として無遠慮なまでに竄入していることを知るのである。⁽²³⁾

4、日蓮遺文と数法相配釈

数法相配釈のいわば典拠といふべき『提謂經』は、『戒体即身成仏義』・『随意意御書』・『戒法門』等にその列名が見られる。まず大石寺に真蹟の現存する『随意意御書』は、「提謂經と申經は人天の事をとけり⁽²⁴⁾」と。真撰と見て差し支えない『戒体即身成仏義』⁽²⁵⁾は、『提謂經』乃至『弘決』の文を恣意的に解決しようとする筆勢は全くなく、ただそっくりそのままを引用するという姿勢である。これに対し、定遺三卷統編所収の『戒法門』は、例えば五戒についていえば、「三千世界も五戒を以て作れるなり。……（中略）……五戒破れて世間の五穀損すれば、身の五臓もよはく成り、五神も栖を失ふ⁽²⁷⁾。」等々自由奔放な展開を試みた上で、「上の五戒の名目は、提謂經に出たり⁽²⁸⁾。」と、説示されるのである。

次に、数法相配釈の見られる遺文を列挙すると、前述の『戒体即身成仏義』、真蹟の現存する図録の『戒之事』⁽²⁹⁾、真偽未決との論のある『総在一念抄』⁽³⁰⁾・『阿仏房御書』⁽³¹⁾・『妙法尼御前御返事』⁽³²⁾・『三世諸仏總勘文教相廃立』⁽³³⁾、偽

撰の『戒法門』・『色心二法抄』・『一念三千法門』・『十如是事』・『此經難持十三箇秘訣』・『成仏法華肝心口伝身造抄』・『無作三身口伝抄』・『十八円満抄』・『御義口伝』等々である。

そして、これらの遺文を通観していえることは、(1)濃厚な教法相配釈の見られる遺文は、偽書乃至真偽未決との論のあるものが大半である。(2)宗祖も一時期、かかる配釈にかなりの興味を抱いていたことは間違いない。なぜなら、それは建長六年に系年される『戒之事』中に、五戒を五行・四季・五味・五色・方位・五龍・五雲・五仏・十干十二支・五星・五常に配当したものの真蹟の断片が、三島本覚寺に存するからである。(3)宗祖は純粹法華教學を樹立する上において、かかる問題は所詮第二義的なものであると考えられたためか、初期の遺文には見られるものの、最終的には除去されていったものと思われる。等であらう。

5、日朝と教法相配釈

日朝の「本尊抄私記・見聞」全八巻中には「尋云五大即五行ト云者如何可相配耶」の項をはじめとする教法相配釈が、九箇所に亘って注されている。今、これらを整理し、主たるものを掲げると、(1)五大と五行 (2)四菩薩と四大 (3)五大及び五臓と五智・五仏性・五果 (4)序品の五瑞と六大 (5)五大と五尊 (6)四菩薩と四大 等々の相配が確認される。いわゆる中古天台でいうところの典型的な教法相配釈と、何ら撰ぶところはないように思われる。これと同種のものに「本地垂迹口伝」(『本尊論資料』所収)の「相配事」がある。なお筆者読書範圍の日朝関連著作には、前述の『法華肝要略注秀句集』・『文句略大綱私見聞』等に有名な、周知の五大・五輪・五智・五仏と妙法五字、皮肉骨と法報応の三身、等の相配は見られない。が、しかし、日朝がいうところの「我等衆生五尺形骸全体五輪塔婆形貌

也⁽⁴⁶⁾」との言を見ると、『阿仏房御書』・『御義口伝』⁽⁴⁷⁾等で説示される五大思想に根拠を置いて、宝塔と衆生との同等関係を説き、父母所生の肉身を以て宝塔と断ずるところのものを想起させるに充分で、かつその基調を同じうするものではないか、と案じられるものである。

（三）むすび

以上、極めて荒い論となってしまったが、締めくくりとして拙論の要点を述べるならば、

（１）宗祖も一時期興味を持たれた数法相配釈ではあるが、所詮は第二義的なものであるとして、最終的には斥けられた。

（２）日朝の「本尊抄私記・見聞」中には、数法相配釈が色濃く展開されている。加えて、「我等衆生五尺形骸、全体五輪塔婆形貌也」との言を見ると、『阿仏房御書』・『御義口伝』等とその基調を同じうするものではないか、と案じられる。

等が挙げられる。

爰に現在の自己の所信の一端を記したのであるが、識者のご叱正を乞う次第である。

〔注〕

- (1) 宗全一五卷「例言」(五〇六)及び宗全一六卷(三七八)の末注「編者云ク」を参照されたい。
- (2) 啓蒙等がいう「別本朝抄」の問題は後日に譲るものとする。
- (3) 宗全一六卷三一二
- (4) ヌ ヌ 三三八
- (5) ヌ ヌ 三七八
- (6) 定遺七二
- (7) 拙稿「朝師御書見聞の一考察——安国論私抄について——」(一九〇二「樓神」五五)を参照されたい。
- (8) 注(7)の二一〇二を参照されたい。
- (9) 拙稿「朝師御書見聞の一考察——本尊抄私記・見聞について——」(三八二〜三八三『印度学仏教学研究』三三—)を参照されたい。
- (10) 注(9)を参照されたい。
- (11) 仏書解説大辞典七卷(五一三)を、また、牧田諦亮氏『疑經の研究』(一四八〜二二一)をも参照されたい。
- (12) 大正藏經三三—二六〇(下)
- (13) ヌ 四六—七七(中)
- (14) ヌ ヌ 一三四—(下)、また、三四二(上)にも「故提謂經云……」「又与提謂対義……」との一文がある。
- (15) 弘全五—五五一
- (16) ヌ 一—一八三
- (17) 田村芳朗氏『鎌倉新仏教思想の研究』(四〇三〜四七四)、「鎌倉新仏教と日蓮思想」(二八〇〜二八八『日蓮聖人研究』所収)、日本思想大系9『天台本覚論』(四七七〜五四八)を参照されたい。なお拙稿はかかる論稿に負うところが大きい。
- (18) 伝全五—九二
- (19) ヌ 一—二二九

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討(中條)

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討（中條）

- (20) ♫ 一三六
- (21) ♫ 一二九三
- (22) 大日本仏教全書一八一六二、なお法華經方便品の三如是を報法応の三身に配当している箇所（四六）等もある。
- (23) 浅井要麟氏『日蓮聖人教学の研究』（三一五～三三五）を参照されたい。なお中古天台文献の成立年代の表が、前掲の『天台本覚論』（五四〇～五四一）にある。
- (24) 定遺一六一〇
- (25) 本書は偽書・疑書（真偽未決）説もあるようであるが、録内（三九）に編入され、かつ『祐師目錄』（定遺二七三八）、日全の『法華問答正義抄』（二六卷一一左へ写本立正大学図書館蔵）にもその名が見られるので、問題はないと思われる。
- (26) 定遺三
- (27) ♫ 一九四一～一九四二
- (28) ♫ 一九四二
- (29) ♫ 二二二二
- (30) ♫ 八五
- (31) ♫ 一一四五
- (32) ♫ 一五二七
- (33) ♫ 一六九七
- (34) 注（27）・（28）参照、なお本書は五戒・五山・五色・五味・五方・五体・五臟・五根・五智等々の教法相配釈に終始したものである。
- (35) 定遺一九四七
- (36) ♫ 二〇三四
- (37) ♫ 二〇三〇
- (38) ♫ 二〇六九
- (39) ♫ 二一〇四・二一〇七～八
- (40) ♫ 二一二

- (41) 〳 二二四一
- (42) 〳 二六一五・二六二〇
- (43) 『日蓮聖人真蹟集成』第四卷(三四六)を参照されたい。
- (44) 宗全一六卷一三八・一四〇・一九一・二二七・二八〇・二八一・二八二・三二九・三五一
六四・六六
- (45) 宗全一六卷二八一
- (46) 注(31) 参照
- (47) 注(42) 参照
- (48) 注(42) 参照

〈追記〉

- (1) 『昭和定本日蓮聖人遺文』は定遺、『日蓮宗々学全書』は宗全、『大正新脩大藏經』は大正藏經、『伝教大師全集』は伝全、『弘法大師全集』は弘全、とそれぞれ略称した。
- (2) 拙論は去る昭和五十八年十月二十八日(金)・二十九日(土)立正大学を会場として開かれた、第三十六回日蓮宗教学研究発表大会のとき、「朝師御書見聞」考——本尊抄私記・同見聞について——と題して発表したものの一부를整理したものである。

身延山晩年の日蓮聖人

上 田 本 昌

一、

「法華經の行者」として、仏使の使命を果すべく、不惜身命の生涯を貫き通し、迫害法難の法華經色説を体験されたあと、晩年を静かにすごした日蓮聖人も、いよいよ入滅の時期が迫りつつあった。身延山での八年四か月は聖人の生涯にとって、最も充実した時期であつたろうことは推察に堅いものがある。

弘安五年の夏は、聖人にとって今生最後の思い出となられた一時期であつた。身延山での自然に囲まれた静寂な境界も、すでに終りを告げようとしていたのである。この年は北条時宗が円覚寺を創建し、戦没者を供養して、無学祖元を開山としたとも伝えられている。⁽¹⁾ また聖人とはほ同じ頃に世を去つた人の中には、東大寺別当を歴任した定済が、聖人より十日前の十月三日に遷化しており、また台密の人で『悉曇正音義』の著者として名高い極楽房承澄は、聖人より九日遅れて、十月二十二日に遷化している。さらにこの年の十二月には、興福寺の僧徒らが強訴を行うなど、⁽²⁾ 多様な動きの中で明け暮れて行つたのである。また、『徒然草』で著名な卜部兼好が誕生したのは、⁽³⁾ ついこの翌年のことである。

西谷の聖人は、昨秋新装成つた久遠寺妙法華院で、病身を推しながら、門下檀越の教化に力を注いでいた。しかし

身延山晩年の日蓮聖人（上田）

身延山晩年の日蓮聖人（上田）

筆を執ることが次第に困難となり、書簡等の数もこの時期激減している。即ち、三月中旬頃から八月の中旬に至るまで、五か月間は、他の月に例をみない程、ほとんど筆を執っていないようである。わずかに四月十三日付の断簡一通がみられる程度である。「あなたがちに申させ給へ」という一紙は、大阪の正法寺に真蹟が所蔵されており、「人々御返事」と宛名が記されている。従って特定の個人宛ではなく、複数の対告衆であることから、重い筆を敢て執るに至ったものとも考えられる。檀越に対しあなたがちに申し伝えておくべき必要を感じ、病身を顧りみず執筆したものといえよう。

この間、各地の門下・檀越から、病状を氣遣つてなにくれとなく見舞いの来訪があり、ご供養もあったことが考えられるが、いつもなら必ず記していた「ご返事」を、必要やむをえないもの以外は、全く書いていない点からみて、病状のただならぬものを感じとることができよう。

春を送り、夏を迎えて、初秋に至り、わずかに氣力を得られた頃、上野殿から使者がやってきた。屋形造りを行ったので、棟札を聖人に依頼してきたものである。その御返事が八月十八日付で記されている。延山本の写本が伝わっているが、縮冊遺文では建治元年に配している。或いは重い病状から推して、この頃に配することは無理ではないかと考え、建治元年に当てたのではないかともいえよう。しかし、『境妙庵御書目録』の中でも、本書を次の身延山御書と俱に、弘安五年の八月に配当している。この点については、この一書だけで考えるよりも、同月二十一日付となっている次の『身延山御書』と関連を持ちながら、考察して行くべきであろう。

さて、この上野殿御書によれば、「屋形造之由目出度こそ候へ。何か参候て移徙申候はばや。一棟札事承候。書候て此伯者公に進せ候。」とある。家屋の建造をお祝いすると同時に、いつか折りをみてお伺いしようとしていた意志

のあったことがわかる。「移徙」は「渡座」の意味であろうか、転居・転宅のことであるが、ここでは新建造を機会をみて訪問したいものであるという希望をそのまま端的に示しているといえる。

依頼のあった棟札を、伯耆公に托したというのであるから、富士方面で活躍していた日興が使者として、これを届けたことがわかる。末文には「委^レは此御房に申^レ含^レて候。」とあるので、法門に関する詳細はとも体力的にも書き尽し難いので、伯耆公御房にお尋ねなさいということである。

これでわかることは、日興らの主な弟子らは、折り折りに西谷を訪れ聖人の健康を気遣いながら、法門についての教化に浴し、さらに檀越への弘法の手ほどきを受け、使者としての役目も果していたことがわかる。必ずしも日興のみに限ったことではないが、富士という身延と近い所に教線を持っていた日興にしてみると、他の弟子等より往復は便利であったといえよう。したがって西谷への出入りも数しげくできたことと考えられる。

特に上野氏とは密接な関係にあり、信仰上も深く影響するところがあった。後年、聖人滅後、波木井氏が身延の山主に日向を推戴したことから、日興は下山して富士に退いたが、上野氏は一寺を建立し、日興を迎えて大石寺と称した程である。したがって日興を使者とし、依頼のあった棟札を持たせた。聖人の代理として、又は使者として弟子達が、病身の聖人を補佐しながら、教化活動を展開していたことがわかるのである。

尚、本書については真蹟が伝わっておらず、延山本の写本があり、一説には系年を建治元年に配している。⁽⁶⁾

二、

さて、八月も下旬に入った二十一日に、聖人は『身延山御書』を記している。この書は入滅前五十余日の執筆とい

身延山晩年の日蓮聖人（上田）

うことになる。現存の遺文中では、最後の部に属する書ということになろう。真蹟は伝わっていないが、京都妙伝寺に日意の写本があり、平賀本も伝わっている。また聖人滅後百年頃に集録されたと思われる『録内御書』に早くも収められており、貴重な文献の一つであるといえよう。

古来、この御書は建治元年八月廿一日の述作であるとする説と、弘安五年とする説とがあった。即ち、日誦の『祖書目次』には「身延記」⁽⁷⁾とあり、日明の『祖書目次』には「身延山記」⁽⁸⁾とあって、共に建治元年の部に配している。また日騰の『新定祖書目録攷異』にも「身延山記」⁽⁹⁾として建治元年に当ている。これに対し日通の『境妙庵御書目録』では、「身延山抄」として、弘安五年にしている。近年鈴木一成教授は、この弘安五年とする立場を支持し、身延靈山説の展開にふれながら、その完成した御書とする見方をしている。⁽¹⁰⁾

「誠に身延山之栖は、ちはやふる神もめぐみを垂れ天下りましますらん。無⁺心しづの男しづの女までも心を留めぬべし。」⁽¹¹⁾

という名文によって始まるこの御書は、その文学的表現上からいっても、わが国の古典を代表する作品として、高く評価されるべきものである。

「かゝる砌なれば、庵の内には昼は終日に一乗妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文誦持の声のみす。伝⁺聞⁺く釈尊の住⁺給⁺けん鷲峰を我朝此砌に移し置ぬ。」

とあり、法華經の説誦・解説が昼夜をわかつたおこなわれていたことがわかる。入山以来ひたすらに門下の教育、檀越の教化を実施されてきた聖人の九年間が、最もよく表されている一文といえよう。晩年のこの頃は、特に病身で、起居も思うようにまかせぬ面があったであろうが、それでも気分のない時は、少しの間も論談・誦持の日課を欠かせ

ず、勵行されていたように考えられる。

したがって、聖人にとり身延山は、「伝く聞く釈尊の住す給くけん鷲峰を我朝此砌に移し置ぬ。」という実感として、受けとめられるに至ったものといえよう。たんに観念的な靈鷲山というのではなく、法華經を色読体験されたように、鷲峰山を肌で感じとっていたということができよう。

法華經の行者の住処を、浄土と思うべきであるとする聖人の立場から考えても、また昼夜に靈山へ往詣して、三仏の顔貌を拝見する⁽¹³⁾という宗教的な観点から考えても、本師釈尊常住の浄土たる鷲峰を、この身延の峰に移し置いたものとする聖人の立場は、まさに末法仏使としての面目躍如たるものがあるといえることができる。聖人の純粋な法華經体験から生れた「靈鷲山即身延山」という考えは、時空を越えた宗教の世界における一つの開悟であるといえるであらう。

寿量品に「常住⁽¹⁴⁾此説^レ法、我常住^ニ於此^ニ」とあり、さらに「時我及衆僧、俱出^ニ靈鷲山^ニ、我時語^ニ衆生^ニ、常在^レ此不^レ滅」⁽¹⁴⁾とある靈鷲山は、「我朝此砌^レ」即ち身延山たることを証得された聖人の心境は、まさに円熟の境界に入られた宗教者の独自の領域であるといえるのではなからうか。『身延山御書』はそうした時期に執筆されたものとみなすことができる。鈴木一成教授もまた「身延靈山説」が、最も高まった時期の作とみなし、弘安五年説を支持している⁽¹⁵⁾。

しかし、一面において聖人の健康状態から推してみるとき、一抹の疑点が残るのも事実である。それは、この頃病状が悪化し、ほとんど二月以降筆をとっておられない状態である。前述の如く二月廿八日に『法華証明鈔』九紙を著述されたあとは、三月上旬に『蓮三枚御書』四紙が見られるだけで、前書の八月十八日の『上野殿御書』まで約五か月間、絶えて書簡を出していない。在山中にこのような例は他にないことである。聖人は事情が許す限りにおいて、

檀越への書簡を記し、文書による教化を絶やすことがなかった。五か月もの間、一書も残されていないということは、いかに病状が深刻なものとなっていたかがわかる。このような例は、この期間を除いて他にないのである。しかも、この御書の前後は、すべて短文であり、三月の『蓮三枚御書』は四紙であり、前書の『上野殿御書』も、これとほぼ同数である。またすぐ後の『波木井殿御報』も同様の短文である。こうした中にはさまって、本書は約八〜九倍の長さにわたっている。

前書『上野殿御書』の項でもふれたように、末文が「委は此御房に申^こ含^めて候」とある点からみても、詳しく述べたのが病身のため、伯耆公に詳細は申してあるので聞いてほしいという意味にもとれるのである。もしそうだとしたら、その同じ月、わずか三日後に、比較的長文の御書が記せたということは、余程に気分が勝れていた日であったとしか考えられないことになろう。本書の前後の御書は、その上、必要にせまられ、どうしても記さなくてはならないものであった。即ち前書は棟札を依頼されて、ことわるこのできないものであったろうし、後書は波木井公に対する御礼で、しかも代筆である。

こうした諸点から考えると、必ずしも病身を押して、ここで書かなければならなかったかどうか、という必然性の問題も出てくる。果してその必用性があったのか、という疑問がないわけではない。或いはもう少し前に、病状の軽い頃の作ではなかったか、とも推察できよう。そうなれば一層納得のいく自然な理解をえることもできよう。

「たのしくして若干の財を布施すとも、信心よはくば仏に成^{なり}ん事難^し叶^ふ。縦ひ貧なりとも信心強^くして志深からんは仏に成^{なり}ん事不^レ可^レ有^レ疑^{（16）}。」

と述べて、信心為本の立場を明示し、もって一抄の結論へ導き入れている。「志深からんは」とあり、「志」を重視

しているが、これは先に建治二年の述作たる『事理供養御書』で、すでに「こころざし」が凡夫にとつては最も重要であることを詳細にわたつて論じられている。即ち「帰命」の説明をする中で、聖賢は「命を仏にまいらせて仏にはなり候なり」と不惜身命の信を説くのであるが、「此等は賢人聖人の事なれば我等は叶がたき事にて候」と正像二時代の賢聖の立場と、われら末法の衆生との立場をあげ、末世凡夫の叶ひがたきことであると指摘している。

それでは末世の衆生は何によつて成仏するのかというに、「ただし仏に成り候事は、凡夫は志ざしと申文字を心へて仏になり候なり。」とある。「志ざし」とは何かというと、

「委細にかんがへて候へば、観心の法門なり、観心の法門と申すはなに事ぞとたづね候へば、たゞ一きて候衣を法華経にまいらせ候が、身のかわをはぐにて候ぞ。飢たる世に、これはなしては、けうの命をつぐべき物もなきに、ただひとつ候御料を仏にまいらせ候が、身命を仏にまいらせ候にて候ぞ。これは薬王のひちをやき、雪山童子の身を鬼にたびて候にもあいをとらぬ功德にて候」

とあるごとく、成仏の要件は凡夫の「志ざし」にあるとし、その「志ざし」は「観心」の法門であつて、具体的にはたった一つの衣であつても、これを仏に奉るという精神「こころざし」をいうのであるということになる。純粹な「こころざし」であつて、この心は薬王菩薩が、己の脇をとめて仏に奉つたという行為に劣らぬ功德をもつたものとして、高く評価している。¹⁸⁾

『身延山御書』における「志深からん」という場も、全く同様であつて、供養する物の多少・大小にはこだわらず、その時の供養する者が、どのような「こころざし」を持つて供養したかということに、大きなウエイトがかかってくるのである。したがつて『御書』では、この文のあとに、無勝・徳勝の例をあげ、土の餅を仏に供養し、その功

徳によつて阿育大王と生れ、ついに菩提をとげることができたと記している。かくして、末文に、

「観念の牀の上に夢を結べば、妻恋鹿の音に目をさまし、我身の内に三諦即一心三観の月曇り無く澄けるを、無明深重の雲引覆つ、昔より今に至^ままで生死の九界に輪廻する事、此砌にしられつつ自かくぞ思^もつづけける。立わたる身のうき雲も晴ぬべしたえぬ御法の鷺の山風¹⁹。」

と述べている。冒頭の一文と共通した一面も感じられるが、やや理観のまさらった趣もあり、台家の流れに添った表現となっている点、いささか疑問視されるところでもある。しかし、「妻恋鹿の音に目をさまし」というのは、身延山に野生の鹿が多く、現在でも時折り民家の近くに現れ、たまに軒先を通じて餌を求めてくることもある程である。日本に古くから棲息しているニホンジカは、肩の高さが八乃至九十センチ位で、夏毛はクリ色で、美しい白斑を持っているが、冬毛は暗褐色で無斑となるといわれている。ただし尻には夏冬をとわず白斑が顕著にあり、主として森林に群生し、十月から十一月頃、交尾期に入るとされ、この頃は「ミュー、ミュー」といった声で盛んに鳴くともいわれている。²⁰したがって妻を恋う鹿の声に目を覚ましたという一文が実写であるとする、この『身延山御書』の成立は、十月頃ということになってこよう。また最初の部分「哀^{かな}を催す秋の暮」と述べ、「草の庵に露深く」「紅葉いっしか色深して」といった描写からして、秋も深まりを感じさせる頃ということになってくる。

俳諧では旧暦を依所として季節を分けているので、「秋」の部といえば、八月七日頃の「立秋」以降は、すべて秋季に入ることになる。故に現代では八月が夏の真盛りのごとく感じられているが、暦や俳句の季語では、立秋以後は「残暑」であり、「初秋」の候として扱われることになる。それにしても「鹿の音」や「秋の暮」「露深く」「紅葉・色深し」といった言葉からは、やはり秋の深まりを覚えさせるに充分なものであるといえる。「初秋」の域を越え

た「仲秋」から「晩秋」の頃といってもよいであらう。

西谷の御草庵は鷹取山の根元であり、特に夏が短かく、秋が早や足で訪れて来ていたとしても、なおかつ右の語句から推すと、八月二十一日の執筆としては、やや季節的にみて多少問題が残りそうな気配がしないでもない。「梢に一乗の果を結び」という表現からいっても、「実相真如の月浮び」「法性の空に雲もなし」という記述からいっても明らかなように、必ずしも実写ではなく、譬喩的・または象徴的に、教理をあてはめつつ、文学的な表現をされているのであるから、一文一句にこだわる必要はないとも考えられるが、「下枝に鳴く蟬の音滋く」「湯湯たる流水湛て」といった表現には、写実的な実感がこめられているといえる。

この場合の蟬は、もちろん「秋蟬」であるが、身延山では現在、九月の下旬頃まで秋蟬の鳴く声を聞くことができる。油蟬・法師蟬から始って、蛸に至るまで、身延では何種類かの蟬を聞くことができるが、蛸が鳴くと秋も進んできた感を覚えるものである。

このように見てくると、『身延山御書』は文中の季節感から推して、仲秋頃の執筆ではなかったか、とも考えられよう。もしこの推察に立つとすれば、本書の成立は、弘安五年ではなく、それ以前の仲秋であったことになろう。一説に建治元年とする系年もあるが、あるいはその頃とも考えられるのである。

あえてもう一つの理由をあげてみるならば、右の自然描写に続いて、

「かかる砌なれば、庵の内には昼は終日に一乗妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文誦持の声のみす。」

とある一文から考えるとき、弘安五年の八月は、聖人の病状が重くなり、とても来るべき冬は、身延の厳しい寒波に耐えられないのではないかと、憂慮されていた頃である。健康な日常、又は健康に近い状態であれば、終日の論談も

身延山晩年の日蓮聖人（上田）

夜もすがらの説誦も可能であったことであろうが、果してこの時期、こうした昼夜をわかたぬ講説・誦持ができる状態であったかどうか、気がかりな点でもある。翌九月八日身延を下山された聖人は、同月十八日に池上へ到着されているが、旅の疲れもあったとはいえ、直接筆を執られる元氣さえない程に病弱となっていたのである。

病状のこの時期、どうしても筆を執らなくてはならぬ人以外の書状は、すべて休んでおられた聖人が、敢てこの病状の時期に、比較的長文の本書を執筆されなくてはならない必然性があつたのかどうか、という問題も出てこよう。弘安五年より前に執筆されたものと考えることが、あるいは自然の考え方であるかもしれない。

三、

さて、九月に入つた聖人は、病状ますます進み、門下や檀越の勧めもあつて、常陸の湯へ治療をかね、静養に出かけることになつたのである。聖人自身の記述はないが、身延日朝の『元祖化導記』によれば、或記に云くとして、

「弘安五年壬午九月八日午刻身延、沢出御有、其日下山兵衛四郎所一宿、九日大井庄司入道、十日曾根次郎、十一日黒駒、十二日河口、十三日クレジ、十四日竹下、十五日関下、十六日平塚、十七日瀬野、十八日午尅武蔵国荏原郡千束郷池上村着了。」⁽²¹⁾

と身延から池上までの道程を記している。また『別頭統記』も、ほぼ同様の記述をもつて聖人の身延下山から池上までのコースを明らかにしている。即ち、

「九月八日午斉烟罷発、身延、舎于下山兵庫館、九日大井庄司、十日曾根、某十一日黒駒、某十二日河口、上房者十三日呉地、遠山氏、十四日駿州竹下、鈴木氏、十五日相州関本、下田氏、請大士、饗之宿于別室、
中老忍上政兵衛為寺今之雨
堂ノ関本山弘行寺是也 路扣旧

好^一、暗告^二長訣^三、結^二最後^一因^一、受^二之供養^一示^二之法要^一、諸子侍^レ駕^二肅々^一如^一、十六日平塚駅、長谷氏出迎一族相会高祖說法論導、信伏受戒若干人、鶴若太夫藤次等亦改^レ宗是地為^レ寺、今之松雲山要法寺是也、長谷川鶴若迄^レ今繁盛為^二寺之檀越^一、十七日瀬谷、一精舎、十八日至^二池上^一、十九日裁^レ書^二謝^一波木井氏^二。⁽²²⁾」

前の『元祖化導記』よりも、やや詳細な記述であるが、日程については同様であり、聖人が、このコースで池上まで向かわれたことは、ほぼ間違いないものと考えられよう。さらに『註画讃』を見ると、

「弘安五年壬午九月八日午、刻出^二身延^一沢^二宿^一下^二山^一、九日大井、十日曾祢、十一日黒駒、十二日河口、十三日呉地、十四日竹下、十五日関本、十六日平塚、十七日瀬谷、十八日入^二于武蔵国荏原郡千束郷池上村右衛門大夫宗仲^一屋^二。⁽²⁴⁾」
と簡潔ながら、同様の日程・コースが認められる。『蓮公行状』によれば、これもほぼ同様であるが、九日の大井について、「日興の御父大井の庄司入道の所に御入^二とある^一」⁽²³⁾とあるので、大井というのは現在の鰍沢町にあった日興の生地を指していることになる。『高祖年譜』もまた同様の日程・コースを示している。『攷異』ではつぶさに地名を探り、宿舎に当てられた人物についても調査している。⁽²⁵⁾

右に掲げた『元祖化導記』や『註画讃』等の説から考え、さらに道程から調べてみると、病身の聖人が、こうした日程の中で、最後の旅をされたであろうことは、難儀の中にも大事をとっての旅程であったことが推察される。

かくして、九月十八日に池上宗仲の館に到着した聖人は、十一日間に及ぶ長途の旅で、疲労はなほだしく、床に着かれるに至ったが、翌十九日、送って来た波木井氏の公達が帰るに当り、一書をもってお礼の言葉と、さらに遺言状の意味をもこめたものを送っている。即ち、『波木井殿御書』がそれである。

すでに自身で筆を執ることができず、門人日興に代筆せしめたので、真蹟ではないが、枕頭に侍して聖人の意に従

って書いたものであるから、真蹟と同様の扱いとなっていた。日興代筆本は、曾て身延山に所蔵されていたのである。

「畏申候。みちのほどべち事候はで、いけがみまでつきて候。」という一文で始まるこの御報は、身延から池上までの道中が、難所も多かったことであるが、公達に守られて無事に到着した旨を述べ、御礼の意を表している。「さてはやがてかへりまいり候はんずる道にて候へども、所らうのみにて候へば、不ぢやうなる事も候はんずらん。」とあり、帰るつもりのあること、所労のため不定であることを述べ、暗に入滅の近いことをほめかされている。二度と再び生きて帰ることのできなくなるであらうことを予知されていたともいえる。したがって、「いづくにて死候とも、墓をばみのぶの沢にせさせ候べく候。」と遺言状の形をとられるに至ったものと解することができる。ここでは明確に死について語られており、その後の墓についても身延にと指定されている。この点から考え、聖人がいかに身延の山を大事に取扱っていたかがわかる。それは単なる感傷や、思いつきで「墓をば身延の沢に」と決められたのではなく、平素からこの山が自分の墓所にふさわしい処として、深く心中に念じていたからであるといえる。

前書の『身延山御書』で、「神もめぐみを垂れ」給う靈山であり、「積尊の住み給ひけん鷲峰を我朝此砌に移し置きぬ」という心境から、当然の結果として定められた遺言であると考えられる。また聖人にとっては、まさに一代のしめくくりをした靈山であり、生涯の総括に相当する処であってみれば、人生の最後、留魂の地として身延の山を選定したことは、むしろ至当のことといえるであらう。

この後、本文では波木井氏が聖人のために「くりかげの馬」を贈られたが、「いつまでもうしなふまじく候」と述べ、この馬を「おもしろくをばへ候」と、気に入っていたことがわかる。馬については前にもふれた通り、聖人はこ

とのほか関心の強いものを持っていたのであった。予定通りに常陸の湯までひかせるつもりであったが、若しも人にとられたりしてはいけないのと、「いたはしくをぼへば」湯から帰るまで、「上総のもばら殿」のもとにあずけることにしたとも記している。わが身が疲労して、筆も執れない状態ながら、乗ってきた馬の上になで心を配り、慈愛の情を持っていたことは、さすがに聖人の人徳を示すものといえよう。「湯よりかへり候はんほど、上総のもばら殿もとにあづけをきたてまつるべく候」とあるので、聖人はこの時点では、あくまで常陸の湯へ行く目的を持っていたことがわかる。

しかし、現実には右の通り、筆を握ることも困難であったという点から考え、常陸の温泉まで歩を伸ばすことはできなかったのではないかと、ともいえよう。聖人はもちろん常陸へ行ったことを記した文書を遺していないが、後世の文書の中には、聖人が池上へ到着されてから、しばらくして三日間程、塩原の温泉へ湯治に出かけられたとする説も出ている。即ち、『別頭統紀』によれば、

「有^レ人告曰下野塩原温泉最善^ニ中風^ニ請^ニ試験^ニ之^ヲ諸子以誘^フ高祖雖^ニ自知^ニ不^レ起^ル而亦不^レ拒^レ之往浴^ニ温泉^ニ居^レ之三日帰路宿^ニ于宇都宮^ニ」⁽²⁷⁾

というのであって、下野の塩原温泉へ湯治に出かけ、三日間逗留していたというのである。『本化別頭高祖伝』でも、ほぼ同様の説をあげ、下総塩原へ三日間行ってきたことになっている。⁽²⁸⁾常陸の温泉ではなく、下野の塩原だとする点にも疑問があるが、湯治を済ませたあと、二十七日に池上へ帰着し、波木井氏に書を送って告別をなしたとしている。こうした記述は、『元祖化導記』にも、『註画讃』にも見ることはできない点から推して、はなはだ疑問とすべきものであろう。尚、この問題については、宮崎英修博士が、「波木井殿御報常陸の湯について」⁽²⁹⁾の論考を発表し、

身延山晩年の日蓮聖人（上田）

常陸を選んだ理由、及び湯治に行ったとする説が生れてきた原因等について研究されているので、ここではそれに譲ることにした。

四、

かくして、聖人は池上における最後の生活に入り、病床の身となったのであるが、四月以来、次の通り四幅の曼荼羅本尊を染筆している。即ち、沙門天目に授与された卯月の曼荼羅で、これは京都の本隆寺に所蔵されている。次は同じく四月の書写で、「俗藤三郎日金授与之」とあり、堺市の妙国寺に保存されている。ともに首題は大きく力強いものがあるが、後者は諸尊が大部省略されており、中央部が簡素化している。また四天王もなく、前者は「広」、後者は「略」といった感がする。

次は六月に入って、最後の二幅がある。曼荼羅本尊の絶筆といってよいものであろう。その一つは茂原の鷲山寺に所蔵されているものであるが、やや墨の鮮明度を欠き、判然としない部分もみられる。四天王や諸尊も備わっているが、やはり病身のためか、他の曼荼羅と比較して、いく分力の入り工合に相違があるように見受けられる。

もう一幅は、京都の本圀寺所蔵のものであるが、これは墨蹟がしっかりしているが、首題はやや小型化し、全体に筆勢がおとなしくなってきた。恐らくはこの六月染筆の二幅が、聖人における曼荼羅の最後のものといえるであろうが、それだけに貴重なものといえよう。

また、遺文における最後は、前述の『波木井殿御報』であるが、このあと十月七日付の『波木井殿御書』がある。真蹟は伝わっておらず、本満寺本の写本があるが、古来真偽説の伝わっている御書であるため、一概に信用するわけ

には行かない。しかし、前書の『波木井殿御報』と、意を同じくするところもあり、特に身延山を墓所と定められている点、波木井氏の外護に対する謝礼の意を述べられているところは、全く同様の趣を記しており、聖人の最後の言葉として、充分に納得のいく内容であるといえる。

さらに、先の『身延山御書』との関連をたどる時、「身延靈山説」も共通したものを持っている。即ち、「我此山は天竺靈山にも勝れ、日域の比叡山にも勝れたり。然れば吹風も、ゆるぐ草木も、流るる水の音までも、此山には妙法の五字を唱へずと云ことなし。日蓮が弟子檀那等は此山を本として参るべし。此則靈山の契也³⁰。」とあるが、自身の墓所として定めた地だけに、身延靈山ということも、身延を根本の地とされたことも、難なく理解することができよう。

真偽説のある御書であることを、考慮の中に入れてみても、尚かつ、他の御書との関連から推して、右にあげたような諸点は、聖人最後の真意を、多分に伝えている点がありうるものと解してよいのではなからうか。

五、

身延山における日蓮聖人の足跡を、遺文を中心にしながら、曼荼羅や他の文献を参考にしつつ、在山九年間の動向を中心にして探ってきた。

入山の当初から、中期を経て次第に数を増した御書も、後期に至るに従って、御書の数も減少し、特に最後の年には、十一編を数えるのみである。しかもその中には、系年に異説のあるものもあり、建治三年五十六歳の頃から比較すると、三分の一以下になっており、病身の聖人を物語っているものがあるといえる。

身延山晩年の日蓮聖人（上田）

入山の第一書たる『富木殿御書』から始り、最後の『波木井殿御書』まで、一貫して考察してきたのであるが、これにより多少なりとも、身延山における聖人の動向が握めたとしたら、筆者の幸せとするところである。

法華信仰の徒にとって、身延はまことに根本の霊山であり、祖山であることには相違はないものといえる。日蓮聖人を真に理解しようとする者にとって、身延山における九年間の上記生活は、欠くことのできない重要なものであり、その生涯における思想・信仰・教義をしめくった拠点であり、棲神の地として、今後も依り所となっていくことであろう。晩年の九年間を、じっくりすごした身延の日蓮聖人を知ることが、真の聖人を理解して行く上の、大切な要件となっていくことであろう。

〔註〕

- (1) 『仏教史年表』（笠原一男監修） 二〇二頁
- (2) 『世界史年表』（『世界大百科辞典』平凡社） 三十一卷二十一頁
- (3) 『日本文学史』（田中重太郎監修） 八三頁
- (4) 断簡一七四 定遺 二五三二頁
- (5) 上野殿御書 同 一九一四頁
- (6) 縮冊退文を参照
- (7) 『祖書目次』（日諦） 定遺 二八一七頁
- (8) 『祖書目次』（日明） 同 二八二九頁
- (9) 『新定祖書目錄攷異』（日騰） 同 二八三七頁
- (10) 『大崎学報』一一〇号参照
- (11) 身延山御書 定遺 一九一五頁
- (12) 最蓮房御返事 同 六二五頁

- (13) 観心本尊抄 定遺 七二一頁
- (14) 寿量品(大正蔵九一四三中)
- (15) 『大崎学報』一一〇号参照
- (16) 身延山御書 定遺 一九二三頁
- (17) 事理供養御書 同 一二六二頁
- (18) 『日蓮聖人における法華仏教の展開』(拙著) 四八頁参照
- (19) 身延山御書 定遺 一九二三頁
- (20) 『世界大百科事典』(平凡社) 一二卷四七〇頁 四一頁
- (21) 『元祖化導記』 八一—一九
- (22) 『別頭統記』 五一—二二
- (23) 『註圖讃』 五七
- (24) 『蓮公行状』 下—四六
- (25) 『高祖年譜攷異』 定遺 一九二四頁
- (26) 波木井殿御報 八一—二〇
- (27) 『別頭統紀』 下—三五
- (28) 『本化別頭高祖伝』
- (29) 『大崎学報』第一二五・六合併号一三二頁以降を参照。九月十八日池上到着した聖人が、二・三日休憩したあと、常陸の湯や其の他塩原の湯等へ出かけたとする説が生れたのは、もと八品派の僧であった舜統院真迢の非難を会通するためのものであったと考えられるとしている。また、常陸の湯を選ばれた理由として、南部氏の常陸移住についての関連から論究している。一四二頁参照。
- (30) 波木井殿御書 定遺 一九三一頁

火 と 光

(仏身觀の変遷)

高 橋 堯 昭

私はガンダーラの山寺を歩きながら、この地で成立した大乘仏教の基盤を表わす一特徴として「火」と「光」と「水」を考えて来た。ここではまず「火」と「光」について述べよう。

(一) 「火」

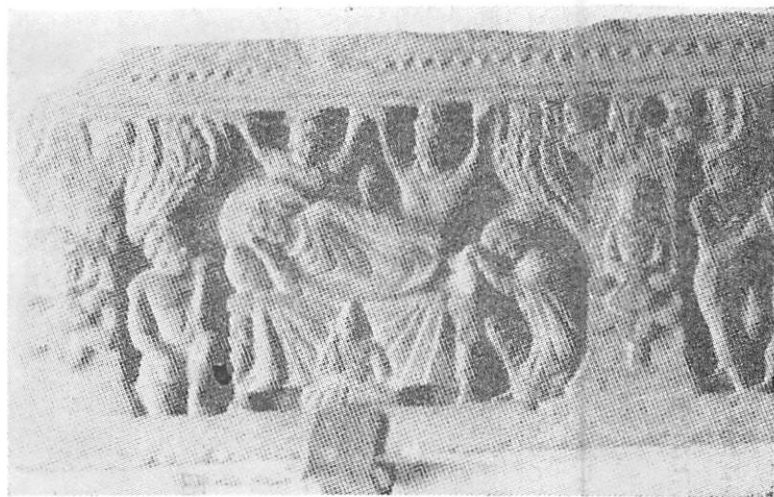
パキスタンのあらゆる博物館を尋ね歩いていううち、一つの興味ある問題に目がとまった。それは広い意味のガンダーラと称せられる地域の中で、パキスタン側とアフガニスタン側とは異った傾向があることだ。⁽¹⁾かつてアフガニスタンのカーブル博物館を尋ね、モタメディ館長の好意で全仏像の写真をとらせていただきながら、見過して来たもの、即ち涅槃図と燃灯仏の彫刻をパキスタン側のものと比較して見て大きな差のあることが分った。

(A) まず涅槃図から考えてみよう。即ち中央に横たわる釈尊をかこんで前と後ろに手を挙げたり、頭をたいたたり、胸を打ったり、或は身を投げ出したり、或は頭髮をかきむしって悲しむ姿が如実に表現されている。これは摩訶摩耶経の「或有宛軀干地、或有牽絶衣服嬰珞、或拔頭髮、捶胸大叫」⁽²⁾の記述にそっくりな表現である。

火と光 (高橋)

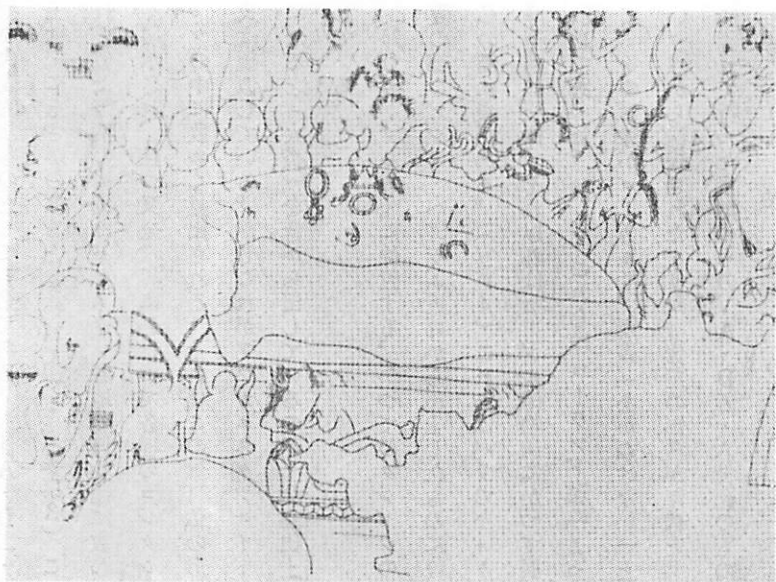
こうした多くの悲しむ人々の中にあつてどうしたことか一人が牀前でじっと坐っている。百二十才で釈尊入滅の直前、最後の弟子となったスバドラだ。長年バラモンの修業を積んで生死を超越しているせいか端然として禪定に入っている。この対比が又面白い。このスバドラはガンダーラでも又インドでも共に牀前で禪定に入っている姿で表現されているが、これがアフガニスタン側では少々変化している。即ちバーミヤンの壁画ではどうしたわけか火炎が肩から出、又火に包まれて坐っている。法顯訳大般涅槃經や玄奘の大唐西域記、そして大智度論に「須跋陀梵志仏前に在って結跏趺坐し、自ら神力をもつて身中より火を出し、身を焼いて滅度をとる」⁽⁵⁾とあるように大乘系の經典の出現に至つて、この火炎の表現が出て来るのは興味深い。

私はかつて何回かバーミヤンを尋ね、この壁画をカメラにうつし判別出来るよう努力を重ねたが、余りにも剥落がひどく、肉眼ではどうやら区別出来るのだがフィルムではどう努力しても判別出来なかった。思うに目は立体的に物をとらえ



1、ディール博物館

（この類型はベルジャワ博物館数体、大英博物館一体、その他多数）



2、バーミヤンK洞（第330窟）涅槃図（京都大学調査隊による）

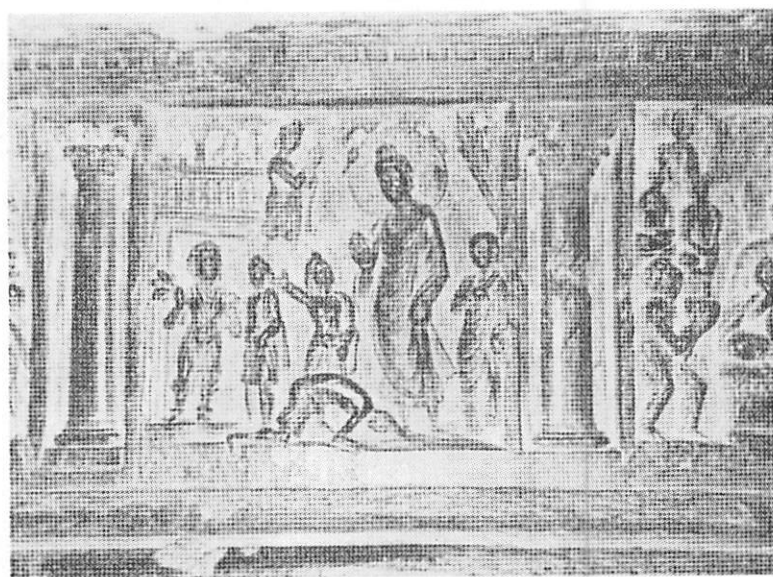
得るが、カメラは平面的に物をうつすからだと思った。為に京大隊報告書「バーミヤン」の第三三〇窟（写真2参照）や名古屋大学隊の宮治昭氏（仏芸一四七号）を参照させていただいた。

これらによれば釈尊の牀前に端坐するスバドラの肩からは火炎が立ち登っているのが分る。同じ涅槃図でありながらバキスタン側のものにはなく、アフガニスタン側のものにこのような火炎があるのはどうしたことだろう。バキスタン側の涅槃図はクシヤンの盛期、カニシカ一世の頃から作り出されているからA・D二・三世紀のものもある。一方バーミヤンはグプタ様式であるからA・D五・六世紀のものといえる。従ってかく時間差があるので比較にならないという論議も当然出て来る。従って他の面、即ち燃灯仏の彫刻からこれを考えてみよう。

(B) 燃灯仏で有名なのは現在ラホール博物館内に復元されているシクリのストゥーパのもの。ガンダーラ彫

刻の代表的なものとして有名である。大体A・D二三世紀にもさかのぼると言われている。（写真3）これと似た図柄の彫刻はパキスタン各地の博物館に数多く展示され、且つ又全世界にわたって各種のコレクションの中に数多く見出される。それ程この燃灯仏の形式は類似している。然しこれがアフガニスタンサイドになると「火炎」を背から出しているのが十体程出土している。

即ちカーブル東北に位置する、かつてのクシヤンの夏の都カピシ・ペグラム近郊から出土したものには仏の肩に炎がある。（写真4）これらはバリのギメー博物館に一体、それ以外はカーブル博物館にかつて展示してあった。然してこれらはローランド達によって、その形態がローカルの、所謂「あかぬけない」という点から洗練されたギリシャ彫刻の影響が年代と共に薄れて行った後期のもの、A・D五・六世紀のものと考えられて来た。



3、ラホール博物館 シクリの仏塔より

然し最近の研究では

やはりこの「あかぬけ
ない」点から後期のもの
のとして考えられて来
たスワットのデール
地方の仏像が、そのロ
ーカル性の故にギリシ
ヤ芸術の墮落ではなく
その地方その地方の特
殊性を失わないでギリ
シャ彫刻の手法をとり
入れた時代のものとし
て、むしろ最初期のもの

の即ちA・D三世紀にまでさかのぼるものとして考える方向に進んで来た。⁽⁶⁾ 従ってこのカピシ・ペグラム近郊の出土
の燃灯仏も、むしろこの「あかぬけなさ」の故に早い時機のものとして考えられるに至った。⁽⁶⁾ 従って三・四世紀にさ
かのぼれるということになった。

このような視点に立って考えると、このカピシ・ペグラムの燃灯仏もシクリのそれも、ほぼ同時代のものと言え

火と光（高橋）



4、在 カーブル博物館 カピシ・ペグラム出土、カ
ピシ・ペグラム出土の同型のもの数体（カーブル
博物館）パリー・ギメー博物館一体

火と光（高橋）

る。従って一方が火炎を肩にし、他はこれが全然ないというティピカルな類型が私には興味をさそう。

尤もバキスタン側にこの火炎仏・炎肩仏が全然ないわけではないが、極めて稀であるといつてよい。燃灯仏ではないが肩から火を出すものとしてたった一つベシヤワル博物館にある。巾十センチ、高さ三十センチの小品で足から水を出している双神変像がある。然もガンダーラ特有の黒色片岩と違って青っぽい黒、即ちスワット地方のものであると私は見ている。

筆者はこの炎肩仏・双神変像に興味をもち極力これを集めて来た。現在三体集っている。このうち二つは明らかにスワット系の石であり、他の一つは黒色片岩であり、マルダン地方出土のものに岩質は似ているが、然しこれを取扱った現地商人はスワットの農夫が持つて来たと証言しているからスワット出土は確実であろう。かく考えるとガンダーラ後期のもの、私の見解ではA・D四・五世紀にはこのような「火炎」をもった仏がガンダーラの北辺に流布していったことが分る。

更に私は前々号に於てクシャンのコインについて言及したが、ヴィーマカドフィース王の肖像に「炎」が現れて以来、カニシカ、フウヴィジカ等の諸王のコインにひき継がれ、又その裏面にミントされた諸神にも火が作られた。そして又フヴィジカやバスデーバに至ると火炎の代りに太陽の光芒を示す円環が諸神の頭の後ろに現れ、又王の頭にも作られて来たことを書いた。私はこの円環（光背）も火炎と同じく、人間の王ではなく、「大王・諸王の王・天子」と最高の天子・即ち天の子という超能力をそなえた王としての立場を示すためにこれが描かれた。

同様に釈尊も生身のものではなく久遠のものへの超越を示す手段として釈尊の上に「炎」が描かれるに至った。いわば「仏身観」の展開発展がこれで示されると私は考える。

然も造像上このことを如実に示す例として、シクリの燃灯仏彫刻では釈尊の前身たるメーガの姿が、大きさをバランスよく表わされているのに、カビシ・ペグラム出土の燃灯仏像はメーガに対して余りにも巨大すぎる。(写真4参照)これこそ仏を超越者として表現しようとする意欲がこれにのみとれるのではあるまいか。

かく仏の超人性を表すに「火炎」をもってする手法はまずアフガンサイドで起り、それが時代と共にバキスタン側に伝わり、特にスワット地方で行われて行くことが、この涅槃図燃灯仏の比較で考証されると思う。

[註]

- (1) 狭義のガンダーラはバキスタンのタキシラからベシヤワル地方も少し広いとアフガニスタンのジュララバード・ハッダを含む私は広い意味でカビシ・ペグラム地方を含めて考えている。
- (2) 大12—1012上
- (3) 大1—204中「時須跋陀羅 即於仏前入火界三昧 而般涅槃」
- (4) 大51—904上
- (5) 大25—81上
- (6) 仏芸一七号モタモテ造子氏論文、及オリエント学会一九七二迦畢試国出土の仏教彫刻の製作年代について
- (7) Rosenfield *Dynastic Art of Kushan*
- (8) *mahārajaya rājatira (ja) sya devaputrasya*
- (9) 足元に伏す小さなメーガに対して巨大な仏→超越者を表現

（二）「光」

前述の如く、大乘仏典の特徴は仏を超越的なものとして考える所にある。即ち阿含経等に現れる釈尊はいわば生身のそれ、インドに生れ、そこで悟り法を説いた仏であつた。いわば覺者である。従つて阿含経では後述の大乘經典が仏の偉大さを光明の奇蹟で表現するような必要を生じなかつたといえる。勿論釈尊が河の底を通つたり（サンチーの彫刻）又大迦葉を帰依させるために種々の奇蹟を行つた（所謂ミラクル・オブ・スラバステイ^イ）といったものもないわけではない。然し自ずと大乘經典の中に現れている光明等の奇蹟とは根本的に異り、前述の如き「仏身觀」の変遷を感じさせられる。

私はかつて法華經の序品の白毫相から光を出したり、神力品の「広長舌を出して上梵世に至らしめ一切の毛孔より無量無數の光を放ち……、宝樹下の師子座上の諸仏も亦、広長舌を出して無量の光を放ち……」という「光」の問題を考えてみた。

然してこの釈尊の放光の奇蹟は法華經の独断場ではなく、釈尊の「超越性」を示す法華經成立当時の流行語？のよなものであつたことを知り我れながら驚いている。即ち大藏經を一瞥して「光」や「火」の表現を探してみる時「仏が授記を与える時口中から五色の光を放つ」というのが常套手段であつたことが分つた。²
然して口中から種々の光を出したという場面を参考の為に詳記してみると次の如くなる。

支婁迦讖訳の道行般若經に五ヶ所。兜沙經に二ヶ所、阿闍世經に一ヶ所。仏說無量清淨平等覺經に十ヶ所、阿闍世經に三ヶ所、般舟三昧經に一ヶ所出ていた。

支謙訳の經典では大明度經恒竭清信女經（これは支婁迦讖訳の道行般若經の異訳）に二ヶ所。菩薩本業經（これは支婁迦讖訳の兜沙經）に一ヶ所、私阿昧經に一ヶ所。仏說阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經（支婁迦讖訳の仏說無量清淨平等覺經）の卷の上に八ヶ所以上、卷の下に三ヶ所ある。又、七女經に一ヶ所。竜施女經に一ヶ所。仏說竜施菩薩本起經に一ヶ所。慧印三昧經に一ヶ所ある。

竺法護訳の經典、仏說心明經、梵志女首意經、文殊師利現寶藏經、順權方便經、等集衆徳三昧經、弘道広顯三昧經、普曜經等々に夫々一ヶ所、文殊師利仏土嚴淨經には三ヶ所もある。

支曜訳には成具光明定意經に一ヶ所ある。

羅什の訳としては集一切福徳三昧經に一ヶ所、仏說阿弥陀經に三ヶ所あり、又そこには炎肩仏の「火」についての表現もある。特に

康僧鎧の無量壽經では「光」が三ヶ所、「炎」が二ヶ所も出ている。

その他修業本起經に一ヶ所、仏本行經に二ヶ所、仏本行集經には「炎」や「光」と「火」が並記されている。

又大乗以外の經典としては

根本説一切有部毘奈耶、卷九に二ヶ所、卷三十八、卷四十六に各一ヶ所。葉事卷二、卷七、卷八に各一、雜事の卷二と卷三十二に各一ヶ所。

増一阿含の第三十六に三ヶ所、第三十八に一ヶ所。四分律第五十一に一ヶ所。

五分律卷三に一ヶ所出ている。これは光だけではなく、火と水にまで言及している。

以上經典に光と火の出ているものを抜き出してみたが、これらの色の種類や出入の場所に関しては参考の別表をみ

火と光（高橋）

ていただきたい。

私はこれらが大藏經からぬき出して表にするうち一つの法則性がここから読みとれるような気がしてならなかった。この光（火はごくわずかだが、時には並記されている）の出ている經典を訳した人々は「支」のついた国、所謂、大月氏出身の人である。更に羅什もクツチャの人だが母がインド人でカシミールに遊学している。竺法護も「竺」が竺高座の弟子ということであつて、出身は大月氏であり、康僧鎧も康国即ち今のサマルカンドの出身であり、大月氏の勢力範圍と深くかわりをもっている所の出身である。

又大乗以外の經典でも根本説一切有部毘奈耶はカシミールからガンダーラにかけて基盤をもっていた有部の律であり、増一阿含もガンダーラの地名や川の名がよく出て来るからガンダーラ地方で作られたものと言われている。尤も阿含經は釈尊滅後から大乘の成立した後までも順次補つて作られ続けて来たから、後期のものは大乘の影響がなかったと言いきれまい。ちなみに四分律第五十一、増一阿含の卷三十六、卷三十八等、經典の後半に位置している所に「光」が出ているから、大乘の影響はともかく、そのような精神的風土に於て大乘經典と同じような環境の上でこれらの小乗經典も生れたとも言えよう。

かく考えて来ると、この「光」と「火」の表れている經典を訳した僧は大月氏、即ちクシヤンの勢力範圍の人であつたことが分る。このことを裏返せば、この經典の成立したクシヤンの領土内に「火と光」をもつて釈尊を超越者として表現しようとする傾向があつた。否むしろ釈尊を人間釈尊ではなく、この「火と光」をかりて超越者として考える思考方法、即ち仏身觀の轉換があつたことが理解されよう。

前述の如く、「光」によって仏の莊嚴さ偉大さを示す傾向心情があつたということは、釈尊が人間ではなく超人的

な力をもつ仏、法華経流に言えば「生身の釈尊から久遠の本仏」への立場の飛躍。この重大事件がこのガンダーラで行われたことが分る。これが小乗から大乘への宗教運動であり、然もこの超越飛躍を媒介するのがこの「火と光」であったと私は考える。これが又前述のコインの太陽の光芒を思わせる円環光背のリングであり、又王や神の肩から炎々ともえ上る炎であったと思う。

〔註〕

- (1) ベンヤワル博物館蔵やサンチーの彫刻
(2) 以下は別表参考

〔参考〕

支婁迦讖

道行般若経卷六(大8―四五八上) 仏笑口中金色光出優婆夷即持金華……不墮地

卷八(大8―四六八中) 口中出若干色其明至十方仏刹悉明其明還遍仏三匝從頂上入

卷九(大8―四七一中) 身有金色身放十億光炎

〃(大8―四七三中) 於上虛空中有化仏身有三十二相紫磨金色身有千億光耀炎出

卷十(大8―四七六上) 焰三昧

兜沙経(六十華嚴第四・第五及び支謙訳菩薩本行経第一品の異訳)

(大10―四四六上) 仏放光明先從足下出照一仏界中極明現十億閻浮利天南

阿闍世王経卷上(大15―三九三中) 其臂者一一毛放百億千明其臂上毛一一有百千光明一一明者有億千蓮華一一蓮華上者有菩薩

仏説無量清淨平等覺経(大阿の古訳・支謙訳阿弥陀三耶三仏薩婆仏檀過度人道経の異訳)

第一(大12―二七九下) 面有九色光數千百度光甚大明面色光明乃此耳

〃(大12―二八〇上) 焰宝光……紫磨金焰

火と光(高橋)

火と光（高橋）

第一（大12―二八〇中）如是之焰明

〃（大12―一八一中）十三我作仏時令我光明勝於日月……焰・無數天下窈冥之所

〃（大12―二八二中）焰照十方仏国

第二（大12―二八八中）此教光從口出遍焰・諸教刹則廻光還邊仏三匝已從頂入

〃（大12―二九〇上）頂中光明焰・照他方

第三（大12―二九〇中）無量清淨仏光明照國中及焰・照他方仏国

〃（大12―二九二下）第三焰・天

第四（大12―二九六中）比如火起燒人（これと同じ表現他に二九六中にあり）

阿闍仏国經第三（大11―七五七中）中有阿羅漢身中自出火・還燒身而般泥洹

第五（大11―七六一上）阿闍仏身中出火・還燒身已便作金色

〃（大11―七六三上）炎・照他方世界

般舟三昧經卷中（大13―九二上）時笑仏国中金色光出至十方不可計仏国

支識

大明度経恒竭清信女品（大15―三九三中）仏笑口中金光出清信女即持金華散仏上仏威神故不墮地

強弱品（大15―五〇二中）口中出若干色其明至十方仏国悉為其明

菩薩本業經（兜沙經の異訳）（大10―四四七上）仏放足下相輪光明悉照仏異小国土

私阿味經（大14―八一三中）仏爾時便笑無數色々……從口出光照無央數仏国還繞身三匝於頂上使不見

仏説阿弥陀三耶三仏薩婆仏檀過度人道經（大阿）

卷上（大12―二九九上）第一仏名光遠焰・

〃（三〇〇上）面有九色光數千百變光

〃（三〇〇下）頭中光明如仏光明 所焰・照無極

〃（三〇二中）頂中皆有光明

〃（三〇二中）光明焰・照

(◇) 三〇二の中→三〇三の上) この間多くの光明の表現あり

(◇) 三〇八中) 頂中光焰照他方……仏光明照國中及燄照他方仏國大明

(◇) 三〇九下) 是第三燄天

卷下 (◇) 三二〇中) 但見其光明

(◇) 三二一下) 自然成五光五光乃至九色

(◇) 三二三下→三二四中) 比若劇火起燒人身心能自於中(三回)

七女經(大14—19〇九上) 是時迦葉仏笑五色光從口出照滿仏刹還繞身頂上入

竜施女經(大14—19一〇上) 時仏乃笑五色光從口出照一仏刹還從頂入

仏説竜施菩薩業起經(大14—19一一上) 時仏來詣舍眉間放光明

慧印三昧經(大15—19六四下) 若干種光色色各異從口出青黃赤白遍照無央數仏刹皆覆蔽日月明還繞身三匝便從頂入

竺法護 (餘正法華)

仏説心明經(大41—19四二下) 諸仏笑法皆有常瑞授菩薩決遍照十方光從頂入

梵志女首惡經(大14—19四〇中) 欲五色青黃赤白索光從口而出甚大光明普照十方無數仏國

文珠師利現寶藏經(大14—19四五上) 仏便笑時三千大千世界無量光明遍滿其中……

順幢方便經(大41—19三〇中) 無央數色從仏國出青黃白黑紫紅之色……

等集衆德三昧經(卷中) (大21—19八一上) 於時世尊知離垢威菩薩所念尋入欣入五色光從口光照十方無數仏國還繞三匝從頂上入

弘道広顯三昧經卷四(大15—19五〇上) 時世尊笑諸仏笑法口出五色香羅變光燄無數

文珠師利仏土嚴淨經(大11—19九二中) 時仏因笑無數光色從其口出照於十方無量世界

(大11—19九五下) 時仏欣笑口中五色光照十方還還三匝從頂上入

(大11—19〇〇上) 於時世尊尋便欣笑光從口出五色普……

普曜經卷八(大3—19五三一の上→中) 仏亦出烟龍大顯怒身皆火出、仏亦現神身出火光……

支曜

成具光明定意經(大15—19五五中)

皆見光從口出三色燄燄明接十方
其在痛者一時得安還從頂入自如常輝

火と光 (高橋)

火と光（高橋）

羅什（除妙法華）

集一切福德三昧經卷中（大12—九九七下）爾時世尊即便微笑若干百千青黃赤白紅紫等光從面門出
仏説阿彌陀經（大12—三四七中下）中出広長舌相……大縁肩仏……縁肩仏

（大12—三四八上）大縁肩仏

康僧鑰

無量壽經（大12—二六七上）炎光・炎根

（◇）二七〇中）炎・葉光仏

（◇）二七二上）一々華中出三十六百千億光一々光中出三十六億仏

（◇）二七三上）口出無數光遍照十方国廻光圓遶身三匝從頂入

その他

修行本起經（大3—四六二中）仏乃蹈之即住而笑口出五色光出離口七尺分為兩分

一光繞仏三匝光照三千大千刹土莫不得所

還從頂入一光下入十八地獄苦痛一時得安

仏本行經（大4—八二中）頭上火炎然口中亦吐火 身放火炎

（◇）九三上）即時欣笑五色光明躍出從口出若干彩色

仏本行集經五十三（大3—八九七上及八九八上）身或放烟惑於炎火……入於火光三昧

根本説一切有部毘奈耶

卷九（大23—六六九中）即便微笑口中出五色光或時下照或復上昇光下者至無間獄機余地獄若受炎熱皆得清涼

（◇）一六六九下）仏世尊過去事光從背入……從眉間入（その他あり）

卷三十八（◇）一八三五中）時彼光明遍照三千大千世界已還仏所光從背胸足指掌入……光從眉間入……光從頂入

卷四十六（◇）一八七九上）世尊法爾若微笑於口中出五色光明

藥事卷二（大1—六八上中）敷座而坐熙怡微笑口出五色光或時下照……

卷七（大24—二九下）於微笑時出青黃白等光從如來口分三道……

卷八(24—36下) 諸仏常法若有微笑即放青赤白種々之光從口而出
雜事卷二(24—21—中) 口出五色微妙光明或時下照或復上昇

卷三十二(24—36七下) 遂便微笑口出五色微妙光明或時下照或上昇

增一阿含

第三十八(大2—七五八中) 是時灯光仏即入三昧定鍾彼梵志見其二相

是時灯光仏復出広長舌……放大光明……

第三十六(大2—七五〇下) 身飛虚空作大八變化或行或坐……身放烟・火踊設自由無所触礙……或出水火遍滿空中

(大2—七五一上) 口出五色光

(大2—七五七上) 即便微笑口出五色光

その他

四分律五一(大22—九四九) 身出烟・燄猶若大火

五分律卷三(大22—二二上) 身上出火・身火出水

参考(火のつく仏)

現在賢劫千仏名経(大14卷) ……南無燄肩仏・南無衆燄仏(378中) 南無宝火仏(378下) 南無燄熾仏(379中)

十方千五百仏名経(大14卷) ……

火・炎肩仏(312中) 宝・炎・放・炎・火・然・以上(312中) 通・炎・華・以上(313上) 網・光・以上(315中) 火・相・以上(315中) 火・目・以上(315中) 火・目・以上(315中) 火・目・以上(315中)

仏・炎・味・以上(316下)

(三)

これらの思想的飛躍はこのクシヤンの世界で起った。(二)に出て来る沢山の教典がここで作られたと推測されるからである。

火と光(高橋)

火と光（高橋）

然して更に(一)のガンダーラ彫刻を資料としてこれに重ね合せる時、（尤も彫刻では光の表現はむづかしく、従って光背や火の表現に重点がむけられるのであるが、——この火と光との関係については次号で述べるつもり——。）この火が最初はバキスタンサイドには出ず、アフガニスタン側、即ち西方からである。もしこれがリグ・ベーダ以来のアグニの火の伝統であつたら当然バキスタン側の方に先に火が出る筈であつたが。

然してここにユニークな彫刻がある。それはカラチ博物館にある「裸行行者の信者である婚家の家族の中で孤立しているスラバスティの長者の娘のために、仏が率卒天から降りられて奇蹟を行じてこれを助けた」という彫刻である。横六十センチ、高サ三十センチの大きさだ。この彫刻には仏の頭はないが、肩から火足から水が出ている。これが燃灯仏で有名なシクリから出土している所に大きな意味をもつ。年代はストゥーパの燃灯仏彫刻より少し年代が下つてA・D四・五世紀、早くても三世紀の後半であろう。このことから考えると、火の出ていない燃灯仏より、さして時代が下らない頃にもうこの彫刻のように「炎」のついた仏像が、然もガンダーラを中心たるこのシクリに出ている。

勿論前述のようにカニシカコインがクシヤン全域に流通しているから、コインの炎がこの彫刻に影響したとも考えられるが、未だ他にも考えられよう。それはベルシャの火の宗教がその原因とも考えられる。特に「炎」をもった燃灯仏の出土したカピシ・ペグラムから百キロ北方の地点にスルフコタルという所があつて、そこにゾロアスター教の神殿があつた。ゾロアスター教はクシヤン民族の信仰であり、ここがその総本山の役割をもつていたことがカニシカ王の大きな像が出土したことから分る。この宗教の「火と光」が仏教に影響し、その思想の深化に大きな役割をもつたことは十分推測される。一步下つてゾロアスター教とまで行かなくても、火を重んずるベルシャ等西方の信仰が影

響したと考える方が自然のことかも知れない。

かく考えると大乗仏教は東西文化の総合、特にガンダーラ彫刻に示されるようにインドの心とギリシャの芸術、そしてヘルシャの民間信仰等の交流がもたらした一大総合文化であると私は考えるのである。

〔註〕

(1) この彫刻は左右の図板に連絡がなく向って左半分は異った物語の燃灯仏をくつつけたと考えられている。

参考文献

静谷正雄 初期大乗仏教の成立過程

Basham The Evolution of the concept of the Bodhisattva

Ingholt Gandharan Art in Pakistan

Rosenfield Dynastic Arts the Kushans

京都大学隊 バミヤン 1・2・3・4

宮治 昭 中央アジア涅槃図の図像学的考察 仏芸一四七号

モタメディ達子 アフガニスタン出土の燃灯仏本生譚の諸遺例 仏芸一一七号

田辺勝美 カニシユカー一世金貨の国王立像考 仏芸一五六号

〃 迦畢試国出土の仏教彫刻の製作年代について オリエンツ(昭和四十八年)

〃 Iranian Background of the Flaming and watering Buddha Image in Kushan Period, Orient vol 1961

Dr, Saifur Dar Kushan Art of Gandhara

マックス・ウェーバー Max Weber に於ける

「禁欲的宗教倫理」について

町 田 是 正

一 はじめに

西ドイツの古都・ハイデルベルク (Heidelberg) を訪れる人は、ネッカー河畔の美しい風光とともに、その大学に教鞭をとったマックス・ウェーバー教授（一九〇三年退官名譽教授）の巨大な思想的業績に心を寄せるべきであります。Weber 教授の巨大な業績については、ヨーロッパはもとより、わが国に於ても大塚久雄教授の研究を頂点として、優れた研究論文が公開されている所であります。^(註1)

(註1) 昭和三九年（一九六四）が Max Weber 教授生誕百年に相当し、それを記念して、『マックス・ウェーバー研究』（生誕百年記念シンポジウム・大塚久雄編・東京大学出版会）・『マックス・ウェーバー研究』（大塚久雄・安藤英治・内田芳明・住谷一彦・岩波書店）の刊行がみられ、内外のウェーバー研究については、梶山力訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（有斐閣刊版の参考文献目録（六二―六九頁）或は梶山力・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫上巻巻末に所載される文献目録）並びに経済学大系Ⅺ大塚久雄編『資本主義の成立』（河出書房）・一橋大学新聞部編『経済学研究の乗』（春秋社）を参照されることで、ウェーバーをめぐる論争史の理解は得られよう。

わけても『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（Die Protestantische Ethik und der Geist des
「禁欲的宗教倫理」について（町田）

「禁欲的宗教倫理」について（町田）

Kapitalismus. zuerst 1904, 1905 以下『倫理』と略記する）は、教授の代表的著作であり、その思想を知るうえで最も適した論文であるとされています。周知のように、Weber 教授は本論文において、近代西欧の「資本主義の精神」の起源の重要な契機がプロテスタンティズムにあること、殊にカルヴァニズムのごとき禁欲的倫理にあることを論証しようとしたのであります。実は近代経済史を播きますと、本論文の命題がそのまま近代資本主義文化の誕生そのものに関わる問題であります。

いさ少しく付言すれば、近代ヨーロッパの文化、それは経済の面から云えば「資本主義の文化」であります。この資本主義文化は、物質的に或は精神的にどんな源泉から誕生したのでありましょうか。即ちヨーロッパ資本主義の起源は、何処に、如何にして生れたかという問題であります。そして、この問題についてはシュモラー（Gustav Schmoller 1833～1917）を領袖とする新歴史学派の人々によって、ヨーロッパ経済生活の歴史が解明されたことは経済史を学ぶ人のよく知る所であります。二十世紀初頭に至って、資本主義精神の起源は如何にという問題をもって華々しい論争、研究がなされるなかで、古典的な価値をもつのが Weber 教授の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』なのであります。

この論文が最初に発表されたのは、一九〇四年、一九〇五年の『社会科学および社会政策雑誌』（Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd. XX, XM）誌上であった。その後、ゾンバルト（W. Sombart）・布伦ターノ（Lujo Brentano）などの著名な経済学者の批判にこたえるために、論争的な龐大な脚註を付加したのであります。

本『倫理』の主題となっているものは、禁欲的プロテスタンティズムの経済倫理と、近代資本主義発展の主体的原

動力である資本主義の精神との間に存する内面的連関の解明が主眼となっています。やや具体的に付言しますと、宗教改革者ルターが提唱し、更にカルヴィニズムのごとき禁欲的プロテスタンティズムの中に力強く展開した職業召命観は、それ自体は純粋な信仰をよび賞す源泉でありましたが、そのことがかえって、世俗的勤労を積極的に肯定し、合理化・組織化して、これに倫理的品格を賦与する点で、はからずも「資本主義の精神」を誕生させる要因となったと云うのであります。

そして筆者をして最も喚起させる問題は、「エートス」(E^(註2)thos)という概念の導入によって、禁欲的宗教倫理を因果連関の次元において、社会科学的に究明することの可能性を(豊富な資料と該博な知識を駆使して)明らかにしたことは、不朽の業績というべきであります。

(註2) エートス(ἦθος英・独・仏・希)各文化に独自の慣習の形成態を云い、倫理的品格・生活の仕方・道徳の品性と、意識されている。古代ギリシアのアリストテレスの倫理学の重要概念で、アリストテレスの用い方によれば、行為の慣習によって、靈魂の善い悪いという性格が養成されると説いたが、今では社会集団に於ける道徳的慣習の意味に用いられている。

1-1 禁欲 Askese の意味

マックス・ヴェーバー教授の『倫理』なる論文は、教授の社会科学の方法—理想型 Idealtypes による科学的認識—を意識的に適用した最初の試みであり、それが見事に結実した極めて注目すべき著述であり、後に与えた影響を考えますと当に画期的な論文であります。

Weber 教授が本書に於て用いている種々の概念—たとえば資本主義の精神、世俗内的禁欲、伝統主義、職業倫理、
「禁欲的宗教倫理」について(町田)

「禁欲的宗教倫理」について（町田）

カルヴィニズムの倫理、禁欲的倫理、カリスマ、予定説、エートスなどはすべて理想型として構成されているので、こうした理想型の構成のことからも理解されるように、社会科学の研究の目的は、経験的事象の中から一般的な法則を導き出すことではなくて、個性的なすがたをもつ現象—歴史的個体（Historisches Individuum）として把握して—としてその意味を理解することにあります。^{（註3）}

（註3）歴史的個体（理想型）の意味を理解するとは、一例としてヴェーバー教授は、資本主義の精神について次のように論じている。即ち「ここで資本主義の精神」という概念を用いるのは、このような独自の意味においてである。しかもその場合資本主義とは、いうまでもなく、近代資本主義のことである。何故ならば、ここで論じようとするものが専らそのような西ヨーロッパ及びアメリカの資本主義であることは、問題の立て方に照して自明なことだからである。資本主義は中国にもインドにもバビロンにも、また古代にも中世にも存在した。しかしこれらの資本主義には独自のエートスが欠けていたのである」（梶山・大塚訳『倫理』上巻岩波文庫四四頁）。つまりヴェーバー教授のいう「資本主義」は一つの歴史的個体であって、他の資本主義とは全然異なる特質をもっているとする。そして「資本主義の精神」も他のそれとは異なっていることを論証するのであって、その特質とは、プロテスタンティズムの信仰によってもたらされる職業倫理こそ、近代資本主義の精神の特質的要素だとするのであります。

Weber 教授の『倫理』を播いてみますと、

第一章問題の提起・（1）信仰と社会（信仰の種類と社会的階級）。（2）資本主義の「精神」について。（3）ルッターの職業観念（研究の課題）

第二章禁欲的プロテスタンティズムの職業倫理。（1）世俗内的禁欲の宗教的諸基盤。（2）禁欲と資本主義精神。

となっていて、本論文では近代資本主義文化の誕生への源泉となったものが、禁欲的職業倫理であることを論証しようとしています。随って筆者は、Weber 教授が特徴的に用いる概念のうち、とりわけて「禁欲」・「禁欲的宗教倫

理」・「エートス」などに焦点を合せ、資本主義の精神の内的な関連を明かにして、近代化の意味を考えてみたい。

Weber 教授が『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に於て主張する所は、周知のように、資本主義の精神（近代文化の精神）が、キリスト教の禁欲的合理主義にその源泉があるとするのですが、この学説はすでに学界の財産的定説ともなっている所であります。

筆者はまず、教授が用いる「禁欲」(die Askese)の言葉の意味から理解をすすめていきたい。我々仏教徒（アジアの人間）は、「禁欲」と云えば、直に沈黙・黙想・經典誦誦・忍辱・服従などの精神的苦行と、或は独身生活（貞潔）・断食・沐浴・粗衣粗食・巡礼行脚・森林生活・肉体虐使などの肉体的苦行を連想するのであって、特に感性的欲望を惡の源泉と考え、或は惡それ自体であるとして、人間的な徳を高めるためには、出来る限り欲望を抑圧することによって、道德的・宗教的な理想が実現すると考えがちであります。

しかし Weber 教授が指摘する所の西欧キリスト教に於ける「禁欲」が、東洋的な難行苦行の禁欲とは著しく性質を異にしますことは、キリスト教の歴史を知る者には周知の事実であります。西欧キリスト教の禁欲、それは信仰を深め、愛を高めるための精神的修行を重んじることなのであります。^(註4)

(註4) 「禁欲」の語源とされるギリシャ語の「askesis」は、本来は「修行」を意味する語であり、ギリシャ語に由来する独語の「Askese」も「精進」の意味が強いのである。禁欲の基本理念は諸々の欲望を切り捨て、人間の営みを可能なかぎり宗教目的に必要な高みに高める所にあります。従つて宗教生活を、目的の達成に向つて働きかける合理的で体系的な原動力ともなりうるのであります。こうした禁欲の原動力が世俗の領域に働きかける場合、世俗生活を導き規定する倫理となります。ウェーバー教授は、その典型をキリスト教に見出し、①中世修道院生活における世俗的禁欲が教会組織や荘園経済に及ぼした影響を論証し、②近代カルヴィニズムにみられる世俗内禁欲が、職業倫理と資本主義精神の形成に与えた役割について、歴史的に、社会的

「禁欲的宗教倫理」について（町田）

「禁欲的宗教倫理」について（町田）

に、経済的・文化的の関わりにおいて見事に論証したのであります。

一九七九年筆者は、西ドイツの「聖オットーリエン修道院」(Sankt Ottilien Kloster)に於て三ヶ月の共同生活を体験した。この修道院はヴェネディクト修道会に属するので、祈り・働き、読書を修道の信条となし、従順、貞潔、清貧・定住を修道誓願としている。修道戒律と修道誓願の徳目を見たとき、東洋的な禁欲修道を想起するでありましようが、筆者が百二十名の修道僧と共同生活をした体験に基いて云えば、近代化された設備と施設、明るく開放的（部外者は修道士館内には入れない）で、彼等が修道誓願の達成を目指して、祈り働く姿は愛の人そのものであり、各修道士の特性が発揮されるように環境が整備され、一大禁欲的共同体でありながら、筆者は重苦しい禁欲的苦行を覚えることはなかった。世俗外的修道僧の禁欲は、決して社会から隔絶したものではなく、むしろ世俗内的職業禁欲との間に深い関わりがあるのではないか、とさえ思えるほどであった。

Weber 教授は『倫理』のなかで、

「キリスト教的禁欲……略……西洋ではすでに中世においてその最高形態は完全に合理的な性格をおびていたし、いくつかの現象については早くも古代においてさえ、そのことが見られた。東洋の禁欲僧生活に対比して、西洋の禁欲僧生活のもつ世界的意義はこの点にある。西洋的禁欲は、聖ヴェネディクトウスの規律において、無方針な現世逃避と練達した苦行の域から原理上すでに脱しており、クリューニー派ではその傾向は一層明白となり、シトー派ではさらに顕著に、最後にイエズス会派ではまったく決定的となった。……略……禁欲の目標は、往々一般に考えられているところとは異なって、意識的、覚醒的かつ明確な生活をなしうることであって―無軌道な本能的享楽を絶滅することがその当面の課題となり―これに従う人々の生活態度に秩序あらしめることがそのもっとも

重要な手段となった。この決定的に重要な観点は、カトリックの修道僧生活の規律にも、カルヴァン派信徒の生活上の原則にも、すべて一様に顕著にあらわれている。^(註5)

(註5) 梶山力・大塚久雄訳『倫理』岩波文庫下巻七三頁〜七五頁。

とのべている。当しくキリスト教的禁欲は、欲望を滅し去るためのものではなくて、職業召命觀を誕み出したとすることである。筆者は偶々滞留した修道院に於て、三カ月余の間、全く性欲また煩惱に苦しまれることなく、修道士達の折りの儀礼に参列し、労働に参加し、研究活動を続ける間、実に不思議なくらいに愛のための生活訓練が持続できたのであった。つまり禁欲を殊更に意識することなく、日常の愛のための肉体的訓練を通して、いつしか欲望は滅し去り愛の人となっていくことを、この目で確しかめたのであった。

西欧キリスト教の禁欲が、愛のための訓練であり、職業倫理の形成にあずかり、決して欲望を消滅させるためのものでなかった一例として、中世末期のドイツの説教家タウラー^(註6) (Tauler, Johannes 1300〜1361) の説教の一節を紹介してみよう。

或る人々は問うていう「現在の状態にあるかぎり、欲望やよろこびなしにすることがどうして出来よう。飢えた時は食い、渴いた時は飲み、疲れた時は眠り、寒い時は身を温めるのだ、肉体の欲を充たすならば肉体のよろこびなしにすることは決して出来ない。肉体が自然である限り、これはどうにもならない」と。そうである。しかしこうした欲び、安易、満足、愉しみ、歓喜等は、心の深所にまで立ち入ってはならないし、哀なる生活の一部分となってもならない。それらは、それらを惹起した事物と共に過ぎ去って、汝のうちに踏み止まってはならない。それら

「禁欲的宗教倫理」について (町田)

「禁欲的宗教倫理」について（町田）

に溺れるのではなく、それらの来ると往くとに委せ、世と被造物とのよろこび、或は満足をもって所有の思いに休息してはならない。……これら及びそのほか一切の性向は、より高い力によって支配されねばならない。なぜなら、このことが成就されない間は、幼いイエスの生命を窺うヘロデとその僕らのような悪魔の力は、汝のうちに決して死に切つてはいないからである。^(註7)

〔註6〕 J. Tauber ケルン大学に学び、パーセルでドミニコ会神秘思想団体の中心人物として活躍、シュトラスブルクで説教家となり、正統カトリック神秘思想及びドイツ語の発達に大きく影響を与えた。

〔註7〕 S. Winkworth: Tauber's Life and Sermons, p. 230~231. 梶山力訳『倫理』（二八～二九頁）（有斐閣）所収の訳者序言中の引用より。

右のタウラーの思想が、宗教改革者ルッター（Luther, Martin 1483～1546）に強い影響を与えたことは、Weber 教授が指摘する所であります。^(註8)

〔註8〕 「Beruf」の語を「職業」の意味に最初に訳して使用したのはルッターですが、その「Beruf」の解釈をめぐって、中世末のタウラーの思想のなかにすでに「神から授けられた使命観」がみられるとして、ウェーバー教授は次のように論じています。即ち「どんな環境にあつても、世俗内的義務の遂行こそが神に喜ばれる唯一の道であり、これが、そしてこれのみが神の意志であつて、したがって正当な職業はすべて神の前には全く等しい価値をもつ」（梶山・大塚訳）『倫理』（岩波文庫上巻一二頁）と論じ、さらに「Beruf」の語が世俗的労働の意味で使用されている最初は、エペソ書第四章・に関するタウラーの美しい説教『Basler Ausg. 1177』に見られる「施肥に赴く」農民が「実直に自らの Beruf に励むならば、自らの Beruf をなおざりにする僧侶たちよりも」成功することがしばしばあるとしています。

ルッター以前の時代において、タウラーが始めて世俗的職業（Beruf）と僧侶のそれとを同じ価値であると認めた。

即ちタウラーの神秘主義思想とルッターとは、トマス (Thomas Aquinas 1225~74) の思想と対立した点では共通している、教授は指摘している (大塚・梶山訳『倫理』岩波文庫上巻一一五頁註五)。世俗的禁欲の考え方を、世俗的禁欲へと移し換え、かえって禁欲の観念は職業召聖観へと昇華されていたと見るのであります。中世的禁欲、東洋的禁欲は、修道院の内部で行われていたのでありますが、プロテスタンティズムの運動以降は、それは世俗生活の中へ移入されていったのであります。一九七九年の東西霊性の交流に参加し、西ドイツの聖オットー・ティエン修道院内の生活をかえりみて、ヴェネディクト戒則の禁欲生活が厳重に遵守されていると思われたが、しかし東洋的中世的禁欲は解放され、かえって修道誓願の達成を目指すなかで、修道院という一大共同体が、一大生産工場となり、大きな愛の砦となり、世俗に対して大きく寄与している現実を見たのであります。

Weber 教授が、禁欲的プロテスタンティズムと云うのは、ルッター派の信仰思想のことではありません。勿論、ルッターの信仰が、中世の思想を支配していた世俗生活への輕視を粉碎した点について、極めて重要な役割を演じたことは認めている。例えば「Beruf」(職業・使命)という語がルッターの聖書翻訳に始まることにも明らかであるが、しかし他方に於て職業労働への刺激のための積極的な根拠は、ルッターには欠けていた。かえって彼は「信仰のみによる義認」を強調し、その結果、禁欲的な労働の訓練を「行為主義」として排斥したために、彼の職業観念は次第に保守的・消極的となったのであります。^(註9)

(9註) 大塚・梶山訳『倫理』上巻・一〇二、一〇三、一一一、一二三、一二四頁にわたって示される「註3」のヴェーバー教授の所論を参照。

教授が「禁欲的プロテスタンティズム」というのは、カルヴィン派 (Calvinismus)・メソヂイスト派 (Methodismus) について (町田)

「禁欲的宗教倫理」について（町田）

thodisten) 敬虔派 (Pietisten) ・ バプテリスト (Baptist) ・ クエーカー (Quakers 英) 等の信仰思想のことであり、そして、これら諸派の教理の夫々を説明することで、これら諸派の教理が、信徒の日常生活の上に心理的刺激を与える源泉となったことに注目するのであります。^(註10)

(註10) 大塚・梶山訳『倫理』岩波文庫下巻七～一三頁。カルヴィニズム諸派の教理と特徴に関する論証は、敬虔主義については、下巻九七～一三〇頁。メソディズムについては下巻一三一～一三八頁。バプテリストについては下巻一三九～一六二頁を参照

そして、カルヴィニズムの信仰に於て最も特徴的な教義は「恩恵による撰びの教説」(予定説 Prädestinationslehre) であるとなし。^(註11) この予定説はカルヴィニストに対して、自己の救済についての確信を得ようとする努力の源泉となったと云うのであります。この確信を得る方途として、(一)は自己の救済について疑いを罪惡として排斥すること、救済の確信を維持しようとする態度であり、(二)は禁欲労働に携わること、救済の確しきさ (Bewährung 保証) を得ようとする方法であります。^(註12)

(註11) 大塚・梶山訳『倫理』岩波文庫下巻一三頁

(註12) 前掲訳書岩波文庫下巻三五～三六頁。三八頁の(註1)。四〇頁等参照。

さて先の(一)に見た「救済に対する疑いを罪惡として排除する」態度は、カルヴィニストをして「我等撰ばれたり」とする強い特権的な、貴族主義的な態度の源泉となります。次に(二)の「禁欲労働に精進して保証を得たい」とする態度は、中世僧侶にも似た規律的生活の源泉となったのであります。しかし、カルヴィニストは、ルッター派の信徒と異なつて、神との神秘的的一致ではなく、行為によつて、救ひの確信を得ようとした所に意義があります。こうした

カルヴィニストの禁欲的生活態度が、中世僧侶（東洋的苦行）と異なる点は

(一) 中世に於ては世俗外に向つたのに対して、カルヴィニストに於ては専ら世俗生活（職業生活）の内部に於て行われたことであります。

(二) 救済の確かさ（予定説）の思想によって、更に一層拍車をかけられたという事でもあります。

Weber 教授はカルヴィニズム諸派—敬虔主義・メソディズム・バプティスト・クエーカー—の教理について検討を加え、諸派には夫々独自の教理と違いはみられても、「救済の確かさ」を得ようとする努力を通して、禁欲的生活への実践的刺激を生んだことでは共通しており、後世への影響の点でも、禁欲のプロテスタンティズム諸派は、何れも同じ結果を生じたのであるとしています。^(註13)

(註13) ヴェーバー教授は「聖徒たちの特別な生活は、もはや世俗の外の修道院ではなく、世俗とその秩序の只中に於て行われることとなった。このような来世を目指しつつ世俗の内部で行われる生活の合理化こそが、禁欲のプロテスタンティズムの職業觀念の帰結だったのである」(大塚・梶山訳前掲書・岩波文庫下巻一六三頁)とのべ、教授は更に論証を深めるために、カルヴィニズム諸派のうち「清教主義」について見ている。そして清教主義の優れた牧会者たるバクスター(R. Baxter)の『基督教指導書』(Christian Directory 1678)『聖徒の永遠の憩』(Saints Everlasting Rest. 1649-50)を考察の中心とし、そして、清教徒が合理的禁欲的生活態度をもって財の獲得に専念したとする。清教徒は財の獲得(生産)の側面において宗教的信仰から強い刺激をうけたのみでなく、消費の側面においても、清教徒は人生の快楽を排斥することによって、奢侈的(不合理)な消費を抑制したのであるとなし、ヴェーバー教授は、禁欲的信仰による影響力を論証したのであります。(大塚・梶山訳『倫理』岩波文庫下巻一六八頁参照)。

「禁欲的宗教倫理」について（町田）

三 禁欲的 エートス (Ethos)

Weber 教授の代表的著作である『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中で、「資本主義の精神」という場合、必要以上に教授は「資本主義の精神」(《Geist des Kapitalismus》)のよう^{註14}に、とくに「精神」(Geist)に重きをおいています。この事について、教授は何ら説明してはいませんが、しかし本書に於て用られている「精神」という語には、教授の独特な意味が加味されているのです。^(註14)

(註14) ウェーバー教授は本論文に於て、例えばヤーコプ・フッガーとベンジャミン・フランクリンの対比に於て、「ヤーコプ・フッガーが……「私はまったくちがった考えであり、できるあいだは儲けようと思う」と答えたというが、このヤーコプ・フッガーの一語にみられる「精神」は明白にフランクリンのそれとは異なっている。フッガーの場合に語られているものは商人的冒險心と個人的な、道徳に無関心な氣質の表明であるのに反して、フランクリンの場合のそれは倫理的な色彩をもつ生活の原則という性格をとっている。ここで「資本主義の精神」という概念を用いるのはこのような独自の意味においてである。しかもその場合資本主義とは、いうまでもなく、近代資本主義のことである。……「資本主義」は中国にもインドにも、バビロンにも、また古代にも中世にも存在した。しかし……それらの資本主義には右に述べたような独自のエートスが欠けていたのである」(大塚・梶山訳・『倫理』岩波文庫上巻四三～四四頁)

およそ「資本主義精神」と云えば、近代以前、近代という時代を問わず、資本家たちを内側から絶え間なく利潤の追求に駆りたてている「營利欲」(Erwerbsdrang)を指しており、人間の生来的な貪欲を意味してしよう。しかるに Weber 教授の云う「資本主義の精神」は、人間の生来的な衝動的な欲求、營利的な貪欲を意味するのではなく、或特定の「倫理」を意味しており、人々を内側から一定の方向に向って押し動かしていく「倫理的雰囲気」「倫理的性」を指しているのであって、教授が好んで用いる術語で表現すれば、それは近代西ヨーロッパに固有な「エート

ス」(die Ethos) なのです。

教授が『本論文』のなかで特徴的に用いる「エートス」の語は、「倫理的性格」、「倫理的雰囲気」などと訳されるのであるが、Weber 教授は「エートス」と云いうる所をしばしば「心的態度」(Gesinnung)、「倫理的態度」(ethische Verhalten)、「生活の仕方」(Art der Lebensführung)、「人間」(Menschentum) などと云い換えているばかりでなく、更に「エートス」に関連して「倫理の衣服をまとった一定の生活型式」「経営者の魂をうごかしている精神」などと表現しているのです。以上のことから「倫理」(Ethik) という語がすぐれて規範を意味し、教義と関連せしめられているのに対して、「エートス」という語の概念構成においては、人々の内にやどり、内側から一定方向に押しうごかしていく所の現実の原動力としてとらえられています。随って「倫理的性格」とか「倫理的雰囲気」と訳されるのもそのためであります。^(註15)

(註15) 大塚久雄教授による解説参照(『倫理』岩波文庫上巻一四八～一四九頁)

さて Weber 教授の云うヨーロッパ資本主義経済における精神・「エートス」の転換とは、一体何をいうのでありましょうか。教授によれば、高利貸の経済観念(倫理)、儲けるだけ儲けるという營利欲、吝嗇欲はすべて賤民的資本主義、旧い経済的伝統主義として斥けられるのであります。それに代って、近代の資本主義の「精神」が展開すると云うことは、正に精神的転換であり、教授によれば、決定的なエートスの転換であったのであります。そして、この精神的転換にプロテスタンティズムの倫理(禁欲的倫理)が決定的な要因となったと云うのです。Weber 教授は「資本主義の精神」を歴史的に独自の「エートス」としてとらえようとしたのです。プロテスタンティズムの禁欲倫

「禁欲的宗教倫理」について(町田)

「禁欲的宗教倫理」について（町田）

理は、経済倫理の画期的な転換の契機となり、近代西ヨーロッパの資本主義の精神の形成に多大の倫理的要素を与えたのであります。

しかして、「資本主義の精神」の産婆役として、その誕生を見守ったプロテスタンティズム特有の倫理的要素とは、一体なんであつたのでしょうか。この問題こそ、Weber 教授の問題とする核心であつたのであります。そして、教授の積極的な解答として、「職業義務」(Berufspflicht) という観念（世俗的職業こそ召命に基く使命とする観念）が示され、この観念こそ、資本主義文化の社会理論に特徴的なものであるとするのであります。^(註16)そして、この職業観念こそ、社会経済倫理を転換させた決定的な契機であつたのであります。^(註17)

（註16）大塚・梶山訳『倫理』岩波文庫上巻）

（註17）禁欲的経済倫理との対比において、前期的資本主義（賤民的・伝統主義）にみられる職業観について、ヴェーバー教授は次のように説明している。「貨幣の獲得を人間に義務づけられた自己目的、すなわち使命たる職業とみるような理解は、他のどの時代の道徳感情にも背反するものであり」、「利潤の追求を「purpudo」（卑賤）とよんだトマスの考えのうちにも……倫理上容認される利潤の獲得さえもこのように非難された」「営利を自己目的とする行為は根本的には「Pseudung」（恥辱）であり」「資本主義営利の精神を「purpudo」（卑賤）として排斥しており、「ベンジャミン・フランクリンのようにそれを「道徳的」と見るようなことは、およそ考え及ばぬところであつたと思われる」（『倫理』岩波文庫上巻八二～八三頁）

しかして、前期的資本主義の精神において、利潤の追求が反道徳的とされていた観念が、どうして「使命としての職業観」にまで昇華したのでありましょうか。外面的には利潤の獲得を志向するにすぎない活動が、個人の義務として意識されて、「使命としての職業」という範疇にまで構成されるに至つたという事実は、いかなる観念の世界にその源泉をもつのでありましょうか。

Weber 教授によれば、「資本主義の精神」の搖籃に際し産婆役を果たした要因は、プロテスタンティズムの倫理に特有な「職業観念」であつたとします。西欧で用いられている「聖召」と「職業」の二つの意味内容をもつ語として「Beruf」^{註8)} (calling 英) という特有な語が用いられているが、この語の基調には「職業こそ聖召なり」「職業に於ける義務の遂行こそ最高の道徳的実践なり」とする倫理観（神から授与された使命）がよこたわつてゐるとします。

（註8）「Beruf」なる観念と用語法はルッターから始まつた。即ちルッターは、聖書のドイツ語訳に當つて愛蔵していた旧約外典『ヤン・シラーの智慧』一一の二）に出自する「罪人の業に敬かず、主に信頼して汝の労働に止まれ」の「労働」(七十人訳の *equot*) を職業と訳している。ルッターの聖書翻訳以前にはドイツ語の (Beruf) ・オランダ語の (beroep) ・英語の (calling) ・デンマーク語 [kald] ・スウェーデン語の [kallelse] などの語は、いずれの国語においても、世俗的な意味には使用していない。ウェーバー教授は、ルッターによるドイツ語の「Beruf」が純粹に世俗的な意味をそのまま用いた最初とします。（『倫理』岩波文庫上巻九七～一〇頁）

この「Beruf」という観念のなかに含まれる「神から授与された使命観」をもつて、世俗的日常労働を尊重する態度は、とりもなおさず、世俗的職業に於ける義務の履行および道徳的実践の最高の内容として重要視することになったのです。この観念が必然の結果として、世俗的日常労働に宗教的意義を認める思想を生み、「職業観念」をつくり出したのであります。

この職業観念は、東洋的禁欲労働とか、修道僧的禁欲を、世俗内的道徳よりも次元が高いと考えるのではなく、神によるこぼれる生活を営むための手段はただ一つ、各人の生活上の地位から生ずる世俗内的義務の遂行であつて、これこそが神から授与された使命であると、考えることが「Beruf」観念の中に含まれてゐるのであります。修道僧的禁欲労働よりは、この世俗的職業の方こそ、すぐれて隣人愛の現われであるとなし、神によるこぼれる途は、修道院

「禁欲的宗教倫理」について（町田）

「禁欲的宗教倫理」について（町田）

に入ることではなく、いかなる環境に於ても世俗的職業を忠実に遂行することにあると考えるのであります。^(註19)

（註19） 世俗外労働、世俗的職業の遂行観と信仰との結びつきについて、筆者が偶々体験した西ドイツ「聖オットーリエン修道院」の共同生活、また東西霊性交流メンバーによるベルギー・フランス・オランダ各地の修道院滞留記を参考としてみて、所謂、労働の聖召観は、修道士たちには世俗、世俗外という差別意識は全く感じられない所であり、修道士は只ひたすらに祈り、働き、学び、愛を深めていくのであって、禁欲的倫理を超えた信仰の確立に人生目標をおいているようにみえたのであります。

さて我々にとって決定的に重要な問題は、我々一人一人の胸中に、「この私は果して撰ばれているのであろうか」「私はいかにしたならこの撰びの確信が得られるのでありましょうか」という、自己の撰びの確信を満足させる信仰、つまり「救いの確かさ」がこの上もなく重要となるのであります。

この「救いの確かめ」の問題は、筆者が滞在した西ドイツ「聖オットーリエン修道院」の修道士にとっても、大きな問題であった。旧教ヴェネディクト会に属する修道院であるから、Weber 教授の問題とする禁欲的エートスの視点からそれるかも知れないが、彼等修道士が自己の修道誓願の達成を秘めて、祈り・働き・読書を生活信条として、日夜修道の共同生活の中に埋没していく姿には、「救いにあずかりたい」とする禁欲的倫理・生活浄化の観念が強く作用していたのではなからうか。そして禁欲的労働の故に、隣人愛を深めることになれば、それこそ教派を超えて、すぐれて禁欲的エートスの醸成となったのではないか。

自己が救いの確信を持ってないことは、信仰の欠如の結果であり、神の恩恵にあずかり得ないとする。斯くして、自己に対する召命に「確く立て」となし、日々の労働・祈り・精進によって、自己の撰びの主観的確信を獲得していくのであります。Weber 教授は、こうした自己の信仰、撰びの確信を獲得する最善の方法として、「絶えまない職業

労働」(restlose Berufarbeit)が厳しく教えこまれたということです。つまり職業労働によってのみ、宗教上の疑惑は追放され救われているとの確信が与えられるという、カールヴィニズムの禁欲的エートス・職業倫理を強調しているのです。^(註20)

(註20) 大塚・梶山訳前掲書・岩波文庫下巻五〇頁参照。

禁欲的エートス(職業倫理)が、自己の信仰や宗教的煩悶の解毒剤となることは、修道院の中でも、修道士の誓願の達成への支柱となっていることは、筆者の実体験見聞した所であった。「どうすれば自分の救いを確信できるか」という、この問題こそ宗教史一般に於ける核心的問題であることは論をまたないのであります。

禁欲的エートスは、各個人の「自己の救いを獲得するための手段」「自己の救いを確しかめる手段」から、「イエスに奉仕する仕事」「神に奉獻する職業労働」へと転換がなされる過程で、世俗内に於ても、或は世俗外聖域に於ても、特殊な職務遂行の意識へと転換されていくのではないか。禁欲的エートスが、修道院から外に出て世俗に対してカリスマ的志向をもって、信者の善導が可能となれば、それこそ宗教の果す社会的役割は大きなものと云えましょう。カルヴィンは、合理的禁欲を修道院による原理から、世俗そのものの原理に転換させ、宗教改革の支柱となしたが、これと同様に、現代に在っても、修道僧的禁欲は社会との交流のなかで、積極的に靈性化に努めなければならぬのでありましょう。

(59・9・2)

「柔道の精神」について

「精力善用 自他共栄」の教えるもの

一 宮 嘉 孝

- 一、はじめに
- 二、語 義
- 三、道とは
- 四、術とは
- 五、柔術と柔道
- 六、講道館柔道の目的
- 七、まとめ

一、はじめに

日本武道学会会報第二十号で羽川伍郎氏（同学会事務局長）が現代柔道に対し、柔道が世界にひろがり柔道人口が数百万人にも及んだせいかな、柔道の祖、嘉納治五郎という名前を知らない若い修行者がふえて来た。このままではやがて、嘉納治五郎も架空の人物になってしまう。

「柔道の精神」について（一宮）

まう。試合重視の柔道界や、スポーツ万能の体育界、荒れる学校教育の現状が世論に問われる今、柔道の根底を知り、そこに流れている柔道の精神を学ぶことによって道徳の教えを考えなおす時が来ていると指摘されていた。そこで講道館柔道の真の教えとは何か、私なりに聊か考察してみたい。

二、語 義

講道館柔道の創始者嘉納治五郎師範（万延元年・一九六〇）昭和十三年・一九三八）が柔道人修業の目標は「精力善用、自他共栄」であると唱え、柔道は心身の力を最も有効に活用する道として今日まで講道館柔道が発展して来たのである。そこで「精力善用、自他共栄」（大正十二年「大勢」誌上掲載）の持つ言葉の意味、真

「柔道の精神」について（一宮）

の教えはどこにあるのだろうか。

先ず單純に語句の解釈を試みてみる。

「精力」とは、漢書に示して「尤精力過絶^ス於人^ニ」（尤も精力は人を過絶す。）、「過絶す・はるかに過ぎる・へだたりの甚々しきこと」とある。精力は人より出てさいげんのないものであり「精力」は「精神」と同意語である。そこで「精神四達^ニ竝無^ニ流所^ニ不^レ極^ニ、上際^ニ三千天^ニ、下蟠^ニ三千地^ニ」（精神四達は並び流れる所を極めず、上は天を際し、下は地を蟠く）四達^ニ道路四方に通ずること、すみずみまでとどく、天際^ニかぎりないの意、とあるから「精神」はすみずみまでゆきとどきつぎるところがない、それはあたかも上は天、下は地までかぎりないものである。又「君其省^ニ思慮^ニ、一^ニ精神^ニ、輔以^ニ医藥^ニ」（君其の思慮を省き精神を第一に医藥はその輔にすぎない）とも云われるのであるから「精力」は心身の活動力心身を働かせるものとなる力であり、根気でこれは無限の可能性を秘めているものである。この無限の精力を上手に使用し、自他（我と他人と）に及ぼし、人生社会すべてが榮えさせよと崇高な理想を掲げたのが「柔道精神」であるとするならば、これが一柔道の修業にとどまらず、柔道を学ぶ者は人間的にも社会的にも精神を四達

させなくてはならないだろう。これが「柔道」すなわち「道」であると考えられる。

三、道とは

柔術から柔道へ「術から道へ」と呼び替えた嘉納師範にとって、なぜ「術」が「道」でなければならなかったのであろうか。「道」を解釈してみる。

道とは

一、人の往来すべきところ、通うべきすぢ、かよいぢ

二、ものの通るところ

三、地方、国

四、途中、半途

五、人のふみ行なうべき理^{ことわり}、道理、義理

六、すぢ、修理、秩序

七、てだて、方法、手段

八、教え、教義、教法

九、道理をわきまえること。分別

十、そのむき、方面

十一、百般の学問、技芸の方法、業

十二、道程の略

辞典から拾うと以上十二の解説がみられる。この中で

一、二、三、四、五、六、十、十一、十二は単純なる道の語約であるので省略するとして、残る五、七、八、九のいずれかが嘉納師範の術から道へ改めた因となっているのだからか。人のふみ行なうべき理、道理、義理なのか、てだて、方法、手段か、教え、教義・教法か、はたまた道理をわきまえること、分別であるのか、上の語に「柔」をつけて「道」の意語を考えてみることにする。

嘉納師範は自から柔術諸派（天神真揚流・起倒流後述）を学び、これら柔術が青少年の教育に大いに役立つものであることを知ると共に柔術を基礎としながら柔術の殻から抜け出し、修身の法としての技術、道の修行を本旨とし、技術や練習のうちに流れている原理を体得し、これを日常生活のうえに体现することを最も重視した。（老松信一著柔道五十年史より）とあるから、先の五、七、八、九すべてが柔道の「道」の意語であらう。では「術」ではなぜ本意ではないのであらうか。

四、術とは

術とは

一、わざ、技芸、学問

二、方法、てだて、手段、すべ

「柔道の精神」について（一宮）

三、はかりごと、たくらみ
四、まじないの方法

学問を術（わざ）と云いあてる以外「術」は唯方法、てだて、すべ、にすぎず、ひいては三、のはかりごと、たくらみ、と解釈されるに至っては「道」の意語と比較対照すると格段の相違があるのに気づく。しかして「術」より「道」が人生への教えを説く時はより適切で本意であるとしたのであらう。

五、柔術と柔道

嘉納師範は前述の柔術諸派を学び（師範の幼少の頃はひ弱な身体であったため柔術を学ぶことにより体力の増強を意図とした。）その諸派を比較検討することにより師範の理想とするところの新らしい「求道」講道館柔道、「講道館」（道を講ずる館）を創設することにより、知、徳、体育、全て人生百般に通ずる修業が必要であることを感じ「道」を広めようとしたのである。そこで「術」と「道」の対比を追求してみることとする。

武術からとり入れられた柔術の「柔」（やわら）の語意は、中国三略にある「柔能制剛、弱能制強」（三略Ⅱ中国古代の兵書で六韜と併称され秦の隠士黄石公が

「柔道の精神」について（一宮）

前漢の功臣張良に授けた兵書で、上略、中略、下略に分かれていたので三略と称す。 ※張良は秦の始皇帝の狙撃を図るが失敗し、やがて劉邦をたすけて天下統一に訓功あった人。（柔能く剛を制し、弱能く強を制す。）柔は徳なり、剛は賊なり。弱は人の助くる所。強は怨の攻むる所。の文中から来ている「柔」であり、柔こそ宇宙大法自然の理法であるとされている「柔」である。この「柔」の理想をある程度転開させたのが柔術諸派諸流であるがまったく抽象的な表現にとどまり、あまり奥行の深いものは見当らないのである。例えば揚心流柔術ではその心得として、歌に依って自得すべし、とし「降ると見れば積らぬさきに打払え、風ある松に雪折れはなし」「乗り得ては波にゆられる蟹小船、ただ浦々の風にまかせて」として単に柔を柳に風の如くとらえ、又波川流では、柔は柔順、の意味だとし、直神流では外柔、内剛をとえ「剛中有柔」「柔中有剛」又起倒流は「弱にして強を制し、柔にして剛を制し我が力を捨て、敵の力を以って勝つ」天神真揚流も「身体をして心の欲する所に柔順ならしむ」と主張し、総じて「柔」は「総て相手の力に逆らわずして順応しながらその力を利用して勝を制する理合」であると理解されて来たのである。

〔註〕 柔術諸派系図

揚心流（揚心古流—三浦揚心）天神真揚流
揚心流—秋山義時—磯又右衛門源正足

直神流 寺田満英

起倒流 茨木俊房

外波川流 竹内流等 全国各地に六十余流派が徳川時代末期に存在したといわれる。

講道館柔道の創始者嘉納師範もこれら「柔」の理を応用し相手に対し制禦する技術を練習会得し、それを人事百般について適合させるものであるとしたのであるが、実際に攻撃・防禦の両面でも「柔の理」以外で理解しなければならぬものが輩出して来たのである。それが新しい目的と方法を備えた講道館柔道の出発である。

六、講道館柔道の目的

講道館柔道の方法・術理・命名を明治二十一年十月より講道館発行の雑誌「国土」に連載された師範の「講道館柔道講義」筆記から学び取ってみたい。

柔術と柔道の相違については「柔術」は修業することによって種々身体四肢を運動するところから「体育」になり、そのために心を練り、勝負を競うことにより「工夫」、「掛引」をするので知らず知らずのうちに「勇氣」

「沈着」等人生に貴重な性質も自ずと涵養することが出来る。としながらもあくまでも柔術は「勝負の法」を体得することが主目的でこれに附随して「間接的」に体育や練心の目的をも達していたが、「柔道」は先ず第一に「体育」続いて「勝負」「修心」の三つの目的を持ちながら柔道の修業し、修業することにより体育も出来勝負の方法も練習も出来、一種の知育徳育も出来るとしたのである。

三つの目的をさらに展開させると次の如くである。

一、体育の目的は「有益ナ能力ヲ得サセル」にあるとし筋肉を適当に発達をさせ身体を壮健にし、力を強く身体四肢の働きを自在にすることにより有益なる能力を得ることを目的とし柔道の修業を行なうのであるから勝負だけにこだわらない体育を専らとしての修業につとめることを第一としたのである。その側として「何程善イ手デモ危険ノ恐レアルノハ悉ク省キ又成ル丈ケ一様ニ全体ノ筋肉ヲ働カセル様ニ工夫スル。云々」とある。どのような善い技でも相手に危険であればその技を用いてはならないとしたのである。

二、勝負の法、勝負という語に広狭二義があり、広義には、一つの目的を達しようとして他と争うことにある

「柔道の精神」について（一宮）

とすれば「柔道」の勝負法と云う語義は狭い意味で使われ「肉体上デ人ヲ制シ人ニ制セラレザル技の練習」であるとされ、人を制し、人に制せられざる為に練習するその過程を「勝負」と云わしめたと解釈されている。

三、修心法としての徳

1 人に対しての徳

イ 気風の高尚であること。

ロ 驕奢の風を嫌うこと。

ハ 正義を重んずること。

ニ 道の為には艱苦を厭はず容易に身命をも擲つ覚悟あること。

ホ 公正なること。

ヘ 礼譲を守ること。

ト 信実なること。等々。

2 自己に対しての徳

イ 身体を大切にすること。

ロ 有害な情を制止すること。

ハ 難苦に堪える習慣を養うこと。

ニ 耐忍の力を強くすること。

その他勇気を富ませ、熟慮断行、自他の関係を

「柔道の精神」について（一宮）

見とめる所を知ること。等々。柔道修行に不可欠な自己の涵養を理想としている。

さらにその他の利益として。

- ① 快楽 ② 護身 ③ 健康 ④ 筋肉使用自在 ⑤ 制他
- ⑥ 交際、以上を掲げ「柔道一斑並ニ其教育上ノ価値」としているのであると云われている。

以上に掲げた如く、術と道は「柔・理」は同じでも底に流れる教義において「道」は深く人間百般の行為を通して行なわれるべき「大道」に教え・教義・教法・であり、道の神髄を体得することにより「己」を完成し、世を「補益」する、すなわち「精力善用・自他共栄」の精神こそ「柔道の心」と理解されるのである。

七、まとめ

柔道精神を理解するにはその創始者「嘉納治五郎」の人となりを知ることにより理解することが出来るが、師とのあまりにも偉大、かつ他種多方面に寄与した足跡をつぶさに枚挙することは至難である。そこで師範の残した揮毫と附記された「号」にその片鱗をのぞくことをする。全国の道場等に残された揮毫は二百六十余枚に達するとされるが、そのうちの主な揮毫を摘出し柔道精神の

底流をさぐってまとめたい。

嘉納師範は六十才までは「甲南」、六十才台「進乎齊」七十才台には「婦一斉」と号していたらしい。

甲 南 師範の生地、兵庫県甲南地方を指して号とする。

進乎齊 莊子曰「臣之所好者道也、進乎技二矣」から引用する。

婦一斉 荀子曰「百王之法不問、所婦者一也」揮毫の語句とその枚数（一）

順道制勝（八十一枚） 精力善用（六十六枚）

力必達（二十一） 心身自在（十二）

精力最善活用（五） 成己益世（八）

竭己埃成（五） 自他共栄（五）

尽 力（十二） 修己治人（三）

（講道館発行「嘉納治五郎」より。）

以上は仏教語から引用したものもあるが、そのほとんどは嘉納師範の造語であり、全て柔道精神を云い得て妙である。

最後に講道館柔道の基本綱領を掲げてみると、

一、精力の最善活用は自己完成の要訣なり。

二、自己完成は他の完成を助くることによって成就す

る。

三、自己完成は人類共栄の基なり。

この綱領そのものが「精力善用・自他共栄」の教えの集約である。

我もまたこの教えを享受し、柔道の修業を通し、もって人生の道しるべとしたい。

参考文献 講道館発行「嘉納治五郎」昭和三十九年十月十日

発行五、六、七、参照文とする。

「柔道の精神」について（一宮）

資

料

身延山諸堂記

身延山再建諸堂記

身延山再々建諸堂記

校註・北沢光昭

編纂・身延山短大仏教文化研究所

○身延文庫所蔵の写本「身延山諸堂記」「身延山再建諸堂記」「身延山再々建諸堂記」により、文明六年、十一世行学院日朝上人の代、西谷から現在地に移転した諸堂の、大概明治・大正時代に至る諸堂塔変遷の状況を知り得る。殊に、文政七年・明治八年の諸堂焼失の現在にあって、その時々々の荘麗なる寺観を窺うに欠かせぬ、集成された記録として唯一のものである。

○該記録は全三巻三冊よりなり、第一巻は題外「身延山諸堂記」(題内「身延山諸堂塔建立記録」)、第二巻は題外「身延山再建諸堂記」(題内「身延山再建立記録」)、第三巻は題外「身延山再々建諸堂記」(題内「身延山再々建立記録」)である。

○該記録の体裁は、第一巻は、縦二二・三センチメートル、横一五・六センチメートル、二十行罫紙の袋綴、板心の表側に丁数を記している。丁附は一四二であるが、墨付一四〇丁である。第二巻は、縦二二・六センチメートル、横一五・九センチメートル、十八行罫紙の袋綴、板心に項目を記し、その表側に丁数を記している。丁附は一四九墨付は一四二丁。第三巻は、縦二二・七センチメートル、横一五・六センチメートル、二十行罫紙の袋綴、板心に項目を記し、丁附は板心の表側の欄外上に記し、この巻は特に加筆を見込んだ白紙が多い。丁附は二〇一、墨付は三五丁。

○該記録は、身延山三十三世遠沾院日亨上人による正徳二年の正本(第一巻一〇六丁表)を、妙俊院日寿上人が嘉永七年に写した(第一巻一丁表)事に始まり、以後、主に日寿上人による追加記録(第一巻二丁表・一〇七丁表)である。日亨上人による正徳二年の自筆本の所在は現在知る事ができない。

第一巻は、前述の嘉永七年二月の写本と、日寿上人による補足・追加の記録で、主として文政年中の火災以前の状

身延山諸堂記外（北沢）

況が知られる。第二巻は、安政四年三月に記録を編集したもので、文政年中の再建から、明治八年焼失の堂塔が中心の記録である。第三巻は、明治八年一月より記録を始めたもので、大火災後の復興状況が知られる。この為に全体に亘って記録予定を見込んだ白紙が多い。

妙俊院日寿上人の略伝は、「身延山史」三四三頁（新版「身延山史」三三二頁）にあるので詳述を避けるが、終身延にて生活し、明治大火災後の諸堂宇再建計画の実施に参画した事は第二・三巻中に見える所で、「身延山史」の編纂者の「現存せる祖山の古記録は……師が丹精の賜物」の言を俟つまでもなく、質・量ともにこの三巻三冊の記録は、身延山史に欠くべからざるものである。

○日享上人による正本が正徳二年に成立した事は先に述べた所であるが、改訂本も存在した。それは宮内庁書陵部所蔵の写本「^{身延}身延諸堂細調録」（『身延山久遠寺諸堂等建立記録』四十五丁と『身延山御歴代譜』の二部より成り、全五十一丁、一冊）に記載する原本の奥書により知られる。改訂本は「正徳三竜集癸巳春改之書」したものである。

書陵部所蔵本は、安政六年十月、信州松本「迦葉山妙福寺日胎聖人原本」による鍊頭上人の写本である。

書陵部所蔵本の堂塔記載の順序は身延文庫所蔵本と異なるが、目次に丁数を参考として付記した。この写本の全文は「御本尊鑑 遠沾院日享上人」（藤井教雄編・昭和四十五年十一月刊・身延山久遠寺発行）の第二部に活字化されている。（但し、丁付はない。）

○諸堂の旧観を知る手掛りとして、数多くの地誌・紀行なども見逃せない。本稿ではこの点の詳述を目的としないので、書名を列記するに止めるが、一般的に地誌の類に諸堂等の記述が詳細に亘るのは、「案内」を主内容とするの

で当然であり、他方、紀行の類は「実感」が中心であれば、描写に特色を有するものが少なくない。主な著述は次の如くである。

△地誌▽「久遠寺参詣記」（延宝九年刊『日蓮上人御伝記』卷十）、「身延鑑」（貞享・元禄・宝暦・天保の各版）、「みのぶ山ひとり案内」（安永九年刊、一冊、北沢光昭蔵）、金子日徳著「延嶺袖鏡順詣記」（文政二年成立、版本、他の二書と合一冊、無窮会^{増補}蔵）、村上某著「甲州嘶」（享保七年成立）、鶴虱子著「裏見寒話」（宝暦二年序文）、大森快庵著「甲斐綴記」（前輯、嘉永四年刊）

△紀行▽元政上人著「身延行記」（寛文三年刊）、享弁（法住院日義上人）著「萩の名ごり」（延享四年成立）、篤子刀自著「安永身延紀行」（安永五年成立）、稻懸棟隆著「身延杖」（同年成立）、喜左衛門著「日記帳」（安永九年成立、鶴岡節雄校注「十返舎一九の甲州道中記」所収）、佐竹邦著「身延紀行」（寛政元年成立、写本一冊、宮内庁書陵部蔵）、加賀屋善蔵？著「おさな車」（寛政九年成立）、吉沢某著「道記」（文政元年成立、原本一冊、最首雅晴氏蔵）、清水浜臣著「甲斐日記」（文化年中成立）、日擬上人著「延山紀行」（文政十三年成立）、黒川春村著「並山日記」（嘉永三年成立）、松亭金水著「松亭身延紀行」（万延元年成立、写本一冊、国立国会図書館蔵）、霞江庵翠風著「甲州道中記」（慶応二年成立）、「みのぶのしるし」（写本一冊、九州大学蔵）

右著作中、その刊本・写本等の所蔵先を明示しないものは、先人の紹介が既にあったものである。地誌・紀行は他にもあり、文芸作品・絵図・錦絵など加えると、五十点を越えるものがみられる。

各所蔵先より資料の御提供を受け、鶴岡節雄氏よりは種々御教示を受けました。厚く感謝の意を表します。

○全文の翻刻にあたって、次の様にした。

身延山諸堂記外（北沢）

身延山諸堂記外（北沢）

- ・丁付を示す数字と、その丁の「表」を「オ」と、「裏」を「ウ」として本文の上に示した。
- ・頁と丁の終りにあたる部分は『により示し、行末は「」で示した。
- ・漢字は、旧字・異体字など、ほぼ通行のものに直した。
- ・明らかな誤字は直したものもある。宛字・送り仮名など、通行でないものに（ママ）と付した。
- ・項目毎に「註」として記したものは、頭註・脚註・押紙であるが、本文中の該当箇所、又は近い箇所を以て(1)(2)等と示した。朱字の記載はその旨を示し、頭註・脚註・押紙の別は最後に示した。
- ・該記録原本で使用されている特殊な送り仮名「ㇿ」・「ㇾ」・「ㇽ」・「ㇼ」は、夫々に「コト」・「シテ」・「ナリ」・「トモ」のように改めた。

○今回は第二巻「身延山再建諸堂記」、第三巻「身延山再々建諸堂記」の全文を翻刻する。

目次

。堂塔の下の漢数字は“巻数”を、洋数字は“丁数”を示す。
 。() 内の数字は、書陵部本の丁数を示す。

惣門	一 2	201	(12)
逢島ノ祖師堂	一 2	134	(12)
太平橋	一 3	141	(13)
稻荷大明神社・拝殿	一 3		(13)
三門・廊門	一 4	50 370	(9)
三門常唱堂・頭寮・香積・結衆寮	一 8		(12)
同常作事長屋	一 8		(12)
(重栄梅) 天神宮・雨屋	一 9		
(聖徳) 太子堂	一 9		(11)
浴室	一 9		(13)
石壇	一 9	127	(9)
二天門 <small>石灯籠 木鉢</small>	一 10	54 2103	(2)
本堂灯籠	一 11	31 103 43	(2)
祖師堂 <small>木鉢・宝塔・灯籠・出仕ノ 廊下・木笠ノ廊下</small>	一 12	24 25 丁末 2 2 48	(3)
	二 94	296 297 298 3 2	(3)

身延山諸堂記外(北沢)

位牌堂 <small>祖師堂ノ 廊下</small>	一 15	24 246 297	(5)
本地塔(堂)	一 15	290	(5)
二重宝塔	一 16	266	(1)
灯主堂・万灯室	一 19	270	(5)
鼓樓(堂) <small>灯籠</small>	一 19	278 2103	(8)
円師堂	一 20	263	(7)
椎鐘堂・番部屋(大鐘樓)	一 21	284 235	(6)
舞台	一 23	274	(6)
同衆屋・廊下	一 23	274	(6)
普請所長小屋	一 23		(7)
供厨(御供所)	一 24	2101	(7)
通本橋・回廊 <small>位牌堂ノ 廊下</small>	一 26	297 2106	(9)
十二時鐘・番寮	一 27	23	(13)
釈迦堂	三 27		
納骨堂土蔵	三 65		
宝物館	三 69	に入紙	
△本院之分▽			
中門 <small>(前門)</small> ・長屋	一 29	139	(16)
東大門	一 29	171	(16)
西門下馬札	一 30		(16)

身延山諸堂配外（北沢）

塩沢口（札）	一	30	（16）
会合所・玄関式台	一	31 二150	（14）
厨子（司）	一	34 二164	（16）
対面所・次間	一	34	（16）
小方丈	一	35 二143	（17）
大方丈・唐門・浴所	一	36 二146	（17）
藏経堂（一切経藏） <small>唐本一切經 唐小經</small>	一	37 二139 二185	（17）
（真骨）宝蔵	一	40 二109 三14	（19）
宝蔵中央・廊下	一	44 二114 三19	（21）
同拝殿	一	45 二114 三19	（21）
奥位牌堂	一	47 二134 三32	（22）
古仏堂	一	48 二128	（22）
霊宝蔵・拝殿	一	51	（23）
東土蔵	一	52	（24）
経堂前ノ庭泉水等	一	53	（24）
廊下七ヶ所	一	53	（24）
（奥）書院・学問所・休息所	一	53 二160	（24）
料理所	一	54	（25）
湯浴所	一	54	（25）
金支配部屋	一	54	（25）
新土蔵	二	172	（25）

永守稻荷社・雨屋	二	174	
奥書院・山主ノ居間	三	35	
大書院	三	36	
小書院	三	37	
講究所・玄関式台	三	38	
生徒寮・廊下	三	38	
飯厨司	三	39	
受附所・内玄関式台	三	39	
物置長屋	三	39	
普請会所等	三	40	
法喜堂（厨司・庫裏）	三	53	
大客殿	三	56	
△從上之山通至奥之院之部▽			
祈禱堂・番寮・廊下	一	55	（25）
願主堂	一	58	（26）
鐘樓堂	一	59	（27）
影現七面大明神・幣殿・拝殿・鳥居	一	60	（27）
番神社（八幡宮）・拝殿	一	61 二129	（27）
五重（宝）塔	一	62 二175	（27）
利堂（十如房）	一	64 二131	（28）

兒文殊宮・児水

— 65 —
126

(29)

宝塔

— 66 —

(29)

延師ノ廟堂

— 67 —

(30)

一切経蔵

— 67 —

(30)

経蔵側廟塔(原性院
八条宮)

— 68 —

(30)

丈六釈迦堂

— 69 —

(30)

相輪塔

— 70 —

(31)

大黒堂

— 70 —

(31)

三光堂・拝殿・番僧寮・大光坊

— 71 —

(31)

金仏釈尊像

— 72 —

(32)

常題目堂(堂唱堂・法久庵)・衆寮

— 73 —

(32)

東照大権現宮・雨屋

— 73 —

(32)

妙見大菩薩宮

— 74 —

(32)

水屋庵(堀本庵
法明坊)

— 74 —

(33)

奥院祖師堂・拝殿

— 75 —

(33)

二王門(二天門)

— 77 —

(35)

椎鐘堂

— 78 —

(35)

別当寮(孝東院)

— 79 —

(35)

籠屋

— 79 —

(35)

御供所

— 79 —

(35)

井水

— 137 —

(35)

身延山諸堂記外(北沢)

△西谷通七面山詣▽

朝師堂(東谷
茂林房)

— 80 —

(45)

西谷檀林善学院諸堂

— 80 —

(44)

常経堂・衆寮・食堂

— 84 —

(37)

廟番僧寮(妙福庵)

— 84 —

(37)

収骨堂

— 84 —

(37)

犬ノ塔

— 85 —

(37)

釈迦堂

— 85 —

(36)

祖師廟堂・拝殿

— 86 —

(36)

阿仏房日得聖人ノ塔

— 89 —

(37)

御草庵旧跡

— 68 —

(37)

田代祖師堂・庵(妙石庵)

— 90 —

(38)

松之息ミノ寮(松樹庵)

— 91 —

(38)

追分ノ寮(感井坊)

— 91 —

(38)

十万部

— 91 —

(39)

赤妙福寺

— 92 —

(39)

神力房

— 93 —

(39)

蓮華房

— 93 —

(39)

鳥居

— 94 —

(40)

身延山諸堂記外（北沢）

北神通坊	一	94	(40)	松尾大明神社（西谷）	二	195
祐安住房	一	95		寿量院社（別当）	二	197
肝心房	一	95		地神宮（南谷）	二	199
中ノ茶屋（中適房）	一	95	(40)	清正堂（遠泉坊）	二	200
晴雲房	一	96		清今寺	三	63
赤沢万年橋・羽衣橋	一	96	106	小檀林教場	三	76
宗悦房	一	96		祖山学院	三	76
七面山諸堂等	一	96	108 112			
甲州七面山鐘銘并叙	一	101	(41)			
七面山神祠修營疏	一	102	(42)			
七面山神祠記	一	103	(43)			
池大神宮	一	105	(44)			
影向石ノ社	一	106	(44)			
波木井日円之古地・廟所	一	106	140			
帝釈堂（西谷）	二	183	(45)			
辰師堂（東谷）	二	187				
興師堂（醍醐谷）	二	189				
妙見宮（中谷）	二	191				
尊賀堂（西谷）	二	193				
二十三夜堂（片腰沢）	二	194				

(1オ)

文久四甲子二月廿日正九ノ時山火事清正堂正堂寺中三ヶ坊焼失
慶應元乙丑十二月十四日丑四ノ時仙台坊ヨリ出火松尾屋三夜堂妙見堂
三門太子堂天神堂常照堂妙壽稲荷社
焼失

安政四丁巳年三月改之輯之写

第二之卷

身延山再建立記録

明治八乙亥歳一月十日後六時西谷本種坊ヨリ
出火諸堂宇不殘類焼失四十七棟

(巻) (巻) (巻)
印 印 印

(1ウ)

本堂 祖師堂 位牌堂 二天門 円師堂 鼓樓 推
鐘堂并番所 二重塔 万灯室 灯主堂 舞台并樂屋
水鉢雨屋 御供所 会所 作事小屋 通本橋并屋根
祈禱堂 脱師堂 夏鐘堂 影現七面本社并幣殿 拜
殿 五重塔 延師廟堂 大方丈 水鳴樓 経蔵 真
骨宝蔵 中央 廊下 拜殿 古仏堂 永守稻荷社 奥
書院并膳所 大庫裏 寄附茶ノ間 玄関式台 対面
所 院代部屋并役所 穀倉味噌倉 小庫裏 十軒部
屋 時ノ鐘堂并一番小屋 廊下十三ヶ所 手水場
十ヶ所 風呂場三ヶ所 七十三棟

身延山諸堂記外 (北沢)

(2オ)

尊賀堂 琥珀稻荷社 辰師堂 興師堂 寺中拾二坊
町三軒
棟数大小百四十二棟焼失也

註

(1) 小計四十七棟 (頭註・朱字) (2) 朱字

祖師堂二十間四方縁各二間宛

前ノ祖師堂者文政七甲申八月廿七日申ノ下刻ニ焼失

第五十五世日遍師代再建企之

同五十八世日環師代上棟

環師棟札文政十三年庚寅歳十一月十日吉辰上棟同

裏書

祖師堂再建之始

五十五代日遍尊師 (時之院代 養心院日遊聖人 文政十三庚寅七月十八日 日化) 漸昌院日春聖人 文政十三庚寅正月二十

五十六代日晴尊師 (時之院代 太蓮院日發聖人 天保八丁酉五月二日 日化) 本解院日劉聖人 文政十二己丑三月朔日

五十七代日舜尊師 (時之院代 其如院日談聖人 文政十二己丑三月朔日 日化) 本解院日劉聖人 文政十二己丑三月朔日

五十八代日環尊師 (時之院代 是經院日琳聖人 嘉永七甲寅八月五日村 田化) 是中院日考聖人 文政十二己丑九月二十

田化

身延山諸堂記外（北沢）

祖師堂再建元方 東都下谷宗延寺隱居 重厚院日実聖人文政十二己丑正月

六日」

同 本所本仏寺隱居 智善院日誦聖人嘉永二己卯四月

西十月十五日」
檢下改

甲州西郡一ノ瀬妙了寺現住 太研院日梵聖人天保二辛卯五月十

二日」

一老啓運院日修聖人弘化二己巳五月廿八日

院代是翰院日登聖人安政六己未七月十一日下谷化人十一歳

三老海寿院日量聖人天保三辰十月五日五十五歳

四老慈善院日鉢聖人安政二乙卯八月廿六日

五老教智院日行聖人天保十己亥十二月十七日六十四歳

中頭本浄院日順聖人嘉永五壬子十一月廿八日七十九歳

番頭亮玄院日照聖人天保五甲午九月四日

当番潮養院日範聖人天保六乙未五月廿九日

海運院日隨聖人安政三丙辰十一月十五日七十五歳

顚円院日報聖人安政三丙辰四月十五日六十四歳

潮解院日明聖人嘉永三庚戌十月十三日六十歳

太寿院日永聖人文政十三庚寅九月八日

太量院日考聖人天保十四癸卯三月廿日

本考院日侃聖人天保十三壬寅十二月廿八日五十八歳

普請奉行

龍房三十世潮諦院日解聖人天保三壬辰十月廿七日

岸之房三十四世本寿院日光聖人天保十五甲辰七月廿一日

常榮房十六世是明院日清聖人天保九戊戌八月六日四十八歳

普請方」

智寂房十三世潮運院日恵天保五甲午八月十九日

端場房三十八世太林院日建天保十五甲辰八月廿六日四十七歳

蓮宮房十二世太堂院日棟嘉永六癸丑三月十八日五十八歳

光精房六世学翁院日永天保九戊戌九月九日

龍之房三十世太運院日勢弘化四丁未三月十八日五十二歳

大工碩樂池上主計致昆檢皮家根師小倉兩右衛門」

池上織衛玄明同世話役遠藤三郎兵衛」

東都彫工島村源蔵俊矩 佐野繁八」

大工肝取池上亀之亟宗忠②③④袖木挽頭池上宗右衛門」

池上万吉玄宣③④市川重左衛門」

池上新之亟宗員④同世話役橋爪太次郎」

海沼浅右衛門宗蔵 池上治兵衛」

吉野忠蔵吉純 望月儀助」

望月為右衛門嘉治 小倉縫之亟」

古谷繁右衛門仲澄左下山村官遠藤茂七」

（3才下段）

（2ウ下段）（3才上段）

（上段）

（4才）

（3ウ）

（3才下段）

（3才上段）

(4ウ)

奥野嘉兵衛伴幸

群方尾州
名古屋船

橋半七

武田千蔵宗武

山切地形
岐阜市賀若

永野治平

深沢惣吉保政

山切地形
岐阜市賀若

緑伝兵衛

清權藏矩徳

竹下利助

池上幸助宗美

昔時方望月久四郎

同苗佐四郎

望月又吉宗栄

佐野作之亟

池上惣兵衛敏昭

池上喜十郎宗利

宮川七左衛門

以上棟札

祖師御遷座天保二辛卯四月二日

御堂開眼同三日ヨリ十二日迄千部法用

御宮殿開眼同十三日十四日法用勤之

同年九月廿七日ヨリ十月十三日迄宗祖五百五十遠忌

万部法用勤之五十八世日環師代

御宮殿施主ハ大坂身延年中

御宮殿ノ内ニ左右掛札ニ校有之又明細施入ノ巻物ニ巻頭入ニシテ
御宮殿ノ内ニ有之外ニニ巻御経机ノ引出シニ有之花天井施入巻物一巻有

之「世話人正覚寺檀村田宗倍 正覚寺檀木付屋半次郎」右世話人四
京都大仏師

人ノ姓名御宮殿ノ外左右ノ戸扉ニ有之
法橋林如本作之

御持経ハ 如来神力品

身延山諸堂記外(北沢)

(5オ)

御持珠数天竺木赤桐樹 御持得 厨白漆ナリ

御戸帳赤地ノ綿葛紋ニツ附紋ノ寸法唐尺五寸リ
長サ六尺 横巾六尺四寸ナリ

御施主

戸帳文久二壬戌年納ル 孫師御代納ル
御施主奏御数ニツ付

戸帳明治五壬申六月開帳ノ御 健師御代也
施主日本橋十三日歳之内願子連中納之并桁橋敷ニツ付

御鍵箱奏紋附

御施主一ツ橋大奥

取次大奥房住
殿字

同台文化四年丁卯年八月江戸開帳ノ御納之

書写妙経開結共拾巻

御施主御本丸御連名第一ノ巻ノ終ニ有之

同御机天保二辛卯四月八日法橋林如本エト有之

御洗米入銅燈臺形

施主江戸芝口河内屋尊右衛門

同台引出シ附

御手箱

御施主文政四巳年八月十六日様

御書棚

御経机ノ台

御宮殿内宝蓋

右妙日尊儀御位牌両基厨子入御宮殿ノ内左右ニ有之

身延山諸堂記外（北沢）

左 妙蓮尊儀 ウラニ 文政八年乙酉二月 日 違判形」
大檀越日円尊儀 御位牌御宮殿ノ外岸ニ有之」

永代五種香料 金五拾両 施主 当山國沢房三十九世 位牌須弥壇ニ有之
彌次院日喜聖人 天保四癸巳正月十三

日化」

永代常經 金五十兩 天保四癸巳四月 位牌有之」
北品川代參卿（？）中

永代常經 金百兩 從每月朔日至十五日ニ 同有之」
江戸小伝馬町太黒屋平十郎

永代常經施主内 金拾兩 天保八酉八月 同有之」
江戸宮沢町常經卿（？）中ノ内妙久尼」

須弥上天井竜画并 同裏張附蓮華画 甲陽雲林筆」
後門十六羅漢画 東都宗巨齊影紙

永代 金百兩 尾州藩中永平六太夫
當經 慶応三卯十一月特師代納之」

作り花并 大花瓶一對 其繪 文政十三頁八月」

施主東都身延御花構中 永代隔年ニ花立替」
文政十三頁八月」

木花蓮華并 大花瓶一對 磨金 天保二卯四月」

施主東都新吉原構中」

大燭台一對 其繪 文政十三頁七月」

施主江府駒込 高崎屋長右衛門」
同出店長平

盛物台一對 須勢形 会式之御餅ヲ備」

施主当所塩沢村望月周藏 金七兩二分ナリ」

百味供檀并 白木三方百組 宗祖五百五十遠忌ノ御」
宗祖五百五十遠忌ノ御

施主万灯室再建奉加ノ内 猪頭主
遠寿院日命聖人」

開帳供養小香炉 本銀并南儀較四ツ附蓋ニツ附」
施主江戸芝口拾七人 連名香炉ニ有之」

燭台一對 其繪 文化四年丁卯七月十九日」

施主江戸小網町構中」

燭台一對 其繪 喜永二乙酉年七月」

施主池上取持構中」

花瓶一對 其繪 生花用之
文政三庚辰五月日」

施主」

御鑪供養時小香炉 其繪」

施主江戸深川細町田中宇兵衛母」

同台」

施主 取次大衆坊」
慶字

御鑪台」

施主越後国糸魚川八木三郎右衛門」
常灯明灯籠兩基 其繪 台朱塗 文政十三頁七月」

施主江戸浅艸大坂屋直助」

同同基 其繪 台朱塗 文政十三頁七月」

施主江戸芝田町二丁目坂本屋隠居弥満女」

常香盤 其繪 台朱塗 抹香料
文政十三頁七月」

施主江戸浅草馬道東国屋 八五郎
同張姫女」

(8ウ)

施主二代目 中村芝翫（粹駒太郎）

施主大坂身延年参擗中

施主江戸芝河内屋善右衛門 金三十兩ノ施主ニ而出来』

施主江戸深川常盤町搦中」

妙經(六十部)
五十部
合百部也
尾州法蓮寺判(三)發願人妙信尼
赤紙 妻紙

師御代施主卷每有之御經蓋新造之

判形
尾州信者中寄附施主名每卷有之

「施主当国教来石駅河西六良平源昌里」
文政八乙酉十月
 五十六世靖節代

吉辰 取次速伯房智德院日受」

又次ニ妙經三十六部天保二卯春三月喪紙モロギ絹卷經也」

脇座御経百五拾部 同机共 妙経巻経表紙赤紙也」

身延山諸堂記外（北沢）

(9才)

猩々緋唐縫大水引長京間拾五間
巾九尺 菊紋八ツ井襦一ツ

葵御紋附金襴水引并御宮殿戸帳

同御紋附紫縮緬幕四張」

同御紋附祖師御袈裟衣并衣服

御施主御本丸大奥_{ロリ}為御祈禱納之一

於淨心寺ニ開帳ノ御同時ニ納
之六十六代日新師代

大常香盤塔形安政四丁巳七月檀師代江戸開帳納之
施主千住小塚原十三日辨(一)中

過去帳拾五冊各二日宛 冊每二五十五日還判形

施主江戸浅艸蔵前相磯勘兵衛」文政七甲申年十月日」

大過去帳三冊各十日宛
五十八世日環判形
文政十一戊子年五月
過去帳序文宋江配之

諸堂再建立施入之面々」
志ノ俗名法号可也記之

大打鳴シ同台并蒲団一枚黒天金糸縫共

施主江戸芝蓮台構中(中)天保十四卯年秋江戸巡説ノ砌

大打鳴シ井台 蒲団一枚 黒天 嘉永二酉年七月

施主江戸新吉原江戸町一丁目大黒屋金兵衛

常経場小打鳴シ井台」

施主江戸大伝馬町御神酒搦中」

(9ウ)

(10才)

身延山諸堂記外（北沢）

開帳場鑿并 台明後ノ御堂番鳴之

調声場鑿并 台其鼓卷懸ノ節本四ノ仁鳴之

一老座鑿并 台其主ノ代始懸之節一老鳴之

大鼓鑿渡シ 開帳ノ初五ツ鳴之
文政十三庚寅八月

施主江戸浅州新町拵中（姓名大鼓ニ有之）

半鐘 指渡一尺三寸 開帳ノ初三ツ鳴之
文政八ノ四月辰五十六世明師代取次運信房

施主当国教米石駅河西六郎平昌里

前机 朱塗 巾長 施主江戸神田拵中（喜永三己酉七月納之）
明治六癸酉年修復 本願主平井安右衛門藤原信吉法号長寿院清心日悟居士
文久三癸亥七月廿六日六十七歳永代修復為料金五拾兩

(10ウ)

ノ田地附置之此田地替米付
ニアリ小林小太郎ノ世話 明治五壬申五月百兩修復料健師代納之
合百五十兩也小林氏預リ田地附置之

木花蓮華并 五具足其論

施主江戸橋町拵中（文政十三庚寅七月納之健師代）
明治六癸酉六月修復之健師代

七五三 御膳 惣金四方 六箱江入ル
正徳四甲午七月吉日細工人杉山多右衛門

願主東谷円信日行大坂屋茂兵衛太田屋与左衛門

七五三 御膳 白木三方 長持三棟へ入ル
喜永三己酉七月納師代

施主江戸桜田窪町七五三拵中

賽銭箱 經卷殿 巾 施主 喜永村望月周藏
金十五兩ナリ

(11オ)

世話方西郡大師邑了泉寺住是逢院日聚聖人 慶応元乙

(11ウ)

丑十月廿二日八十二歳化

題目大鼓 并 台共 永代製替可致約束也
喜永六癸丑年納之

施主江戸浅草新町丸山三右衛門（御宝殿七面山同時ニ）
同大鼓并 台文化十四丑年四月廿八日

施主飯沢宿兩國屋清左衛門

御宝前昼表

永代施主備後国豊表拵中（本願世話人同納津）
總屋喜十郎

御拝所昼表替廿五段

永代施主西郡西南胡安藤三右衛門（取次世話人同所）
孫左衛門

菊花天井

御宝前上菊八ツ 施主 江戸花川戸 常盤校校
金山ノフ女

同前通り二十四 施主尾州拵中

左右上四十八 施主 駿州豆州巡説等ニテ作之

須弥左右三十二

須弥壇 朱塗金具共 天保十五甲辰年繪成

施主扇師院代妙信院日法（日影）上人 慶応二丙寅年正月朔日化
村田妙法寺下谷宗延寺代

金柱塗四本 喜永六癸丑年繪成就

施主当国内船村近藤太兵衛（二十六十兩）原田源右衛門
三十兩四條幸八（本三十兩）

(12オ)

朱塗柱」

行道縁擬宝珠拾四ツ 文政十三庚寅十一月」

施主江戸 姓名擬宝珠有之」

御拜柱四本ノ金具并上り壇隅金具等ハ先年」東都ニ

住ス奥州岩城名古曾関隠士深見要言」七面山ノ麓

江唐金ノ鳥居造立有之右鳥居破」壞ニ付此ノ古ル

金ヲ以テ駿州江尻ニ於鑄レ之」

釘隠シ」

施主越中国銘、姓名釘隠ニ有之」

雨落縁石并石橋」

山内中老若大衆加用人等門前新宿」塩沢迄毎日門

經修リ而前道リ分作レ之」

御拜、敷石」

施主当国商人中」

御拜所、香炉 鍍金參閱ノ衆人焼香可シス 喜永二酉七月」

施主江戸末広、搦中」

栖神法窟、額者天保二辛卯年九月攝代 額之裏面下江記ス」

水戸從三位中納言齊昭卿、御筆」彫刻納レ之取次江戸納

日華頭人」

大幢旛一对并大幡一对大打敷一枚同時ニ納之」

身延山諸堂記外(北沢)

施主御本丸御女性方」天保七申年四月八日 世話

人本石町八日、搦中參閱永屋米八

猩々緋大幡一对天保十亥年三月良辰 中國西國九州巡觀之商納之」

施主長崎長照寺檀中」

金拾兩祖師永代御膳料天保十五年辰五月始 此ノ金子長沢大森檀之助預リ田地ニ致置」

施主当国十日市場河西佐右衛門」

御洗米糯米 取次同所孫左衛門」

永代施主西南胡邑安藤三右衛門」

瓶子并三方共一对」

施主江戸本郷傘谷五代目銅壺屋仁右衛門」

同 一对三方共」

施主江戸本所立川二ツ目搦中」

同 一对三方共喜永二己酉七月

施主江戸芝題目搦中」

御鏡一面并台天保第八丁酉九月日潤判形

施主江戸施入面々家運繁昌」發願人銀座御役所内

社田氏」

御供米永代式俵十三入 施主當國中郎ツイシハ就地ノ村内藤卯兵衛 明治二己巳年祥顔代ロリ 七面山江モ一俵

ハ斗俵ナリノ永代施主」

同永代二俵但シ一斗 施主当国藤田村五味作右衛門」
享保年中ロリ永代納

身延山諸堂記外（北沢）

（14ウ）

勸化帳序」

今般「祖師堂再建就勸化信心之施入不_レ限_ニ」多少_ニ此ノ帳面ニ相記シ当酉年ヨリ来ル卯年」祖師御遠忌迄各々連々奉納之心得_ニ而_レ被_レ抽_レ志候様希者也」

身延_{（印か）}□

老僧中」

文政八年酉三月日

当番中」

諸国諸檀越」

（15オ）

今般「祖師堂御再建御助金并御香奠共此帳面ニ」相記シ当酉年ヨリ来ル卯年 高祖五百五拾御遠」忌迄ニ連々奉納之心得_ニ而各寺御請印形之上」可被抽丹情者也」

身延_{（印か）}□

老僧中」

文政八年酉三月日

当番中」

諸国諸末寺中」

諸寺院中」

（15ウ）

①祖師堂再建大本願人ノ掛札 同本願人ノ掛札」

當宿國宮川紋藏、 長沢村折居文右衛門、」

同石和宿早川半兵衛老、 鐵沢宿小河内常右衛門、」

（16オ）

同油川村遠藤善兵衛、同所牧野紋藏、」
甲府町名取作右衛門、天神中条秋山久左衛門、」
鐵沢宿雨宮与八、鉄沢村北村彦兵衛、」
同所秋山政七、長沢村齊藤半左衛門、」
同所中込清左衛門、当上町望月又吉」
春米村小林小太郎、同所同苗政左衛門」
同所土屋安之丞、同鉄町樋口勘右衛門、」
西南湖村安藤三五右衛門、同所望月佐兵衛」
福土村芦沢恒藏、同中町深沢佐次兵衛」
同所望月五兵衛、同池上弥市兵衛、」
大崩村佐野八良左衛門、同中町望月佐藏」
当所上町池上重兵衛、同鉄町若尾栄助、」
同上町佐野伊兵衛、同下町鈴木文左衛門、」
同鉄町阪上万七、同鉄町井水治良兵衛、」
同鉄町葉山十之丞、鐵沢宿青柳喜兵衛」
下山宿穂坂喜代平、鉄町佐野長右衛門、」
最勝寺村志村好之助、手打沢村埜村彦兵衛」
②桃園村相原甚兵衛、是ヨリ明治再建本願人
中町一ノ宮与右衛門、上町田中勘三」
同鉄町坂上市藏、同遠藤佐左衛門」
同坂上良之助、同町古谷善太郎」

（16ウ）

垣 沢望月吉五郎、 同 松木半右衛門「
中 町池上惣右衛門」 同 海沼忠八郎「
巨摩郡土橋慎三」
東花輪村
(朱字)

(17オ)

南人作箇 祖師堂大過去帳叙「

夫当山者末法万年之大導師高祖大菩薩草創也」自
為三本化上首一開三末法万年宗門本基道場於身延山
矣」尽未來際聖神安居自他兼濟本土也良以荆棘
非三鸞鳳之所巢一小池匪麗竜之淵焉今以三本化
之開闢二偏此土知レ為三靈地二其地勢也四山四方環珠
樹玲瓏二田三繞梵台二依報正報唱三妙法三靈鷲山之貌」
夢三髯眼前一四河水深阿耨達池之流浮三天月」吾宗
法水流布之根源宗門興起本基道場而」普天之支流
流三於此二率土之縑田生三於此二矣真靈山」事寂光土也
故高祖曰運レ歩之程無始罪障一時消滅一度往詣此
道場二者開三成仏於利那二矣況」此靈地收三藏肉身之一
毛分骨一塊二記三留俗名法名命」日者豈不三期三現生
成仏乎今般当山諸堂伽藍」再建立之砌日本國中諸
州一同金銀米錢寸鉄」尺木資費戮力寄附施入之面
先祖精靈見聞」覺知靈魂俗名法号命日等欲三簿レ
之憑レ斯造三作」大過去帳三冊二頒三一月三旬」以書三

身延山諸堂記外(北沢)

(18オ)

記之日日会三乎満山」大衆一千余員之淨侶一矣万代
不易之回向謹」修三行之二祈三乎諸靈魂得三菩提」以
擬三乎施恩報」謝三耳抑回向為三利也譬如」以レ水合レ水
以三虚空二」合三虚空」也所以何者夫妙法蓮華經者十
界」心体也万法主宰而心体弥三綸十方三周遍三」世
雖三日月所レ不レ照風雨之所レ不三至亦無レ不有」是
心」此心既然彼心亦然心心互具互融利那一不離故回
向一念遍三明遍三幽通三凡通三聖矣彼此」心心元来一
不二也故如」以レ水合」水以三虚空」合三虚空」爾矣然
者今經廻向豈不」通乎然則諸靈魂」即身成仏何疑之
有耶故知非三成仏之難」一值三此經」難也得三值三此經
成仏俯如」拾三塵芥」矣凡誦三誦此經三資三幽冥」其靈
跡云三二」者」如三妙題」才唱地獄頓空經紙既成天堂
忽」現」散在」衆典」今也耐三枚挙」焉正知心之」妙用
經之神力不」論三今古」不」分三賢愚」嗚呼」佛哉經王力
用今經不」論罪多少」但依三信心」強弱」而已伏冀永
後代之衆徒」早晚無三懈怠」永勤レ之勿三以」忽」
諸回向功德」力者今世」攘三災殃於千里之外」将来
得」法樂於三転之果」如レ反」掌矣今也記三乎」事始

(18ウ)

(19オ)

身延山諸堂記外（北沢）

卒、所^レ唱如^レ是若然、当山永代無^キ強^ク」回向其功德广大
无边而已矣云爾」

皇和文政十一竜集^{戊子}年五月

賜紫身延五十八代

日環^{（朱）}
身延^{（朱）}
山主^{（朱）}
環日^{（朱）}

大天蓋^{三間四方ノ外ワラビデ}

嘉永二己酉年野州巡視之勅領入
安政三丙辰年成就供役之勅

施主野州栃木信者中板本尊有之

楹師板本尊^{当山祖師堂大天蓋成就供役于時安政三丙辰歲三月廿八日}
祈施主面々現安後尊別而榮起世諸人信力増進所願満足者也

野州栃木新田隨喜擢大発願主」慈近日恵 田代善兵衛

齊藤源兵衛 野口磯吉」増田岩吉 片野幸兵衛

大塚長五郎

奥州白川信力^{（朱）}大竹重三郎 三国秀吉 内山金兵衛 内

山久蔵」安田六助 清野伝兵衛 尾崎徳兵衛」

奥州須加川要法^{（朱）}渡辺伝之助 丸井常吉 渡辺寅蔵」

同裏書」

祖師堂大天蓋起本願主
并普請奉行

常不礙院智順院日逗聖人^{大工棟梁 池上伊織宗治}
當所中可^{（朱）}親治師權現堂文左衛門貞友」

三十三世^{（朱）}普請方^{（朱）}東都住人^{（朱）}萬七」

成尊^{（朱）}智逗院日疎^{（朱）}東都住人^{（朱）}浅井庄兵衛」

（19ウ）

（20オ）

（20ウ）

以上」

栖^{（朱）}神法窟^{（朱）}額裏書^{（朱）}皇順院日華ノ紙」

今玆天保二年 辛卯 冬十月十三日正當吾」

高祖大菩薩五百五十回之諱辰諸山諸寺之僧徒各々

募縁無修法会不擬報恩也於」此乎小比丘日華欲奉納

大額於身延山」祖師堂前報鴻恩万一回恭聞吾水戸上

公」乞揮山登公許之八月十四日書栖神法窟」之四大

字賜之其紙中也横一丈有八尺堅七」尺其四縁増一尺

其色也朱黒金以彩之」文字亦以金塗之地則素木也令

工林蔵」作之其彫刻也則余与伊東丈信篠氏兄」弟岸

氏同刻之又永井介用幹事之令」漆工池松塗之本月五

日始其夏九月十日」落成焉翌十一日入之於小石川富

士見御殿」之正寢以皇峯寿院大夫人公主峯姫君」上

公及天人登美姫宮之尊覽而上公雄」賞謂余日卒業之

速而且夫甞彫刻」美乎兩日行装已調十四日発江戸十

九日」到身延山廿日掛於大堂之向拝誦経唱」題專祈

一天四海皆娣妙法末法万年」広宣流布仰翼上公宝筭

長久御子」孫繁榮臣僧日華大願成就就本山永昌」檀林

繁茂能所之僧侶自行化他具足」円満者也」

法華三味^{（朱）}檀林能所生入費東都駒籠」雞声窸十行山大
乗寺兼水戸靖定」僧録司靈端日華識^{（朱）}以上裏書」

（21オ）

（21ウ）

(22オ)

右願之宣本戸公ノ寺社方ヨリ問合ニツキ哀切享シ送之時文久三年
壬戌三月上旬藤師代院代智心院當番智章院出府先ヨリ申来ルナリ

欄間大ミスクミ 枚 (慶応三丁卯年春 祥師御代 本堂同時出来)

朱柱塗地并 大格子黒塗地 藤師代 新七

施主西京信者、面々 免起本願主西京望慶院村 石田音吉

明治七年戊申八月企之未シ、而而塗中ニ
同八年乙亥一月十日焼失ス

〔註〕

- (1) 一ノナミ、三ノ二ハ朱字
- (2) 主水ハ朱字
- (3) 舍人ハ朱字
- (4) 図書ハ朱字
- (5) 頼母ハ朱字
- (6) この一項は欄外上部にあり。
- (7) 七条ナリ
- (8) 施入面々志ノ雪過去帳二冊アリ「頭註」
- (9) 「明治五」より「附置之」は脚註である。
- (10) 「施主」を「世話方」と訂正。
- (11) 下ノ印、掛札有之之印也「頭註・朱字」
- (12) 「是ヨリ」より「本願人」は朱字である。

本堂十三間四方各一丈宛

身延山諸堂記外(北沢)

前ノ本堂若文政七年申年八月廿七日回禄ス(一)

第六十一世日心師代再建企之 心師板本尊

天保十一 庚子 正月十三日本堂再建斧初之砌日心判形

第六十六世日薪師代本堂上棟 薪師棟札

嘉永三 庚戌 十月十一日柱立同四 辛亥 十一月十日吉辰

上棟「日薪判形 同裏書」

六十一世日心尊師 天保十一庚子年正月
十三日再建斧初

六十二世日扇尊師 天保十四癸卯二月
十六日地形初

六十三世日關尊師 慶応元乙丑十二月廿九日六十九歳

六十四世日仲尊師 天保十五甲辰七月廿一日

六十五世日桂尊師 安政三丙辰四月十五日六十四歳

一老潮心院日陽聖人 安政六己未四月十一日

院代妙信院日法聖人 慶応元乙丑十二月廿九日六十九歳

院代妙信院日法聖人 慶応元乙丑十二月廿九日六十九歳

三老太善院日棟聖人 嘉永六癸丑三月十八日五十七歳

四老太善院日大聖人 明治十五壬子三月廿六日八十一歳

潮円院日遊聖人 明治七甲戌四月七日六十七歳

智文院ト改

智文院ト改

身延山諸堂記外（北沢）

當番全中院日惠聖人 元治元年甲子五月五日六十二歲

同 太秀院日忠聖人 安政二乙卯二月十一日四十五歲

當番妙覺院日誠聖人 安政六己未十月十五日四十五歲

同 是感院日行聖人 明治二己巳四月朔日五十三歲

同 顯正院日光聖人 明治四年辛未七月十七日

同 音中院日願聖人 明治八乙亥一月廿一日七十三歲

同 智順院日逗聖人

同 妙俊院日壽聖人 勅賜權律師

普請奉行

本機坊五世 老太彦院日等聖人 安政三丙辰五月廿一日五十一歲

時五 山本房州二世 頭要中院日顯聖人 明治十丁丑二月廿三日七十歲

大遠 番英中院日孔聖人 嘉永四年辛亥四月三十日三十一歲

同 房鑑乘院日逢聖人 安政二乙卯九月五日三十七歲

普請方

妙音 房了乘院日惠嘉永七年甲寅正月十三日三十五歲

門台房廿七世 妙定院日翁文久三癸亥五月十四日四十三歲

会所結世話人

春米 村小林小太郎喜五 尊德院了智日惠僧士 文久三癸亥十一月十六日六十八歲

針山村市川三右衛門

(31ウ下段)(32才上段)

(32才上段)

(32才下段)

(32ウ)

(33才)

當上 町池上重兵衛守 一字磨梅旭日縣僧士六十歲 明治五年申十一月十一日六十歲去

同 所佐野伊兵衛

狐 町阪上万七 開法院尉盛日僧僧士 安政二乙卯十月廿七日

同 葉山十之亟臣 院道源日僧僧士 明治九年子六月二日七十四歲

同 望月善左衛門 與相院法貞日僧僧士 明治四年辛未四月二十六日八十四歲

小田村志村太兵衛 本理院法性日僧僧士 明治五年申十月廿六日去

大工棟梁 檜皮家根師

當中 町池上内匠書宗員 中 町小倉久右衛門

上町池上内匠玄諦 下 町佐野恒兵衛

中町池上伊織宗治 瓦師

下町池上額母宗武 伊沼村望月平八

彫工 杉木挽頭

東都和泉小三郎 中 町池上徳之助

大工肝煎 下 町佐野友藏

中 町望月藤左衛門 左官

下 町池上定右衛門 下山村遠藤常八郎

同 望月幸左衛門 建方

上 町川口彦次郎 下新町高井善次郎

中 町遠藤儀右衛門 下 町柿島太吉

同 吉野勝兵衛 地形

(33ウ)

同 深沢 佐平治 妙法堂世話人中
 上新町 佐野 平次郎 手打沢村 深沢 儀右衛門
 上 町 望月 祐右衛門 椿根村 久保田 蔵右衛門
 同 池上 兵 蔵 榎里村 早川 徳之丞
 狐 町 樋口 勘右衛門 普請方下役
 片隈町 小倉 源八 梅平村 武田 要兵衛
 下新町 芦川 彦三郎 相又村 千頭和 惣兵衛
 中 町 望月 幸二郎

以上棟札裏書、写

嘉永五年 壬子 七月七日 本堂開堂供養并 諸尊御遷座

入仏供養 六十六世薪師代

宝塔兩仏四天王無辺行ササ安立行ササノ像

施主当国青柳村中

龜嶺寺同村昌福寺閑居 遠寿院日命聖人嘉永五壬子年七月廿五日化

天保二 辛卯 年十月 五十八世日環師開光

京都大仏師法橋林如水作之

上行浄行菩薩像

施主大坂 年参中世話人 京都御園屋兵衛 大坂御屋利三郎 伊丹屋惣兵衛 同平兵衛 大島屋徳七

嘉永七 甲寅 年 六十六世日薪師開光

文殊師利普賢菩薩像

身延山諸堂記外(北沢)

(34ウ)

施主大坂 年参 両講中 安政四 丁巳 年正月 六十七世日楹師開光

宝塔兩仏金子五百両 合而一千兩寄進也 今上皇帝宝祚万々歳 位牌兩基

征夷將軍御武運長久

嘉永五 壬子 年七月吉辰 六十六世日薪師筆

施主再建会所結合中

御拝所天井ノ竜ノ画并 後門張附獅子ノ画者

甲府玉亨等願ノ筆

後門竜虎羅漢ノ画者

京都野永町立信ノ門人永林僧契証 嘉永七甲寅四月参詣登山ニテ面之寄進

天蓋嘉永六癸丑四月 仏工京都竜契

施主野州宇都宮崎尾新右衛門 金五拾兩寄附

貫首礼盤并 御経 判形 同机 箱 鑒 同台 棒 過

去帳 判形 同台 嘉永六癸丑三月

施主江戸巢鴨町石場文右衛門

花天井 為半伝金子百両嘉永五壬子年寄附有之

施主江戸南茅場町鴻池儀兵衛

須弥壇一式

施主当国西河内福土邑真篠望月五兵衛 法号真府院法教 安政六己未二月

(35オ)

身延山諸堂記外（北沢）

日蓮居士
八日去七十七歳

行道椽擬宝珠拾四并金具」

施主江戸谷中三河屋齊藤権右衛門」

嘉永二己酉 年秋 世話并取次谷中妙行寺
發行院日研上人」

釘隠シ」

施主越中国」

打鳴シ同台蒲田二枚棒共 嘉永二己酉七月」

施主江戸深川一乗揃中」

金灯笼一對 文化四丁卯七月」

施主兩國東西揃中」

常香盤」

燭台一對 真鍮 文化八辛未九月」

施主江戸深川淨心寺揃中」

花瓶一對 真鍮 文政十三庚寅十月十三日」

施主渋谷大奥」

造り花永代隔年ニ建替」

施主江戸身延御花揃中」

花瓶一對 焼物ナリ
生花ニ用じ之」

施主備前国御野郡上伊福村中」

瓶子并三方共 一對 文政十三庚寅七月」

施主江戸芝口揃中ノ内江島屋茂兵衛門」

過去帳全冊 日新 同台」

是ハ本堂再建立大小寄附施入等加ノ面々先祖精進」
見聞覚知志願現俗名法号配之可三同向者也」

本堂前金灯笼二基六十七世楹師代」

施主泉州堺中村富十良取次 東谷 永代為油料金

子拾五両納之」 嘉永七甲寅十月吉日納工東都大門通御屋元次郎」

欄間 四 枚 慶応三丁卯年春本堂御成金百両奉納ナリ」
大ミスクミ 祥師御代 施主羽州山形佐々木甚蔵同母」

本堂再建大本願人ノ掛札 同本願人ノ掛札」

御州松代憲性院日明聖人 当 國 田島村大森 作右衛門」

蓮乘寺題目揃中 發起人 妙常尼 越出村遠 藤源兵衛」

同 寺 題目揃中 發起人 妙常尼 越出村遠 藤源兵衛」

奥 州 長谷川饒左衛門 松前城下 安部屋 喜兵衛」

同 國 小 林 小 太 郎 同 所 吉田三郎右衛門」

同 國 片 田 伝 三 郎 小田船原 志村太兵衛」

同 國 宮 川 紋 藏 同 所 松田 饒兵衛」

同 宿 村 望 月 五 兵 衛 同 所 土村内田新之丞」

同 土 村 望 月 五 兵 衛 初鹿島村望月喜兵衛」

西郡北組大題目揃中 針 又 村 市 川 三 右 衛 門」

当所狐町望月善左衛門 針 又 村 市 川 三 右 衛 門」

〔註〕

(1) 一ノ十一「朱字」

(2) 名体院宗用日教信士〔頭註〕

(3) 万延元年申閏三月廿七日七十二歳〔頭註〕
親行院要道日得信士

(4) 明治七年九月九日八十一歳
福聚院内海日信信士

(5) 「儀右衛門」を「儀兵衛」と訂正。

位牌堂拾貳間五尺二寸四方

前ノ位牌堂者文政七甲申八月廿七日回禄

丈六釈尊座像六十六世日新開光

発願人当山上ノ山鬼子母神堂前ノ別当 法達院日久法師弘化五戊

申二月四日化ス

施主者 当國精根村正行等十六世蘭磨 大僧都 不退院日住上人 万延元庚申

九月廿一日化六十八

弘化五戊申 四月九日御開眼千部執行勤之

同 別 当 春 教 日 恵

東都大仏師奥村雲開作之

過去帳十五冊各二日宛同合思盤

施主江戶本所御島法性寺廿一代貫華日香

天保十二年二月 六十一世心師代
発願主時之院代慈願院日發願人

貫首、礼盤

身延山諸堂記外(北沢)

(45才)

同御経机 御案ニ菊ノ紋
文政十三庚寅十月吉日 工人 塗 師 与 四 郎

同御経箱 寄附主江州今市遠藤嘉右衛門

同鑿并 台施主不知

大打鳴シ并 台 文政十三庚寅七月癸卯師代
施主江戶 名前打鳴シニ有之

金灯籠一對 文化四丁卯七月(マコ)
施主江戶 両国西東橋中

燭台一對 施主開運要品中

造花一對 永代隔年ニ立替
施主江戶身延御花御中

前机

常香盤 文政三辰年八月吉日
施主領地求馬大願成就

幢旛一對 嘉永五壬子四月 發願尼

三堂之内釈迦堂再建加入勸信牒序

抑甲斐国身延山久遠寺ハ其の靈鷲山事の寂「光土に

して高祖日蓮大菩薩尽未来際まで」御魂を留まし

すと云 乃至ならず一度参詣の輩ハ無始の罪障を

消滅すと遊され御遺言にも日蓮が弟子檀那として

ハ身延山を一宗の本山と崇び志を運べし身延山を

疎略に心得人々ハ日蓮が弟子にはあらずとの玉ふ

依レ之五百年來」日本国中の崇敬信仰の志しあつて

法灯日に輝を増の靈場也爰に当山三堂の内万善

宝殿ハ教主釈迦尊を奉安置左右に日本」國中諸檀

(45ウ)

身延山諸堂記外（北沢）

（46ウ）

越精靈の位牌を起立し毎日「日月杯の靈供を備て誦誦回向の所在なり」右釈迦堂大破に及び今般再建を企不^レ断香華灯明をさ^レげ誦誦唱題報恩謝^レ徳の修行をなさん事を発願す仍て信力の「諸檀越に告しらしめ多少によらず是が施入^ハ」たらん事を乞のミ」高祖大菩薩の恩山の一座に報徳海^ニの一滴を「謝し奉らせ現当二世の大願を成就せしめ」むと欲すよつて勸進の意趣しかり」

安政五年 戊午 歳春

身延当番

〔註〕

（一） 一ノ十五へ朱字

仮位牌堂再建^{十三間}四^三方

文政七年 甲申 年九月成就^{六月千部ノ元金二百兩用之}五十五

世暹師棟札有之

初へ祖師堂ノ仮堂トシテ再建文政七年ヨリ天保二年四月二日迄ハケ年之間祖師仮堂也今ノ本堂ノ地ニ再建ス^{（一）}
次保六年今ノ位牌堂ノ地立引移シテ地ヲアケテ本堂金ル一喜永五三子七月七日日本堂成就遷座也二十年之間一仮本堂也^{（一）}
亦次ニ位牌堂ノ仮堂トスル喜永五三子年本堂諸尊遷座^{（一）}シテ其跡同年七月ヨリ

家根更 棟板 天保十三壬寅年十二月全之
同十四癸卯年九月成就

（47オ）

六十二世扇師代院代妙信院日法聖人丹情也
入用金百廿五兩二朱ト六十五文也葺替入用^{（一）}集金百廿六兩也残り金三歩ト七百三十七文
右勘定帳有之^{（二）}当中葺師小倉兩右衛門

家根更 棟板 明治四年辛未年秋扇師代葺更金之
同五年壬申十二月扇師代成就ス

板本尊^{（一）}イタ 中九寸七分大教正^{（二）}山日健^{（三）}形

当山釈迦堂仮殿柿板葺宝形屋根更成就^{（一）}施入之面々現当二世安樂祈者也維時明治五^{（二）}壬申十二月吉辰奉図之為安泰守護之本尊也

（47ウ）

同裏面ニ 当山三堂之内釈迦堂仮殿家根葺更者^{（一）}明治四年辛未年九月七十一世日禪師代始之^{（二）}
時院代^{（三）}西谷正法院智順院日逗聖人時普請方^{（四）}山之坊廿五世寛智院日伸玉泉坊三十三世要義日理^{（五）}

明治五^{（一）}壬申年十二月吉辰葺更成就^{（二）}

時院代^{（三）}仙舟院上^{（四）}世體遊院日珠聖人時当番役^{（五）}妙俊院日寿鏡閣院日賀顯妙院日修顯隆院日勢^{（六）}詮寿院日周事遠院日甲普請方玉泉房三十三世^{（七）}俊光院日理南延房二十二世事明院日三大工棟梁^{（八）}池上伊織宗治家根師池上平兵衛佐桵恒兵衛^{（九）}杣木挽望月忠兵衛左官湯平村伝十郎日雇頭^{（一〇）}石積勘兵衛作十郎源助^{（一一）}以上裏

（48オ）

書也」

世話人下田原村若林重左衛門」

柿板屋根入費醫師代金
健師代金」

行道縁下石積但シ三方」

堂内壁塗替但シ中塗迄」

東ヨリカ
ケ上リノ渡り廊下新規建替」

祖師御仮堂文政七甲申年十月上八日檼板也」

仮堂棟札巾二尺一寸七分
賜紫当山日逞在判」

同裏書 当番普請奉行海寿院日量聖人」本教院日東

聖人海運院日端聖人時普請方」法雲房端場坊常栄坊

松林坊大工棟梁池上」主計致昆池上織衛玄明檜皮師

小倉両右衛門栄行」仕手当町諸職人以上
裏書」

〔註〕

(1) 右仮堂本堂ノ地ヨリ今位牌堂ノ地江建地其儘ニテ

引入ル六十世潤師代夫ヨリ本堂ヲ企ルヘ頭註」

(2) 三十年メフキ更ナリヘ朱字」

三門(1)十三間 廊門左 各五間 寛永十九壬午六月十二日成就供養」

元トノ三門ハ慶応元年乙丑十二月十四日辰仙台崩ヨリ」

出火類焼失ニ王像ハ安奉十六願深像ハ焼失ナリ

身延山諸堂記外 (北沢)

慶応二丙寅年八月七日ニ王尊假門成就上棟遷座之御納之安奉守護」
之棟札七十世日祥判形

同裏書ニ」

時院代 妙衣院日忍聖人

昔 諱方是感院日行聖人

同 妙俊院日寿聖人

同 執事顯立院日勢聖人

時別 当智観院日透聖人

普請方詮寿院日周

智宣院日彭

事遠院日甲

寛智院日伸

励明院日染

本願人 小林八右衛門

春米村 新津 又兵衛

落合村 新津唯右衛門

同 村々世話人中

町話人 池上 重兵衛

佐野金左衛門

同 苗半兵衛

葉山十之亟

樋口勘右衛門

望月善左衛門

坂上万七

佐野豊之亟」

大工棟梁」

池上 伊織宗治」

池上 主税玄吉」

小倉源八郎常延」

(50オ下段)

(50ウ上・中段)

(上・中段)

身延山諸堂記外（北沢）

家根屋池 上平兵衛

佐野 恒兵衛

柚木挽望 月 忠兵衛 清野親靜 日忠信士

深沢 半七郎 深心法持 日親信士

池上惣右衛門

建方 勘兵衛

日屋頭 弥兵衛

以上棟札

(50ウ下段)

(51オ)

三門新築ノ時二十六世日通上人勸募ノ記

誠下特被三道德貴賤助力令於三延峯新建中立三門之狀

夫身延山久遠寺者本化垂化之地衆聖降臨之境也靈祖曰彼月氏靈鷲山本朝此身延峯也望此砌聳無始罪障忽滅轉三業惡成三德等云云當今此寺堂舍鐘樓皆悉具足其所無者唯三門而已凡三門者祇有二門一亦呼為三門者此即所以表三解脱也大論云涅槃城有三門謂空無相無作大師云此三通名三解脱門一者解脱即是涅槃門謂能通此三法能

(51ウ)

(52オ)

(52ウ)

通行者一得入涅槃故名三解脱門也又曰觀三法無我我所故空諸法從三因緣和合生無有作者無有受者能如是通達者是名三空解脱門觀男女相一異等相一是相中求實皆不可得能如是通達者是名三無相解脱門若一切法無相知即都無所作若於法有所得者即於三界而有願求因是造作三有之業令一切相皆不可得故則於三界無所願求不造一切三有一生死業無業故無報是為三無作解脱門門經云三空解脱門正念為三防守四道為三正路遊之出三界金文允矣可信可歸如如是稱善散在具業不離備一出一者也然此門建立之望歷代之諸師所強志覃思也余亦志念此興隆米年尚矣乃案三其當弁之功曾非自力之所堪而恐慮多功欲抑止此情空自利利人之德如之何進退惟谷濶聞縱有下大山者上覆一簣以不阻止及三萬仞又有下赴長途者上投一屐以不阻留必屈三千里

(53オ)

焉其積^レ功^ヲ 累^ニ德^ヲ 致^シ誠^ヲ 專^ニ心^ヲ 無^ニ事^ヲ 不^レ成^ニ無^ニ願^ヲ 不^レ遂^ニ一^ニ肆^ヲ 將^ニ欲^ヲ 下^ニ藉^ヲ 衆^ニ力^ヲ 一^ニ半^ヲ 錢^ヲ 所^ニ施^ヲ 一^ニ粒^ヲ 所^ニ捨^ヲ 漸^ニ合^ニ力^ヲ 微^ニ成^ニ功^ヲ 非^ニ造^ニ立^ニ三^ニ空^ヲ 解^ニ脫^ニ門^ヲ 以^ニ為^ニ道^ヲ 場^ニ之^ニ莊^ニ嚴^ヲ 報^ニ中^ニ仏^ヲ 祖^ニ大^ニ恩^ヲ 仰^ニ願^ニ常^ニ住^ニ三^ニ寶^ヲ 增^ニ益^ニ我^ヲ 願^ニ助^ニ成^ニ一^ニ我^ヲ 願^ニ重^ニ乞^ニ華^ヲ 夷^ニ遠^ニ近^ニ緇^ヲ 素^ニ尊^ニ卑^ヲ 扶^ニ疏^ニ 同^ニ志^ヲ 之^ニ人^ヲ 同^ニ浴^ニ三^ニ仏^ヲ 海^ニ之^ニ無^ニ辺^ヲ 須^ニ保^ニ壽^ニ木^ヲ 之^ニ不^ニ老^ヲ 乃^ニ至^ニ自^ニ他^ニ 俱^ニ安^ニ 同^ニ歸^ニ 常^ニ寂^ニ 愚^ニ舟^ヲ 所^ニ思^ニ 啓^ニ白^ニ如^ニ斯^ニ 諸^ニ君^ヲ 勉^ニ焉^ヲ

寛永十七年庚辰歲次^ニ

正月如意珠日

二十六代日廻^ニ判^ニ

寛永十九年壬午六月十二日三門成就供養也^ニ

三門^ハ二年六月^ニ成^ニ弁^ニ

三門前石宝塔

惣丈四間三尺^ハ長^ニ一丈四尺^ニ 山^ニ三十五尺^ニ

開山日蓮大菩薩

発起奥州白石僧徒中^ニ

御首題^ニ 山日鑑^ニ 判^ニ

惣入費金貳千五百円^ニ

六百遠忌報恩塔^ニ

明治十四年十月十三日

明治十五年七月三十日落成^ニ

〔註〕

(1) 一ノ四〔脚註・朱字〕

(2) 明治廿年三月四日旧二月十日午后二時中町蛭子屋ヨ

身延山諸堂記外(北沢)

(54オ)

リ出火焼失〔頭註〕

二天門^ハ四間半^ニ

前ノ二天門者三堂同時ニ焼失^ニ 一^ニ

再建立施入帳^ニ 叙^ニ

法華經云我亦自^ニ當^ニ擁^ニ護^ニ持^ニ是^ニ經^ヲ 者^ニ上^ニ令^ニ三^ニ百^ニ由^ニ旬^ニ 内^ニ

無^ニ諸^ニ衰^ニ患^ニ 亦^ニ以^ニ陀^ニ羅^ニ尼^ニ神^ニ呪^ニ 擁^ニ護^ニ持^ニ法^ニ華^ニ經^ニ 者^ニ上^ニ

トアリテ靈山会上ニシテ持国毘沙門ノ二天何レモ末

法^ニ今^ニ時^ニノ本^ニ化^ニ道^ニ場^ニ殊^ニ一^ニ乘^ニノ行^ニ者^ニヲ^ニ昼^ニ夜^ニニ^ニ守^ニ護^ニシ

其^ノ一^ニ病^ニ痼^ニヲ^ニ治^ニシ^ニ怨^ニ敵^ニヲ^ニ退^ニケ^ニ罪^ニ垢^ニヲ^ニ滅^ニシ^ニ法^ニヲ^ニ護^ニシ^ニ人

ヲ^ニセ^ニント^ニ 釈^ニ尊^ニノ御^ニ前^ニニ^ニ誓^ニセ^ニヌ^ニ爰^ニヲ^ニ以^ニテ^ニ吾^ニ朝^ニ往^ニ昔^ニノ

聖^ニ帝^ニハ^ニ四^ニ天^ニノ^ニ像^ニヲ^ニ造^ニリ^ニシ^ニハ^ニ專^ニヲ^ニ是^ニヲ^ニ尊^ニ信^ニシ^ニ中^ニ古^ニノ

高^ニ僧^ニハ^ニ盛^ニ二^ニ天^ニヲ^ニ請^ニシ^ニテ^ニ 山^ニ門^ニニ^ニ奉^ニ安^ニセ^ニリ^ニ是^ニ則^ニ慈^ニ悲

深^ニ重^ニ護^ニ世^ニノ^ニ天^ニ王^ニナ^ニレ^ニバ^ニナ^ニリ^ニ 抑^ニモ^ニ当^ニ山^ニハ^ニ即^ニチ^ニ天^ニ竺^ニノ

靈^ニ山^ニナ^ニリ^ニト^ニ高^ニ祖^ニ大^ニ士^ニモ^ニ自^ニラ^ニ夸^ニ耀^ニシ^ニ玉^ニヒ^ニ 九^ニ箇^ニ年^ニノ^ニ間

ヤ^ニス^ニト^ニ法^ニ華^ニ經^ニヲ^ニ講^ニ讀^ニ誦^ニノ^ニ靈^ニ窟^ニナ^ニレ^ニバ^ニ堂^ニ塔^ニ覺^ニ

ヲ^ニ並^ニヘ^ニ二^ニ天^ニノ^ニ高^ニ閣^ニ亦^ニタ^ニ有^ニレ^ニト^ニイ^ニヘ^ニト^ニモ^ニ文^ニ政^ニノ^ニ火^ニ災

ニ^ニ一^ニ時^ニニ^ニ燒^ニ亡^ニセ^ニリ^ニ宗^ニ門^ニノ^ニ徒^ニ誰^ニカ^ニ是^ニヲ^ニ悲^ニ歎^ニセ^ニザ^ニラン

ヤ^ニ然^ニニ^ニ今^ニ般^ニ東^ニ都^ニ信^ニ者^ニノ^ニ輩^ニヲ^ニ志^ニシ^ニヲ^ニ同^ニシ^ニ力^ニヲ^ニ合^ニセ^ニテ

再^ニヒ^ニ二^ニ天^ニノ^ニ門^ニヲ^ニ造^ニ營^ニシ^ニ奉^ニリ^ニ遠^ニハ^ニ仏^ニ恩^ニヲ^ニ報^ニシ^ニ近^ニク^ニハ^ニ信

身延山諸堂記外（北沢）

(55オ)

心ノ老少男女ニ「ソノ利益ヲ蒙ラシメ俱ニ仏慧ヲ期
セシコトヲ發起セリ善哉」真実ノ念願感賞スルニ余
リアリ定メテ仏天ノ冥慮ニ「叶ヒ現世安穩後生善処
疑ヒナカルヘシ若シ其ノ伽藍」造営ノ功德広大成ル
事経論ノ中ニ詳カナリ豈信ゼ」ザルベケン哉

身延山

嘉永二年 己酉 九月

役僧〇一

第六十六世薪師代再建立施主ハ江戸惣構中

薪師板本尊有レ之嘉永六 癸丑 年三月十一日 柱立同

年十二月再建成就 同裏書ニ

時院代主妙信院日法聖人

施主 江戸惣構中

本行房是感院日行聖人

駒込構中

妙仙房太彦院日等聖人

小泉百助
小松屋利助

大進房英中院日孔聖人

伝馬町構中

新節隨身頭正院日光聖人

京屋源右衛門
三河屋源右衛門

南之房智順院日逗聖人

東神田構中

清水房鑑乘院日逢聖人

馬喰町構中

薪師隨身妙衣院日忍聖人

新吉原水引構中

戒普房妙俊院日寿聖人

小石川構中

普請奉行

本郷構中

(56オ)

智報院日は
了乘院日恵
妙定院日翁
顯智院日勢
世話人
身延最初赤坂構中
芝構中
江戸末広構中
各拾構世話人

柿木挽頭

春米村小 林小太郎

池上 徳之助

同 同 梓 八右衛門

佐野 友蔵

荆沢村市 川 文 蔵

遠藤 喜瀬蔵

西南胡村安藤三五右衛門

石工望 月 幸 八

当狐町葉山十之亟

建方

大工棟梁

高井 善次郎

池上 図書宗員

柿島 太吉

池上 内匠玄諦

地形

池上 伊織宗治

妙法堂

池上 頼母宗武

世話人中

彰工機梁 江 戸 和 泉 小 三 郎

普請方下役

家根屋小 倉 久 右 衛 門

梅平村武 田 要兵衛

伊 沼 村 望 月 作 兵 衛

相又村千頭和惣兵衛

(57オ)

瓦 師 望 月 作 兵 衛
以上棟札

持国毘沙門二天ノ像六十一世日心開光（模札有之）

施主江戸芝中門前中村屋平兵衛同母幾女（法智光院抄）

最日行僧女（号喜永六矣）
丑正月廿二日去七十四歳」天保十己亥年六月吉辰 仏師成田東

運敏風作」

二天像 書写妙経卷一（一部宛）
懷中ニ（大塚氏因縁） 秋山氏女御川 此兩人之書写ナリ」

天井竜ノ画者」

奉寄附東都狩野永應立信ノ門人永林信実」嘉永七

甲寅年四月上旬登山ニ而画レ之奉寄進」

擬宝珠并金具一式」施主江戸小石川搦中」

金網四枚 施主

鰐口一ツ 施主（江戸果鴨町石場文右衛門）
安政四丁巳年秋古仏堂祖師開帳ノ刻盤師御代」

同 一ツ 施主（江戸果鴨町中）
同年同時ニ納之」

久遠寺額者ニ從四位下前侍從間部下総守藤原詮勝（アキカツ）

書」額之施主江戸日本橋十三日搦中（文久三癸亥八月）
祖師江戸開帳之刻納

六十九世
琢師御代」

积迦尊文殊普賢五百羅漢并眷屬共」六十九世 琢師御開

光 彫工高橋尚古齊鳳雲ノ作木彫ナリ」

施主（江戸浅田）伊勢屋太田加右衛門壽敬発起彫刻」之

施主也從文政年中末至安政始成就矣」

身延山諸堂記外（北沢）

法号永替寛了一如居士（文久二壬戌九月五日去）
加右衛門コト」

施主江戸两国村松町河辺惣次郎藤原盛善」

同 同 下谷 河辺武八郎藤原宗親」

同 江戸浅田旅籠町伊勢屋市郎右衛門」

右（文久三癸亥）奥院祖師江戸開帳之砌納之琢師御代」

六十九世琢師板本尊（長一尺五分）奉鎮座五百大阿羅漢之像」

皇和元治元太歳（甲子）年六月十八日若人為仏故○皆已

成仏道」

同裏書ニ当山白毫様安置五百大阿羅漢遷座之砌納

之」

仏像世話方

発起彫刻之施主」

江戸谷中 瑞輪寺妙音院日声聖人 伊勢屋加右衛門壽敬」

相州鎌倉智境院日進聖人 施主河辺惣次郎盛善」

時之院代潮松院日愈 同 同苗武八郎宗親」

本行房是感院日行 同 伊勢屋市郎右衛門」

志摩坊妙俊院日寿 世話方」

松井坊鏡闍院日賀 三筋町増田力藏」

國沢坊智章院日鑑 同 同所池上伊織宗治」

鹿 房頭妙院日修」

大林房鏡円院日勤」

身延山諸堂記外（北沢）

普請世話方」

至日房智文院日遊」

妙仙房要中院日願」

上妙坊智順院日逗」

猊之坊智運院日願」

以上板札裏書」

豚師棟札巾一尺五寸三分
長三尺三寸三分

当山二天門再建成就

維持元治元年甲子年六月十七日上棟」同十八日二天尊

遷座安泰守護之」棟札也再建施主東都惣搆中登山」

同(2)ウラ書ニ

当山一老太善院日大聖人

普請奉行」

院代潮松院日逾

妙普坊智山院日登」

三老智文院日遊

林藏坊詮寿院日周」

四老音中院日願

清水坊事遠院日甲」

五老要中院日願

再建世話人」

中願智妙院日弘

吾米村小林八右衛門喜社」

当番是感院日行

当所狐町(4)葉山十之亟臣(シヤトキ)晨」

智順院日逗」

大工棟梁池上伊織宗治」

妙俊院日寿

池上主税玄吉」

智運院日願

(59ウ)

(60オ)

(60ウ)

(61オ)

鏡閣院日賀

小倉源八郎常延」

智觀院日透

家根屋池上平兵衛」

智章院日鑑

佐野恒兵衛」

鏡音院日隨

楠木挽池上徳之助」

頭妙院日修

遠藤喜瀬蔵」

鏡円院日勤

望月忠兵衛」

身延最初赤坂搆中

大塚屋久次郎 慶応元乙丑閏五月廿五日
遷座院榮心日香居士

去」

駒込搆中

小泉百助 眞実院母願功由日香居士
文久二壬戌八月十八日七十六歳」

伝馬町搆中

京屋源右衛門 三河屋源右衛門」

本郷搆中

兼康祐悦 蓮種院法樹日良居士 慶応二丙寅七月十

二日」

馬喰町搆中

江戸屋錦五郎」

小石川搆中

尾張屋卯兵衛」

東神田搆中

建具屋勝蔵」

芝蓮台搆中

上總屋平次郎 松壽院長遠日榮居士 明治三庚

午六月二日」

江戸末広搆中

大和屋文蔵」

新吉原水引搆中

各拾搆元方世話人」

地形丹精 妙法靈結世話人中」

以上棟札裏書」

〔註〕

- (1) 一ノ十〈朱字〉
- (2) 欄外上部にあり。
- (3) 宝城院延喜日誌
明治十丁丑十二月廿三日六十歳去
- (4) 一東院遺蹟日誌
明治九丙子六月二日七十四歳
- (5) 信明院常延日巧
- (6) 体心法喜日悦
- (7) 清時觀靜日忠

円師堂三間半 各縁三尺五寸宛」

前ノ円師堂者三雲ト同時ニ焼失「」

第六十一世日心師代再建成就天保十二辛丑九月
成範棟札日心判形

一式ノ施主者江戸浅艸蔵前坂倉屋酒井清兵衛」

前ノ円師堂建立ノ御酒井清兵衛所松屋四郎兵衛金子百兩寄附」
右ノ由緒ヲ述テ勉之同家先祖累代之位牌此ノ堂ニ納置之」
大工棟梁 油

上國母宗員」
上舍人玄宜」

前机

貫主ノ礼盤」

同御経并机」

鑒并台」

身延山諸堂記外（北沢）

(63ウ)

過去帳 同台」

御経并机 円師助巻経也」

波木井影堂ノ額者本戸宰相
人本也ト
添納之
天保年中修復心師代

六十八世実師板本尊」

(64オ)

当山大檀越法寂院」日円聖人之影堂嘉永七甲寅年十

一月四日大」地震而破壊故今般地形固修補之者也」

維時万延元年 庚申 十月穀旦為安泰守護」図而以納置

之者也

同裏書」

院 代 戒修院日確 昔諸方南向房日禪」

執 亦是感院日行 武井房日觀」

妙俊院日寿 戒善坊日周」

妙定院日翁 常住坊日甚」

大工棟梁 池上伊織宗治 柚木挽 築池上徳之助政純」

池上主税玄吉 佐野友蔵」

小倉源八常延 遠藤喜瀬蔵」

仕事師 駿州御原宿和泉屋半次郎」

以上裏書」

地震損ニ付再建主ノ様ヲ以テ領之金貳拾三兩二朱ト三匁五分五厘」
万延元庚申十二月奉納東都蔵前坂倉屋清兵衛

(64ウ)

身延山諸堂記外（北沢）

〔註〕

（1）一ノ廿（朱字）

二重宝塔三間一尺

前ノ二重ノ塔ハ三臺同時ニ燒失（一）

第六十一世日心師代再建企レ之

六十二世日扇師代「地形并立柱

六十三世日闍師代家根造作

六十四代「仲師代九輪作レ之

六十七世楳師代彫物并造作」須弥并塗銅瓦屋根成就

御本九大奥ヨリ金二百兩下ル楳師代」
伯州高遠領ヨリ金（2）

御施主者御本九一之丸御住居」

本輪院」
嘉永三庚戌年
三月十二日去

水野」

奥津」

經定院」

征夷大將軍家齊公天保十二年辛丑
閏正月三十日卒六十九歳」文恭院殿正一

位大相国公尊儀御菩提ノ」為メニ御内々御造立也塔

ノ下ニ石ノ室有レ之銅金ノ」包箱裡テ有リ御本丸ヨ

リ封シ下ル伝ヘ聞ク」文恭院殿ノ御爪髮歟」

（67オ）

宝塔兩仏六十六世日新開光

施主者江戸日本橋十三日（一）搦中」

五具足 七五三御鑓」

嘉永二己酉年七月同時納之」

施主ノ面々祈禱回向ノ位牌兩基有レ之」

安政六己未年
開堂供養勤之 諸尊御遷座東師御代」

六十一世日心師棟札」

（67ウ）

六十二世日扇師棟札」

六十三世日闍師棟札」

二重宝塔再建 天保十五甲辰弘化十一月初如意吉祥日」

御施主御心願満足丹情世話々々信力増進一切無障礙

祈者也」

裏書無之」

六十四世日仲師棟札」

二重塔九輪成就之処」

皆弘化第三丙午竜集十月吉祥日」

同裏書」
天保十二丑年新立」

心尊師代

院代慈嚴院 普請奉行

〔國沢坊尊是
光緒坊厚旭
定林坊慈教〕

（68オ）

天保十四卯年地引下之重立」

廟尊師代

院代妙信院

奉行

岸房太林院
志摩坊慈教

弘化元辰年上之重聚根成」

關尊師代

院代本教院

奉行

光緒坊慈教
定林坊慈教

九輪成院」

仲尊師代

院代妙守院

奉行

林政坊快普
院之房顯牙

御施主

一

取次滝尾御女性

大工棟梁池上内匠玄嗣

世話人村山民部

以上ウラ書仲師棟札有之」

六十七世日楹師棟札」

当山二重塔銅瓦屋根并惣造作令周備者也」

維時安政五戊午年十月十三日吉辰」

〔註〕

(1) 一ノ十六 へ朱字

(2) 山室遠照寺是雄院日琳世話

灯主堂三間半 万灯室三間六

前ノ堂室者三堂同時ニ焼失(1)」

第五十八世日環師代天保二辛卯十月十三日再建立大

工棟梁池上主計教良
池上鐵衛文明」

発願主青柳村昌福寺隱居遠寿院日命聖人」

身延山諸堂記外(北沢)

(68ウ)

(69オ)

(70オ)

(70ウ)

(71オ)

世現住太遠院日聞聖人
昌福寺
秋山千弥
同苗佐平次
聖人」

春米村小林新藏

寶柳村磯野新太郎

同所井上太良八

奉納集金高金三百拾七兩貳分ト錢壹貫五百四拾九

文」

内弘方一金三拾七兩三十分
二百九十五文ト

一金拾五兩三朱ト
百九十四文ト

一金七兩貳分

一金三兩

一金八拾四兩

一金貳拾四兩壹分ト
五百五十八文ト

一金壹兩

一金三歩貳朱ト
二百五十文ト

一金拾兩

惣ノ金百八十三兩三歩也」

残り金百三十四兩也此金祖師堂再建入用江加

之」

天保四癸巳年四月九日」

身延山諸堂記外（北沢）

灯主堂再建施入面々志之諸精靈過去帳（朱字）「
右此ノ序文ニ有之」

御法夏七日間百味内（一）味之施主銀三匁
同日一（一）味ノ施主銀三匁

御法事七日間万灯内（一）灯之施主銀三匁
同日一（一）灯ノ施主銀三匁

右之外タトヒ一錢半紙タリトモ志次第施入可有之候」

文政十二稔丑十一月日

祖師尊像 功德主当国石和早川半兵衛」

三ツ具足 施主江戸芝露月町常盤津若太夫」

打鳴シ 造花一本 江戸麻布谷町妙像寺一真院日治聖人」

万灯并長明室額者六十世日潤師筆」

灯主堂（板）板家根更成就之砌明治三（庚午）十月十三日」

板本尊七十世日祥在判家根更施主当国巨摩郡春米邑

小林八右衛門喜祉為子孫長久也」

同裏書ニ時院代順明院日惠聖人」当番執事妙俊院日

寿頭妙院日修觀樹院日明」普請方南向房廿九世俊明

院日選世話人太工成樂池上伊織宗治」

灯主堂家根土瓦葺更成就之砌明治五（壬申）年十一月

吉辰板本尊（板）長一尺八寸二分大教正（山）日健（在判）家

根替施主当国巨摩郡春米村小林八右衛門喜祉丹精

也」

同裏書ニ此土瓦者嘉永七（甲寅）十月六十七世日楹師代舞

台」之古瓦用之不足分新規足レ之葺更成就矣」

時院代（東京）青山體遊院日球上人（當番役）妙俊院日寿」頭

妙院日修頭隆院日勢普請方（玉泉坊三十三世俊光院日理）世話

方池上伊織宗治土瓦師伊留村望月作兵衛 以上」

〔註〕

（一） 一ノ十九 へ朱字

（二） 嘉永五 壬子 七月廿五日化

（三） 天保十四 癸卯 三月七日化

（四） 日号を欠く。十八世日護上人。

（五） 同右。二十二世日有上人。

（六） モミ板長一尺二寸五分（頭註）

舞台（三間） 樂屋（六間）

前ノ舞台同樂屋并廊下等三箇所同時ニ焼失（一）」

第五十八世日環師代再建立」

施主東都本石町八日（人）擗中（世話人）弘化四丁未八月廿六日」

同五十九世日詔師代擗中登山上棟

詔師棟札云」

舞殿再建立成就天保五（甲午）四月吉辰上棟之砌」施主

東都本石町八日擗中^(77ウ)

同裏書ニ時普請奉行「堀場尉太林院日建蓮僧房太堂院日棟^(77ウ)之房太連院日勢^(77ウ)感應房潮松院日迦」大工棟梁中町主

計致昆上町織衛玄明中町圖書宗員^(77ウ)以上

舞台家根土瓦葺更^(77ウ)勲許上人日楳師代^(77ウ)

嘉永七^(77ウ)甲寅年十月吉辰棟札有之

祥師代板本尊^(77ウ)

舞殿并樂屋去嘉永七^(77ウ)甲寅年十一月四日之大地震^(77ウ)而

地形弛石積押出柱根傾斜椽栂差脱雨漏^(77ウ)難^(77ウ)凌^(77ウ)故^(77ウ)今

般地形固修補之又四柱而土瓦者重^(77ウ)桁^(77ウ)垂^(77ウ)故^(77ウ)柿板以

葺^(77ウ)之者也維時明治元^(77ウ)戊辰年^(77ウ)十月吉辰為安泰守護

図以納置之

同裏書ニ時院代順明院日惠聖人^(77ウ)

執事是感院日行聖人^(77ウ)大工棟梁池上伊織宗治^(77ウ)

同 妙俊院日壽聖人^(77ウ)池上主税玄吉^(77ウ)

同 觀樹院日明聖人^(77ウ)柿家銀節池上平兵衛^(77ウ)

同 詮壽院日周聖人^(77ウ)佐野恒兵衛^(77ウ)

同 事遠院日甲聖人^(77ウ)仙木挽頭望月忠兵衛^(77ウ)

同 甘跡方俊明院日選^(77ウ)深沢半七^(77ウ)

同 勵明院日染^(77ウ)口福頭勘兵衛^(77ウ)

身延山諸堂記外(北沢)

以上七十世祥師板本尊^(77ウ) 会所下役源右衛門^(77ウ)

〔註〕

(1) 一ノ廿三へ朱字

(2) この一行は欄外上部にあり。

(3) 地震ヨリ十五年メ修補ナリ(頭註・朱字)

(78オ) 鼓樓^(78ウ)三間半^(78ウ)

前ノ室ハ三堂与同時ニ類鏡^(78ウ)(3)

第六十六世日薪師代再建企^(78ウ)之

同六十八世日実師代成就入大鼓^(78ウ)

施主者東都^(78ウ)本所惣擗中^(78ウ)

嘉永二己酉年二天門与同時傾^(78ウ)之於三深川^(78ウ)切組^(78ウ)海上ヲ崩シ当山江邊送再

建ノ約連同三庚戌年春於二深川^(78ウ)手折初メ致シ作^(78ウ)之過同七年甲寅十月迄

二荒方^(78ウ)出来致シ然也安政二年乙卯十月江戸大地震^(78ウ)而一火事出来ス

深川大工小屋ニ於テ彫物組物タルキ等焼失^(78ウ)江戸棟梁岩田半次郎岩田常吉

同前治助^(78ウ)

安政七庚申正月十三日吉辰当山而新初同三月廿七日立柱^(78ウ)

同六月上拜成就同年十二月五日大竣工^(78ウ)

鼓樓堂勸化帳之序^(78ウ)

抑モ甲斐国身延山ト申者宗祖大菩薩御退隱マシ^(78ウ)マ

シ本化別付三大秘法伝灯ノ靈地ニシテ四方ニ四大

ノ一峯聳ヘ白雲路ヲ埋ミ寂莫タル苔ノ扉ソニ觀念ノ

床ヲ^(78ウ)布キテ本化正宗根本ノ戒檀ヲ草創マシ^(78ウ)タ

身延山諸堂記外（北沢）

（79才）

ルヲボロケ」ナラヌ靈跡タリ故ニ御書ニ日月支ノ靈鷲山ハ本朝此ノ」身延ノ嶺ニ不レ異、日蓮カ魂魄ハ此ノ山ニ止ルベシ吾カ」弟子檀那等此ノ山ヲ本トシテ參詣セシムヘキ旨仰セ」ヲカレ此ノ山ニ御靈ヲ止メサセ玉ヒシカハ千早振神ノ恵ヲ」タレマシ」御歷代先聖丹情ノ功積リテ日朝上人ノ」頃ニヤ伽藍ヲメ成就ナシ莊嚴日ニソヒ歳ニマシメテ」幾春秋ヲカ経ニケルヲ去ル文政ノ頃、火災ノ為ニ諸堂」樓閣若干焼失シテ一遍ノ煙リト成シシカトモ十方ノ」檀越ノ丹情ニ依テ諸堂再ヒ營造成トイヘトモ未レ全」有シ昔ノ跡モナク浅間敷焼野ト成テ此ノ山ニ詣ル夏ニ」見ルモイフセキヲ此ノ儘ニスゴサン事仏天三宝ノ照覽モ」勿体ナク然ルニ此度日薪尊師鼓樓堂再営ノ」御心願難默止依テ同志ノ人々ヲ語ヒ俱ニ丹情ノ力ヲ合テ」諸堂再営ノ資補ニ備ヘテ施主ノ面々永代過去帳入ノ」法号ヲ相記シ姓名ヲ末世ニ殘シ宿罪消滅現世安」穩後世菩提子孫長栄ノ志願ニ酬ン事ヲ欲ス」信心同志ノ信男女等施無差別ニシテ三ヶ年ノ間」多少ヲ不論丹情寄進ヲ希而已」

（80才）

本所 惣世話人」
身延山役僧」
皆嘉永二己酉歲十月
深川 淨心寺」

太鼓堂者六十六代薪師代企レ之六十八代」実師代再建成就 実師棟札」

当山鼓樓再建成就之節納之安泰守」護之本尊也維時万延元 庚申 六月吉辰」施主東都深川惣擲中現安後善」同裏書ニ当山鼓樓再建者日薪師代」嘉永二己酉年秋東都本所深川惣擲中」頼レ之同三年 庚戌 春於」東都深川手斬初」組物彫物垂木等荒方出来然」安政二年」乙卯 十月二日江戸大地震之節出火於」深」川大工小屋」類焼依レ之組物彫物又彫刻而」海上舟廻山着安政七 改元 庚申 正月十三日」於」当山手斬初同三月二十七日立」柱同六月」上葺成就矣

普請方」

院代 戒修院日確聖人
南延房日積」
發起并執事
武井房日観」
本行房是感院日行聖人
法雲房日徳」
三十七世
志摩房妙俊院日壽聖人
南坊日周」
二十五世

(81オ)

門台^四妙定院日翁聖人
三十七世

大本願主

東都深川大石弥三郎

同 伏見屋清助

同 富田屋半兵衛

同 三河屋伊助

江戸大工棟梁

岩田半次郎

飯田常吉

同 苗治助

鍛冶工

権現堂文左衛門貞友

石工

望月幸八貞治

以上棟札裏書

大鼓新堂^五移シハ同年十二月五日甲子吉辰ニ付九

ツ時ヨリ打^レ之始メ安泰守護ノ御経誦^レ之

入用金 金百六拾二兩^中中ヨリ送り
金九拾七兩^分分再建ヨリ出ス

也」

積尊^七七世祥師開光 慶応三丁卯四月

身延山諸堂記外(北沢)

常住坊日甚

当峯大工棟梁

池上伊織宗治

池上主税玄吉

家根屋棟梁

佐野恒兵衛

柚木挽棟梁

池上徳之助政純

佐野友藏

遠藤喜瀬藏

建方頭

柿島太吉

望月宇兵衛

日雇頭

志村七五郎

(82オ)

当山鼓楼再建立成就今般柿板葺家根更成就之砌納

之」棟札檜板^巾二尺一寸五分^身身七寸二分^延延大教正日健在判

維時明治六^{癸酉}六月十六日上棟 施主東京^{本所}深川惣^二櫛

中^後後安

同裏書 当山鼓楼再建立者当山六十六代」日薪師代

嘉永二^{己酉}九月企之同六十八代日実師」代万延元^{庚申}庚申

六月再建成就今般明治六^{癸酉}六月十六日家根葺更

吉辰上棟令周備畢

時院代権訓導日球上人時執事権訓導日寿上人」同日

賀上人同日鑑上人同日修上人鏡門院日勤聖人」頭隆

院日勢聖人時普請方玉泉房日理本願主」深川津村熊

五郎并世話人中大工棟梁池上伊織」宗治池上主税玄

吉小倉源八常延家根師池上」平兵衛佐埜恒兵衛柚木

挽望月忠兵衛池上伴右衛門」石工望月幸八日雇方

佐野勘兵衛佐野源助留月作十郎^{以上}裏書

〔註〕

(1) 「鼓樓堂」を「鼓樓」と訂正。

(2) 大鼓者從^正西打^正東へ頭註

(3) 一ノ十九へ朱字

(4) 曉月院法僧日住僧主 元治元年甲子年
六月十六日

身延山諸堂記外（北沢）

（5） 法号智玉院顯光日輝居士 文久三癸亥
七月廿一日

① 椎鐘堂三間 番部屋九畝

前ノ堂者三堂同時ニ焼失（2）

飯堂造立

文政七年 甲申 九月吉辰 五十五世遍師代」大工棟梁池上主計致昆池上織衛玄明」

〔註〕

（1） 鐘從東椎西へ頭註

（2） 一ノ廿一へ朱字

本地塔二間 四方二階

前ノ本地塔者三堂同時ニ焼失（1）

第六十六世日新師代再建立

嘉永二 己酉 年正月十三日吉辰手新初メ

同五年 壬子 三月廿八日吉辰上棟

同日開堂供養御開眼并 御遷座

上行菩薩像者厨子入開光日新判形

造立之趣者当国西河内楮根村正行寺十六世閑居

大僧都不退院日住上人 万延元庚申九月廿 奉納安置之

住古上行ササノ像者感沢閑居日現奉納ノ像者」
文政七甲申年八月廿七日三堂同時ニ焼失ス

中古上行ササノ像者京都大仏師林如水奉納ノ像ハ、
文政十三己丑年九月六日方丈焼失ノ初奥ノ程成ニ於焼失也」

（当山本地塔再建上棟之砌）

棟札

嘉永五 壬子 年三月廿八日吉辰

同裏書

時院代妙信院日法聖人

昔 諸方了乘院日恵

妙定院日翁

顯智院日勢

兎願主

鬼子母神 法達日久

堂前別當 當時春教日恵

同 大工棟梁池上伊織宗治

池上頼母宗武

柚木挽清 源兵衛

古谷 繁右衛門

池上 重兵衛

望月 善左衛門

阪上 万七

葉山十之亟

本地塔勸化序

高祖仰に云身延山者真の靈山事相の淨寂」光土也と

いへりかゝる靈場江永く屋疏并に」姓名等を書駐め

(92才)

御宝前に備置ハ自然と」先祖両親の菩提となり家内安全子孫」長久の祈禱とならん我も人もともく」に「現世安穩後生善処ハこいねかふ所なれハ」今般某し身延山高祖御本地堂再建立」発起の心願に付幸ひと存し広く諸人に功」徳善縁を結バしめんとほつし知音近隣の「御方」披露いたし物の多少にかきらす」御信力の浄施を奉希者也」亦く御銘く御親縁の御方」御披露被下」御志し御施入所希也」

天保八年酉六月日

希願主法達日久」

柿板葺替明治十二年 己卯十月成就七十四代」鑑師代

普請幹事里見日珠」

〔註〕

(1) 一ノ十五ハ朱字

(94才)

堂前石ノ水鉢并 雨屋永代修役料金拾兩納之(1)」

一式之施主当国野邑矢崎又右衛門」

天保十年 己亥十月六十一世 心師代新造営之」

發願院日蓮宗之遊樂ノ水鉢ノ台石座并三門
前石ノ水鉢之雨屋右矢崎又右衛門同時ニ遊樂寄進之」

六十八世実師代板本尊 当山祖師堂前水」照雨屋柿

身延山諸堂記外(北沢)

(97ウ)(97才)

(96才)

板葺今般改土瓦葺更成就」之刻維時万延元 庚申年十月吉辰」

同裏書

甘藷方南向房日禎」

院代戒修院日確

武井房日観」

執事是感院日行

戒善坊日周」

妙俊院日寿

常住坊日甚」

妙定院日翁

瓦師望月平八」
伊沼村

以上裏書」

〔註〕

(1) 一ノ廿六ハ朱字

祖師堂江出仕ノ廊下巾」

毎年六月從十五日迄十七日迄報恩修造講大会執行
之時作之恒シ常ニハ置假之」

通本橋ヨリ位牌堂江ノ廊下巾」

位牌堂ヨリ祖師堂江之屋根柿廊下巾」

天保七年 丙申二月吉辰六十世潤師代再建」

弘化三丙午年六月
仲師代ニ北ノ方江寄テ修復屋根替」

身延山諸堂記外（北沢）

祖師堂ヨリ本堂^五至ルノ屋根土瓦廊下^{長巾}

嘉永四^{辛亥}年十一月掛之六十六世薪師代再建

堂前唐金、宝塔一基

施主東都酒家惣連中

發起人江戸駒込高崎屋長右衛門

同千住町伊勢屋甚兵衛

嘉永二^{己酉}年七月一切経并経蔵同時納之

^{六十六世日薪師代、執事本行房是盛院日行聖人、東都深川於淨心寺ニ当山興院祖師開帳之御納之}

供厨二間半 再建四間

^{俗ニ御供所ト云フ 三十三世薪師代再建立ノ供厨破壞ニ付又餘再建文政五^{壬午}年九月吉辰五十五世過師代}

第五十五世日薪師代再建立^{文政兩度ノ焼失ニモ此ノ供厨斗残ル}

施主東都藏前相磯勘兵衛一式ノ寄附

文政十一^{戊子}年五月廿日去

了因院縁種日縁信士助兵衛

了正院妙縁日種信女後妻

發起人^{西谷玉泉坊智弁院日諦聖人 天保二^{辛卯}年 門正坊智弁院日諦聖人 九月廿四日化}

^{再建之 西谷之房 本教院日東聖人 弘化五^{戊申}年 世語後 江戸青山妙門等 正月廿一日化}

御供所額者五十五世日薪師筆 本妙日臨ノ代筆ナリ

(101ウ)

御供所一式之丹情其外御膳具^{三ノ館附御茶碗臺台共}

御膳具入簞司二通^{平日ノ御膳具} 御膳台^{是ハ祖師堂ノ後門 江常ニ置ク焼失ナリ}

唐金鍋同釜等ニ至ル迄一式ノ丹情依之毎月廿日

於^{三寶藏}自我偈ヲ誦シテ回向ス 又タ大衆ノ肴料金

三百^ニ兩納^レ之 古ノ会合所縁ノ下ヲフサグ 亦タ

御供所ヨリ祈禱^ニ堂ノ下迄ノ場通本ノ通りヲ殘シ

ヘイヲ掛ル 皆ナ相磯ノ丹情ナリ

金三拾兩 永代御膳米料東都相磯氏納之

金三拾兩 永代修復料近村中納之

右祠堂金方江預ケ置利潤有之右一式智弁院発願丹情

也

御碗^{四ツ碗平坪 平日常用 施主江戸駒町三番町土肥玄谷 元治元年甲子十一月納之薪師代 取次松井房}

五十五世日薪師棟札維時文政五^{壬午} 九月吉辰 当山祖

供所棟札

同裏書 東武浅卿相磯氏金三百兩出資

時祖供所 玉泉坊智弁院日諦發起

^{シモハシラノ御歌大工棟梁坂上宮内不成就説}

同梓 坂上四良兵衛

以上棟札 棟梁没後丹情起立ス古谷繁右衛門

(101オ)

(98オ)

〔註〕

(1)

(弘德院崇徳日從僧土 天明七壬寅九月十四日
本御院妙日從僧女 天明七丁未八月六日)

(丁門院內日從僧土 文政十一戊子五月廿日
丁門院妙正日從僧女 文化十四丁丑八月二日先妻)

〔頭註〕

(103才)

二天門前水鉢一對」

施主江戸釘鉄銅物問屋中」

願主今津屋平右衛門世話人今津屋平兵衛」

御鑄物師江尻住山田六良左衛門藤原種秀」

于時安政四年丁巳九月日 六十七世 楳師御代」

本堂前金灯籠兩基」

施主泉州堺中村富十良」

鑄工東都大門通銅屋元次良取次 東谷 山本財

嘉永七 甲寅 十月吉日 永代油料金拾五兩納之」

大鼓堂前石灯籠一基」

施主遠州長上郡内野村大久保三良兵衛同苗熊次

良」

永代油料金三拾兩納之」

從文化十一年辰年迄起 世話人 當所 久米屋藤右衛門」

至文政四年巳成就 子孫繁昌切附有之 (是ハ三門ロリ至二天門迄道筋

右灯籠破壊ニ付再興施主」

身延山諸堂記外 (北沢)

遠州長上郡内野村大久保三良兵衛方一」為先祖代
々靈菩提 宿房志摩房」

維時安政七 庚申 年三月再建之 東師代」

〔註〕

(1) 此上ニモ有之 〔頭註〕

通本橋二間 回廊」

前ノ通本橋者文政十三己丑年九月六日戌申刻方丈」焼失之類類焼失」

第五十八代日環師代再建立」

施主当山惣町中」

一金貳拾兩 上町片隈 一金貳十兩 中町」

一金四兩貳分 下町 一金三兩 中下町」

一金五兩貳分 大下町 一金貳兩 下新町」

一金貳十兩 狐町 一金貳兩同寄歩 新宿」

一金拾兩同寄歩 塩沢 九口合而金九拾八兩寄歩」

一甲三十貳文四分 十貳文」

五十八世環師棟札」

天保二 辛卯 年通本橋新掛之」大工棟梁池上主計致昆

池上織衛玄明」

五十九世詔師棟札」

(106才)

(106ウ)

身延山諸堂記外（北沢）

（107オ）

天保三^{壬辰}年通本橋廊下再建立」大工棟梁右兩人」
六十六世新師棟札
弘化五^{戊申}年十二月吉日通本橋回廊家根更成就之砌」
通本ノ額ハ本阿弥大庵庵光悦筆」

六十八世実師棟札。当山通本橋者日環師代再建」立也
嘉永七^{甲寅}年十一月四日大地震而破損」殊柱根推朽
基陸頽毀故今般柱根繼」修補成就維時万延元年^{庚申}
十月穀旦」為安泰守護圖而納之置者也 同裏書」

（107ウ）

院 代戒修院日確 執事妙俊院日壽」
執事是感院日行 同 妙定院日翁」

昔諸方南向房日禎 棟梁池上徳之助政純」
武井房日觀 佐野友蔵」
戒善坊日周 遠藤喜瀬蔵」
常住坊日甚 仕部師」

大工棟梁 池上伊織宗治 駿州和泉屋半次郎」
池上主税玄吉 郡原宿和

通本橋廊下柿板葺更^{榑節代} 代型日陳代」
小倉源八常延 以上裏書」

明治七^{甲戌}年十月廿初未^{ツシメ} 同八^{乙亥}歲十一月十日焼失」
右葺更金百円施主西京聖護院村石田音吉」

（108オ）

（109オ）

御真骨宝藏^{三間方}
前之宝藏者文政十二^{己丑}年九月六日戌中刻焼失（一）」
第五十八世日環師代再建立」
免願主^{江戸本所本仏寺 改名 和真院日倫聖人} 十月十五日^{酉化}

施主者^{江戸本所入江町住人} 亀屋万兵衛夫婦」
法号 種徳院諒栄日寿信士天保九^{戊戌}年二月六日去」
同妻 種善院妙栄日長信女天保十三^{壬寅}年十月十七日去」

一金三百三拾三兩三步 合金四百五兩三步納之」
一同七拾貳兩是ハ陶金也」

（109ウ）

右依ニ丹情有レ之ニ毎月六日十七日於宝藏「自我傷」
誦レ之回向ス」

御宝藏内惣金極緑色金張付華天井等」

丹情ノ趣ハ駿州池田本寛寺 閑居 本寿院日行聖人^{嘉永十四^{辛亥}年六月廿五日化}」

金子三百兩納之依之毎月廿五日於宝藏「自」我傷
誦レ之回向ス（^{世話并執事慈尊院日林聖人泰心院日達聖人} 誦師并誦師当中町山田四良右衛門

御宝藏家根銅瓦井 壁上塗ノ施主」
江戸牛込三^三揃^三」

法味^{（世話）}拵中^{（世話）} 京屋野吉 土屋留五郎^{（世話）}
開帳^{（世話）}拵中^{（世話）} 石屋四良右衛門 田中文明^{（世話）}
八日^{（世話）}拵中^{（世話）} 和田屋源兵衛 柳屋吉兵衛^{（世話）}

和田屋源兵衛 柳屋吉兵衛」

発起本願 江戸高田寛朝院 十六世妙守院日護聖人 明治五壬申九月廿三日化

同世話 人松本銀次郎

弘化三年 丙午 歳企^レ之六十四世日仲師代

嘉永六年 癸丑 年八月廿八日成就

第六十六世薪師棟札有^レ之

普請奉行 智報院日是^一顯智^改院日勢

御真骨ノ宝塔 京都大仏師法稱林如木作

一式ノ施主美濃国大垣実相寺檀家 清水惣吉三十二

歲同妻円女二十四歳

法号 心鏡院皎潔日昌信士喜永二己酉年十月十四日卒

円鏡院妙體日輝信女天保十三壬寅年正月二十六日卒

宝塔金蓮華 木花八本 施主東京信者連名花瓶ニ彫付有之 後神玉泉寺日行

取次

同 関間ノ滝并須弥中輻ノ菊水ノ彫物等

施主銘、別記ニ有之 彫工師池上内匠玄壽作

同 入口ノ戸裏ノ張附獅子ノ画ハ

東都宗巨齊素彰奉寄附画^レ之

御靈骨宝塔ノ天蓋^②

木品天竺 ベニヤム 日本ノクスノ木ノ如シ

織物唐土 東三子手錦 模倣唐子赤地

〇〇子手錦 房本紅唐糸

身延山諸堂記外 (北沢)

玉物阿蘭陀 銅子花細工五色

願主長崎 中

取次 尾州 拵中

安政三 丙辰 年八月八日山君 同十三日奉掛 六十七世日楹師代

宝藏窓東西ノ障子式本ギヤマン 横長

中央ノ猩々緋幔 世俗三巾 本引 長

右天蓋同時納ル

古作ノ持国毘沙門天王ノ兩像

^③ 二天像之事古作也 山州名跡志九之卷三十丁 ○纏所大日堂在^ニ本殿^ニ南東向^ニ

本尊大日如来安^ス厨子^ニ脇士毘沙門 北壇持国天 南壇

長七尺許未^レ考以上作者 天長年中ノ頃 千二百余年

^④ 古作ノ二天ノ像者京都松尾明神ノ社ニ有リ元^ト兩

部ノ神道也此度唯一ノ神道ト改ル依之能キ便リヲ

得テ宗門ノ書堂村上勘兵衛宗門ノ仏工石見源七二

人相ヒ議シテ御影講^ニ頼^レ之以テ身延山御真骨ノ

中央^ニ奉安置也

施主京都御影^拵中

嘉永七 甲寅 年仲秋六十七世日楹師為^ニ敕許^ニ御礼^一

上京参内妙伝寺ニ於テ内拜ノ刻納^レ之

(111ウ)

身延山諸堂記外（北沢）

中央金綱ノ幔蓋紋九ツ附」

施主御本丸大奥 「為御祈禱納之老女衆迎名ノ藝文有之」

御真骨宝藏再建立此裏書下ニアリ」

天保二 辛卯 年十月十三日五十八世日環判形有之」

流金花灯籠老釣御真骨宝藏江奉納
阿蘭陀本國新造作工人カンムリヤ」

万延元庚申年水無月寄附主長崎異體同心」
六十八世日環御代
七面山江現々掛鏡 世俗ニ云ニ木引ト
奥院江現々掛鏡 担堂前江現々掛ノ鏡 同時ニ納之」

(112ウ)

我祖鴻恩施折伏逆化不顧身命授是好良藥如育赤子」

大慈大悲如虚空無辺治風巾四尺九寸 柳南邊鏡掛
喜入」

五十八代環師棟札 天保二 辛卯 年十月十三日」御真

骨宝藏再建立」

裏書 免願主并世話方 江戸本所本仏寺智善院日誦聖人」
施主者 同寺且方 江戸本所入江可住人 龜屋万兵衛」

普請奉行潮運院日恵太林院日建」太堂院日棟学翁院

日永太運院日勢」

大工棟梁当国波木井邑佐野直右衛門以上棟札」

左官当国下山邑遠藤茂七」

(113オ)

(113ウ)

御真骨宝殿棟札裏書」

当山御真骨栖神宝殿中央者」尾州信者中以格別信力
於国元切組嶮山波濤之運送其」上從当五月信者惣代
々而布目正兵衛諸職人引卒登山之処」於国元六月廿
二日同人妻雖病死聊不愛妻子只惟再建」守心無憾惜
之金言十月下旬中央奥廊下宝殿渡廊下皆」成就迄不
散寸心丹情之夏実不惜軀命之為善男子依而記置而
已」当山世話方泰心院日連聖門台妙定院日翁 世略人葉
松井切廿九代 尾州信者惣代 同茶屋新田 布目正兵衛大工方中木挽方
山十之返臣晨」
中日雇方中以上」
維時嘉永三 庚戌 年十月十日上棟遷座之御納之 日薪
判形」

〔註〕

(1) 一ノ四十ハ朱字」

(2) 阿蘭陀ギヤマン 四拾枚
広東錦キレ 長七寸七寸
巾九寸四分

右破損之時用意長崎織中ヨリ預リ置右預リ書

差出スハ頭註」

(3) 以下、「千二百年余」迄は112丁表に記してあるが、

指示箇所に挿入した。

(4) 以下、「奉安置也」迄は欄外上部にある為、行末を示さない。

(114オ)

中央六間半 廊下二間半 拜殿六間半 各縁側五尺宛 檼札三枚有之

再建立之施主者尾州惣拵中

発起大本願主尾州茶屋新田久満野屋正兵衛

尾州御林山木曾山ノ檜海上ヲ廻シ当山ニ運送再建成

就也

嘉永三庚戌年十月十日吉辰上棟同日開堂供養并御遷

座第六十六世日薪師代大工棟梁池上伊織宗治有之

掛簡板式枚中央 墨塗

東ノ方 宗祖当山開關文永十一甲戌年六月十七日

西ノ方 宗祖入滅弘安五壬午年十月十三日

金灯籠 一对 天保二辛卯年春 遷師代

施主三州岡崎大島屋伝右衛門永代油料

同 一对 弘化二己年七月上旬

施主当国内船村寄畑近藤太兵衛藤原長克

同 一对 鉄ナリ ナンパンテツト云フ

同 一对 文化四年丁卯正月十三日

施主武州豊島郡吉原同契ヤク女

宝塔一基 天保十己亥十一月吉日 心師代

身延山諸堂記外(北沢)

(115オ)

施主丹後国峯山住板垣彦次郎七兵衛

前机

施主越中国泊駅小沢与三右衛門

訓読妙経三十部折本

施主

御経机三十脚朱塗

施主上州桐生拵中 取次大栗房住慶学

貫主ノ礼盤

御経机 并机朱塗

鑒 同台朱塗

過去帳 五十八世 日環判形

同台

御宝蔵 御宝蔵

夫靈瑞感通嘉名早立誠哉抑当山者本化

祖大菩薩至尽未来際迄

棲神之靈地也身者本有無作

三身也延者無

始無終本有常住之義也故高祖云今本

時娑婆世界離三災出四劫常住淨土仏既過去

不滅未來不生化以同體此即己心三千

具足三種世間也入乎其境憶其人則境即

人也人即境也然則此土即淨寂光土例如釈迦尊三千大千世界一仏化境土故云我常

身延山諸堂記外（北沢）

在耆闍崛山共大菩薩諸」声聞衆围绕說法釈云靈山会上儼然未散」矣是則寄境作言也以之標準之極成則高」祖棲神所居必此之山真靈山淨土也然」此過去帳命日戒名記之日日為回向矣其」靈魂即身成仏何疑之有哉故云法妙故」人貴人貴故処貴矣経云当地是処即是」道場也矣俯可信也」

(116ウ)

皇和文政十二竜集己丑年 賜紫身延五十八代
十二月如意吉日

日 環 判形
(朱字) 身延
(朱字) 主山
(朱字) 環 日

打鳴シ同台蒲団共

施主江戶銀座新庄氏 文政十三庚寅七月、
法号六發有之 環師代納之

大鼓并 台文政十三庚寅八月吉日 環師代

施主江戶坂本町一丁目植木店世話人 魚屋貞吉
山田屋惣兵衛

同 井 台共 嘉永六癸丑年三月吉日 新師代

施主江戶浅草新町丸山三右衛門四十二歳

花瓶一对 真鍮 文政三年庚辰三月 過師代

施主江戶細町田中卯兵衛母

同造り花一对

施主江戶御花搦中 永代隔年ニ立替

木花金蓮華一对

(117ウ)

施主東京

明治五 壬申 六月深川開帳之御納之 健師御代

燭台一对 真鍮ナリ

施主萩江ひな同門弟中

香炉 真鍮 嘉永二己酉八月吉日 日新師代

施主江戶箱崎一丁メ銅屋惣兵衛

生華ノ花瓶一对

蓮華形常香盤

施主江戶京橋南構中

大燭台一对 台竜ノ巻

施主江戶浅草二 神ノ搦中

拜殿掛簡板式枚 朱繪 嘉永五壬子年冬 新師代

東ノ方吾祖棲神玉骨鮮永留ニ舍利ニ資ニ人天ニ 賜紫日応 拜母

西ノ方毎拜感涙懷ニ恋慕ニ滅後靈光曜ニ幾年ニ 〇〇〇

再興之施主堀之内妙法寺住 戒厚院日解聖人

而実不減度ノ額者彫刻師小沢兵衛

村雲御所日尊師筆号 瑞正文院日尊宮尊儀 慶応四年戊辰十月十二日叙 伏見宮恩女

一月十二日叙

嘉永七甲寅秋檢師上京参内ノ刻領之 正 安政三丙辰夏六月朔ニ刻而掛之ニ拜殿ニ過師代

御鏡一面并 台天保八酉年八月 西師代

施主江戸大平春女」
茶湯仏器」

施主江戸浅草蔵前伊勢屋（伊勢屋）（伊勢屋）

同三方并 蠅張附（嘉永二）西七月 薪師代」

施主江戸万代十二日擗中」

御膳仏器 同并 蠅張附 施主不レ知」

出仕ノ半鐘（文政九）丙戌四月吉日 日晴師代」

施主江戸深川蛸店身延擗中」

開帳ノ節供養ノ小香炉（天保八）丁酉七月 日潤師代」

施主江戸八丁堀小川氏（山本氏）（永谷氏）（永谷氏）

御膳具一式（コリ）至三三万 嘉永二己酉七月 日新師代」

施主 一」

拜殿西ノ方」紀伊侯御先祖位牌仏壇一式」

紀伊菊千代君再興之」

仏壇黒塗金張附金唐紙六本作之」

嘉永四 辛亥 年夏要行院日忠ヲ以テ御屋鋪上」頼レ之

同五 壬子 年春成就」

三ツ具足唐金 前机（春慶堂）

同東ノ方」左京侯御先祖代々ノ仏壇一式」

松平左京大夫頼学卿再興之」

身延山諸堂記外（北沢）

(119ウ)

仏壇黒塗金張附金唐紙六本作レ之」

嘉永四 辛亥 年春正月要行院日忠ヲ以テ御屋」鋪上

頼レ之同年秋成就」

三ツ具足唐金 前机（春慶堂）

三ツ具足（金蓮花） 前机（鳳堂） 秀徳院殿前并妙座一部白木箱入

中央ノ畳式拾壹拾壹拜殿ノ畳（三式）并」

施主尾州擗中 永代尾州擗中ニ而表更」

三ツ具足（金蓮華） 前机（鳳堂） 智徳院殿前

香炉（真鍮角ナリ） 同台（朱塗）

觸台（朱塗） 一對」

神鏡一面」

宝塔一基（施主大坂身延八日擗中） 明治六癸酉六月大教正健師大坂説教之初納之」

過去帳（明治六癸酉六月大教正健師大坂説教之初納之） 施主大坂身延八日擗中

同去帳（明治六癸酉六月大教正健師大坂説教之初納之） 初ニ首照有之」

御宝蔵廊下ノ掛札」

永代常経 澁州今尾足立氏」

常経料金五百 兩成院院置サ大 板長田氏」

同金百 兩文化三辰年納御 本 丸浜岡老女」

同金貳拾 兩是院院妙松日縁大姉サ主 渋谷金五郎」

同金拾 兩 江戶小石川依田妙縁尼」

(120ウ) (120オ)

身延山諸堂記外（北沢）

野州宇都宮
同 崎尾新右衛門
忠右衛門
同 重左衛門
同 重兵衛

東
都北品川構中一

京
都万人構中
取次
丹波屋勘助

江戶高田寺智徳院日苻聖人」

尾州名古屋
中橋裏住
藤屋妙瑞
俗名リノ女

尾
州信者中

大坂炭屋善助」

江戸前相磯勘兵衛妻

相碰毆兵律

川赴掃中一

富田屋長右衛門

江戸小石川依田妙縁尼

州名古屋搦中明笹屋伝兵

加州金沢
綿屋源助

三州岡崎大島屋伝右衛門

尾
州
関口円明院

遼州内野村大久保三良兵衛

(121才)

(121ウ)

(122才)

金三十兩
江戸芝口河内屋善右衛門

金百兩天明五巳年
迄二納加
州金沢搦中取次
相發院

永代金 十両
越中富山松屋清蔵

永代金 式十兩
越 前福井藩中』

同 金五十兩 江戸京橋搦中

永代登科 金貳十兩
加州金沢綿屋源助

永代金拾五兩文政五年四月納
修復料
越中富山室屋治右衛門

金十三兩

油 32 料金貳拾兩 貞樹院

油	料	大	坂河内屋弥兵衛
(33)	(34)	金貳拾兩	

常經料金百兩天保二年四月納 小伝馬町戸大黒屋平重郎一

油
料金五拾兩
十月
月九名古屋
十一月日長
笹屋伝兵衛
兵衛」

料金五合三兩文化四卯 江戸鶴屋市三郎

永代油料金三十兩
中村富十郎

祖師永代金百兩
 慶応三卯
 尾州藩中
 永平六太夫

七面山永立	合	可同時納	古司人
常經料立	下	同十一月納	元五

(162)

④ 永代常経 毎年御経料納中ヨリ納ル 東都御真骨常経中

御経一部八巻 同箱机共 打鳴シ 同台 棒 布同共テレンブ 過去帳上
下二冊上ノ巻頭節首題序文ノ巻後節首題 同台引出シ付 右三品共黒柳
金具シヤクドウ

再 (世話人 富沢町 富田盛徳兵衛)

免 同 村松町 扇屋孫八 感応院受法日教付士 慶応四戊辰三月十八日

配 同 同 越後屋政吉 証光院本覚日有信士 慶応三丁卯八月廿一日

御真骨水金五拾兩 山本坊前在 要中院日願聖人

〔註〕

(1) 明治十五年二月廿二日七十八歳去
法号寂光院法入日清居士

(2) 東面身延御真骨栖神宝殿等普請小屋場

北面弘化丁未四年十一月二日新初嘉永二丁酉三月

十九日於当地上棟此日遠近僧俗群会調軌則矣

同西九月廿九日出船嘉永三年戊辰四月二日初

荷山着同年十月十日於身延山令上棟御遷座者
也

南面当山御真骨栖神宝殿等再建主者以於国産之棺

材欲奉調刻既越遠路峨々嶮山凌漫々海上風波

無恙到着矣依之數多諸職人引率而正今再建成

就畢也亦為凌雨露于效苑一字号寂光精舍是全

前代無比類以丹誠故為信力増進面々祈現安後

身延山諸堂記外(北沢)

善者也焉

西面なにゆゑに碑しほね乃なこりぞと
思へは袖にたまそちりける
昭和(三十四年七月十六日)國口是婦師より見せられて後日の
ために鑑記し置くものなり 岡州重正寺に在りと云ふ(私曰。
林是婦師記)

〔押紙〕

(3) 曆安政四丁巳歳至五百八十四年(朱字)

(4) 曆安政四丁巳歳至五百七十六年(朱字)

(5) この一項欄外上部にあり。

(6) 紀伊公牌前(頭註)

(7) 源性院殿牌前(同)

(8) 秀徳院殿牌前(同)

(9) 智徳院殿牌前(同)

(10) 御真骨(同)

(11) 御宝藏(同)

(12) 金二百兩先方ニ預ケ利十兩ツム来ル

(13) 御宝藏(頭註)

(14) 祖堂毎月十三日一日宛施主(同)

(15) 祖師堂ノ(同)

(16) 小嶽山 安政三辰七月二日六十六化(朱字)

(17) 御真骨

金五拾兩文化十四丑四月 又金廿五兩

身延山諸堂記外（北沢）

- (18) 合七十五兩納〈頭註〉
御経料毎年先方ヨリ来ル
(19) 御供所ノ〈頭註〉
(20) 祖堂ノ〈同〉
(21) 祖堂前外常夜灯〈同〉
(22) 祖師堂前常夜灯〈同〉
(23) 「円妙院」を「円明院」と訂正。
円明院妙忠日高大姉
(24) 二天門前〈頭註〉
(25) 三門金灯籠常夜灯〈同〉
(26) 祖師宝前常夜灯〈同〉
(27) 御真骨前〈同〉
(28) 御宝蔵ノ〈同〉
(29) 祖堂ノ〈同〉
(30) 廿九口ノ千八百八十五兩〈頭註・朱字〉
(31) 御宝蔵常夜灯〈頭註〉
(32) 御宝蔵油料〈同〉
(33) 祖師堂ノ〈同〉
(34) 元金先方江預ケ利足毎年来ル
(35) 御真骨ノ〈頭註〉
(36) 同所〈同〉
(37) 本堂前金灯籠二基〈同〉
(38) 御真骨ノ〈同〉

- (39) 合而百十兩春米小林預ケ
(40) 御真骨中央ノ〈頭註〉

(128オ)

古仏堂三間半
前之堂文政十二己丑年九月六日方丈同時ニ焼失（一）
第五十八世日環師代再建立」

施主者 御本丸於屋満御女性」法号松寿院」

天保二 辛卯 年五月四日良辰ニ付再建斧始」同年十月

十三日古仏堂上棟之砌 日環判形」棟札有レ之

同裏書 時之普請奉行」堀場房太林院日建十二世太堂

院日棟」建之房太運院日勢三十三世潮運院日恵大工棟梁

当所主計致昆上町織衛玄明」中町図書宗員 木挽棟梁中町

惣右衛門」以上棟札」

天保二 辛卯 十月環師代下ノ段五 西向ニ再建立之有レ

之」処地形築地故東五 地形下ル故ニ嘉永五 壬子 四月」

薪師代上ノ段御宝蔵与 並ヘ南向ニ引レ之武州神奈川一中山

ノ手間費過ニ普請方妙音房門台房」円柳房 会所結世話

人葉山十之亟」

宝塔一基砂粧一部八卷

施主者奥院御袈裟搦京橋北搦中」

高祖五百五拾御遠忌御報恩
文政十三庚寅年七月

壽量擗ノ宝塔一基第三十六世潮師筆

寛保元年辛酉四月
天保四年癸巳七月再建 詔師代

花瓶一对 施主京橋北将(一)中

同造花一对 施主御花中永代隔年ニ立替

香炉 天保二卯年九月 願師代

神鏡一面 同台 天保第八丁酉七月大安日

打鳴シ并 台共 身延山久遠寺常什御宝殿前
文政十二年十月十日 日現納之

瓶子ニツ三方 共 嘉永二己酉七月 願師代

祖師御経全部 日新 判形 同机 共 嘉永二己酉七月
東都經王辨(一)中

蓮華形香炉 共 宗祖五百五十遠忌初
江戸小綱町伊勢屋吉右衛門

竜之巻花瓶一ツ 唐金 施主不知

鶴亀形燭台一ツ 同 施主不知

燭台一ツ 共 願主深川仲町松屋藤助

焼物宝塔一基 同大香炉一ツ

施主尾州名古屋陶本屋勘治郎 天保二辛卯年六月
尾州額戸加藤新七作

仏天蓋 施主 安政四丁巳年秋開帳之初 極師御代

六十九世琢師代家根更柿板葺成就文久三壬戌年三月下流

身延山諸堂記外(北沢)

〔註〕
(1) 一ノ四十八(朱字)

奥位牌堂六間

前之室(方丈同時ニ焼失(1))

第五十九世詔師代再建立

再建立施主当国教来石住河西六郎平

夫婦法号 円徳院麗山日嚴居士天保八丁酉五月十二日化

是則院妙精日進大姉文政十二己丑六月十八日去

五十九世詔師棟札云

天保三 壬辰 年十月吉辰上棟之砌納之

同藏也 増場房太林院運信坊太堂院座之房太運院 盛応坊潮松

院 大工 中町主計致昆上町織衛文明中町圖書宗員

釈尊座像厨子入 三十一世日脱開光

元(一)中谷仙台房常什 天保三年戊戌十月再建

須弥壇朱塗并 金具一式

六十二世心師御代時院代 慈謙院日義聖人天保十二丑九月廿四日化 丹情

過去帳 天保十三壬寅春正月改 六十一代日心判形

同台 施主江戸蔵前坂倉清兵衛

貫主ノ礼盤并 御経同机

身延山諸堂記外（北沢）

（135オ）

打鳴シ井台 嘉永二己酉七月 薪師代
施主江戸深川一桑樹（？）中

大香炉二ツ唐金 施主不知

花瓶一对 其論
施主京橋北條中

燭台一对同 施主神田池上取持源中

香炉一口同 施主卯年女佐外通名

合而五具足 嘉永二己酉七月 薪師代

造花一对 施主江戸御花拵中 永代開年ニ
立致ス

天保三壬辰十月 薪師代再興有之処築地ノ故ニ東ノ

方江下ル依之嘉永五壬子四月 薪師代古仏堂ノ引

跡江移シ少シ西ノ方江寄テ建之 武州神奈川中山ノ又之助
仕掛并手問ノ寄進ナリ古

仏堂同時ニ引立之右依并新
師ヨリ三枚統一ノ本尊造之

当山奥位牌堂家根土瓦葺更成就之砌 嘉永七甲寅年

二月吉辰六十六世日薪判形 瓦師伊沼村望月作兵衛已上棟

札

五十九代日詔師代再建ノ奥位牌堂嘉永七甲寅歲十一

月四日ノ大地震而地形下リ皆潰レニ相成將軍家

御代々ノ尊牌諸大名方御位牌当山代々ノ先師ノ御

位牌并仏具等不殘皆潰ニ相成 六十七世日楹師代

〔註〕

（一）一ノ四十七ハ朱字

（139オ）

（2）この一行欄外上部にあり。

一切経蔵三間 各棟六尺宛四方
前ノ経蔵者方丈同時ニ焼失（一）

第六十六世日薪師代再建立

一切経 實徳藏判也
筆筒八掉

同経蔵 同四方庇土瓦

傳大士普成普建ノ像 六十六世日薪開光

右一式ノ施主東都酒家惣連中

時嘉永四年 辛亥十月十三日 六十六世日薪判形 機札
有之 当山

一切経并経蔵再興成就之砌 同裏書

発願主 発起本願人

時院代妙信院日法聖人 江戸駒込高崎屋長右衛門牛長
領

本行房是感院日行聖人 同 千住伊勢屋甚兵衛

本願房太彦院日等聖人 大工棟梁

大進房英中院日孔聖人 当所中町池上伊織宗治

頭正院日光聖人 左
下山村遠藤常八郎

以上棟札裏書ノ写シ

薪師代再建有之経蔵嘉永七甲寅十一月四日ノ大地

震而壁不殘落故ニ酒家連五頼之安政三年ノ冬

（139ウ）

（140オ）

四方ノ庇ヲ掛壁塗更修三宮之 楹師代」

楹師棟札 于時安政五^{戊午}年九月吉祥辰」当山一切
経蔵者新師代再建未満内嘉永七^{甲寅}年十一月四日
之大地震而悉破壊依之経蔵壁塗」替四方庇附行道椽
廊下新造成就之砌」

裏書。

院代智禅院日頭

普請会所
世話人池上重兵衛

杣木挽頭

同 妙音院日声

同 佐野伊兵衛

池上徳之助」

執事要中院日頭

同 葉山十之亟

同 佐野友蔵」

当番是感院日行

同 望月善左衛門

同 遠藤喜瀬蔵」

当番智順院日逗

大工棟梁
世話人池上伊織宗治

左官
下山村

同 妙俊院日寿

同 武田頼母宗武

遠藤常八郎」

同 妙定院日翁

同 池上主税玄吉

同八日清
市堀村七」

同 鏡閣院日賀

家根屋
普請小倉久右衛門

石工
当町

奉行智寂房日運

同 佐野恒兵衛

望月幸八」

同 戒善房日陳

瓦師

同夜子
沢村

同 麓房日修

伊沼村望月平八

渡辺新太郎」

施主東都酒家中

発起本願主

高崎屋長右衛門
伊勢屋甚兵衛

実師代上棟之札」

身延山諸堂記外

(北沢)

(140ウ)

(141オ)

身延山一切経蔵皆成就上棟之節維時安政七」年^{庚申}
四月二日吉辰蔵経共 一式之施主東都酒」家惣連中発
起人高崎屋長右衛門伊勢屋甚兵衛」

同裏書。

経蔵再建之始

普請奉行

瓦師
伊沼村

日薪導師

南延房日楨

望月平八」

日楹導師

武井房日観

杣木挽頭

院代永寿院日等

法雲房日徳

池上徳之助」

同 戒修院日確

南向坊日周

佐野友蔵」

執事全中院日慧

常住坊日甚

遠藤喜瀬蔵」

是感院日行

普請会所
世話人

左官
下山村

智順院日逗

池上重兵衛

遠藤常八郎」

妙俊院日寿

佐野伊兵衛

同八日清
市堀村

智妙院日弘

葉山十之亟

清 七」

智近院日孝

望月善左衛門

石工
当町

妙詮院日静

大工棟梁

望月幸八」

智運院日頭

池上伊織宗治

同夜子
沢村

妙定院日翁

武田頼母宗武

渡辺新太郎」

鏡閣院日賀

池上主税玄吉」

厚澍院日曼

家根屋

以上裏書」

(141ウ)

(142オ)

身延山諸堂記外（北沢）

智俊院日逢 小倉久右衛門

智観院日逢 佐野恒兵衛

一切経并経蔵再建立ニ付嘉永二己酉年ロリ東都西家迎
中助成之集リ金高

金千五百七拾五兩ト壹貫百七拾貳文也

万延元年庚申四月高長伊勢甚登山ニ而目錄帳上ル

外ニ施入志靈法号帳一冊上ル

法号 文久二壬戌三月廿三日 文久二壬戌年三月廿三日死去
高祿院久定日勤居士 高祿屋長右衛門半長法号也

〔註〕

（1）一ノ卅七八 一ノ六十七へ朱字

（2）慶応元乙丑十二月廿九日六十九歳

（3）五代目 文久二壬戌三月廿三日
法号高祿院久定日勤居士

（4）明治二己巳四月朔日五十三歳

（5）安政三丙辰五月廿一日五十一歳

（6）嘉永四辛亥四月三十日三十一歳

（7）明治四辛亥七月十七日化

（8）この一行、欄外上部にあり。

（9）同右。

小方丈十二間

此ノ殿云古法殿間又云上ノ座トモ水鳴楼共
前ノ小方丈厨司号同時ニ焼失（一）

第六十世日潤師代再建立

（144ウ）（143ウ）

施主者当国巨摩郡春米邑小林小太郎喜五⁽²⁾

天保六乙未年ノ冬再建企メ同七年丙申春成⁽²⁾就ス此ノ年西条少将領學卿
ノ御参詣ニ付俄ニ再ニ建之⁽²⁾施主者ニ喜五、小林氏ノ檀那寺智観院日逢寺
江永代⁽²⁾耕紋白ノ襷袢令ニ免許⁽²⁾早大村領御所ノ御免状モ有之故也

第六十六世日薪師代家根更柿板葺也⁽²⁾弘化五年戊申

藏院代妙信院日法聖人

第六十世潤師棟札 当山水鳴楼再建立⁽²⁾令成就之者

也天保七年丙申春二月吉辰

裏書

時院代相寿院日誠聖人 大工棟梁

時執事潮解院日明聖人 当町

志摩野太量院日考聖人 池上圖書宗員

菅藤寺行僧太量院日棟 池上舍人玄宣

武井 牙音中院日願 棟札長一尺六寸三分
感 応 坊潮松院日愈 棟札巾九寸一分

水鳴楼一字再建立之施主春米村小林小太郎⁽²⁾

水鳴楼土瓦新規葺更砌安泰守護本尊謹築毫之⁽²⁾維時

明治七⁽²⁾甲戌四月八日奉圖之施入面々祈二世安樂者

也⁽²⁾大教正七⁽²⁾延日健利形

同裏書 当山水鳴楼家根元ト⁽²⁾柿板葺也今般新規土

瓦葺改成就之砌納之」

時院代執事東京青山體遵院日扶聖人 時一老執事

志摩房妙俊院日壽聖人」 普請方玉泉房俊光院日理

東之房頭光院日瑞」 元ト水鳴樓一字再建立ノ主今

般土瓦葺金百円」寄附ノ主春米村小林八右衛門喜

社 大工棟梁」池上伊織宗治同子息龜之丞 柿板屋

根師」池上平兵衛 土瓦屋根師伊沼村望月作兵衛房

富」 杣木挽望月忠兵衛」

(145才)

〔註〕

(1) 一ノ卅五ハ朱字

(2) 文久三癸亥十一月十六日六十八歳
法号尊德院了智日恵僧土

(3) (棟札) 檜板巾一尺五寸九分ハ頭註

大方丈十五間

前ノ大方丈者厨子ト同時ニ焼失 (1) 」

第五十八世日環師代再建立」 施主松和田谷法類中

棟札巾九寸六分 日環判形」大方丈上棟之砌天保二竜集

辛卯年十月十三日」

裏書

身延山諸堂記外 (北沢)

(上・中段)

時普請奉行

時普請方

一之額太研院日梵聖人

燭場坊太林院日建

妙了等本寿院日了聖人

應賢坊太堂院日棟

龍 房潮諦院日解聖人

重之房太運院日勢

大工棟梁」

下山宿」

佐野喜内正標」

石川久左衛門源宅胤

以上
裏書

第六十世日潤師代大方丈造作ス唐門玄関等」建レ之

天保七 丙申年春成就」

第六十六世日新師代家根土瓦葺更成就」之砌嘉永三

庚戌歳八月吉日棟札日新判形 裏書ハ跡江記ス」

大方丈惣座鋪ノ画者」

東都深川黒船細荷之別当鈴木中務改名主殿」画名宗巨齊名鑑観素影藤原因

久慈」寄進ニ而西レ之奉納嘉永二己酉年九月江戸於深川淨心寺」奥院祖師

開帳之砌成就六十六世日新師代免人本行房」是感院日行道人天台大師ノ

像同時西寄進之此ノ表具ニ施主ハ高崎屋長右衛門伊勢屋甚兵衛」

西上段同二間三間大広間東上段同二間宗巨齊筆」

東三間竹ノ画者内藤彰川藤原昌言ノ筆」

同三間竜ノ画者金剛右近藤原氏成ノ筆」

入側日ノ出井象ノ画者星野彰心藤原繁是ノ筆」

右惣座敷張附并手引等安政二年乙卯九月」日楹師為ニ

身延山諸堂記外（北沢）

自普請「營」之（經師甲府町住人）

宗巨齊（神戶） 徳元（右ノ丹精有之聞當山立願起立シテ） 永代月牌卜
神道ナリ スル 同向料金三兩餘木主計納之

同人ノ妻 信彰院妙邑女（善提寺當山末谷中長遊寺）

大方丈葺更薪師棟札裏書云

当先殿者為賢師棟札施主羽柴武藏守一路之「室殿下
秀吉公姉関白秀次公岐阜宰相秀勝公」母堂瑞竜院殿
日秀尊儀也秀勝公天正廿年（文禄 壬辰）九月九日於高
麗国他界法号「光徳院殿前參議清嚴大居士為追薦文
祿」二（癸巳）十二月建立之于爰自然天災文政十二年

（148オ）

丑稔九月焼失時環師松徒仍而其類末抽寸「志再建之
今此大方丈也乍然家根柿板葺」故近年及大破今嘉永
二（戊酉）歲普請世話「方并奉行雖評葺更更惜切立木且
計永」持且惟時輕營以土瓦欲葺替奇哉于時參詣「之
信士伊沼村平八幸初業瓦於之望輕引請」猶評決而任
信力之意価宝黄式百兩相渡「之其余家根地之外大工
作料瓦駄賃等方」金百兩惣計以三百兩手普請葺更成
就「爰畢」

于時嘉永三（庚戌）年八月吉日 棟札（巾巻尺四分）
長尺五寸六分

世話方

奉行僧（龍 坊鑑） 乘院日達

時院 代妙信院日法聖人

妙音坊了乘院日恵

（149オ）

時番頭太彦院日等聖人
大時當番英中院日孔聖人

円台坊妙定院日翁
隅之坊妙亭院日受
北之坊是教院日良

大工棟梁（中町池上伊織宗治） 瓦師伊沼村望月平八（以上）

第六十世潤師棟札 天保七歲（丙申）春二月吉日「当山
大方丈者日環師代再建今般造作唐門」玄関等新建立
令成就之

同裏書 時院代相寿院日誠聖人

大時執事潮解院日明聖人

志摩房太量院日考聖人

奉行僧太堂院日棟

武井房音中院日願 棟札（長二尺二寸二分）

感応坊潮松院日迦

大工棟梁（下山宿佐） 野喜内正標

玄関棟梁（當所新町清） 権藏 矩懷（以上）

〔註〕

（1）一ノ卅六ハ朱字

（2）この一行欄外上部にあり。

(3) 後ニ(日)光ト改

会合所^{二十間}十四間半

前ノ会合所ハ厨司同時ニ焼失(1)

過去帳上中下句三冊同合黒塗并桁橋ノ紋附

年曆不レ知相伝フ遠師代ノ頃^{アノトキ}

貫主ノ礼盤

同御経^{毘摩開結}同机天保六年乙未十一月

施主^{武州江戸愛宕下}御堂内蔵^{此家臣}高橋仁左衛門重晴

同鑒并台 文政九丙戌二月五日

施主江戸麴町^{アノトキ}搦中

真鍮花瓶一对天明三癸卯十一月

施主当国荆沢邑市川安之^{アノトキ}亟

同造花一对 施主江戸御花^{アノトキ}搦中^{永代隔年}立役

金灯籠一基^{真鍮小形}天保二辛卯九月

施主江戸連名灯籠有^{アノトキ}レ之

大打鳴シ并台^{享保}丁酉年六月辰辰

小打鳴シ并台 身延山久遠寺常住^{アノトキ}

燭台一对ビヤタダン^{アノトキ}施主開運要品搦中

常香盤

身延山諸堂記外(北沢)

出仕ノ大鼓^{送渡シ}嘉永三年庚戌九月納之^{新師代}

施主江戸浅草新町御大鼓搦中^{アノトキ}十四人有之^{迎名有之}

〔註〕

(1) 一ノ卅一

(2) 年数を欠く。二年の事。

奥書院并学問所休息所^{八十間}

前ノ書院ハ厨司同時ニ焼失(1)

第六十七世日楹師代安政三^{丙辰}年秋再建^{合三三所}

一棟ニ造ル^{安政六己未年春造作成就}

楹師棟札 桎^{板巾一尺二寸二分}板^{長一尺九寸四分}当山奥書院再^{建立八十間}

成就安泰守護之棟札謹染毫之^{アノトキ}維時安政三年^{丙辰}十

二月吉辰上棟納之

同裏書 時院代妙音院日声 発願主并執事 智順院

日逗 執事并勸進智文院日遊同 要中院日顯是感院

日行妙俊院日寿 智近院日孝智運院日顯妙定院日

翁 鏡闍院日賀 普請方要運院日順智逗院 日陳頭

妙院日修 世話人^{尾州}新田久満野屋正兵^{衛西郡小林小}

太郎喜五^當野伊兵衛 望月善左衛門 大工棟梁池

上伊織宗治同 小倉源八常延 家根師小倉久右衛門

身延山諸堂記外（北沢）

（161才）

池上「平兵衛佐野恒兵衛 杣木挽頭池上徳之助」遠
藤喜瀬蔵以上表書
上段床柱唐木イス木也 施主春米村小林小太郎
西北両縁側板鋪張ノ施主 羽州山形佐々木甚蔵母
金^{（イ）} 兩慶応三丁卯年祥師代
天井二間施主 一
柿板葺屋根更 明治四 辛未 年七十一世禪師代

〔註〕

（1） 一ノ百五十四（朱字）

（164才）

厨子^{（イ）}十二間 香積也又云庫厨^{（ハ）}又云庫裏^{（ト）}成云^{（ハ）}
十五間 庫裏^{（ハ）}世俗云三台所
前ノ厨司ハ文政十二己丑年九月六日夜焼失（1）

仮厨司再建^{十六間} 嘉永ノ地震災故ニ明治四 辛未年四間縮メテ
九間半 二間底ヲカケル 禪師代

文政十二 己丑 年十二月吉辰再建成就

五十八世環師棟札有之 杉板巾^{一尺四寸五分}
長^{四尺七寸}

裏書^{（イ）} 普禪 奉行麗 房潮諦院日解上人

同 岸之房本寿院日光

同 智寂房潮運院日恵

（下段）

（164ウ）

同 端場房太林院日建
普禪 奉行蓮信房太堂院日棟
同 光精房善察日永
同^{（イ）} 常栄房願明院日清
禪方志摩房太栢院日玄以上
大工棟梁池上主軒致尾
池上幾衛文明

大黒天ノ木像

文政十三年 庚寅 年再彫刻 五十八世環師開光

地震災^{嘉永七年正月四日破損地形東ノ方三尺下ル}
安政二乙卯年五月修復成就 禪師代

惣修復 明治四年 辛未 五月成就七十一世禪師代時

院代智順院日逗

〔註〕

（1） 一ノ卅四（朱字）

（2） 「願明院」の「願」を是ト改ル

大門^{東谷}
二間半

裏門家根檜皮葺替^{六十七世}日楹師棟札云^{（イ）}

（上段）

安政三年丙辰天 萬門家根替造作手入音讀成就
二月廿八日納之

同真書

音讀奉行

音讀方

本行房是感院日行聖人
南之房智願院日還聖人
戒啓房智願院日還

大工棟梁
池上伊織宗治
池上頼母宗武
池上芳吉玄吉

智啓房要願院日還
戒啓房智願院日還
小倉久右衛門
佐野恒兵衛
以上
『』

〔註〕

(1) この一行欄外上部にあり。

新土蔵三間半

第六十七世日極師代新建立^{安政二年}
乙卯十月日

新土蔵往古ヨリ無し之処近年ニ及諸配縁多分ニ相成故ニ
南谷積尊房ノ土蔵ヲ引テ建立也

永守稻荷社一尺三寸五分同雨屋^{九尺}

初勘師ノ時代不レ詳相ヒ伝フ四十四世英師^{四十七世登師ノ頃ト云フ三十三世字師ノ諸堂記等ニモ}無し之ノ已後頗不詳

五十八世環師代焼失ノ後ニ社鳥居等再建板本尊ノ御
身體環師ノ筆有之及ニ破壊故極師代再建 極師
御免起院代当番近習中其外助誠成就ス 極師板本
尊有之 大工棟梁池上伊織宗治 永守稻荷大明
神社再建成就御遷座維時安政万年第三^{丙辰}二月初
午日山内安泰施主銘々所願満足而已^{以上}
模札

身延山諸堂記外(北沢)

(175才)

五重宝塔三間四方
高拾二丈三尺但シ九輪共二千間半ト成ル

前ノ五重塔者文政十二^一五年九月六日^二焼失
之跡飛火ニテ頗焼失^三

第六十六世日薪師代再建企^レ之

施主当国中大題目擲中

嘉永六^{癸丑}年四月八日再建新初同年六月廿六日地

形初之御安泰成就板本尊有之 六十六世日薪^形

九輪并 金物 鐘物 師殿 駿州江尻宿山田六郎左衛門藤原德秀

同 元治元年甲子七月成就
初重 元治元年甲子七月成就
南集辨^二ニテ登之

六十六世日薪師棟札 檜^{一尺三寸}

当山五重宝塔再建立施主当国中大題目擲中皇和嘉

永六年^{癸丑}四月八日新初同 六月廿六日地形鑰建之

砌

同裏書

院 代妙信院日法

免起大本願主 田島村望月五右衛門光明

執 事^{妙仙房}太彦院日等 春米村小林小太良喜五

普請方^{妙尊房}了乘院日惠 同子息八右衛門喜社^二

同 門台房妙定院日翁 大工棟梁 池上伊織宗治

同 蓋啓房頭智院日勢 下 町池上頼母宗武

以上裏書

(175ウ)

(173)

(174才)

身延山諸堂記外（北沢）

六十七世日楹師棟札 檼長二尺九寸 檼市二尺二寸五分

当山五重宝塔再建立施主者当国中大題目「⁽²⁾擗⁽⁴⁾中心信増進一切無障礙之攸安政三^(丙辰)年」四月八日立柱同五^(戊午)年十二月三重目迄組「建成就之刻納之同裏書」

院 代智禪院日願 ⁽³⁾免起 田島村望月五右衛門光朋

同 妙音院日声 春米村小林小太郎喜五⁽¹⁾

當^(普請執事)香要中院日願 会所結世居人池上重兵衛守一

(176ウ)

是感院日行 佐野伊兵衛

智順院日逗 望月善左衛門

妙俊院日寿 大工棟桑池上伊織宗治

妙定院日翁 同 頼母宗武

同 万吉玄吉

智^(普請方)要順院日運 柚木 挽池上德之助政純

戒^(普請方)智逗院日陳 佐野友藏

院 房⁽⁵⁾顯嶺院日修 石 遠藤喜瀬藏

以上裏書 銀治 工權現堂文左衛門貞友

(177オ)

六十八世日実師棟札 檼板長三尺七寸五分

(177ウ)

当山五重宝塔再建立成就之節万延元年^(庚申)九月吉辰奉圖之^(同年十一月十日)上^(御願)再建造立之大施主当国中大題目擗⁽²⁾一結信力⁽⁶⁾増進現当三世大願満足同裏書

当山五重塔再建之始

六十六世日新尊師 ^(嘉永六年四月八日新初)同年六月二十六日地形廻張

六十七世日楹尊師 ^(安政三丙辰四月八日立柱)同年五月十二日三重目迄成就

一老 知恩房 四世 太善院日大 普請奉行

院代 江戶淺野玉泉寺 戒修院日確 ^(當番役) 同台房二十七世 妙定院日翁

三老 至 官 房 智文院日遊 普請方

四老 通 閑 房 音中院日願 南房二十七世 妙賢院日禎

五老 山本房三十二世 要中院日願 武井房二十五世 鏡音院日觀

中頭 竹之房三十一世 全中院日慈 法賢房三十二世 遠寿院日德

當番 本行房三十七世 是感院日行 戒善房三十二世 詮寿院日周

南之房三十三世 智順院日逗 常 住 房 智雄院日甚

志摩房二十五世 妙俊院日寿 免起大本願人

箕林房三十一世 智妙院日弘 田島村望月五右衛門光朋

清水房三十一世 智近院日孝 春米村小林小太郎喜五

林藏房三十一世 妙詮院日靜 同子息八右衛門喜社^(?)

(178ウ)

館之房三十一世智運院日顯」

松井房三十一世鏡聞院日賀」

臨身 役厚澍院日曼」

惠喜房 四世智親院日透」

國沢房四十二世智鮮院日鑑」

金所結世話人(8) 池上重兵衛守一

阿 佐野伊兵衛

狐 望月善左衛門

同 望月善左衛門

上 池上内匠玄諦

中 町古谷善右衛門

下 町佐野豊之丞

小田舟原村志村太兵衛

大工棟梁

中 町池上伊織宗治

下 町池上頼母宗武

上 町池上主税文吉

片隅 町小倉源八常延

大工肝煎 佐野元兵衛 望月常七

身延山諸堂記外(北沢)

(179ウ)

樋口勘右衛門 遠藤嘉七

庄村喜三郎 池上友兵衛

佐野銀七 遠藤松助

笠井伊左衛門 千頭和友右衛門

逆修知本院淨惠日教清信士」

田島村五右衛門光朋ノ法号也」

善徳院了智日恵信士

宝城院延喜日祉信士

〔註〕

(1) 一ノ六十二(朱字)

(2) 「祉」を「社」と訂正。

(3) 安政三丙辰十二月廿三日化

(4) 慶応四戊辰五月十二日化

(5) 「(顯顯院)の「顯」を」妙ト改

(6) 「信心」を「信力」と訂正。

(7) 註(2)に同じ。

(8) 明治五壬申十月十八日六十歳

(9) 明治九丙子六月二日七十四歳

(10) 明治四辛未四月廿六日八十四歳

(11) 明治二己巳八月十一日五十七歳

柿島太吉」

望月宇兵衛」

金所下役志村七五郎」

以上裏書」

(181才)

身延山諸堂記外（北沢）

- (12) 明治乙亥九月廿三日六十七歳
治月院宗良日如僧士
- (13) 明治壬申十月廿六日
本理院法性日是僧士
- (14) 明治廿三年庚寅七月十二日七十七歳
名体院宗用日教僧士
- (15) 万延元年庚申閏三月廿七日七十二歳
緇行院要道日得僧士
- (16) 明治九丙子年五月四日八十四歳
深入院法悟日明僧士
- (17) 明治十丁卯八月一日六十二歳
信明院常延日巧僧士
- (18) 明治壬午壬申五月二日六十八歳
臨令法永日久僧士
- (19) 実師ヨリ二枚統紺紙金泥本尊造ス

高祖御廟八角堂三間一尺四

前ノ八角堂ハ文政四年辛巳八月九日夜九ツ時焼失

第五十五世日暹師代再建立

文政五^{壬午}十月十三日成就
施主六堂内金和板二有少
 大工棟梁池上主肝致昆池上段衛玄明

八角宝龜惣修復塗替一

明治十五年^{壬午}八月十三日落成妙福坊内野日蓮^一 癸

起淺艸玉泉寺廿五世前住職鵜川日行聖人一 施主

東京有志連中
明治十三年大堂ノ宮邸
世話人十八名ノ連中ナリ

大前机 朱盜 明治十七年甲申十月 内野日逕

八角堂元ト楡皮茸ナリ
今回初テ 土瓦新規葺 明治廿年丁亥七月一

落成七十五世修師代妙福坊海徳日運丹精也」施主者

(183ウ)

諸所信徒中』

帝釈堂 二間半
三間半 西谷在二本行房二

尊像從^レ往古^ニ在^ニ興院^ニ高祖開光大學三郎授与之盤像ナリ
維時安政五年^ニ當山六十七世楡師代本行所江安座

堂新造立
当六十八世山実師棟札有之

身延山西谷帝釈堂造建成就之師維時万延元庚申年九月庚申日本行房中興三十七世現住是感院日行聖人」助成面々現安後啓

郎能本江授一与之被為在靈像也有故奥院安座去ル安政五年秋一日檀師代西谷本行房者大学三郎本行院日学之旧跡故一西谷本行房江奉移老幻婦女之聲令

易參臨今故市」新堂造建成就安泰守護之柳札園築臺之

御宮殿施主者当狐町麻屋望月普左衛門

五具足真鍮ナリ 施主江戸

仙天蓋御宮殿ノ内 施主江戸

唐本一切經 明藏

本藏二百一十一函之外統藏九十函又統藏一三十八函目

錄一函合三百四十函乃是唐本藏也

飯高岸ノ蔵經ハ本蔵二百一函ナリ黄檗蔵モ亦二百一函ナリ
何レモ延山蔵ヨリ八百二十九函少ナシト知ルヘシ

儲テ此ノ度納ノ蔵經ハ本蔵二百十二函ニテ一千四

百五十四冊ナリ」続蔵九十一函ニテ六百五十三冊

ナリ又統藏四十七函ニテ」四百十九冊ナリ合シテ

三百四十九枚 延山旧本より大函をシ
二千五百廿六冊但シ共冊ノ故ナリ

(185ウ)

傳大土普成普建ノ像字師開光

男子入釈迦尊ノ像厨司ノ像

右五鉢御衣更 施主戸深川住人當下山座 趙板替代平實金一枚ノ奉納御衣更御縁廻七御縁連送等致之 京都仏工電班安政四丁巳七月吉辰

安政四丁巳 歲八月良辰武州江戸谷中領玄寺江当山亭

師 納之唐本一切經今般奉納領玄寺現在良雅日感代

良雅日感ハ胸込良元寺洞照院日均聖人弟子也師弟共ニ相ヒ願シテ当山江納之右之依ノ功領玄寺永代其法類ニテ相統之旨免意道之

古仏堂ノ祖師江戸深川於淨心寺開帳ノ砌 六十七世日

極師代

〔註〕

(1) 建武四年 丑五月八日生 大建元年己丑四月二十四日七十三歳入滅

御首題南無當来解脱東陽善慈博太士

賜紫永樂衣初祖 身延三十三世 日亭判形

〔頭註〕

辰師堂二間四方御拜附 東谷在妙仙房

棟札 明和三年戌年十一月吉拜日 賜紫身延山四十三世 日見判形

師範日辰聖人影像奉安位之道場也 授手之原主尊要日證者也

東谷樹下庵常在本院也 同裏書

身延山諸堂記外(北沢)

(187ウ)

東谷樹下庵境内者東者上之根根近西者大道迄南北者 深溪也古孝了雲房清閑房有此處 中古武井房此ノ 爲江引去ル壬午ノ九月旧地ニ鳩ル故ニ七面山五十五代之別ノ 當壽遠院日長初而一字建立シ其ノ名ヲ号 樹下庵 則当山四十二代之貢主日辰上人開基也明和三丙戌 十月十八日辰尊者御影堂建立之奉三寶高祖ノ御影殿御像安置之者也

大工棟梁當上町 同 庵匠屋 孫右衛門 木挽上新町 僧王佐五兵衛 同 同苗喜太郎 屋沢 孫兵衛 垣月清七郎

同片殿 同德平 手伝上新町 同 藤右衛門 孫之丞 以上棟札有之

近藤嘉兵衛 善右衛門

板本尊 東谷樹下庵常什 四十二代日辰判形

辰師 一枚本尊 宝曆八戊寅歲三月日身延山東谷片殿樹下庵常什本尊也 授手于 壽遠院日長聖人之者也

二枚統本尊 寶曆十二年十月吉日身延山東谷片殿 沢武井房引跡境内不之樹下庵常 四十二世日辰判形 什本尊也

本尊 當山東谷塔中樹下庵就彼殿 孝恭院殿尊聖尊令永代扶持方科寄附 依其功助勝故妙仙坊造立新者不如修古 寛政元年第八丙辰極月五日授手之山本房廿四世 妙法寺二世大翁院日現聖人 賜紫身延 四十九世 日地判形

本尊 吾山東谷片殿沢妙仙坊封内者故日辰之所 附身於樹下庵也以故今復奉而顯于妙仙 附因其証授手之妙仙房三世大翁院日現聖人者也 維時寛政十二年庚申十一月吉辰 五十一世 日全判形

安政八年己亥二月廿四日 御歳十八歳

孝恭院殿贈正二位内大臣尊儀

說明院殿ノ御子西之丸從二位大納言家基公也將取曆代ニ加ル

天明二年壬寅年七月三日

妙仙院殿理性智榮日忠大禅尼

孝恭院殿御乳人 初崎中野竹右衛門藤原清房ノ女

身延山諸堂記外（北沢）

（188ウ）

真如閣ノ額者四十五世庇師ノ筆也元ト（一）秀悦坊ノ額也此ノ堂五移之
辰師尊像丈 紫御衣葵御紋附袈裟七条御珠數御帶御召白ムク羽二重
御厨子木爪形ニヒ錠附 大鼓同台 御経八巻經 同机 斗
帳錦 朱塗 常香盤施主堀土村 三ツ具足唐金ナリ 前机
打鳴シ同台布團 簾二流

〔註〕

（1） 四十二世耐慈院日辰上人 字修海

明和二乙酉十月十八日八十歳遷化（頭註）

（2） この一行、欄外上部にあり。

（189オ）

興師堂表口二間半奥行三間 椽四方三尺五寸宛茅葺御拜附 醍醐谷有リ林蔵房
棟札 嘉永六癸丑年九月七日再建立成就之棟 札六十
六世日新判形 常在院二十九世現住 智通院日靜聖入

再建施主当所下町惣若者中 大工棟梁池上頼母宗

武 以上棟札

本理院日持代田代祖堂再建ニ付古堂興師堂雖運
朽故不用須弥左右柱ニ本耳用之

尊像作不知御丈九寸緋紋白袈裟紫衣珠數

御経卷經八巻 同机 斗帳赤地錦 厨子木爪形丈四尺 此ノ厨子 智通院日靜代 元ト影向

（189ウ）

石七面社ノ厨子（一）本阿闍梨江移ス 前机 常香盤 釣金灯笼
大鼓同台

〔註〕

（1） 六老僧伯耆阿闍梨日興上人

正慶元年 壬申二月七日八十八歳化（頭註）

（3） 「本理院」より「用之」は欄外上部にあり。

（190オ）

朝師堂四間 東谷在覺林房

前ノ堂者延享四丁卯七月七日下之坊ヨリ出火之節類焼

明和三丙戌年十二月再建立 善翁院日養代

朝師御宮殿安永七戊戌年九月日養代 施主尾州住関口円明院妙忠日高大師

同前机安永七戊戌九月日養代 施主尾州住低屋伝兵衛

朝師堂額者大光山主筆 發起主大坂宝樹寺五世日理 明和五戊子年五月 大坂二十九人

〔註〕

（1） 眼病寺藏加賀阿闍梨行学院日朝上人 字鏡澄

明応九年 庚申六月廿五日七十九歳化（頭註）

妙見宮二間半 中谷在松井房

尊像ハ北辰也伝教大師御作木爪厨子入

(193才)

尊賀堂二間半
西谷在常住房」
日廷上人影堂也尊賀院伏見宮邦親王御子京妙覺寺」廿五世貞享元年甲子年九月九日七十二歳當山日迎上人ノ弟子一三四建立之郎昔請舉行勅ト云フ西谷常住房ニ御住居」

(194才)

二十三夜堂二間四方ヤネ櫛板フキ
後前斗一尺五寸 片障沢山本房ニアリ」
尊像」
厨子」

(195才)

松尾大明神ノ社二間四方ナリ
後二尺七寸短ニシ三方茅葺屋根御拝所 西谷在法寶房」
松尾大明神勸請寛政十 戊午 九月吉祥日当山五十世」
日沾師板本尊有之 法寶房教秀院日如代」

(195ウ)

永代毎年九月二十三日祭礼三十番神日即ナルカ十三日故ニ
祭礼日トスル歟」
松尾神社再建立廿三世要善院日光代文化五年」 戊辰 十
二月吉祥当山五十三世奏師棟札有之
同」裏書 大工棟梁当町 海沼友右衛門直政以上棟札」
御尊像 御殿不知 深沢良右衛門智徳以上棟札」
御尊像 御殿不知 斗帳 紺地 錦」 御宮殿 木爪厨子也」
前机 白ラ木 施主信州酒造関兵衛」
鳥居」
御経料甲金三両 施主当所松尾搦中」
御堂茅屋根葺更 施主上町河内屋重兵衛不知」

身延山諸堂記外(北沢)

鰯口一ツ 施主月夢 』

(197才)

寿量院社三間 別当円台房」
社再建宝曆四 甲戌 歳寿量院文殊遷宮」陀羅尼品一千
余卷成弁処建立之主竹之房」日教代木札有之」
社三間再建 当山五十五世日逞 判形 棟札有之」
文政八 乙酉 年」六月如意珠日寿量院文殊稻荷大明
神」遷宮

(197ウ)

ウラ母 当所中町世話人 曾左衛門 繁右衛門 七」別当円台坊廿五
世憲誠院日遇代以上」
六十六世日薪判形板本尊有之 土瓦葺更」成就嘉永五
手 九月日土瓦施主伊沼村」望月平八時別当妙定院
日翁判形裏書有之」

(198才)

明治九年 丙子 九月十七日ノ大水 通本橋下 社皆潰ナリ」
更地再建 九尺 寿量稻荷大神 延 七十四世 日鑑判形 依水災」堂
字破損再建落成謹書之
明治九年」十二月七日上棟遷宮祈山内井町内安全」
有志面々二世安樂者也 檜板 長一尺二寸九分 厚四分五厘」
ウラ母 寿量文殊社 九尺再建成就上棟之砌」明治九 丙子 十
二月七日吉辰」

身延山諸堂記外（北沢）

（198ウ）

梵起世話方 東京仙府院邊院里見日扶聖人」同^{三十四世}林房妙俊
普助神事 十二世體邊院里見日扶聖人」同^{三十四世}林房妙俊
院鈴木日壽聖人」時別當^{三十八世}台^{三十四世}教明院要惠松木日
順」世話人大門村河住宗四郎^{中町池上与兵衛}上町遠
藤佐左衛門^{中町一ノ宮与右衛門上町田中勘三郎}棟大
池上伊織宗治^{同小倉源八常延}楠木挽」遠藤真三郎^同
青柳惣八^{地形并}建方池上作重郎」同佐野源助以上裏書
再建入費金七拾四円也^{内金十五円寺中}金三十一円町中」金二十八円本院依丹
情落成也」
宮殿施主^{東都新宿若松屋}嘉永五壬子年四月 妙定院日猶代」

〔註〕

- （1）「社三間再建」は欄外上部にあり。
（2）「更地再建二間」は欄外上部にあり。

（199オ）

地神宮^{二間半}向拝附 南谷在^{常樂坊}」
常樂坊^{三間}茅共ヤネ
十六世是明院日清^{文化九年迄}在位廿七年ノ」間地神堂
庫裏廊下其ノ外不残再建立有之」
地神ノ額ハ五十五世遍師ノ筆」

（200オ）

清正堂^{間口二間半}奥行三 間 遍靜院初而建立
在^{遷泉坊}」
遷泉坊初祖遍靜院日泉^{上人}治正公大神位初而安置

（200ウ）

其ノ後当山」六十六世新師代大尊像感沢信者ヨリ納之新師開光初ニハ円師
堂ニ安置一次ニ此ノ堂江寧遷座也」
清正堂宝蔵再建立未レ満之内嘉永七 甲寅 年十一月」大
地震而皆潰依^{ツレ}之又再建企^レ之」

清正堂^{間口三間半}奥行四間半 棟各 押所附」

遷泉坊六世要寿院運性日栄代^{文久四年甲子正月官成成就}六十九世遷師御代

右盛文久四年甲子二月廿日山火事飛火ニ而類焼スルヤ」
遷泉坊林行坊延壽坊妙正堂新宿在家四軒同時ニ焼失」

清正堂^{四間}元治元年甲子二月廿三日再建企之新初」
明治六癸酉二月廿日成就上棟并遷座

健師棟札 樞板巾二尺二寸八分 七十二代 大教正日健御判」

（1）当山東谷清正堂四間四方再建立成就明治六癸酉二月廿日上棟并
遷座之稱奉因之安泰守護之棟札也輸入之面、現當三世大願消尾也」

（2）当山清正堂者去元治元年甲子年二月廿三日地形并新初經二十年」至明治六年癸
酉二月廿日成就上棟并遷座令周御畢」遷泉坊第六世要壽院日永代再建立本
願入世話人中一依丹殿者也

発起本願入 大工棟梁 大工世話役」
当所中町池上伊織宗治 下山村」

波木井近藤治右衛門 下山村石川政五郎為豊 牛奥喜兵衛」
塩沢望月吉五郎茂富 下山村松木左内定完 同清子村」

門野村佐野太郎左衛門 波木井佐野勝三郎宅衛 若尾時兵衛」
波木井村依田新吉 早川村桂原源四郎為友 楠木挽棟梁」

以上並同 新宿望月菊之疏」

清正堂土瓦成就棟札七十二世健師判形明治六癸酉十二月廿日官成
願世話人中一依丹殿者也遷泉坊六世要壽院日永授与之丹楨面、進名有之」瓦
師伊酒村望月作兵衛左官八日市場若尾治七以上並書有之」

〔註〕

（1）ヲモテ「頭註」

(2) ウラへ頭註

(201オ)

開会関ノ額修復当山四十七代
日登尊師御代 時院代 奉行松林房 大工方下町助
十之五時安永万年
丑龍集四月日以上裏也 智願院 法須房 登師狐町兼山

惣門檜皮葺更梁札賜紫身延
四十九世 日地判形 院代 潮文院日邊 普請方

門台房日庭 大工坂上宮内 家根屋兩右衛門 寛政第六

甲寅 天秋七月大吉祥日 以上棟札

惣門檜皮家根更棟札賜紫身延
六十七代 勅許上人日楹判形

于時安政五戊午年十二月吉辰小林小太郎金五十兩納之

惣門外西ノ方石垣積ミ更明治十八年乙酉六月三十日ノ
大長雨押出シ同年十一月成就

越島祖唐金ノ宝塔一基 安永八己亥六月 役師代 施主大坂河内屋秀兵衛

惣門外唐金宝塔一基

外石宝塔一基天保
翁頭主鞍州小島普立寺方院

高祖五百五十遠忌御報恩謝禮

身延山諸堂記外(北沢)

身延山諸堂記外（北沢）

（1オ）

第三之卷

明治八年 丁亥 一月ヨリ記之

身延山 再々 建立記録
諸堂塔

（朱）
（巻）
（印）

（1ウ）

明治八年 乙亥 一月十日 （朱）
（字）
「旧七年十二月三日ナリ」 午后六時西谷本種坊ヨリ「出火諸堂宇（朱）
（字）
「旧十月十四日 午前十二時正ナリ」本院向支院十二ヶ坊町三戸類焼」棟数大小百四十四棟」

明治十五年 壬午 十一月廿四日 （朱）
（字）
「旧十月十四日 午前十二時正ナリ」 庫裏天井上ヨリ出火「講究所小書院生徒寮玄關焼失」

明治廿年 丁亥 三月四日 （朱）
（字）
「旧二月十日」 午後二時中町蛭子屋望月宗五郎ヨリ「出火町百三十八戸飯二玉門妙見堂松井坊山本坊円台坊」竹之坊法雲坊北ノ坊善学院寂光坊円正坊芳春坊」玉泉坊類焼」

院寂光坊円正坊芳春坊」玉泉坊類焼」

祖師堂（朱）
（字）
「旧二月十日」二十間

（朱）
（印）

（3オ）

（2ウ）

本ト江戸風山盛院寺ノ本堂也 天保年間新寺建立徳川「十一代文恭院殿家齊公新建ノ盛興寺ニ付相模國鎌倉此企」谷妙本寺江引取タ、ミ位 今同明治十丁丑年柱四十八本高梁」彫物等金三百円ヲ以テ買取海上船廻シ無事山岩外限（一）座ノ分トスル也 内限（二）ハ新設建立也」

棟札 檜板（中）一尺九寸 身延山日鑑彫形」長四尺二分 七十四世

表出。今此三界〇能為救護」

明治十四年四月廿五日祖師堂再建落成謹書」於祖山本院東軒」

同裏書」

開山宗祖日蓮大菩薩御影安置之祖師堂」（開口十二間 奥行二十間）明治十一年 戊寅 二月十四日再建立新初」同十二年 己卯

二月三日立柱同十四年 辛巳 歲」四月廿五日吉辰上棟同月廿九日宗祖大土」遷座開堂供養同月從三十日至五月十三日」六百遠忌万部經誦供養令落成者也」

安泰守護之棟札也」

普請幹事

世話人」

下総國飯高村
飯高寺住職

體遊院日珠聖人

當國増穂村
曾住寺住職

遺藤日寿聖人

大工棟梁

當中町池上伊織宗治

増穂村小林小太郎」

落合村新津又兵衛」

増穂村井上五左衛門」

同村川住宗四郎」

當中町池上与兵衛宗直」

同所一之宮与右衛門」

(3ウ)

同上町小倉源八郎常延 家根師

同中町池上亀之丞宗正 當下町池上平兵衛

同狐町樋口勘十郎義高 彫工

仏師兼塗師 深川後藤功祐

東勢京奥村雲開 仙方頭

同奥村眠開 當下町青柳惣八

銚師兼銅家根師 同狐町遠藤定右衛門

同水道町鈴木兼吉 同所苗新三郎

木挽頭 左官

同下町志村安藏 同中町池上伝吉

鍛冶工 増穂村深沢忠兵衛

同下町鈴木嘉兵衛 疊師

同所今村源兵衛 同狐町田中万右衛門

石工 建方

豊岡村小林平之丞 同上町池上作重郎

同上町佐野源助

以上裏書 一条町遠藤文七

宗祖御宮殿家根榮惣式（一）一丈八尺四寸 仏師東京淺草北松山町 前田幸次郎

明治十三年庚辰九月落成 發起東京淺草玉泉寺前住職廿五世福川日行聖人

施主東京有志連中 入費金六千円也

身延山諸堂記外（北沢）

(4ウ)

伊東茂右衛門 田口庄七 高橋安右衛門

大塚丸屋藤八 滝沢巳ノ吉 大黒屋平十郎

同藤七 鈴木由兵衛 鈴木鉄五郎

同吉兵衛 伊東長三郎 吉野甚三郎

丁堀池田忠兵衛 鈴木新次郎 沢崎徳兵衛

同田中芳兵衛 谷口熊五郎 山本文女

右世話人十八名也

人天蓋 幢幡 大打鳴シ 同台施主大坂年参結社中 明治十四年四月納之

大常香盤明治十四年四月納之

施主大坂年参結社ノ内ウツボ白藤嘉助

前机朱燈明治十四年四月

施主東京前机（一）中本願主神田平井安右衛門信吉 修復金百五十円ノ田地ヲ附置此ノ費金ヲ以

再造ス

五具足所金 金蓮華一對明治十四年四月 發起人福川日行聖人此ノ施主名下ニアリト

一名 造華并華瓶鉄 施主東京最初御花（一）拵中

木華金蓮華一對并花瓶

施主東京本所 堅川南北拵中 明治八年五月納

金灯籠一對真鍮 明治十年一月納之

施主能登国羽喰郡信徒中

焼物灯籠一對明治十四年辛巳十月吉日建立

(4オ)

身延山諸堂記外（北沢）

(5ウ)

施主肥前国有田皿山法元寺信徒中」
 山主ノ礼盤并 御経机 鑒 同台 過去帳 同台」
 施主大坂 山家屋孝女」 明治十四年四月」
 御経机百脚阿闍梨形」
 内五十机施主播州明石郡大蔵谷村三國茂三郎邦義」
 内五十脚施主越後上州野州堺町信徒中」

姓名経机有之 明治十四年四月」
 御経机共百脚クリ足尊慶流」

施主美濃国笠松蓮国寺檀中」
 行道椽擬宝珠并釘隠」

施主越中国信徒中明治十四年三月」
 小打鳴シ 同台朱塗 明治九丙子年」 施主

前机朱塗 明治八年亥九月」

施主東京本八丁堀五丁目松屋田中芳兵衛」
 木花金蓮華一对 明治八年九月」

施主千住南組田中屋上原満野女」
 五具足」 施主

祖師御饗具三ノ總組銀付 明治八年五月」
茶湯碗三万付

施主東京桜花世話人」
拵中 山村金石衛門

桜花 明治八年五月ヨリ」 永代施主右同拵世話人」
右同人

(6ウ)

太鼓巻渡シ 明治九年丙子」
明風盆金箔ヲヤ

施主東京浅草亀岡町团直木寄附」

平太鼓巻渡シ 明治九丙子年四月」 施主大坂妙鬼世話人」
拵中

蠟燭台拾二本以輪 明治十七年四月」
輕座用

施主東京浅草年世話人」
拵取次宿坊寶林房

賽銭箱」 施主横浜世話人」
拵中

栖神閣三文字額 七十四世鑑師ノ筆」
 明治十六年十月奉掛
 彫工ノ施主東京駒込大工職飯田秀次郎」

須弥上ノ前机惣金箔拵」

燭台一对其輪」

生花焼物錦手花瓶一对」 施主」
前机上ノ五具足并金蓮花一对入費金八百圓也

岡田富三郎 福井菊三郎 日本橋 建石三蔵」
長谷川町

矢沢菊蔵 有泉又蔵 八ッ橋辰五郎」
伊豆

鈴木伊兵衛 竹田治兵衛 村松善五郎」
屋

木村豊吉 高橋恒七 以上十一名」

永代疊表」 施主備前備中備後三ヶ国信徒中」

焼香ノ香炉 雨屋共一式」

施主東京銀座秋葉大助」 明治十四年六百遠見際納之」

(7オ)

(6オ)

(7ウ)

石ノ水盥修復 先天天保十亥年寄進破綻ニ付修復」

明治十四年御遠忌際修復 有野村矢崎又右衛門」

宮殿ニ蓮華ノ画左右天人ノ画并 岩ニ牡丹獅子ノ画」

後門 羅漢ノ画等 尾州名古屋源道恭敬筆」

銅瓦葺 向拝并左右ノヤネノフマヲ葺キ大組ノ事故ニ 明治十八年乙酉
一時土瓦ニテ仮葺ス廿年十二月土瓦落成日修代 鑑師代葺初
九月」

金牡丹一对并花瓶」

明治十九年一月十四日山着」

施主東京 世話人岡田 本具屋小沢惣吉」

金灯笼一对 店鋪 施主内船村近藤太兵衛」

明治十四年六百遠忌ニ付鑑師代修復ス」⁽²⁾

大打鳴シ并 台衆 蒲団二枚 捧」

明治十八年乙酉 五月東京開帳ノ際鑑師代」納ル施

主東京府 一」

土瓦葺」^(明治廿年丁亥十二月落成保存会ノ金ヲ以テ葺之)
七十五世修師代

向拝所敷石 明治廿二年己丑四月成就 修師代」

施主信徒之面々 発願人東京芝区田町一丁目」井之

口弁五郎并 信徒連中」

向拝所
上ユ釣大金灯笼一ツ」

明治廿二年三月納之修師代」

身延山諸堂記外(北沢)

(9オ)

施主大阪年参擲⁽²⁾信徒中」

外
所
上
鉤
小
金
灯
籠
二
ツ」

明治廿二年四月納之修師代」

施主東京浅艸区本所通横川町」能勢妙見山連中」

唐戸拾六本 マイラ戸四本代金三百円余」

施主東京本町四丁目」大倉金庫店萩原弥吉」

明治廿二年ヨリ同三年四月成就修師代」

大打鳴再鑄」

明治卅二年三月卅一日奉納」

大坂年参擲⁽²⁾中 良師代」

幢幡 木製総金箔」

明治四拾参年五月廿八日 慈師御代」

施主京都真浄講 全親監智 吉田茂入」

隠顯灯笼」

明治四十四年五月 慈師御代」

施主京都真浄講」

紫縮緬大幕」

明治四十⁽²⁾年 全」

施主真浄講」

青地金襴御戸帳^(西兵衛) 一」

身延山諸堂記外（北沢）

明治四十一年 全一

施主真淨講』

青銅灯籠一對（祖師堂前大香炉右左）
御影石台三座ノ上」

大正三年宗祖六百五十遠忌為御報恩」

施主京都日體寺土谷日察師」

祖師堂前石垣（山崎石
東西五拾貳間 階段十三間三尺）

大正五年三月竣工」

施主東京青山南町六丁目望月軍四郎」

費壹千五百五拾円ノ内（千三百七十八円寄付
殘金特別部支出）

石工甲府相生町星野完吉請負」

祖師堂裏石垣 東西 間 高

明治 敵師御代』施主春米小林

祖師堂前高灯籠（石九柱高拾
貳間）

明治卅九年日露戰役記念 良師御代」

施主東京新宿勢州樓福井豐藏外」

礼盤蒲団」 大青地緞子

大正五年八月」 施主仙台市 東郷正作」

小赤地繪子

大正」 施主大津市 羽賀靜子」

打鳴蒲団」 紋縮緬 白一 紅白腹合一」

施主 京都

〔註〕

（1）「六百円」を「八百円」と訂正。

（2）「買求ル」を「修復ス」と訂正。

御真骨ノ宝藏八角五間四方ノ土藏 銅瓦葺」

本ト折證堂ノ旧地五新ニ建立 施主尾張國物搦中」

明治八年乙亥十一月九日再建新初 七十三世薩師代」

同 九年丙子三月十一日地形鑿立」

同 十四年辛巳三月廿一日上棟同廿二日遷座同廿三日供養」

表書」

棟札 檼板長 三尺 王舍城（身延山日鑑判形）

天人常充滿 令百由旬内無諸衰患火不能燒水不能涸」

此板七十三世薩師ノ筆也九州巡教留守中前住薩師登山」上様式遷座勅之
此堂薩師代金薩師代上様落成也」

裏書」

宗祖大菩薩御真骨（五間
四方八角之寶藏一式）寄附之主尾張

國惣信徒中維時明治八年」乙亥十一月九日再建新初

同 九年 丙子三月十一日」地形鑿立同年九月十日柱立

同 拜殿（五間半）」拜所（二間半）武藏國堀之内村妙法寺扣同國

荏原」郡洗足村御小庵之祖師堂也当山真骨堂ノ拜殿

ニ「寄附依而明治十一年^{戊辰}六月海上船廻無事」山
着同年八月廿六日柱立同十四年^{辛巳}三月廿一日」上
棟同廿二日遷座同廿三日惣供養令落成者也」安泰守
護之棟札也」

普請幹事

当国世話人」

體遵院日珙聖人

井上五左衛門」

尾州元方世話人

川住宗四郎」

鈴木勝藏

池上与兵衛宗直」

時田吉藏

大工棟梁」

鷺見弥七

池上伊織宗治」

河本惣助

小倉源八常延」

村上治兵衛

池上亀之丞宗正」

水野弥七

樋口勘十郎義高」

尾州大工棟梁

仙方頭 青柳惣八」

柴田健左衛門

遠藤定右衛門」

木挽頭 志村安藏

同苗新三郎」

家根屋

池上平兵衛」

左官

池上伝吉」

石工

小林平之丞」

建方

池上作十郎」

佐野源助」

身延山諸堂記外(北沢)

以上裏書」

真骨ノ宝塔^{四角}二重

於同国ニ造立シテ当山ニ持参」

尾張国惣信徒中

宝藏八角唐木枕香木ナリ長崎(中)寄附
同宝藏ノ遷座歴銀也 美濃國寺院中寄附ナリ」

世話方

茶屋新田村久満盛盛 布目正兵衛」

明治十三年^{庚辰}四月十四日山着」

仏天蓋^{木品天竺木也}

織物唐土 玉物阿闍陀」

長崎長照寺^(中)拵中」

明治九年^(中)二月免願同十一年^(中)第四月成就後而
同年五月廿六日山着同廿八日奉拵同廿九日供養
ナリ」

世話人岡本清七

林為三郎」

宮崎政吉

落合与兵衛」

藏原為三郎

万屋花晃」

中村丈右衛門

唐木師中村守五郎」

宣徳香炉^{并台紫檀}

寄附主長崎平井橋蔭^{ヤシ}」

御真骨拜殿前上リ石ノ階段」

明治廿三年一月成就日修飾代 代金百円也」

施主浅州今戸町平井清次郎」

御真骨堂打鳴^{鐘有尺一寸}

大正五年十月」施主岐阜県大垣身延年參拵^(中)

御真骨堂宝殿銅屋根葺替」

大正六年八月九日^(中)銅板長四尺幅三尺式寸(コーヘル長板五百枚)
谷板及下リ檜ハツ新規模ナリ(五百九付)」

身延山諸堂記外（北沢）

（17オ）

名古屋伝灯^(ア)搦服部増藏^(イ)鷲野久助^(ロ)「尾張千人^(ウ)搦林忠三郎^(エ)ノ三氏屋根職人」数名引卒登山十一日着手旧屋根銅板^(オ)「全部削取り土居葺ノ代リニ杉赤味六分」板ヲ以テ裏板ノ上ヘ張り詰メ新旧ノ銅板ヲ一以テ葺替ヘヲ了セリ此間監督諸氏ハ修^(カ)「善中日々現場ニ臨ミテ職工ヲ督励ス而シテ宝珠ノ」下ニ空氣抜キ二個ヲ調ヘ通風ヲ計リテ^(キ)「腐ヲ防グ葺替竣成棟札ハ檜材老尺」式寸巾六寸ノモノヲ土屋根銅屋根ノ中間ニ納ム^(ク)

（17ウ）

宝殿入口^(カ)廊下^(キ)鏡ノ場所^(ク)陶器ヲ^(ケ)「ヲ樞窓寸板ヲ以テ内陣ノ廻廊ト同様研ギ」出シニテ張り替ヘタリ^(コ)

拜殿向拜ノ銅屋根モ同時ニ修理ス^(カ)
監督伝灯^(イ)搦服部増藏^(ロ)鷲野久助^(ハ)「千人搦林忠三郎丹羽清五郎」大工^(ニ)當所池上保治外式名 木挽佐野仁藏外三^(ヘ)「屋根職工 名古屋中区大池町下丁廿五番地 桂川清一郎外」

〔註〕

（一） 明治十五年二月廿二日 七十八歳去
法号寂光院法入日澄信士

真骨堂ノ拜殿間口五間半 御拜二間半^(ア) 銅瓦葺^(イ) 御四方^(ロ)

（19ウ）

（ア） 本武州堀ノ内妙法寺持池上院足御小庵ノ祖師堂也^(イ) 建立ノ時ノ棟中在後領
当山江寄附海上船廻無事^(ロ) 山登明治十一年戊寅八月廿六日拜殿柱立同十四
年辛巳三月廿一日上棟同廿二日懸梁同廿三日供養令周備者也^(ハ)
棟札ハ宝蔵拜殿一枚ナリ^(ニ)

從拜殿廊下長八間
至宝蔵廊中八尺

前机朱漆 五具足立籠 木金蓮花一對^(ア) 金灯籠一對^(イ)

寄附尾州名古屋無上擗中^(ロ)

礼盤 御経机 過去帳 同台 鑒 同台^(ハ)

寄附尾州海東郡榮唱擗中^(ニ)

釣り金灯籠一對^(ア) 明治九年丙子三月納^(イ) 名古屋題目擗中^(ロ)

同一對^(ハ) 明治九年丙子三月納^(ニ) 名古屋大野紋一郎^(ヘ)

同一對 名古屋鈴木正七奥田清兵衛^(カ)

拜所鏡天井ノ千羽鶴ノ画并 宝蔵内彩色等^(キ)

尾州名古屋源道恭敬筆^(ク)

金灯籠一對 施主尾張国^(ケ)

油料金貳拾円 名古屋^(コ)

打鳴シ一個 大野茂三郎^(カ)

永代常経 施主東京御真骨常経擗中^(キ)

御経一部八卷 箱机共 打鳴シ 同台 棒 蒲団共^(ク) 過

去帳 同台右三品共黒棉ヲ以作之^(ケ) 世話人^(コ)

明治十四年 辛巳 四月再興シテ納之^(カ) 赤井政吉^(イ) 大川吉兵衛^(ロ) 伊藤庄右衛門^(ハ)

同 村土屋七郎右衛門 同 樋口勘十郎義高

身延山諸堂記外（北沢）

落倉新津 又兵衛 杉木 挽青柳惣八」
世話人 屋根 師池上平兵衛」

大門口井上五左衛門 石 工小林平之丞」

同 村河住 宗四郎」

当中町池 上与兵衛 以上裏書」

大鐘樓家根土瓦葺」

明治廿年 丁亥 四月落成七十五世修師代」

(27オ)

釈迦堂 九間七間半 元ト檜皮葺也」
四方後各三尺宛 土瓦ト改ル」

元ト西谷榎林ノ藤堂也一所ノ藤留林園シニ付開山宗祖ノ」
飯堂トシテ元ト大方丈ノ地江引移シ再建ス」

右講堂ハ寛文九 己酉 歲明治八乙亥年第二十九世」日蓮

師棟札善学院第八世興源院日蓮代江府」安藤寺岐

守重常為慈父伊賀守重元」法蓮行院道円日覺居士

追薦「寛文八戊申」喜三捨黃金一千兩一建二立之」右徒重

立至三百七十年」

明治八 乙亥 年三月廿一日移此地」柱立同五月十日」

祖師遷座二十三十四日開堂供養令落成也」

（明治八年五月十日ヨリ同十四年四月廿九日迄）
其後也」

釈迦尊像安置 座像也」

東京青山仙寿院里見日珠寄進ス」

(28ウ)

鰐口」右仙寿院ヨリ納之」
左右正当山歴代安置」

日向日進日善上人木像 厨子入 各朱塗」

台師ヨリ七十四代迄金位牌 各厨子入 朱塗
鑪師並立之」

前机右二 五具足右二組 木金蓮華右二対」

明治十五年四月新二彫刻 七十四代鑑師代」

山主ノ経机 同箱 鑒 同台 過去帳 同台 各朱塗」

明治九年 丙子 四月納」施主東京」

山主ノ礼盤 明治十四己年朱塗替ス」

下山本國寺ヨリ納 明治八年 乙亥 五月」

釈尊前前机 燐金塗 明治十七年甲申十一月新調」五具足 金蓮

華一對」

生花ノ花瓶二」

金灯籠 其飾 台朱塗 文政十三年戊申七月
江戸浅草大坂屋直助納」

御経机 同函 燐メハシキ朱塗 五拾脚」

施主 明治 姓名机毎二書付有之」

打鳴シ 同台」施主」

出仕ノ半鐘」

同 太鼓」

釈迦堂ヨリ登リ渡リ廊下 長折廻シ拾五間」
真寶堂ノ拝殿江 中九尺」

明治十四年巳二月落成」

自然石 水壘兩屋九尺」明治八年乙亥 五月十日成就」

〔註〕

(1) 明治九年四月八日上棟へ頭註

奥位牌堂八間二尺 家根板葺
土瓦ニ改

元ト西谷本行坊客殿移シ此地ニ再興成統ス此ノ殿ヘ嘉永七年寅歲十月六十
七世日趨判形續札有之」本行坊三十七世是慈院日行聖建立之」

嘉永七年寅年ヨリ
至三十二年」 明治八年乙亥 四月七日移シ此」地ニ柱立同

五月十日落成御真骨ノ仮殿トスル」

唐紙二十四本ノ西ヘ東京深川宗巨齊齋影ノ簾」

位牌檀四箇所 旧紀州桑左京条兩像ヨリ金八十円」
仏壇菩提納 仙寿院取次ナリ」

明治九年丙子八月落成 兩塔ノ位牌安置ス」

宝塔一基 明治八年亥六月武州川越行伝等」
文妙院日忍納之」

此宝塔明治十四年巳十一月廿一日宗祖分骨ノ際」
筑後国生葉郡清瀬村新寺当山末別院本仏寺立送之」

明治八年五月十日ヨリ
同十四年三月廿二日マデ 御真骨仮殿也其後位牌堂トス」

納骨長持黒蓋 明治十四年ニ發售」

日月牌ノ位牌」

礼盤黒蓋 明治十四年ニ新造」

御経机 同函 鑒 同台 過去帳台朱魚」

西谷講堂ノ具也」

身延山諸堂記外(北沢)

過去帳一冊」

渡リ廊下 奥位牌堂ヨリ 長四間」
釈迦堂五 中七尺」

明治八年乙亥 五月十日落成」

〔註〕

(1) 明治二年己巳四月朔日五十三歳化

(2) 明治九年四月八日上棟へ頭註

奥書院四間 井山主居間四間 新造合十一間五尺」
右奥書院ハ元ト清水坊ノ書院ヲ引移シ此地ニ再興ス」

文政七甲申年五十五世通節續札清水坊第二十七世」啓運院日修聖新建立
也」此ノ地元ト御真骨寶藏ノ跡江移引 文政七甲申年ヨリ五十三年ニ至ル」

明治九年 丙子 三月一日柱立同四月廿五日落成」移徙

也同五月一日旧四月 上棟 薩師代」

大工棟梁池上伊織宗治小倉源八郎常延」

〔註〕

(1) 弘化二乙巳年五月二十八日化

大書院新造立七間 棟左右四尺五寸ツム 瓦葺板」

元ト奥書院ノ跡地江南向ニ造立」
第七十三世薩師代建立

明治九年 丙子 四月十四日立柱同年八月」土瓦葺落成

身延山諸堂記外（北沢）

大工棟梁池上伊織宗治
小倉源八常延

上ノ間床并 唐紙古法眼越前守元伯ノ繪也 其土蔵ニ有此度張

二ノ間三ノ間ノ唐紙ノ給ハ 東京中橋狩野永應立信筆
欄間四枚ノ彫明治十五年壬午十月成就

廊下從大寺院至奧符院 長拾五間 明治九年子四月

(37才) 小書院九間四尺 第七十四世鑑師代

元ト山主居間ノ旧地江 西谷本是院頭寮以テ再興ス
此ノ寮天候年間新造ナリ

明治十四年 辛巳 歳六百遠忌手狹ニ付此ノ地江 造立

同十五 壬午 年造作 大工棟梁池上伊織宗治
同儀之苑宗正

廊下大寺院ヨリ小書院江 長十間
泉水ノ上ヲ減ル 巾六尺

〔註〕

(1)(2) 焼失へ頭註・朱字

(1) 講究所十二間 玄關式台新造元ト茅葺 土瓦ニ改

元ト水嶋橋ノ旧跡江 西谷妙玄庵ヲ引移此地ニ再興ス
右妙玄庵ハ玄義講釈ノ寮也至永年中三十三世宗師ノ模札有之

明治八年 乙亥 六月十六日柱立同年九月上葺落成 同

年十二月八日吉辰移徙也

(2) 生徒寮并 廊下新造十間半 同時ニ移徙也

(38ウ)

(3) 渡廊下生徒寮ヨリ 奥位牌堂江 長三間 巾六尺 同時ニ落成

(4) 同廊下講究所ヨリ 長五間 明治九年丙子四月
大書院ニ至 巾七尺

明治九年 丙子 五月一日旧四月上棟 薩師代

〔註〕

(1)(2)(3)(4) 焼失へ頭註・朱字

(1) 飯厨司 庫裏ナリ 八間 底九尺 元ト茅葺 土瓦ニ改

(2) 受附所二間半 内玄關式台八尺 新造

元ト厨司ノ上ノ楨江建ル西谷醫學院ノ庫裏ヲ引移此地ニ
右庫裏ハ宝曆年間四十一世妙師判形模札有之

明治八年 乙亥 十月廿二日柱立同年十二月八日 移徙

落成也同九年 丙子 旧四月八日上棟 薩師代

(3) 物置長屋二間 變倉味噌倉細工場也 古材木ヲ以テ造立之 明治八年十二月

〔註〕

(1)(2)(3) 焼失へ頭註・朱字

普請会所六間半 底九尺 西谷川向法張坊ヲ元ト大方丈ノ西江建之
同会所并 本願人詰所建替十三間四尺

替地元ト御供所ノ地江引テ立之
明治十三年庚辰ノ秋

(39才)

(40才)

(41オ)(40ウ)

尾州世話人会所四間半 西谷光精坊ヲ引テ舞台ノ地立之

人足休息所七間 西谷妙尊坊ヲ以本堂ノ西立之

普請作事小屋 御供所ト舞台ノ間ニ立之

作事小屋六間 元ト内師堂ヨリ二重塔迄ノ間西ノ方立之

明治八年 乙亥從一月至十二月八日移遷迄 一ヶ年分

普請入費古堂宇ヲ以建之

一金千五百拾円 仮祖師堂 金六十七円 会所

一金七百五十円 仮真骨堂 金九十円 廊下

一金二千三百円 講究所 金七十円 小屋三ヶ所

一金千五百円 庫裏 金五百円 地石形積

一金拾三円 水鉢雨屋

右九口計金六千四百四拾円也

明治八年 乙亥 十二月十日算

本堂十五間四方

明治十五年 壬午 三月二日吉辰新初

大工池上伊織宗治四子 池上亀之丞宗正樋口勘十郎義

高

法喜堂十二間半 厨司車裏ナリ

身延山諸堂記外(北沢)

(54オ)

施主甲駿兩國寺院并信徒中

明治十六年 癸未 二月二十日舊正月十三日 再建新初

同年六月二十九日舊五月廿五日 柱立

同年十一月十日舊十月十一日 落成御移徙

棟札 身延山日鑑判形

法喜堂三太字ノ額 七十四世鑑師ノ筆

明治十七年 甲申 一月奉掛彫工池上伊織宗治 鑑師海澄忠八郎

土瓦家根 明治廿三年 庚寅 旧ノ十月落成

七十五世修師代

大客殿

東京於深川興院宗祖開帳以集金初之

明治十八年 乙酉 八月四日舊六月廿四日 再建新初 鑑師代

同十九年 丙戌 三月廿八日立柱鑑師通化 無住中

同年六月柿板葺成就右開新

大玄関式台

内玄関式台

右同時ニ造立之 七十五世修師 八十九年七月十三日入山

建具障子雨戸等 明治廿三年ノ春当山ニテ居開帳

ノ際ニ造立之七十五世修師代

身延山諸堂記外（北沢）

御欄間 大正六年五月東京本郷唱導結社「施主トナ
リ御料林払下奉納金ノ割戻金」ニ一般寄付ヲ募リ
七尺六寸三尺七寸三枚（私云）同へ七尺六寸二尺八寸
三枚」総檜材ヲ以テ製作シ七年五月五日取付ク」
發起人山本常松（本郷四丁目）
製作人金子吉兵衛（下谷環輪寺付近）

自厚山清兮寺建立 本院隱居所也

元ト樋沢坊ノ旧地ニ新建立也

明治十八年^(朱子)乙酉九月廿二日「旧八月十四日」新初

同十九年丙戌四月落成

七十四世鑑師御隱居所自普請也御移り無之遷化ス^①

[往]

①（明治）十九年一月十三日

納骨堂土蔵

元ト灯主堂ノ地江造立

明治廿二年造立ニ付右ノ廟塔ヲ以テ上ノ重ヲ造立下ノ土蔵ハ新規ニ建之

明治廿三年十月銅瓦家根落成同九輪ヲ上ル

宗祖御草庵之旧跡

此ノ処ハ宗祖文永十一年六月十七日初テ入山在ラセ
ラレ」当山最初御建立十間四面ノ堂地也九ヶ年説誦」
説法書写本尊著述諸書ノ靈地也從「往古」真俗葬送
ノ場トス山地狹少ニシテ別ニ無「広地」故歟」仰キ願
ハ後代ノ貫主此ノ処ハ為「清淨靈地」立「四方境」葬
場ハ別ニ可「設之」云云右三十三世亨師ノ申置有レ之」
依テ今般明治廿二年駿州内房本成寺住職「鶺鴒川」行
苑起同志ヲ集メ「釈迦堂」ヲ妙福坊ノ前立」引移シ十間
四面ノ旧跡立御影石ヲ以テ玉垣ヲ新ニ建立」中央ニ
宝塔ヲ建立ス諸國僧ヲ集テ創立唐厨」
拾間四面立御影石ニテ玉垣明治廿三年庚寅七月」落
成七十修師御代」
此ノ御施主酒井家御隠居顯寿院殿」入用金

[註]

① 并葬場共ナリ

① 宝物館建設

大正十四年五月六日起工大正十五年四月十三日竣
成」

一建設費金七万円也」

内金貳万四千円 本山出資」

金四万六千円 小林八右衛門出資」

小林八右衛門出資ニ対シテハ向フ十ヶ年間ニ元利
金共観覧料ヲ以テ償還シ」不足ヲ生シタル場合ハ
本山會計ヨリ補給ノ約」

一棟梁 池上鶴三郎 工事監督 阿部多朗」

一建設発起人 加茂日養 富川玄快 中村是本 太
田日定」 小林諦照 小林八右衛門 小林豊蔵」

〔註〕

(1) この一条は別紙に記入の上貼付してある。

仮山門落成 明治二十三年五月二日 修師代」

山門落成 明治二十三年五月二日 良師代」

小檀林教場』

祖山学院 築間五
檜桁十二間三尺」

大正六年四月十七日新始メ』

(80オ)

電灯敷設⁽¹⁾

〔註〕

(1) 板心によるが、本文の記載はない。

【資料】

身延山「高座石年中行事帳」

校註 奥 野 本 洋

妙石庵第十四世⁽¹⁾唯完院日恵上人によって記録され始めた行事録が見つかった。これは文化元年（一八〇四年）正月吉日より明治三十六年（一九〇三年）にわたり、厚手と紙の袋綴四十二枚中二十八枚に書かれ、残り十四枚が加筆の余地をもつものである。このうち十五枚が、唯完の筆によるものであり、今回そこ迄を報告し、その当時を知る資料に呈するものである。

又、妙俊院日寿上人が、後年朱にて追加・補足等を加えており、それらは註にて記す。今回読むにあたり、各聖ごとに久遠寺布教部望月真澄師に御教示を受けました。厚く感謝の意を表します。

〔註〕

- (1) 寛政十二庚申年隠居又享和元年辛酉極月五日再住文化二乙丑正月十三日交衆御免

身延山「高座石年中行事帳」（奥野）

- (2) 鈴木日寿上人。身延山史中に「師は祖山貫主に歴仕すること十八代、……現存せる祖山の古記録は、実に師が丹精の賜物と云ふべし」とある。

甲	文	化	元	年
子	中	行	事	帳
正	月	吉	日	

- 一、高座石⁽¹⁾本堂之義者 当山三十一祖一円院日脱⁽²⁾聖人御建立也 則本堂之御厨司右脱尊⁽³⁾前⁽⁴⁾当所⁽⁴⁾送り給ひ候由

是迄者右唐銅 高祖大井ハ石上ニ被遊御座候由 夫ハ日像菩薩御作ノ高祖大菩薩ヲ御腹籠リニいたし開帳仏ニ被仰附様及承候 右当所 高祖大士之義者宝永年中当庵主宗善坊日顯ト申僧江戸表ニ而 建立いたし候よし 唯完於本堂ニおいて大位杯ニ印シ有之候ヲ見出し是迄者妙石庵曆代不相知レ依比功ニ右宗善坊ヲ元祖と相極メ愚僧迄十一代と定ム

高祖大士ハ脱尊前御開眼之尊像也

〔註〕

- (1) 三間半ニ三間縁三尺祖師堂新建立ハ亨師代宝永三丙戌十月十三日棟札有之
- (2) 金像ノ祖師則御開眼
- (3) 祖師大堂ノ
- (4) 亨と改める
- (5) 元ト奥之院ニ安座是ハ脱師代其後省師代田代ニ移ス石上也其ノ後亨師代祖堂新建立之上宮殿下ニ開帳仏トスル
- (6) 開基學禪院日遙聖人也、宗善坊ハ丹精ノ主ニテ第二代也
- (7) 十四世の誤まり、三世了達日因、四世法蓮日縁、五世蓮信日厚が欠けていたと思われる。

一、毎年節分之夕小豆麦飯之御膳ヲ本堂ニ奉備也比義者六老僧様之内比所ニ御草庵ヲ為結給ひ粟ヒヘヲ為作ヲ尤田作等茂被遊候て我祖大井ヲ為育ク、給ひ候由 夫故比所ヲ田代と申候也 其後節分之夜高祖被為入何も差上候品なく右之麦飯ヲ御地走ニ差上候処 比因縁ヲ以永代節分之夜右之麦飯ヲ相備ル者也 寛政年中ハ当所上町河内屋十兵衛殿ハ志を以麦粍はいづつ被送之勿論上白ニいたし

一、当山御代々之 尊前御入山之砌者惣門迄御迎ニ出ル尤唐銅宝塔前ニ而 平伏可仕者也翌日御厨司様迄御祝儀御機嫌伺之礼義ヲ申上下山いたし夫ハ百日之御堂參相濟七面山ニ御登リ西谷之節者手前ハ二ツ目橋迄御迎ニ出南之方ニ平伏ス奥之院通り御登リ之節ハ松之木迄御迎出ル但シ北ノ方ニ平伏いたし其節御傍衆ニ申上先ニ欠ケ貫ケ又々手前御上リ場ニ而 平伏可仕也

差上候品者高付キニ 上御菓子上茶ヲ入レ備之ヲ御傍衆ニ者外ニ上落がん之類差出ス御取看硯蓋茶枚鉢之肴等ツ御吸物先御傍衆迄差上らるべき也 御帰リ之節者先ニ欠ケ手前下リ鳥居キハ北之方ニ平伏ス尤道普請掃除所ニ破損場繕ひ寄席ニ可仕者也

一、御院代様 七面山ニ御登リ之節者毎年九月十八日之

朝追出し之鐘ニ御供揃イニ而 当所^五夜之内御出追出シ内
切り前^六下タ之橋場ニ御待申上候御通り之節南之方ニ平
伏ス夫^六先^五参リ 祖師堂戸帳ヲ開キ置御経之砌リ御開
帳可仕者也 差上候品者上らくがん高付キニ 乗セ可備者
也 御傍衆^五者水くわし之類ニ何^七シ あしらい差出ス尤
上茶ヲせんじ不残差出ス御立之節者御路迄御送り可申也
尤上^五満がり迄 灯明てうちん之者者十八ヶ所程内蠟
燭ハヶ所程翌日御帰リ廿日ニ至而 御厨司様迄御機嫌伺ひ
ニ上リ可申也

一、双方差上候品定メ置候事 道下り我レ勝テニ 不相応
ニ相成候故 日全尊前御代御上^五 御くわし斗り之様比
義者道下り之者依時ニ難義之者可有之趣ニ付被仰渡候依
之御地走之品印置者也 永代斯之通り

〔註〕

(1) 第五十一世明静院日全上人

一、本院年始之事 元朝明六ツ時御厨司迄上り御盃頂戴
夫^六厨司御宿房御普請方御兩人宿房自身宿房之義者不及
申ニ年始相勤べく者也

一、歳暮之義 御本院^五長湯波三拾本御厨司様^五鳥目拾^一

身延山「高座石年中行事帳」(奥野)

正持参寛政年中迄ハ勤斗り比義者先住淳善代冥加のため
として湯波三十本差上ル御厨司様拾足之義者唯完代諸事
伺ひ其外願御世話ニ候故冥加之ため初ル之ヲ

〔註〕

(1) 一疋は十文。一兩が四分で十六朱。一朱は二五〇文。

(2) 十三世淳善日住法師。

一、六月大会幕ヲ張りのぼり可立者也十月会式茂同様首
尾能相済十九日ニ御祝ニ登ル十月者十四日ニ登ル

一、当庵御難会之事 毎年九月十二日十三日兩日御出家
十人神力品二千巻修行十三日御説法本院御院代様又ハ御
能化様右御所之内御請待申御礼之義者南^一錄一片所化衆
鳥目拾足供之衆五十銅宛 御院代様之義者日地尊前御代
御院代潮文院様初而御説法ニ被為入御礼之義ハ庵主ニ被
置下候依之御礼ニ上リ候節者御くわし之類ヲ^五あら^五ミ時之
宜敷ニ斗ひ可申也

右潮文院様^六御院代様請待之義初ル

〔註〕

(1) 二朱銀の異称。二枚で一分。

(2) 四九世日地代の院代。潮文院日逞聖人。後に祖山第五

身延山「高座石年中行事帳」(奥野)

十五代山主となる。

一、当庵会式發起人之義者寛政三^{癸亥}年淳善院日住初而大原野村^ノ麦^ノ菰^ノ俵申請 是^ノ於高座石 御難会式初ル勿論世話人^ニ大原^ニおいて佐野左五右衛門殿 同名吉左衛門殿也 夫^ノ淳善文金五両会式積^ミ金として本院本願主^五預^ケ置^ク比利^壹割^ニして金^貳分也 其後淳善急病^ニ而死 去いたし時^ニ寛政六寅十一月朔日正當也 同月七日愚僧唯完^ニ後住被仰付候 尤御厨司端場坊本解院様 山主日地尊前御代 也右唯完文金五両会式料として納之比利七分五^リ二^兩 壹分貳朱二^口元^金文拾兩右方丈本願^五預^ケ置利足二^口元^金三分貳朱也

右当町

池上与兵衛殿

布袋屋要右衛門殿

本願主連名

松尾弥市右衛門殿

新シ屋市左衛門殿

清水屋平右衛門殿

右五人之衆中^ノ証文^壹通取置候者也

一礼文言之趣如斯

預^リ申金子の事

割印有り

合拾兩者 但文金也

右者田代妙石庵為会式料と雖^ニ受取預^リ置申候 然ル上者毎年九月会式之^ノ初金三分貳朱宛相渡シ可申候 為念預^リ手形仍如件

寛政十一己未年六月

身延山

本願人印

田代妙石庵

先住 淳善

当住 唯寛

夫^ノ寛政十三申年唯完隱居願相叶後住^ニ相渡ス 又々享和元^酉年極月五日唯完再住被仰付文化元^{甲子}年極月八日弟子舍弟誠玄日近^五相渡ス則愚僧義翌年文化二^{乙丑}正月十三日交衆御免也 被仰付寺之義追而

〔註〕

(1) 此証文今ハなし。

(2) 此拾兩坊号頂戴之御本院へ差ル上。

一、右会式料先年当庵主行円日修と申代当国青柳村磯野新太郎殿^ノ高座石修復料として文金拾兩方丈本願^五預^ケ有之比利文金^壹兩也右之利足者是迄年々六月十八日ニ本

願^ハ請取候処若シ高座石ニおいて住寺病氣カ或ハ不埒成
者相直リ候節会式滞リニ相成候故文化二丑年^ハ窪之坊様
ニ願イ毎年会式之砌ニ請取候様ニ相定ム 則証文^ニ書
添いたす 比利共二口^ノ文金^ハ尙參分式朱毎年会式之砌
右本願年番之方^ハ請取り御経相動ル者也 右利足之次第
者淳善唯完兩人位杯之表^ニ彫記し置者也

〔註〕

(1) 妙石庵第八世

一、会式御経之朝者御出家衆十人^ニ平^テ尙^ツ香之物茶清十
三日朝^ハ參詣之衆迄ニ不殘こわめし尙盆^{ヅツ}十二日昼過
胡麻之ぼた餅尙^ハい程こしらへ本堂^ニ備可申但シこわめ
し之義者餅米大升^ハ五升^ハ梗大升^ハ貳升^ハ小豆大升^ハ貳升^ハ九升^ハふ
かす餅大升^ハ四升^ハ搗^ハ三宝^ハ諸天^ニ中備尙本堂^ニ大備尙^ハ七
面様妙二郎様小備尙^ハ宛 外者時々志々餅大升^ハ四升^ハ者神
酒油施主別^ニ御経之施主方札^ヲ添二切^レッ 包ミ配ル
尤御院代様七面山御下リ後廿一日^ハ國方札配リニ出可申
事大原野村^ニ御札^ヲ添七面山撰待迄十七日迄ニ送り遣ス
札者五拾七軒ト仏供者七拾軒分遣ス

〔註〕

(1) 擲と同じ。うすつく。曰で物をつく

一、日輪尊前御代当庵義長院^ニ日如代当国西郡寺部村萩野
萩右衛門殿先祖当庵^ニ為月杯料高座石永代再興之志^ヲ以
田地四反七畝廿七步奇^ノ附右法名真淨法閑と有之 則位杯
之肩ニ田地四反七セ廿七步と彫付有之 子孫ニ至リ小作
萩野丈右衛門殿^ニ被願是^ハ年ニ米五俵^{ヅツ}送ル当庵^ニシ
カン田地ニ応じ候^而者

〔註〕

(1) 祖山第四十世円通院日輪上人

(2) 妙石庵第九世

一、淨志院日理高座石^ニ永代抹香料と彫付有之候位杯尙
本是者先年本院^ニ甲金五兩相納置右之利足年々極月廿日
後御厨子^ニ請取書付之義者代々之義故紛失いたし候由
先代^ハ申^云候^而是迄頂戴仕り候
一、妙二良様御札之事 日地尊前御代御院代潮文院様窪
之坊遠治院様御一老之節唯完日恵右妙二郎様御札願いた
し候処御承知有之首尾能相叶ひ尤御札下書ハ御本院^ハ涼
池院様御筆^ヲ以御認被置下候

身延山「高座石年中行事帳」(奥野)

一、当庵住寺繼目之義者 御本院^五長湯波五拾本当番方之内御當日^五鳥目貳拾疋御厨司様^五同貳拾疋侍中^五酒壺升宿坊^五同貳拾疋右之通^リニ 繼目披露可被致候事

一、樋木掛^二直し之義者前々^々御普請方^五ハ、相届ケ不申致来り候 尤松縦^二并薪之義ハ是又松縦枯木又へうら枯之分無届ケ切取り候 但シ見聞ニかかわり候処者不相成事ニ候猶又杉檜樫之類切取り候事一向相成不申事 但シ為念双方山廻りニハ断りいたすべく候

一、松之木摂待ハ金之義ハ寛政初頭^六松樹庵時之住寺日宣法師^五当庵淳善^六金子壺兩余かし遣し候故右之代ニ当庵^三奇附被致候

一、松之木松樹庵繼目之事 御本院^五長湯波五拾本御当番當日^五鳥目拾疋同貳拾疋御厨司様^五同貳拾疋御普請御兩人^五同拾疋御藏方^五同三拾疋侍衆飯もり衆共以上六人但シ壺人前五十銅^つニ成ル 手前宿坊^五貳拾疋右之通持參可仕事

一、同人歳暮之義 御本院^五湯波五十本鳥目拾疋御厨司様^五同拾疋御普請方御兩人^五同五拾銅を御藏方様^五同貳拾疋ハ侍衆四人同^五五拾銅ハ飯もり衆^五双方如斯相違無之候

一、日盛尊前御代 御厨司法雲坊教秀院様之節 道下^一リ

之内不調法有之被仰付候趣何事ニ不寄十万部^六三門常題目迄道下^リ之者相談之上斗ひ可申候様被仰渡候 尤仲間と申^二ハ無之由ニ候得共 為不調法無之様思召^ラ以右之段被仰渡候相守可申候

〔註〕

(1) 祖山第五十二世堅樹院日盛上人。

言語小論 ⑧

大 森 孝

On relation between language and society

◎ 言語と社会について

我々が住んでいる此の社会に於て、人々との関係をつくり出す言語の働きを考える時、如何に言語と社会が、密接な関係にあるかを理解出来ると思う。この事に関し、言語学者ピーター、トルージル (Peter Trudgill) 及び、マデロン E. ヘザリングトン (Madelon E. Heatherington)⁽¹⁾、フィリップ、エス、デール (Philip S. Dale)⁽²⁾ 等の説を参照しながら、論を進めて行く次第です。
⁽³⁾

~~~~~  
先ず、ピーター、トルージルの説を、参照しながら考えてみたいと思う。

彼は言語と社会の関係について、次の様に述べている。

The two aspects of language behaviour are very important from a social point of view : first, the function of language in establishing social relations, and, second, the role played by language in conveying information about the speaker.

We shall concentrate for the moment on the second 'clue bearing' role, but it is clear that both these aspects of linguistic behaviour are reflections of the fact that there is a close inter-relationship between language and society.

即ち、和訳すると、「言語活動の二つの面は、社会的立場から非常に重要である。即ち、第1に、社会関係を作り上げる事に於ける言語の作用であり、第2は、話し手について情報を伝える事に於ける言語の果たす役割である。我々

は少しの間、第2の‘手掛り提供’の役割について心を集中するが、しかし、言語活動の此等の2つの面は、言語と社会の間に、密接な相互関係があらうと云う事実の反映である。」

彼は、以上の様に述べて、言語と社会が、非常な密接な関係にある事を述べている。

先ず、ダイアレクト（<sup>地方語</sup><sub>階級語</sub>）（dialect）について考えてみたい。

ダイアレクトには、地理的背景を持つ場合と、階級的背景を持つ場合とが考えられる。現在の日本に於ても、地理的背景による方言は、しばしば認めるところであり、例えば、東北弁、九州弁、甲州弁の如くである。階級的背景による言語は、現在の日本に於ては、少数になって来ているが、未だ、多少残っていると思われる。

尚、此のダイアレクトに関し、彼は、ドイツ語とオランダ語の例を上げて、次の様に述べている。

Dutch and German are known to be two distinct languages. However, at some places along the Dutch-German frontier, the dialects spoken on either side of the border are extremely similar. If we choose to say that people on one side of the border speak German and those on the other speak Dutch, our choice is again based on social and political rather than linguistic factors.

即ち、「オランダ語とドイツ語は、はっきりと区別される言語であると知られている。けれども、オランダとドイツの国境に沿う或る場所では、その国境の両側で話されるダイアレクトは、非常に似ている。もし我々が、境界の一方の側の人々がドイツ語を話し、他の側の人々がオランダ語を話す理由を定めようとするならば、その決定は、又、言語的要素よりむしろ、社会的、政治的要素によって定められる。」

次に、彼等の理解（understanding）について、彼は次の様に述べている。

We could say that if two speakers cannot understand one another, then they are speaking different languages. Similarly, if they can understand each other, we could say that they are speaking dialects of the same language.

即ち、「我々は、もし、2人の話し手が、お互いに理解出来ないならば、其の時、彼等は違った言語を話している、と云えるであろう。同様に、もし、彼等がお互いを理解出来るならば、同じ言葉のダイアレクトを話していると云えるであろう。」

彼は以上の様に述べているが、では相互理解の基準は、如何になっているであろうか。彼はこの事について次の様に述べている。

The criterion of mutual intelligibility, and other purely linguistic criteria, are, therefore, of less importance in the use of the terms 'language' and 'dialect' than are political and cultural factors of which the two most important are autonomy and heteronomy.

即ち、「相互理解の基準と、他の純粋な言語基準は、それ故、ランゲージとダイアレクトの使用の場合、その自律と他律が最も重要である政治的文化的要素より、重要さは少ないのである。」  
(4) (5)

尚、言語を区別する場合の規準を如何にするかの問題の困難さについて、彼は次の様に述べている。

The discussion of the difficulty of using purely linguistic criteria to divide up varieties of language into distinct language or dialects is our first encounter with a problem very common in the study of language and society-the problem of whether the division of linguistic and social phenomena into separate entities has any basis in reality, or is merely a convenient fiction.

即ち、「様々な種類の言語を、はっきり区別出来る言語やダイアレクトに別

ける為に、純粹に言語的基準を使う事についての困難さについての議論は、言語と社会の研究に於ける非常に一般的な問題に、最初に遭遇すると云う事である。即ち、言語的及び社会的現象を、夫々の実体に区別する事は、実体に何か基準をもっているか、又は、単に便宜的働まであるかどうかの問題である。」

以上の様に、彼は述べているが、結局、実体の性質そのものにより、言語及び社会的現象が定まってくると云えよう。

更に、具体的例として、カナダ英語と、アメリカ英語との違いを考えた場合、その区別を見つける事は困難であるとして、彼は次の様に述べている。

We can talk, for example, about 'Canadian English' and 'American English' as if they were two clearly distinct entities, but, it is in fact very difficult to find any single linguistic feature which is common to all varieties of Canadian English, and not present in any variety of American English.

即ち、「我々は、丁度二つのはっきり区別されたものであるように述べる事が出来るが、しかし、カナダ英語の凡ての種類に共通であり、どんなアメリカ英語の種類の中にも現われていない何か一つの言語の特徴を見つける事は、実際非常に困難である。」

結局、ダイアレクトと云うのは、語と語の間の単語や、文法の違いに関係していると思われるのであり、更に、ダイアレクトの中には、標準英語として知られているダイアレクトもあるのである。この事に関し、彼は次の様に述べている。

In many important respects this dialect is different from other English dialects, and some people may find it surprising to see it referred to as a dialect at all. However, in so far as it differs grammatically and lexically from other varieties of English, it is legitimate to consider it a dialect: the term dialect can be used to apply to all va-

rieties, not just to non-standard varieties.

即ち、「多くの重要な点で、此のダイアレクトは、他の英語のダイアレクトとは違っている。或る人々は、其の語がダイアレクトに関係している事を知って、全く驚くかも知れない。けれども、其れが他の種類の英語と、文法的に、辞書的に違っている限り、其れをダイアレクトと考えるのは合法的である。其のダイアレクトと云う語は、正に非標準の種類語ではなくて、凡ての種類に對して適用するのに用いられるのである。」

以上の様に、彼は標準英語として用いられているダイアレクトについて述べている。

### ◎ Standard English（標準英語）について

では標準英語とは、どんな語であろうか、彼は次の様に述べている。

Standard English is that variety of English which is usually used in print, and which is normally taught in schools and to non-native speakers learning the language. It is also the variety which is normally spoken by educated people and used in news broadcasts and other similar situations.

即ち、「標準英語は、平常、印刷に用いられ、又、普通、学校や、言語を学ぶネイティブでない話し手に教えられる英語の種類である。其れは又、教育ある人々に普通話され、そして、ニュース放送や、他の似た様な事柄に用いられる種類である。」

では、標準英語は如何にして生れて来たのであろうか。この事について、彼は次の様に述べている。

Historically speaking, the standard language developed out of the English dialects used in and around London as these were modified through the centuries by speakers at the court, by scholars from the

universities and other writers, and later on, by the public schools.

As time passed, the English used in the upper classes of society in the capital city came to diverge quite markedly from that used by other social groups and came to be regarded as the model for all those who wished to speak and write well.

即ち、「歴史的に述べれば、標準英語は宮廷に於ける話し手や、大学の学者や、他の作家や、後にはパブリック、スクールによって、何世紀も修飾されて来たが、ロンドン市内や、その周辺で使用された英語のダイアレクトから発達して来た。時の経過と共に、首都の上流社会に於て用いられた英語は、他の社会のグループによって用いられた英語とは、全く非常に離れるようになった。そして、上手に話し、書こうと願う凡ての人々に対するモデルとして考えられるようになった。」

以上の様にして、彼の云うように、標準英語は発生して来ると考えられるのであるが、後に印刷術等が発達するにつれて、更に、広く用いられるようになるのであり、この印刷術の広まりについて、彼は次の様に述べている。

When printing became widespread, it was inevitably the form of English most widely used in books, and although it was undergone many changes, it has always retained its character as the most widely accepted form of the English language.

即ち、「印刷が広まって来た時に、其の英語は、必然的に本等に最も広く用いられる英語の形になった。そして、其れは多くの変化を経たけれども、其れは常に最も広く受け入れられた英語の形として、其の性格を常に持っている。」

以上のように、印刷の広まりが標準英語なるもの、発達を非常に強くしたと考えられる。しかし、標準英語の中にも、少こしの地域的差異が認められるのであり、この事について、彼は具体的に次の様に述べている。

Standard Scottish English is not exactly the same as standard Eng-



lish English, for example, and standard American English is somewhat different again.

即ち、「標準スコットランド英語は、例えば正確には、標準イングランド英語と同じではない。そして、アメリカ標準英語は、又、少し違っている。」

そして、次のようなよく知られている語や文を上げている。

ブリティッシュのリフトは、アメリカではエレベーターである。又、次の例を上げている。

|                            |                              |
|----------------------------|------------------------------|
| { British : I have got     | { English : It needs washing |
| { American : I have gotten | { Scottish : It needs washed |

又、同じイングランドでも次の差異がある。

North : You need your hair cutting

South : You need your hair cut.

以上のように彼は述べて居り、標準英語の云われているものの中にも、地域的に多少差異が認められるのである。結局、標準英語について、彼は次のように述べている。

Standard English has a widely accepted, codified grammar and vocabulary. There is a general consensus among educated people, and in particular amongst those who hold powerful and influential positions.

即ち「標準英語は広く受け入れられ編まれた文法と単語を持っている。教育を受けた人々、そして殊に、有力な、他に影響を与える地位ある人々との間には、一般的なコンセンサスがある。

以上のように彼は、標準英語を定義づけているが、では、標準英語の発音について考えてみると、彼は、一般的に認められた標準の英語のアクセントはないが、しかし、地域的なアクセントを持つ標準英語を話す事は、少なくとも理論的には可能であるとしており、具体的に次のように述べている。

In practice there are some accent, generally very localized accents

associated with groups who have had relatively little education, which do not frequently occur together with Standard English, but there is no necessary connection between standard English and any particular accents.

即ち、「実際、比較的教育の低い人々に関係する一般的に、非常に地域的アクセントがある。このアクセントは、たびたび、標準英語と一緒に起る事はない。又、標準英語と、何か特別のアクセントの間に、必要な関連はない。」

以上のように彼は、標準英語とアクセントとを分離して考えているが、ただ、標準英語と丈け一緒に起るアクセントがあり、これは R. P (received pronunciation) と呼ばれ、別名, the British English accent, 又は, the English English accent と云われて居り、この事について、彼は次のように述べている。

This is the accent which developed largely in the English public schools, and which was until recently required of all BBC announcers. It is known colloquially under various names such as 'Oxford English' and 'BBC English', and is still the accent taught to non-native speakers learning British Pronunciation.

即ち、「これは広く英国のパブリックスクールで発達したアクセントである。そして、其れは最近迄、凡てのBBCアナウンサーに求められた。其れは国語的に、オックスフォードイングリッシュ、又は、BBCイングリッシュの様々な名前で見られている。尚、其れは、ブリティッシュ発音を学ぶ英語を母国語としない話し手に、教えられるアクセントである。」

R. P について、更に考えてみると、R. P は、彼の言葉を借りると次のように云える。

R. P is largely confined to England. As far as England is concerned, R. P is a non-localized accent. It is, however, not necessary to speak

R. P to speak standard English.

即ち、「R. Pは大部分イングランドに限られている。イングランドが関係している限り、R. Pは、地域的なアクセントではない。けれども、標準英語を話す為に、R. Pを必ずしも話す必要はない。」

尚、彼は標準英語については、次の様に考えている。

Standard English are widely considered to be 'correct', 'beautiful', 'nice', 'pure'.

即ち、「標準英語は広く、正確で、美しく、上品で、きれいであると考えられている。」

更に、標準英語が正確の英語であると述べている。当然、他の種類の英語については、規準から外れたものであると考えられている。しかし、言語の科学的研究は、学者に対し次の様な確信をもたせるに至って居り、彼はこの事について、次のように述べている。

The Scientific study of language has convinced most scholars that all languages and correspondingly all dialects, are equally 'good' as linguistic system. All varieties of a language are structured, complex, rule-governed systems which are wholly adequate for the needs of their speakers.

即ち、「言語の科学的研究は、大抵の学者に、凡ての言語と、それに相当する凡てのダイアレクトは、言語組織としては、同様に秀れたものである。と云う事を信じさせている。凡ての種類の言語は、其れ等の話し手の必要に全く相当する作られた複雑な、ルールに支配された組織である。」

以上のように述べているが、言語の種類と正確さと、純粹さについては、言語的要素より社会的要素によって定まる、と云っており、次のように述べている。

In other words, attitudes towards non-standard dialects are atti-

tudes which reflect the social structure of society. In the same way, social values may also be reflected in judgements concerning linguistic varieties.

即ち、「云い換えれば、非標準ダイアレクトに対する態度は、社会の社会的構造を反映する態度である、同じ様な方法で、社会的価値は又、言語種類に関する判断の中に、反映されるかも知れない。」

尚、上文の具体的意味に於て、r音について、イングランドとアメリカを比較して次のように述べている。

In England, accents without postvocalic 'r' have more status and are considered more 'correct' than accents with. R. P. the prestige accent, does not have this 'r'. And postvocalic 'r' is often used on radio, television and in the theatre to indicate that a character is rural, uneducated or both. On the other hand, although the situation in the United States is more complex, there are parts of the country where the exact reverse is true.

即ち、「英国に於ては、語尾rなしのアクセントは、より多くの地位を持って居り、'r'をもつアクセントより以上に正確であると考えられている。勢力のあるアクセントのR. Pは、此の'r'を持っていない。そして語尾'r'は、俳優が、田舎出であるか、教育がないか、又は、両方である事を示す為に、ラジオやテレビや、劇場でしばしば用いられる。他方、アメリカに於ける状態は、一層複雑であるけれども、その逆が真実であるいくつかの場所がある。」以上のように述べているが、具体例として、

ニューヨークでは、語尾'r'を持つアクセントが、より多くの勢力を有して居り、語尾'r'なしのアクセントより正確であると、考えられているのと事であり、又、英国に於ても、場所により両方の発音が聞かれる処もある、と述べて居り、結局、次の様に云える、と彼は述べている。

There is nothing inherent in postvocalic 'r' that is good or bad, right or wrong, sophisticated or uncultured. Judgements of this kind are social judgements based on the social connotations that a particular feature has in the area in question.

即ち、「生来語尾 'r' の中に、良いか悪いが、正しいか間違っているか、世間ずれしているか、無教養であるかを示すような何物もない。此の種類の判断は、特別の特色が、その地域で問題になっている社会的深い意味に基づいた社会的判断である。」

以上のように述べて居り、結局、'r' 音の中に本質的な意味はなく、社会的判断により、その特色を規制していると、考えられる。

次に、カリフォルニア大学教授 マダレン・E. ヘザリングトン (Madelon. E. Heatherington) 女史の説を参照しながら、考えてみる次第です。

先ず、彼女はダイアレクトには、二つの重要な性質があると云い、次のように述べている。

The first is that everybody speaks a dialect-or rather, many dialects. There is no "pure", "nondialectic" form of any languages. And there never has been. A language is composed only of what its users say and write. Since each individual's speech is both unique and shared with other speakers of the same language, it is inevitable that no one, pure form of a language can exist. Rather, many forms exist. Those forms are the dialects.

即ち、「第一の点は、誰でもダイアレクトを、むしろ、多くのダイアレクトを話すと云う事である。どんな言語も、純粋な、非ダイアレクトの形の言語はない。そして、今迄にもないのである。言語は、そのユーザーが云ったり、書いたりする事柄からのみ出来上っている。夫々個人の話は、特徴もあり、又、同じ言葉の他の話し手と共通するものもあるが故に、1つの純粋な形の言語

が、存在出来ない事は、必然的な事である。むしろ、多くの形が存在するのである。其れ等の形がダイアレクトである。」

以上のように述べているが、では第二の点とは何であろうか、彼女は次のように述べている。

The second point is that social judgement is not the same as linguistic judgement. Linguistically speaking, no dialect is better or worse than any other, all dialects are linguistically equal. All dialects serve perfectly well as expressive and communicative devices for their users ; all are systematic, complex, functional, and creative.

即ち、「第二の点は、社会的判断は、言語的判断と同じでないと云う事である。言語的に述べれば、どんなダイアレクトも、他のどんなダイアレクトより良いとか、悪いとか云う事はない。凡てのダイアレクトは、言語的に同じである。凡てのダイアレクトは、それらの使用者等に対し、表現的で、話の通じる媒介物として、全くよく、仕えるのである。即ち、凡てのダイアレクトは、組織的で、複雑で、機能的で、創造的である。」以上のように彼女は述べているが、結局、言語は文化的現象と云えるので、言語の使用については、社会的意味に於て制限されるようになると云える。そして、社会的に有力な人々の話し方を、他の人々が真似るようになり、ここにスタンダード、ダイアレクトが生れて来ると思われるのであるが、この生れる過程について、彼女は次のように述べている。

The prestige speech behavior comes to be regarded as having such high social value that it is held up as a model to users of other dialects ; it is taught in the schools, in the self-help manuals, in the etiquette books ; it becomes the standard by which other forms of speech, other dialects, are measured.

即ち、「有力な話し方は、他のダイアレクトの使用者等のモデルとして支持

されるような社会的高い価値を、持つものとして考えられるようになる。其れは学校に於て、自己の手引書に、エチケツトブックの中に教えられ、それによって、他の形の話し方や、他のダイアレクトが測られる標準語となるのである。」以上のように述べているが、更に、このダイアレクトが標準語として定着する過程を、具体的に次のように述べている。

Eventually the prestige form comes to be widely regarded as the only right, true, pure, correct way to speak or write. If a speaker does not use that dialect, he is often labeled an outsider ; not a member of the right social group, and probably stupid as well.

即ち、「ついに、其の優勢な形は、話したり、書いたりする唯一の正しい、真実の、純粋な、正確な方法として、広く考えられるようになる。もし1人のスピーカーが、そのダイアレクトを用いないならば、其の人は、しばしば、正しい社会上のグループの1員でなくて、多分、愚かな部外者として、分類される。」以上のように述べているが、この優勢なダイアレクトは標準語として定着すると思われる。英語の場合は、標準英語になるのであるが、この発生経過について、彼女は次のように述べている。

Dialect, viewed linguistically, merely means "variant"-not good, not bad, just different. One variant in any languages usually acquires prestigious social status ; that one is defined as the prestige dialect, In America, the prestige dialect is called standard English. Often shortened to S. E.

即ち、「ダイアレクトは言語的にみれば、良くも悪くもない、単に異なる変形を意味している。どんな言語の中の変形も、普通優勢な社会的地位を得るとその物が、優勢なダイアレクトとして定められる。アメリカに於ては、勢力あるダイアレクトが、標準英語と呼ばれる。しばしば、S.Eと省略される。」

以上のように彼女は、標準英語の生れる過程について述べている。次に、標

準英語にならないダイアレクトを、彼女は次のように区別している。

Non-S. E. dialects can be classified in many different ways, but for purposes of simplification, we will focus on six : historical, regional, occupational, ethnic, age, and gender.

Age and gender dialects have not been studied extensively yet, so here they will be combined into a single section. Finally, we shall return to a consideration of the social value attached to dialects when we discuss the ways in which speakers alter their linguistic behaviors in different social situations.

即ち、「非標準英語のダイアレクトは、多くの異なる方法で分類出来る。しかし、整理する目的の為に、我々は6種類に集める。即ち、歴史的、地域的、職業的、人種的、年齢と性別である。年齢と性別のダイアレクトは、広くは、学ばれていないが、ここでは、1つのセクションに結びつけられる。終に、我々が、話し手が異なる社会的状況の中で、彼等の言語行動を変える方法を論ずる時、ダイアレクトに付着される社会評価を、考えるようになるであろう。」

以上のように述べて居り、いかに、言語行動が、社会評価に影響されるかが理解出来るのであるが、上に分類された6項目について、夫々に考えてみる次第である。先ず、歴史的な項目について、彼女は次のように述べている。

By the early 1600s, the English language had become essentially analytic in its syntax. But many of the lexical items were different from our contemporary language.

即ち、「1600年代の初期迄に、英語は本質的に、その統語法の中に分析的になって来た。しかし、辞書的項目の多くは、現代の英語とは違っていた。」更に、彼女は次のように続けている。

Phonological patterns were quite different in Early Modern English dialect spoken by the first American colonists. Stress, for example,



often occurred elsewhere than where we are used to. It was on the second syllable of such words as "character", "concentrate", and "contemplate", but on the first syllable of most polysyllabic words ending in "able" or "ible", such as "commendable".

即ち、「音声型は、最初のアメリカ植民によって話された初期現代英語ダイアレクトでは、全く相違していた。ストレスは、例えば、しばしば、我々が今用いているより、他の所に起った。其れは、"character" "concentrate", "contemplate", の様な語の第2音節の上にあった。しかし又、"commendable" のような、"able" で終る多音節語の最初の音節にあった。」

又、アメリカ英語とブリティッシュ英語を、比べて考えてみると、そこには統語上に余り変化はないが、発音には、かなりの相違がみられるのであり、この事については、彼女は次のように述べている。

Three hundred fifty years and many thousands of miles have separated the British and American dialect now, so much so that two speakers of the same language from different sides of the Atlantic often have difficulty understanding one another. Syntax has not changed much since the puritans left English shores, but contemporary British pronunciation is different from America.

即ち、「350年と数千マイルは、現在ブリティッシュとアメリカダイアレクトを分離している。その結果、大西洋の異なったサイドからの同じ言葉を話す2人の話し手は、しばしば、お互いを理解するのに困難を感じる。統語法は、清教徒達が、英国の海岸を離れて以来、余り変っていないが、現代のブリティッシュ発音は、アメリカ発音とはちがっている。」以上のように、彼女は述べている。以上の説は、我々も常に認めるところである。

次に、Regional（地理的）から来る相違について考えてみたい。

彼女は、ブリティッシュ英語とアメリカ英語との相違は、ダイアレクトの相違

として残ると云って居り、その理由は、言語は本質的に相互に理解出来るものであるからである。と云っている。

又、アメリカ英語については、彼女は次のように述べている。

Southerners do not sound like Northerners, who do not sound like Midwesterners. Regional dialects, however, may be among the least susceptible of wide-ranging study, because America has become such a mobile society.

即ち、「南部の人々は、北部の人々のように発音しない。又、北部の人々は中西部の人々のように発音しない。けれども、地域的ダイアレクトは、広い範囲にわたる研究の中では、最も熱の入らないものの中にあるかも知れない。なぜならば、アメリカはこのように、移動社会になっているからである。」

以上のように述べているが、では移動社会とは、如何なるものであろうか、この事を具体的に考えてみたい。先ず、彼女は次のように述べている。

When the population is stable, it is relatively easy to draw up maps of the regions where a clearly distinguishable dialect occurs, much of the Midwest and West, settled by people from elsewhere, is difficult to map.

即ち、「人口が一定している時は、はっきりと区別出来るダイアレクトが生ずる地域の地図を画く事は、比較的容易であるが、他の所からの人々によって、居住された中西部及び西部の多くは、言語地図を画く事は困難である。」結局、アメリカ社会に於ける人口の移動性が大いにダイアレクトに影響していると云えよう。

次に occupational（職業的）な言語相違について述べてみたいと思う。

職業的な差異は他の要素と違って、地域差等に余り影響がないようである。特定の職業に従っている人々は、共通の特定語を有している。この事に関し、彼女は次のように述べている。

When occupational dialect is designed to convey specialized information in a rapid and condensed form from one member of the occupation to another, it is called jargon. Although the intention behind the use of jargon is to be concise, and not necessarily to confuse non-members of the group, sometimes jargon can be very obscure to those not familiar with it.

即ち、「職業的ダイアレクトは、速く、縮少された形で専門的情報を、其の職業の1人から、他の人に伝えるようにつくられる時、其れは、ジャーゴン（特殊語）と呼ばれる。特殊語使用後の意志は簡略されるけれども、必ずしもグループの人々を、混乱させるものではない。時々、ジャーゴンは、其の語に慣れない人々には、非常に意味があいまいになるようになる。」

尚、具体的に考えてみると、日本に於てもスポーツにも特殊の用語があり、又、病院で使う“クランケ”（患者）、警察で用いる“ゲロスル”（白状する）、“ヤマ”（事件）、又、すし屋で使う語“ひかりもの”、“とろ”、“あがり” 等がある。尚“やくざ社会”で用いる特殊の語もある。

次に、スラング（slang）について考えてみたいと思う、彼女は、この事について次のように述べている。

Colorful language-not swearwords, but new terms or long used words applied in new ways-is called slang. Slang is easy to recognize, but almost impossible to define in such a specific and predictive way that anyone could determine in advance what a slang word would be.

即ち、「贅いの言葉ではなくて、新しい用語や、新しい方法で用いられる長く使用される語である生き生きした語は、スラングと呼ばれる。スラングは認知する事は容易であるが、スラングは何であるか、前以って、誰でも定める事が出来るような特別な予見的方法で、定義する事は殆んど不可能である。」

以上のように彼女は述べているが、では、定義する事の困難さは、如何なる

ところから来るのであろうか。この事について、彼女は次のように述べている。

Perhaps that difficulty in definition comes from the fact that slang is intimately tied to social respectability, and definitions of "respectability" change from day to day.

即ち、「多分、定義する事の困難さは、スラングが社会の関心度に、密接に結びつけられているからである。そして、関心度の定義は日々代るのである。」

以上のように述べて、スラングを定義する事の難しさを述べているのである。しかし、標準英語スピーカーは、スラングを俗物視する傾向が強く、反面、この事は或る程度、社会的要求に応じているかも知れないが、この事について、彼女は次のように述べている。

Although many slang terms become part of the main stream dialects for a while, they were originally intended to divert main stream, S. E. attention.

即ち、「多くのスラングは、しばらくの間、主流ダレアレクトの一部になるけれども、スラングは本質的に、主流や標準英語の注意から外れる傾向がある。」

スラングについては、以上のように述べているが、外に、ブズ (buzz) がある。彼女はこの事について、次のように述べている。

Like slang, buzz words frequently become fashionable among the general public and are worked to death. Any nation wide preoccupation will produce a spate of buzzes, which may outlive fashion and enter into S. E.

即ち、「スラングのようにブズは、しばしば一般の人々の間で流行するようになり、そして、活動し消えてゆく。何か国民的に広く没頭する事は、ブズのほとぼしりを生じ、そして、其れは、流行するのを長生きさせ、標準英語の中に入るかも知れない。」

次に人種的 (Ethnic) なものについて述べてみたいと思う。先ず彼女は次のように述べている。

Ethnic dialects are probably the best known and possibly the most ridiculed. They are vulnerably obvious in their differentness from whatever that mythic, pure American S. E is supposed to be, just as the ethnic-group members are obviously different, not "American", somehow, but hybrids. : Spanish-American, Italian-American, Japanese American, etc.

即ち、「人種的ダイアレクトは、多分、最もよく知られて居り、そして、かなり非常に嘲笑されている。其れらは、あの神話の純粋なアメリカ標準英語が如何にあるかを云う事から、其れらの違いに、神経質的にはっきりしている。丁度1つの人種のグループの人々が、アメリカ人でなくて、とに角、雑種であると、はっきり違っている如くである。即ち、スペイン系アメリカ人、イタリア系アメリカ人、日系アメリカ人等の如くである。」

以上のように彼女は述べているが、この人種的ダイアレクトは、各人が母国語を、英語の上に重ねるので生れて来ると思う。日本人の場合は 'l' と 'r' の音の区別が難かしく、又、中間母音 'æ' の発音も下手である。

次に黒人の話す英語について考えてみたいと思う。先ず、彼女は次のように述べている。

For a long time, the dialect spoken by many black Americans, it is referred to as Black English, or B. E, was assumed to be a corrupt or deficient form of English, as all other ethnic dialects were commonly supposed to be, But many studies undertaken in the past two decades have convincingly demonstrated the falsity of that assumption.

即ち、「長い間、多くの黒人アメリカ人によって話されたダイアレクトは、

これはブラック、イングリッシュと云われ、B. E と略するが、凡ての他の人種的ダイアレクトが、普通考えられている如くに、英語のなまりのある形が、不完全な形であると考えられた。しかし、過去20年間にされた多くの研究は、其の考えの間違いである事をはっきりと示している。」

更に現在のB. Eの発展過程について、具体的に彼女は次のように述べている。

B. E is strikingly different from other ethnic dialects. B. E apparently had to be built from scratch rather than acquired from an already existent speech community. Black people who spoke many mutually unintelligible African languages would be thrown onto slave ships, unable to communicate with each other or with the white overseers. Once arrived, the slaves eventually contrived a pidgin (a madeup, compromise language composed of scraps of this and that language). A pidgin learned as one's native language is called a creole. The creole or pidgin may have been Gullah and may have formed the basis of present-day Black English dialects.

即ち、「B. E は、他の人種的ダイアレクトとは、非常に違っている。B. E は明らかにすでに存在している言語社会から得る事よりも、むしろ、かき集める事から作られねばならなかった。多くの相互に理解出来ないアフリカ言語を話した黒人達は、互いに、又は白人の監督達と会話する事も出来ずに、奴隷船の上に投げ出されたであろう。一度到着するや、奴隷達は、<sup>(6)</sup>ピジン（混成語）を工夫してつくった。（あれこれの言語の断片から組み立てられた、つくり上げられた妥協語）1つの母国語として覚えたピジンは、<sup>(7)</sup>クリオールと呼ばれる。クリオール又はピジイは、<sup>(8)</sup>ガーラアであったかも知れないし、そして、現在の B. E ダイアレクトの基を作ったかも知れない。」

以上のように彼女は述べて居るが、更に、B. E と S. E との相違について、次のように述べている。

Like other nonstandard dialects, ethnic or otherwise, B. E differs from S. E. phonemically and lexically. There are comparatively greater differences between the syntax of B. E. and S. E. than between S. E. and other non S. E. dialects. These syntactic variants are quite regular, of course, as dialectic differences always are.

即ち、「他の非標準ダイアレクトのように、人種的にも他の点でも、B. E. は、S. E. とは音素的に、辞書的に違っている。B. E. と S. E. の統語法の間には、S. E. と他の非 S. E. ダイアレクトの間の相違よりもかなり大きい相違がある。此等の統語上の変形は、ダイアレクトの相違が常にあるように、勿論、全く規則的である。」

更に、彼女は具体的な例を上げて、次の様に述べている。

Characteristic of B. E., for example, is the elision of be-verb constructions and plural markers common in S. E. as in B. E.'s "They going" "we cool", and "I hungry", or "two brother", and "seven day".

即ち、「例えば、B. E. の特徴は、S. E. に普通用いられている be 動詞構造や、複数形 S の省略である。B. E. に於ては次の如くである。

"They going", "We cool", and "I hungry", or "two brother", "seven day".

次に、Age and Gender について述べてみたい。この事について、彼女は次のように述べている。

Age and gender are primarily biological rather than linguistic circumstances, but people of different ages and different sexes do learn different dialects. Like other dialects, these intersect with each other and with nation, region, occupation, and ethnic background.

即ち、「年令と性は、元来言語的情况よりもむしろ、生物学的なものである。しかし、異なった年令や、異なった性の人々は、異なったダイアレクトを習得

### 言語小論⑧（大森）

する。他のダイアレクトの様に、此等は相互に、そして国家、地域、職業、そして人種的背景と交差する。」

以上のように述べているが、此等の具体的例については、別の機会に述べたいと思う。

次に、ワシントン大学教授フィリップ、エス、デール（Philip. S. Dale）の説を参考にしながら述べてみたいと思う。先ず彼は、ダイアレクトについて、次の様に述べている。

All languages often serves as a barrier, rather than as a flexible and efficient means of communication. We do not all speak the same language. Even within a particular language community, individuals do not speak in exactly the same way. Such variations within a single language are called dialects.

即ち、「全ての言語は、全くしばしば融通性のある有効なコミュニケーションの手段としてよりも、むしろ障害物として役立つ。我々は凡て、同じ言語を話すわけではない。特別の言語社会の中でさえも、個人は、正確に同じ方法で話しはしない。単一の言語の中の、このような変化をダイアレクトと呼ばれる。」

以上のように、彼はダイアレクトを説明している。尚、ダイアレクトの相異については、彼は次のように説明している。

Dialect differences arise whenever a group of individuals communicate more among themselves than with individuals outside the group, at least on certain topics. Thus dialects of a limited sort often develop on the basis of profession.

Different occupations have different things to talk about. But, the same concepts will be labeled with different words.



### 言語小論⑧ (大森)

即ち、「ダイアレクトの相異は、1つのグループの各人が、少なくとも或る話題について、そのグループの外側の各人とよりも、彼等自身の間でコミュニケーションする時は、何時でも起こる。この様な限られた種類のダイアレクトは、しばしば、職業の基盤の上で発展する。異なった職業は、異なった話すべき物を持つ。しかし、同じ概念は、異なった語で分類されるであろう。」

以上のように述べているが、更に、彼はダイアレクト相違をもたらし物として、前述したような年令、社会的階級、人種等を上げているが、彼の所説については、別稿で記したいと思う次第です。

~~~~~

以上三人の学者の説を参考に論述を試みた次第ですが、如何に言語が、言語的要素よりも、社会的要素によって強く影響されるかを、標準英語と非標準英語、ダイアレクト等の問題を通して述べた次第です。

Notes:

- (1) ピーター、トルージル (Peter Trudgill: 1943年英国のノールウィック (Norwich) に生れる。1971年エジンバラ大学から Ph. D を得る。専門は社会言語学。現在リーディング大学教授
- (2) マダレン、E. ヘザリングトン (Madelon E. Heatherington): カリフォルニア大学ロスアンゼルス校英語科教授
- (3) フィリップS. デール (Philip S. Dale): ワシントン大学教授、幼児言語学専攻
- (4) autonomy (自律): 一般にある文化領域が何か他のものの手段ではなくそれ自身のうちに独立の意義と価値をもつこと。
- (5) heteronomy (他律): 自律に対する語
- (6) pidgin (ビジイン語, 混成語): 外国人同士が互いの、あるいはいくつかの言語を簡略混合して伝達に使う補助言語である。発音文法は相当変差があり、各言語に共通な文法を選んで使う事が多い。
- (7) Creole (クリオール語): pidgin を生れつき話し、自分の母国語として使う言語集団の場合に、これを creole と呼ぶ。
- (8) Gullah (ガーラー): 一般にはサウスキャロライナ州、ジョージア州、フロリダ州北部にわたる海岸地域、その地域に住んで居る一部の黒

言語小論⑧ (大森)

人が話している言語。

Bibliographies :

Peter Trudgill : Sociolinguistics, An Introduction, 1974, London, England

〃 〃 : Language and society (edited with notes by K. Awa-
ka) 1981, Tokyo

Madelon E. Heatherington : How Language works, 1980, America

〃 〃 : How Language works
(edited with notes by H. Kodama) 1981
H. Abe
Kinseido, Tokyo

Philip S. Dale : Language Development, 1976, Holt, Rinehart and
Winston, America

〃 〃 〃 : Language Development : Structure and Functions,
1972, Dryden press, New York

(1) 仏教文化研究所活動報告

○公開文化講演会の開催

仏教文化研究所主催による文化講演会は、昭和五十九年十一月二十六日に開催された。今年度は、立正大学教授(日蓮教学研究所長) 文学博士浅井円道先生の御出講を請い、「四箇格言とその心」の演題によって二時間二十分に亘り高説を拝聴した。浅井教授は以下の論旨を展開された。(1)所謂四箇格言と称せられる内容を有つ御文書は文永五年『与建長寺道隆書』文永八年『行敏御返事』・弘安三年『諫曉八幡抄』を教えること。(2)宗祖の四箇格言の思想的根拠は「爾前無得道」にあること。(3)念仏浄土思想(専修念仏)では成仏はあり得ないこと。(4)寂山遊学の成果(立教開宗)としての教判の樹立の基準を「教法浅深」においたこと。(5)法然は浄土三部経を依経としたが、その依経の論拠を示していないこと。(6)『守護国家論』に於て浄土批判・権経批判を体系化されていること。(7)末法時に法華経の広まらべきことは「仏眼をかつて時機を勘えよ」(撰時抄)との教示を素直に享受して、仏慧をもって法華経流布の時を選択せよと、宗祖の教示を通して強調された。(8)四箇格言の主張は、翻

えせば立正安国と云うこと、その立正安国とは上求菩提下化衆生の菩提心の実践であること。(9)四十五字法体段の久遠の生命の世界、更には「事」の宗教としての宗祖の法門を説き明していただいた。(10)宗祖は大曼荼羅の光明に照らされて、本仏と感応道交できる境地を開顯されたこと。等々、該博の知識を駆使して、当日の聴衆(身延山短大教職員・短大生・一般聴衆)に訴え共感を博したのであった。

○第二回文化講演会

今回は、講師・国士館大学講師・農学博士・安間繁樹先生を迎え昭和六十年一月三十日に開催。

演題「日本の野生動物―特にイリオモテヤマネコに就て―」

講演要旨を簡条摘記すれば、(1)日本の哺乳類は種類が多いことと珍種が多いこと。(2)我国の陸棲動物の分布は海峡の成立と南北に長い列島と深い関わりがあること。(3)特に南西諸島(屋久島・沖縄・奄美郡島)の陸生哺乳類に特色が見られること。

(4)南西諸島も屋久島と奄美諸島の間に横たわる吐噶喇列島と海溝が所謂、旧北区(ユーラシア大陸)と東洋区(南西区域)の境界をなし、棲息動物の種類形成に関係していること。(5)西表島の「イリオモテヤマネコ」(現在八十四の棲息確認)は正に自然保護動物として棲息を見守っていききたい珍種であること。

——安間先生は早稲田大学の法学部・教育学部理学科を卒業、東京大学農学系研究科博士課程に在籍、エジンバラ公を総裁と

する国際自然保護連合に所属する気鋭の研究者であり、講演会にはNHKの教育TVでも全国放映された貴重なスライドを使用し、学生・生徒・聴衆に対して動物愛護を強く訴えた。尚安間先生は、本学の中條暁秀助教と高校が同期であることを付記しておく。

学会活動報告

○日本仏教学会

昭和五十九年度学術大会は、六月九日(土)十日(日)の両日にわたり大谷大学(京都市北区)にて開催された。今年度は「釈尊観」を共同研究課題とし、本学から奥野本洋講師が研究発表を行なった。

日蓮聖人の釈尊観

奥野 本洋

○日蓮宗教学研究発表大会

第三十七回日蓮宗教学研究発表大会は、九月二十八日(金)・二十九日(土)の両日、日蓮宗宗務院において開催され、本学から左記の四氏が研究発表を行なった。

維摩経玄疏の研究

若杉 見龍

「西谷草庵考」

奥野 本洋

薬王品の一視点

高橋 堯昭

身延山における日蓮聖人の教学

―三秘を中心として―

上田 本昌

○日本印度学仏教学会

第三十五回学術大会は、十一月十日(土)・十一日(日)の両日、大正大学(東京都豊島区)において開催され、本学より左の二氏が研究発表された。

日蓮聖人における五義の成立と展開

上田 本昌

朝師御書見聞の一考察

―開目抄私見聞について―

中條 暁秀

真乗院(竹下) 日康法主・学長猥下遷化

身延山第八十九世法主・身延山短期大学々長、真乗院日康上人には、昭和五十九年四月十六日午後四時五十二分水鳴橋にて御遷化された。

上人は静岡市に誕生、立正大学史学科を卒業して、同史学科研究室助手に抜擢されて研究者の道を歩むかと思われたが、昭和八年望月日謙法主(八十三世)の招聘を受け身延山久遠寺の録事に就任、爾来、身延山の枢要部に在って才幹を発揮される事となりました。身延山久遠寺庶務部長・身延山総務・身延山短期大学々園理事長・身延山八十九世法主猥座に就かれました。この間宗祖七百遠忌正当会の大導師の弘を執られ身延山大本堂の建立をはじめ、諸堂の新建立・改修等々、輪奐莊嚴の美

を現出されたことは日康上人の法功として後世に遺る偉業であります。昭和六十年五月大本堂入仏落慶の祝典を目前にて五十九年三月三十日突然に四大不調となり、御遷化されましたことは、身延山並に学園教職員一同にとって悲痛の極みであります。学園一同は、上人のお志しを体して精いっぱい努めて参ります。謹んで日康上人の増円妙道をお祈りいたします。

岩間日勇親下・身延山第九十世親座に晋董

昭和五十九年四月二十日身延山祖山会は、万場一致を以つて、久遠寺総務・岩間日勇親下（山梨県増穂町昌福寺山主）を身延山九十世法主に推戴し、参与会の承認を得て法主親座に就かれました。

岩間親下には昭和三十四年、藤井日静法主の懇請をうけて身延山布教部長に就任し、身延山布教隊を組織して全国各地に聲鼓宣令、身延山の宣揚に尽力されたことは周知される所であり、また、「光明」誌を通して、或は優雅諳々とした法話は聴衆を魅了した。身延山のみならず宗門の発揚に貢献された法功は大きく、日蓮宗総合財団賞（布教伝道部門）を受章されたことは、よく親下の法功を語っていると思います。昭和六十年五月は宗祖七百遠忌悼尾を飾る大本堂落慶入仏大法要が厳修されようとしております。何卒、新法主親下には法体愈々健かに、為宗護山に御尽力下され、併せて本学々長として祖山教学発展の為に一臂の御助力を賜わらんことをお願い申しあげ、御入山

を心から表賀いたします。

尚、岩間法主親下の懇望によって、身延山総務の職には、望月一靖親下（東京都善性寺山主）が御就任になられました。望月総務は、人も知る如く、八十三世望月日謙上人の法孫に当り、また八十七世望月日雄上人の法息であります。新総務の行政の手腕は、立正大学常任理事長、日蓮宗副総長の要職歴任が語る所であります。新総務には身延山短期大学々園理事長も兼任されます。新法主親下共々に祖山教学に対して、温かい御教示を懇願して、御就任の祝意といたします。（文責 町田）

訃報

身延山短期大学々頭・身延山高専学校長、里見泰穂先生には、昭和六十年一月十三日永眠されました。先生は本学園に在って法器養成に尽瘁されること四十有五年の長きに亘りました。この間、短期大学昇格運動とその後の基礎固めに尽力、他方、日蓮宗教学審議会委員、日蓮宗普通講習委員長として宗門行政に業績有り、又、山梨県私学振興会理事、山梨県退職金財団理事として私学教育の発展に寄与された。国家は永年の功を彰して、文部大臣教育功労章、勲四等瑞宝章を授与して功を讃えています。

先生には教育一筋に情熱を注がれ、学生徒に教授するに木訥諄諄として学徒の啓発に努め、また該博なる西洋哲学の学識に

裏付された仏教哲学のすぐれた業績は、日本仏教學界に周く知られる所であります。先生の学恩に浴した宗門学徒は幾百人、昨年同窓会有志「鶴群会」と歩を合せて本学に於て「里見泰穂先生著作論文集」を編して先生に献呈せしは、せめてもの学恩報謝でありました。

記して里見泰穂先生の増円妙道をお祈りいたします。

○法号 泰穂院日南上人

○学園葬 昭和六十年二月十四日

午後一時・身延山短期大学大講堂にて

図書館だより

本年も図書献本運動に同窓生の各聖より御高配と御厚志を賜わりまして、数多くの献本がありました。厚くお礼を申し上げます。御蔭様にて次第に蔵書が増えており誠に有難度いこととであります。何卒、今後共よろしく皆様方のご協力を切に御願ひ申し上げます。

図書寄贈者御芳名

1 灘上忠教師 『高麗大藏経』全四八巻 『正藏经』全七

○巻 『正藏经』全一五一巻 『佛教大藏经』等三

五一冊

神奈川県横浜市 善行寺

2 新川日見師 『日本の歴史』全十六巻等三一〇冊

東京都墨田区太平 陽運院寓

3 戸田浩暁師 『文心雕龍』上下等六冊

東京都練馬区 大栗院

4 児島鍊戒師 『文化誌日本徳島県』一冊

徳島県徳島市 妙永寺

5 坂輪宜敬師 『佛教美術の廻廊』一冊

東京都港区白金台3-17-5

6 都守健二師 『ココ、お話しよう』一冊

岡山県岡山市 妙広寺

7 大石要英師 『岩波国書総目録』全八巻等一六冊

静岡県庵原郡由比町由比 本光寺

8 原 光可様 『神道大系』全二〇冊の内、四二冊

大阪府茨木市

9 本田敬信様 『西田幾多郎全集』等七三冊

千葉県松戸市

10 今井昭男様 『佛教大辞典』等二七冊

千葉県市川市行徳駅前

11 永岡淳正様 『龍華御本尊集』一冊

京都市上京区六軒町通 灯明寺

12 東京都支部長久本信明師を通じて東京瑞輪寺小林頤榮師御紹介により、東京都文京区湯島4-9-7の大森暢久様よ

り、『日本文化の歴史』等八七一冊の献本がありました。

合計 一六九九冊 そのほか、

大石要英師 静岡県庵原郡由比町由比本光寺 五〇万円相当
牛居一教師 大阪市東住吉区西今川町妙法寺一〇〇万円相当
の贈呈を受けております。

献本運動に対しまして諸氏より御高配と御厚志を賜わりましたこと衷心より御礼を申し上げます。

(2) 同窓会関係

◇同窓会本部だより◇

身延山教学の振興・法器養成の施設の充実のために、身延山学園図書館の建設が最もたれる所であったが、同窓各位の献本運動、そして建設推進の運動がもりあがるなかで、図書館建設の議が本格的に議せられるに至りました。こうした情況の下で同窓会本部役員会を昭和五十九年十月三十日召集しました。

図書館建設を援助するという重要協議事項もあつたので、本部役員全員（顧問・正副会長・理事・幹事・支部長）に参集をねがい、緩々と協議を重ねました。殊に身延山当局を代表して望月一靖総務様の臨席をいただき、総務様から「大本堂建立落慶の後、学園の充実と図書館の建設を最優先の事業とします」との公約を賜わり、参会役員一同も心から諒としたのである。総務様の御熱意を享けて同窓会本部としても早々に建設勧募の

運動を展開することを決議して、左記の趣意書を全国同窓生各位に配布（支部長の労を煩わして）することとしました。

身延山学園図書館建設資金勧募趣意書

宗門は日蓮聖人七百遠忌を円成、身延山に於ても世紀の報恩諸事業を完遂、就中、その中心浄業である大本堂の建設も成り、昭和六十年五月には入仏落成慶讃大法要を厳修いたすことになっております。

さて、母校身延山学園に在っても先年来より教学振興・学内諸施設の充実へと努力を傾け、殊に法器養成の大目的のために図書館建設の機運を高めて参りました。吾等同窓生も母校の図書館建設には強い関心を寄せる所であり、既に献本運動を推進して数年、実績を着々とあげて参りました。

身延山当局に於かれても図書館建設を御遠忌円成後の最優先の事業とされることを公約くだされ、学園理事会に於ても確認されております。

また、地元山梨県支部では昨年来より勧募運動を強力に展開して目標額を達成しております。こうした現情に鑑みて、吾等学園同窓会本部としても左記要項により、勧募活動を推進していく事を決しました。

何卒母校の発展・法器養成の大眼目を達成するために同窓各位の格段の御協力を賜わりますよう懇請申し上げる次第です。

勧募期間 自昭和五十九年十二月一日 至昭和六十一年三月

三十一日

目標総額 一億円(一口 五千万 二千万)

身延山学園同窓会本部

会長	松井大周
副会長	小崎龍雄
副会長	林是幹
副会長	岩田日成
副会長	大石要英
副会長	中屋教海

同窓会々員各位

尚これより早く、山梨県支部(会長岩田日成師)に於ては勸募を展開、左記の趣意書を配布して協力を呼びかけ、短期日間にその目標を上回る成果を収めたのでした。

趣意書

七百遺忌も円成、身延山に於ては記念事業も着々完成、就中、中心事業たる大本堂建設なり、去る九月十日には新刻なつた三宝尊も奉安され落成式を昭和六十年に迎えようとしております。

母校にあつては予て四年制大学昇格の準備のためにも、亦法器養成と云う大目的のためにも、身延山学苑に図書館をとの機運が漸く高まり第一歩として献本運動が行われ、既に数万冊の献本がありました。当然の事ながらその格護の場所も造らねば

なりません。昨今吾等同窓生は母校充実のため図書館建設資金の一分でも拠出し合つて、推進の基盤たらしめようとの運動を展開し、去る七月二日山梨県支部総会に於て、勸募の方途が協議せられました。その結果左記により勸募することになりましたので御了承、御協力を賜りたく御願ひ申し上げます。

記

勸募期間 昭和五十八年十一月一日より

昭和五十九年三月三十一日まで

目標総額 一千万円(一口 五千万 二千万)

同窓会山梨県支部長

岩田日成

各位

○本誌57号執筆者紹介(論文掲載順)

望月海淑	本学教授	仏教学・梵文学
上田本昌	本学教授	日蓮教学・祖哲学
中條暁秀	本学助教授	日蓮教学・祖哲学
高橋堯昭	本学教授	哲学・東西比較思想史
町田是正	本学教授	歴史学・中世仏教思想史
一宮嘉孝	本学助教授	体育学・柔道
北沢光昭	本学学生会員	札幌市光徳寺裡
奥野本洋	本学講師	天台学・日蓮教学
大森孝	本学教授	英語学・英文学

◇ 編集後記 ◇

◇ 本学のこの一年の研究活動を顧みるとき、日本仏教学会、日本印度学仏教学界、日蓮宗教学研究大会等にも研究発表者を送り、その他人文科学関係の諸学界にも参加するなど一応の成果を得ては来ましたが、身延山教学の発展のためにも、より積極的に学界活動に参加して研鑽の実を挙げて欲しいと願うものであります。

◇ 資料「身延山諸堂記」（北沢光昭師校注）も本号で完結しますが、本資料は先に紹介を終った「身延山略譜」と併せることで、身延山史の基本資料が揃うことになり、斯学に裨益する所が大きいと自負しています。

◇ 本学の学長職に在った竹下日康猥下が御遷化され、久遠寺総務・学園学監職の岩間湛良（日勇）猥下が身延山第九十世の猥座と学長職に就かれ、学監並に久遠寺総務職に東京善性寺山主望月一靖師（宗務副総長）を招待し清新な気風が吹きこまれました。新法主・新総務両猥下には殊のほか身延山学園の充実と発展に意を用いられ、

学園図書館の建設を優先事業とするとの公約を賜わりましたことは、学園一同のよろこびとする所であります。我等教職員は、両猥下の御熱意に応えるべく、意欲ある研究活動を展開するよう努めて参ります。

◇ 仏教文化研究所の事業である「身延山史年表」を本年五月の大本堂入仏落慶大法要の慶讃当日、仏祖三宝の宝前に奉納できるはこびとなりました。諸先生方の御労苦を謝しつつ、この悦びを先生方と分かたく思います。

◇ 編集子（仏教文化研究所長）としてお詫びしたいこと、それは「学内研究会」の開催をおろそかにして、僅かに今村紀子先生の「生成変形文法の基本的な考え方」を一回開いたにとどまったことである。諸汎の事情が重なったとは云え怠慢の謗りは免れない。大いに反省しつつ次年度の充実を期したいと希い、諸先生方の絶大な御協力をお願いしつつ筆を置きます。

（編集子・町田）

「棲神」五十七号

昭和六十年三月二十五日 印刷

昭和六十年三月三十日 発行

編集者 町 田 是 正

発行者 宮 崎 英 修

印刷者 宮 田 如 龍

甲府市中央一丁目十二―三十一

印刷所 大 宣 堂 印 刷

山梨県身延山東谷

(☎NO、四〇九―二五)

発行所 身延山短期大学学会

振替(甲府) 五―二七五番

電話身延(☎五五六) 二一〇一〇七

THE SEISHIN

The Journal of Nichiren and Buddhist Studies

No. 57

Edited by
Minobusan College
Minobu Yamanashi, Japan.